

国と指導者

上 卷

エレン・G・ホワイト著

清 野 喜 夫 訳

福 音 社

PROPHETS AND KINGS
by
ELLEN G. WHITE

Fukuinsha
Yokohama, Japan



まえがき

歴史は万人の教師である。ことに聖書が描く国々の歴史は、すさまじい変化と動揺をくりかえす時代に住む現代人にとって、第一に学ぶべきものである。

古代のパレスチナは現代と同じく、激しい国際的な対立と抗争の場であった。パレスチナは古代世界の回廊であり、長い時代にわたって次々に勃興してくる強大な帝国の度重なる対決の戦場でもあった。古代の覇王エジプト、両河にまたがる諸帝国、アッスリア、バビロニア、ペルシア、さらに西方から足音高く進撃してきたマケドニア、ローマ。これらの強大な軍力はみなパレスチナをめざし、パレスチナを越えて、広大な世界帝国を築いていたのである。

一方、パレスチナの内情は常にあわれなものであった。そこには弱小ないくつもの国々が割拠して、互いに生存をかけた争いをくりかえしていた。



死闘をくりかえす小国のなかに、イスラエルとユダの両王国があった。この二つの国はもとは一つであって、有名なダビデ、ソロモン王のもとに繁栄を味わったのであったが、名君ソロモンの死後、北王国イスラエルと南王国ユダに分裂してしまった。紀元前十世紀のことである。

それ以後、この二つの国は他の国々を巻き添えにしながら抗争をくりかえし、イスラエル王国は紀元前八世紀初頭にアッシリア軍によって滅ぼされ、ユダ王国は前六世紀に新興バビロニア帝国によって滅ぼされたのである。イスラエル王国はそれ以後、歴史から消えていくが、ユダ王国は次のペルシア帝国の時代に再興する。そして数百年のち、ローマ軍によってユダヤ人が世界中に散らされて離散の民となるまで、パレスチナにとどまるのである。ほぼ二千年にわたる離散の旅を終えて、ユダヤ人が一九四八年にパレスチナに帰還し、イスラエル共和国を建国したことは周知の事実である。

本書は紀元前十世紀から五世紀に至る間のイスラエルとユダ王国の歴史に焦点をあてている。これは旧約聖書の歴史書である列王紀上・下、歴代志上・下、エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記などに主として準拠し、ほかにイザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、ダニエル書をはじめ、この他十の預言者の書によっている。



さて本書にあらわれてくるイスラエルとユダの歴史において、それらを真に独自のものにしていくのは、創造者である神の歴史への介入ということである。現在多くの歴史書は歴史をあくまでも人間の事象として平面的に見ているのに対し、聖書は、歴史を形成する主人は神であって、神と神の目的に対する人間のさまざまな作用が歴史の主題であるとする縦の次元を重視している。この場合、神に対する人間の関係は、明らかに表明された神意をめぐってうちたてられるものである。この表明された神意が律法であり、預言者の言である。これらの神意は高度に倫理的なものであって、人間の生き方に根本的にかわるものである。

そこで本書の背後にある第一の視点は、たしかに歴史は人間が赤裸々にかかわり合う場なのではあるけれども、そのかわり合いの中に神が介入されて、人間の歴史実存的な決断に応じてその歴史的運命を与えられるということである。人間が神とのかかわりをもつのは、人間が神によって造られたものであり、神のうちに生き、動き、存在するからである。従って人間は神の意志を無視することができないのであり、その意志への服従が幸いを、不服従が禍をもたらすものであることは当然のことである。しかし、同時に、過ちを犯しやすい人間に対して神へたちもどる道が備えられている。それが悔い改めの道である。



たといどんな悪を行つたとしても、悔い改めて神のもとにもどり、神との正しい関係を回復するならば、神は豊かな恩恵を惜しまれることはない。以上が第一の視点である。

第二の重要な視点は、歴史は無目的に永遠に堂々めぐりをくりかえすものではなく、目的をめざして一直線に進むものであるという点である。歴史に目的を与えるものは他ならぬ神である。神は人間の歴史を通して至高の目的を達成することを企図しておられる。その目的とは神の正義と愛が人間の歴史において実現されるということである。聖書は歴史の究極の目的は、神と人とが共に住む、罪も死も嘆きもない神の国の実現であることを示している。歴史上のあらゆる事象はこの神の国の実現のために働いていることを示すことこそ、聖書と本書の最大の関心事なのである。

さらに第三の視点として、歴史における善悪の抗争の本質は、神に対する本源的な抗争に由来するということがある。神に対立するものは「虚偽の父」と呼ばれるもので、あらゆる奸計を用いて正義を破壊し、愛を歪曲させている存在者である。歴史は、神の正義と悪魔の虚偽が人間の意志を舞台にして激しく抗争する場にほかならないのである。この抗争の戦場にあつて、人間は神につくか、「虚偽の父」につくかを決定しなければならない。ここではだれ一人傍観者であることはできないのである。神の正義と愛の意志を自分の意



志として、歴史の究極の目的である神の国の実現のために献身することが、真に歴史に参与することであり、他方、「虚偽の父」の偽りに屈し、欲望をほしいままにして真実な存在を見誤り、現象界を超えた世界への望みを失い、他人と自分を破壊することに加担するのは、ついに神のさばきを受けなければならないのである。

以上三つの視点は、聖書の歴史観の基本的視点であり、本書の主張もこれらの視点に立つものである。

近年いわゆるユダヤもののブームがあつた。匿名の著者イザヤ・ベングサンによる『日本人とユダヤ人』の爆発的売れゆきに伴って、ユダヤ人の発想、知恵、ことわざ、生活法などが広く読まれるところとなった。それは、きびしい国際的な競争の中にある日本人が、ユダヤ的商法の原理を学ぼうとする実利的な関心だけではなく、低成長時代の反省期にある日本人が、日本文化といわば対極にあるユダヤ文化を学ぶことによって、これからの生き方に何かの指針をも得たいというより基本的な関心もある。実際西欧文化を理解しようとして、その底を探究するならば、われわれは必ず聖書の世界に到達するのである。この場合旧約聖書の歴史と預言の書は聖書のすべての教えの背景をなし、また素材となるものである。この素材はその構成と内容において、現代の乱世を生きようとするものに豊富な



生きた教科書となり、さらに深く世界と人生について考えようとするものに、大きな指針を与えるものとなるのである。

著者エレン・G・ホワイト夫人は、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて活躍した敬虔なクリスチャン著述家であり、本書は原書で全五巻にわたる聖書の解説と歴史シリーズの第二巻に相当するものである。（邦訳ではすでに第一巻を「人類のあけぼの」として、第三巻を「各時代の希望」、第五巻を「各時代の大争闘」として出版されている）。読者の方々が本書を通してより深く聖書の世界に探究の歩みを進められるように祈るものである。

発 行 者

目次

第一章	ソロモン王の選択・・・・・・・・・・	1
第二章	エルサレム神殿の建設・・・・・・・・	12
第三章	繁栄の落とし穴・・・・・・・・・・	27
第四章	権力者が倒れるとき・・・・・・・・・・	36
第五章	ソロモン王の改心・・・・・・・・・・	50
第六章	王国の分裂・・・・・・・・・・	61
第七章	悲劇の王ヤラバム・・・・・・・・・・	72

第八章	急速にひろがった背信	80
第九章	預言者エリヤの出現	87
第一〇章	罪を責める声	97
第十一章	カルメル山の対決	113
第十二章	砂漠へ逃れる預言者	123
第十三章	失敗から立ちあがる	136
第十四章	預言者エリヤの力	146
第十五章	妥協するヨシヤパテ王	158
第十六章	アハブ家の没落	172
第十七章	預言者エリシャの召し	185
第十八章	悪水を良水にかえる	197
第十九章	平和をつくり出す人	203

第二〇章	大国シリヤからの訪問者	212
第二一章	預言者エリシヤの貢献	221
第二二章	アッスリヤの首都二ネベ	232
第二三章	大国アッスリヤの支配	247
第二四章	破滅を定めるもの	260
第二五章	預言者イザヤの召し	268
第二六章	「あなたがたの神を見よ」	276
第二七章	大国に援助を求めたアハズ王	287
第二八章	熱心な改革者ヒゼキヤ王	296
第二九章	虚栄のつけ	303
第三〇章	大国アッスリヤからの解放	314
第三一章	諸国民の希望	335



主のぶどう畑

神がアブラハムを召して、偶像教徒の親族に別れて、カナンの国に住むように言われたのは、地上のすべての人々に天の最上の賜物を与えるためであつた。「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであらう」と神は言われた(創世記一二ノ二)。神が世界にお与えになつた真理を幾世紀にわたつて擁護し、保存する民族の父となり、約束のメシヤの降臨によって、地のすべての国民を祝福する民族の父となるという召しをアブラハムが受けたことは、彼にとって大きな榮譽であつた。

人々は真の神に関する知識をほとんど見失っていた。彼らの心は偶像礼拝によって暗くなっていた。「聖であつて、正しく、かつ善なるものである」神の戒めの代わりに、人々は、彼ら自身の残酷で利己的な心のままに行うことができる律法をとりいれようとしていた。しかし、神は彼らをあわれんで、彼らを滅ぼし去られなかつた。神は教会によって神を知る機会を彼らにお与えになつた。神は、神の民によってあらわされ



る原則が、人間のうちに神の道德的なかたちを回復する手段になるようにご計画になった。

神の律法は高められ、神の權威は維持されなければならなかった。そして、イスラエルの家に、この高貴で大いなる任務が与えられたのである。神は、彼らにこの神聖な責任をゆだねるために、彼らを世界から分離された。神は彼らを神の律法の保管者とし、彼らによって、人々の間にご自身の知識を保存しようと思図された。こうして、天の光が暗黒に包まれた世界に輝き出て、すべての民に偶像礼拝を捨てて、生きた神に仕えるように訴える声が発せられたのである。

神は「大いなる力と強き手をもって」神の選民をエジプトの国から連れ出された（出エジプト記三二ノ一）。「主はそのしもべモーセと、そのお選びになったアロンとをつかわされた。彼らはハムの地で主のしるしと、奇跡とを彼らのうちにおこなった」。「主は紅海をしかって、それをかわかし、彼らを導いて荒野を行くように、淵を通らせられた」（詩篇一〇五ノ二六、二七、一〇六ノ九）。神は彼らを麗しい国、すなわち、神が摂理のうちに敵からの避難所として、彼らのために準備された国へ彼らを導くために、奴隸状態から彼らを救い出されたのである。神は、彼らをご自分のところに連れてきて、彼らを永遠の腕に抱こうとされた。そして彼らは、神の恵みとあわれみにこたえて、神のみ名を高め、神のみ名を地上で栄えあるものにすべきであった。

「主の分はその民であって、ヤコブはその定められた嗣業である。主はこれを荒野の地で見いだし、獣のほえる荒れ地で会い、これを巡り囲んでいたわり、目のひとみのように守られた。わしがその巢のひなを呼び起し、その子の上に舞いかけり、その羽をひろげて彼らをのせ、そのつばさの上にこれを負うように、主



はただひとりで彼を導かれて、ほかの神々はあずからなかった」(申命記三二ノ九―一二)。こうして、神はイスラエルの民をご自分のところに連れてこられた。それは彼らがいと高き者の陰に宿るためであった。彼らは荒野の放浪生活の危険から奇跡的に救い出されて、ついに、恵まれた国民として約束の国に落ちつくことができたのである。

イザヤはたとえを用いて、イスラエルが召しを受け、世界において主の代表者として立ち、すべての善いわざにおいて豊かに実を結ぶべきことを哀愁に満ちた感動的口調で物語っている。

「わたしはわが愛する者のために、そのぶどう畑についてのわが愛の歌をうたおう。わが愛する者は土肥えた小山の上に、一つのぶどう畑をもっていた。彼はそれを掘りおこし、石を除き、それに良いぶどうを植え、その中に物見やぐらを建て、またその中に酒ぶねを掘り、良いぶどうの結ぶのを待ち望んだ」(イザヤ書五ノ一、二)。

神は、選民によって、全人類に祝福を与えようとご計画になった。「万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家であり、主が喜んでそこに植えられた物は、ユダの人々である」と預言者は言った(同五ノ七)。

この民に神のみ言葉がゆだねられた。彼らは真理、正義、純潔の永遠の原則である神の律法の戒めによって取り囲まれた。これらの原則に服従することが、彼らにとって保護となるのであった。というのは、それによって、彼らは罪の行為による破滅を免れるからである。そして神は、ぶどう畑のやぐらとして、国の中心に神の聖なる神殿をお置きになった。

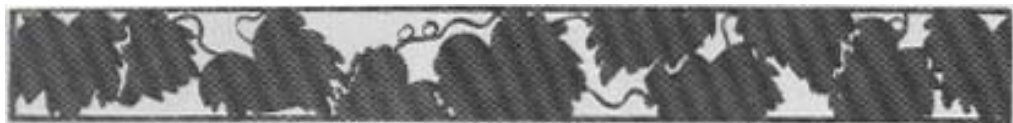
キリストが彼らの教師であった。彼が荒野で彼らと共におられたように、彼はなおも彼らの教師であり、



指導者であられるのであった。キリストの栄光は幕屋において、また神殿において、贖罪所の上の聖なるシエキーナーの中に宿っていた。キリストは、彼らのために、彼の愛と忍耐の富を絶えずあらわしておられた。神のみこころは、モーセによって彼らの前に示され、彼らが繁栄する条件が明らかにされた。「あなたはあなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地のおもてのすべての民のうちからあなたを選んで、自分の宝の民とされた」とモーセは言った(申命記七ノ六)。

「きょう、あなたは主をあなたの神とし、かつその道に歩み、定めと、戒めと、おきてとを守り、その声に聞き従うことを明言した。そして、主は先に約束されたように、きょう、あなたを自分の宝の民とされること、また、あなたがそのすべての命令を守るべきことを明言された。主は誉と良き名と栄えとをあなたに与えて、主の造られたすべての国民にまさるものとされるであろう。あなたは主が言われたように、あなたの神、主の聖なる民となるであろう」(申命記二六ノ一七―一九)。

イスラエルの民は神が彼らにお与えになった地域を全部占領すべきであった。真の神の礼拝と奉仕を拒否した国々は追放されなければならなかった。しかし、イスラエルによって神のご品性があらわされて、人々が神に引きつけられるようになることが、神のみこころであった。福音の招待は、全世界に伝えなければならなかった。犠牲的礼拝の教えによって、国々の前でキリストが高められるのであった。そして、キリストを仰ぎ見るすべての者は生きるのであった。カナン人ラハブやモアブ人ルツのように、偶像礼拝から真の神の礼拝に立ち帰る者は、みな、神の選民に結合するのであった。イスラエル人の数が増加するにつれて、彼らはその国境を広げていき、ついには、彼らの国が全世界を包含するようになるのであった。



しかし、古代のイスラエルは神のみこころを成就しなかった。主は言われた。「わたしはあなたを、まったく良い種のすべれたぶどうの木として植えたのに、どうしてあなたは変って、悪い野ぶどうの木となったのか。」「イスラエルは実を結ぶ茂ったぶどうの木である。」「それで、エルサレムに住む者とユダの人々よ、どうか、わたしとぶどう畑との間をさばけ。わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、何かなすべきことがあるか。わたしは良いぶどうの結ぶのを待ち望んだのに、どうして野ぶどうを結んだのか。それで、わたしが、ぶどう畑になそうとすることを、あなたがたに告げる。わたしはそのまがきを取り去って、食い荒されるにまかせ、そのかきをとりこわして、踏み荒されるにまかせる。わたしはこれを荒して、刈り込むことも、耕すこともせず、おどろと、いばらとを生えさせ、また雲に命じて、その上に雨を降らさない。…主はこれに公平を望まれたのに、見よ、流血。正義を望まれたのに、見よ、叫び」(エレミヤ書二ノ二一、ホセア書一〇ノ一、イザヤ書五ノ三―七)。

主はモーセによつて、不忠実の結果は何であるかを神の民に示された。神の契約を守ることを拒否することによつて、彼らは自分たち自身を神の生命から絶ち切り、神の祝福が彼らのところに達することができないようにするのであった。彼らがこうした警告に心を留めたときには、ユダヤの国には豊かな祝福が与えられた。そして、彼らを通じて周囲の国々にも与えられた。しかし、その歴史において、彼らは神を忘れ、神の代表者としての彼らの大いなる特権を見失った時のほうが多かった。彼らは神が彼らに要求された奉仕をすることをせず、同胞に対しては、宗教的指導と清い模範を示すことをしなかったのである。彼らは管理者の責任を負わせられていたぶどう畑の実を、自分たちの用に供しようとした。彼らの貪欲と強欲は、異邦人

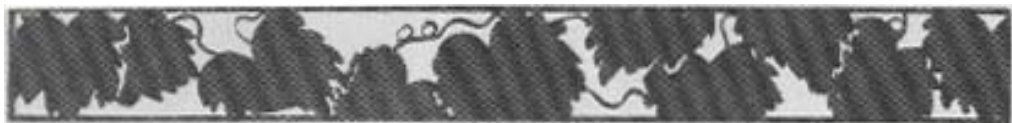


からさえ軽べつされた。こうしたことを理由にして、異教徒の世界は、神のご品性と神の国の律法とを誤って解釈するに至ったのである。

神は父親の心をもって、神の民を長く忍ばれた。神は彼らにあわれみを与え、あるいはあわれみを取り去ることにより、彼らに訴えられた。神は忍耐強く彼らの罪を示し、彼らがそれを認めるに至ることを辛抱強くお待ちになった。神のご要求を農夫たちに説得するために、預言者や使者たちがつかわれた。しかし、こうした先見の明と、霊的能力を持った人々は、歓迎されるどころか、敵とみなされた。農夫たちは彼らを迫害して殺した。神はまた、ほかの使者たちをお送りになった。しかし彼らも、はじめの人々と同様の取り扱いを受けた。農夫たちはさらにかたくなに憎しみを示すに過ぎなかった。

捕囚期間において、神の恵みが取り除かれたことは、多くの人々に悔い改めを促した。しかし、ユダヤ人は約束の地に帰還後、先祖たちの誤りをくり返し、周囲の国々との政治的な争いにまき込まれた。神は、広く行きわたっていた害悪を正すために、預言者たちをお送りになったが、彼らも初期の使者たちに向けられたのと同様の疑念と軽べつを受けた。こうして、ぶどう畑の管理者たちは、過ぎ行く世紀とともに彼らの罪を増し加えていった。

天の農夫であられる神によってパレスチナの丘に植えられたよいぶどうの木は、イスラエルの人々に軽べつされ、ついには、ぶどう畑の壁の向こう側に投げ出され、傷つけられ、足の下にふみにじられた。彼らは、それを永遠に絶滅させようと思ったのである。農夫であられる神は、ぶどうの木を取り去って、彼らの見えないところに隠された。神は、もう一度、それを壁の向こう側に植えて、その幹をもはや見ることができな



いようになさった。枝は、壁から垂れ下がっているから、接ぎ木は枝に接ぐことはできるが、幹そのものは、人間の力がそれに及んだり、害を加えたりすることができない所に置かれたのである。

人類のための神の永遠のご計画を明らかにした預言者たちが語った勧告と警告の言葉は、神のぶどう畑の管理者である今日の地上の教会にとって、特別に価値のあるものである。預言者たちの教えの中に、失われた人類に対する神の愛と、彼らの救いに対する神のご計画が明らかにあらわされている。イスラエルの召しと彼らの成功と失敗、彼らが神の恵みに回復されながらも、ぶどう畑の主を拒否した物語、そして、麗しい残りの民によって、各時代にわたった計画が実現され、彼らにすべての契約が成就されるという物語こそ、過去幾世紀にわたって神の使者たちが、神の教会に伝えた主題であった。そして、今日、神の教会、すなわち、忠実な農夫たちとして神のぶどう畑の働きに従事している者に対する神のみ言葉は、昔の預言者が語った言葉以外の何物でもない。

「麗しきぶどう畑よ、このことを歌え。主なるわたしはこれを守り、常に水をそそぎ、夜も昼も守って、そこなう者のないようにする」(イザヤ書二七ノ二、三)。

イスラエルは、神を待ち望んでいよう。ぶどう畑の主は、今なお、あらゆる国々や国民の中から彼が長く待っておられる尊い実を集めようとしておられる。間もなく彼は、ご自分の民のところに来られる。そしてその喜ばしい日に、イスラエルの家のための彼の永遠のみこころは成就されるのである。「後になれば、ヤコブは根をはり、イスラエルは芽を出して花咲き、その実を全世界に満たす」(同二七ノ六)。

第一章 ソロモン王の選択

イスラエルはダビデとソロモンの治世に、諸国間で強力になり、真理と正義のために大きな影響を及ぼす機会が多くあった。主の名は高く掲げられあがめられて、イスラエルの民が約束の国に確立された目的が実現するかに思われた。障壁は除かれた。そして、異教の国々から真理を求めて来た人々は満たされずに去ることはなかった。改心者が起こった。そして、地上における神の教会は拡張し繁栄した。

ソロモンは父ダビデの晩年に油を注がれて王位についた。ダビデは彼のために退位したのである。ソロモンの生涯の初期は希望に輝いていた。そして、彼が力から力へ、栄光から栄光へと進み、彼の品性がますます神の品性に近づき、こうして、神の民が真理の保管者としての聖なる任務を果たすように、彼らを鼓舞することが神のみこころであった。

イスラエルに対する神の大きいなるみこころは、統治者と国民とがたゆまず目を覚ましていて、彼らの前に置かれた標準に達するように努力することによってのみ達成されることを、ダビデは知っていた。彼は、その子ソロ

モンが、神が彼に授けることをよしとされた信頼にこたえるためには、この若い統治者が、ただ勇士、政治家、国王であるばかりではなくて、力に満ちた善良な人物であり、義の教師、忠誠の模範でなければならないことを知っていた。

ダビデは慈愛深い熱誠さをもって、ソロモンが、男らしく気高くあるように訴え、彼の国民にあわれみと慈愛とを示し、地上の国々とのあらゆる交渉において、神のみ名に栄誉と栄光を帰し、きよい美を表すように訴えた。ダビデは彼の一生の間に多くの苦しいただならぬ経験によって、高潔な美徳の価値を学んだ。そして、ソロモンに対して次のような遺言をしたのである。「人を正しく治める者、神を恐れて、治める者は、朝の光のように、雲のない朝に、輝きでる太陽のように、地に若草を芽ばえさせる雨のように人に臨む」(サムエル記下二三ノ三、四)。

ああ、ソロモンはなんという機会に恵まれていたことだろうか。もし彼が神の靈感による父の教えに従ったならば、彼の治世は詩篇七十二篇に描かれているような正義の治世となったことであろう。

「神よ、あなたの公平を王に与え、

あなたの義を王の子に与えてください。

彼は義をもってあなたの民をさばき、

公平をもってあなたの貧しい者をさばくように。…

彼は刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、

地を潤す夕立のごとく臨むように。

第1章 ソロモン王の選択

彼の世に義は栄え、

平和は月のなくなるまで豊かであるように。

彼は海から海まで治め、

川から地のはてまで治めるように。…

タルシシおよび島々の王たちはみつぎを納め、

シバとセバの王たちは贈り物を携えて来るように。

もろもろの王は彼の前にひれ伏し、

もろもろの国民は彼に仕えるように。

彼は乏しい者をその呼ばれる時に救い、

貧しい者と、助けなき者とを救う。…

彼のために絶えず祈がささげられ、

ひねもす彼のために祝福が求められるように。…

彼の名はとこしえに続き、

その名声は日のあらん限り、絶えることのないように。

人々は彼によって祝福を得、

もろもろの国民は彼をさいわいなる者と

となえるように。

イスラエルの神、主はほむべきかな。

ただ主のみ、くすしきみわざをなされる。

その光栄ある名はとこしえにほむべきかな。

全地はその栄光をもって満たされるように。

アアメン、アアメン。」

ソロモンは若かった時、ダビデの選んだとおりの道を選び、長年の間正しく歩み、彼の生涯は神の戒めに対する厳格な服従がその特徴になっていた。彼はその治世の初期において、国家の顧問官たちとともに、荒野に建てられた幕屋がまだ残っていたギベオンに行った。そしてそこで、彼は「千人の長、百人の長、さばきびとおよびイスラエルの全地のすべてのつかさ、氏族のかしらたち」など彼が選んだ顧問官たちと一つになって神に犠牲を献げて、自分たちを全く主の奉仕に献身したのである(歴代志下一ノ二)。ソロモンは、王の務めに関連した義務の重要さを理解して、重い責任を負っている者がその責任を満足に果たそうとするならば、知恵の源であられる神の指導を求めなければならないことを悟った。そこで彼は、彼の顧問官たちに心から彼と心を一つにして、神に受け入れられることを求めるように促したのである。

王は、神が彼にお与えになった仕事をなしとげるために、この地上のどんな幸福よりも知恵と悟りを願い求めた。彼は機敏な心、寛大な心、慈悲深い心が与えられることを望んだ。その夜、主が夢のうちにソロモンに現れて「あなたに何を与えようか、求めなさい」と言われた。それに答えて、若く経験に乏しい王は、自分の無力感

第1章 ソロモン王の選択

と助けを願い求めている気持ちとを表明した。『あなたのしもべであるわたしの父ダビデがあなたに対して誠実と公義と真心とをもって、あなたの前に歩んだので、あなたは大きいなつくしみを彼に示されました。またあなたは彼のために、この大きいなつくしみをたくわえて、今日、彼の位に座する子を授けられました。

わが神、主よ、あなたはこのしもべを、わたしの父ダビデに代って王とならせられました。しかし、わたしは小さい子供であって、出入りすることを知りません。かつ、しもべはあなたが選ばれた、あなたの民、すなわちその数が多くて、数えることもできないほどのおびたしい民の中にあります。それゆえ、聞きわけの心をしもべに与えて、あなたの民をさばかせ、わたしに善悪をわきまえることを得させてください。だが、あなたのこの大いなる民をさばくことができましょう』。

ソロモンはこの事を求めたので、そのことが主のみこころにかなった。

そこで神は彼に言われた、『あなたはこの事を求めて、自分のために長命を求めず、また自分のために富を求めず、また自分の敵の命をも求めず、ただ訴えをききわけける知恵を求めたゆえに、見よ、わたしはあなたの言葉にしたがって、賢い、英明な心を与える。あなたの先にはあなたに並ぶ者がなく、あなたの後にもあなたに並ぶ者は起らないであろう。わたしはまたあなたの求めないもの、すなわち富と誉をもあなたに与える』。「わたしはまたあなたの前の王たちの、まだ得たことのないほどの富と宝と誉とをあなたに与えよう。あなたの後の者も、このようなものを得ないでしょう」。

「もしあなたが、あなたの父ダビデの歩んだように、わたしの道に歩いて、わたしの定めと命令とを守るならば、わたしはあなたの日を長くするであろう」(列王紀上三ノ五一―四、歴代志下一ノ七一―二)。

神は、ダビデとともにあられたように、ソロモンとともにあられることを約束された。もし王が主の前で正しく歩み、神が彼にお命じになったことを行うならば、彼の王座は確立し、彼の治世はイスラエルを「知恵あり、知識ある民」として高め、周囲の国々の光とすることになるのであった（申命記四ノ六）。

ギベオンにおける昔ながらの祭壇の前でささげた、ソロモンの祈りの言葉は、彼の謙遜と神に栄誉を帰そうとする熱意をあらわしている。もし神の助けがなければ、彼に負わせられた責任を果たすのに、彼は子供のように無力であることを自覚したのである。彼は識別力に欠けているのを知り、このような大きな必要感から知恵を神に願い求めたのである。彼の心の中には、他の者の上に自分を高めようとする利己的な知識に対する野望はなかった。彼は自分に負わせられた義務を忠実に果たすことを願った。そして、彼の治世を神に栄光を帰するものにする事ができるような賜物を選んだ。ソロモンは、「わたしは小さい子供であって、出入りすることを知りません」と告白したときほどに富み豊かで、賢明で、真に偉大だったことはなかったのである。

今日、責任を負わせられている者は、ソロモンの祈りが教える教訓を学ばなければならない。人の占める地位が高ければ高いほど、背負う責任も大きく、及ぼす影響の範囲も広くなり、神に依存する必要もそれだけ大きいのである。働きの召しとともに、同胞の前で用心深く歩くという召しをも受けていることを、常に記憶していなければならない。彼は学ぶ者の態度で神の前に立たなければならない。地位は品性を清くしない。人間が真に偉大なものとされるのは、神を尊び、神の命令に従うことによってである。

われわれが仕える神は人をかたよりにないかたである。ソロモンに賢く物をわきまえる霊をお与えになったかたは、今日、神の子供たちに同じ祝福を喜んでお与えになる。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があ

第1章 ソロモン王の選択



神の幕屋が建てられたギベオンで、ソロモン王はいけにえを捧げ、理解力が与えられるように神に祈った。

れば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」と神の言葉に書いてある（ヤコブ一ノ五）。重荷を背負っている者が、富、権力、名声を求める以上に知恵を求めるならば、失望させられることはない。このような人は、ただ何をすべきかということだけでなく、どのような方法でそれを行って、神のみこころにかなうようにすべきかを、偉大な教師であられるイエスから学ぶのである。

神が識別力と才能をお与えになった人は、献身を維持している限り、高い地位に対する熱望をあらわしたり、支配したり監督したりしようと努めない。人は必要に迫られて責任を負わなければならない。しかし、真の指導者は最高の地位を求めようとはせず、善悪をわきまえる理解力が与えられることを祈り求めるのである。

指導者の立場に置かれた人々の道はやさしいものではない。しかし、彼らは困難に出会うごとに、それが祈りへの招きであることを認めなければならない。彼らは、あらゆる知恵の大いなる源であられる神のみこころを伺うことを怠ってはならない。彼らは、大いなる働き人であられる主の力と教えを受けて、悪の勢力に固く立ち向かい、善悪、正邪の区別をすることができるようになる。彼らは神がお認めになるものを認め、神のみ事業のなかに誤った原則がとりいれられることに極力反対するのである。

神はソロモンが、富、栄誉、あるいは長寿などよりも願い求めた知恵を、彼にお与えになった。機敏な知力、寛大な力、慈悲深い精神に対する彼の祈願は聞き入れられた。「神はソロモンに非常に多くの知恵と悟りを授け、また海への砂原のように広い心を授けられた。ソロモンの知恵は東の人々の知恵とエジプトのすべての知恵にまさった。彼はすべての人よりも賢く、…その名声は周囲のすべての国々に聞えた」（列王紀上四ノ二九―三一）。

第1章 ソロモン王の選択

「イスラエルは皆……王を恐れた。神の知恵が彼のうちにあつて、さばきをするのを見たからである」(同三ノ二八)。人々の心はダビデを敬ったように、ソロモンを敬い、すべての事において彼に服従した。「ソロモンはその国に自分の地位を確立した。その神、主が共にいまして彼を非常に大いなる者にされた」(歴代志下一ノ二)。神に対する献身、高潔さと原則に固く立つこと、神の命令には厳密に服従することなどが、長年にわたって、ソロモンの生涯の特色であつた。彼はあらゆる重要な事業を指導し、王国に関係した取り引きを賢く処理した。彼の富と知恵、彼の治世の初期に建設された壮大な建物や公共事業、彼の言葉と行動に現れた活気、敬神深さ、正義、雅量などが、彼の国民の忠誠を得るとともに、多くの国々の王たちの称賛と尊敬とを勝ち得たのである。

ソロモンの治世の初期に、主の名は大いにたたえられた。王が示した知恵と義は、彼が仕える神の優れた特性をすべての国々にあかししたのである。しばらくの間、イスラエルは世の光となり、主の偉大さを示したのである。ソロモンの治世の初期の真の栄光は、卓越した知恵、驚くばかりの富、また、彼の広範囲に及んだ権力と名声にあつたのではなかつた。それは、彼が神の賜物を賢明に用いることにより、イスラエルの神の名をたたえたことであつたのである。

年月が経過して、ソロモンの名声が高まつたときに、彼は、自分の知的、霊的能力を強めて、彼が受けた祝福を他の人々に分け与え続けることにより神に栄光を帰そうとした。彼に権力と知恵と悟りが与えられたのは、主の恵みによるものであること、また、これらの賜物が与えられたのは、彼が王の王の知識を世界に伝えるためであつたことを他のだれよりもよく知っていたのは彼であつた。

ソロモンは博物学に特に興味を持ったが、彼の研究は学問の一分野だけにとどまらなかつた。彼は生物、無生

物を問わず、創造されたあらゆる事物を熱心に研究して、創造主について明快な考えを持った。彼は、自然界の威力、鉱物や動物界、あらゆる樹木、かん木、草花の中に、神の知恵の啓示を見た。そして、彼は学べば学ぶほど、神についての知識と神を愛する愛とが、絶え間なく増し加わるのであった。

ソロモンの靈感による知恵は、賛美の歌や多くの格言となって表現された。「彼はまた箴言三千を説いた。またその歌は一千五首あった。彼はまた草木のことを論じてレバノンの香柏から石がきにはえるヒソブにまで及んだ。彼はまた獣と鳥と這うものと魚のことを論じた」(列王紀上四ノ三二、三三)。

ソロモンの箴言には、清い生活と大きな努力の原則、敬虔な生活へ導く天来の原則、人生のあらゆる行動を支配すべき原則などの概略が述べられている。このような原則が広く一般に普及していたことと、すべての賛美と誉れを帰すべきお方として、神を認めたことが、ソロモンの初期の治世を、物質的繁栄と同時に道徳的に向上した時代としたのであった。

「知恵を求めて得る人、悟りを得る人はさいわいである。知恵によつて得るものは、銀によつて得るものにまさり、その利益は精金よりも良いからである。知恵は宝石よりも尊く、あなたの望む何物も、これと比べるに足りない。その右の手には長寿があり、左の手には富と、誉がある。その道は楽しい道であり、その道筋はみな平安である。知恵は、これを捕える者には命の木である、これをしっかりと捕える人はさいわいである」と彼は書いた(箴言三ノ一二―一八)。

「知恵の初めはこれである、知恵を得よ、あなたが何を得るにしても、悟りを得よ」(同四ノ七)。「主を恐れることは知恵のはじめである」(詩篇一一ノ一〇)。「主を恐れるとは悪を憎むことである。わたしは高ぶりと、

おごりと、悪しき道と、偽りの言葉を憎む」(箴言八ノ一二)。

後年において、ソロモンがこれらの驚くべき知恵の言葉に聞き従ったならば、どんなによかったことであろう。「知恵ある者のくちびるは知識をひろめる」(同一五ノ七)と言った人、また、地上の王に帰そうとした賛美を王の王に献げるように地の王たちに教えたその当人が、「高ぶりとおごりと…偽りの言葉」によって、神にのみ帰すべき栄光を自分に帰すことをしなかったならば、どんなによかったことであろう。

第二章 エルサレム神殿の建設

主の神殿を建設しようとダビデが長く心に抱いていた計画は、ソロモンによって賢明に実行に移された。エルサレムは、七年にわたって、選ばれた敷地の地ならしをする者、巨大な城壁を築く者、広大な基礎づくりをする者、「大きい高価な石を切り出」す者、レバノンの森林から運んできた木材を整えて、壮麗な聖所を建設する者など、忙しく働く職人たちで満たされた(列王紀上五ノ一七)。

幾千の人々が木材と石材の準備に努力を傾けると同時に、神殿の備品の製作もツロのヒラムの指導の下に着実に進んでいた。彼は「知恵のある工人、…金銀、青銅、鉄、石、木の細工および紫系、青系、亜麻系、緋系の織物にくわし」い人であった(歴代志下二ノ一三、一四)。

こうして、モリアの山の上で建物之音もなく建てられ、「石切り場で切り整えた石をもつて造ったので、建っている間は宮のうちには、つちも、おのも、その他の鉄器もその音が聞えなかった」。美しい備品、すなわち「神の宮のすべての器物」は、ダビデがその子に指示した型に従って、完成された(列王紀上六ノ七、歴代志下四ノ

第2章 エルサレム神殿の建設

一九)。これらの中には「金と精金」で造られた香壇、供えのパンを載せる机、燭台とそのともしび皿、そして、聖所の祭司の務めに関する器具がみな含まれていた(歴代志下四ノ一二)。燔祭の壇、十二の牛に支えられた大洗盤、小型の洗盤その多他くの青銅の器具を「王はヨルダンの低地で、スコテとゼレダの間の粘土の地でこれを鋳た」(同四ノ一七)。これらの器具は、不足することがないように、豊富に準備されたのである。

ソロモンと彼の協力者たちが神と神の礼拝のために建てた広大な建物は、実に、美を極め、その華麗さは、ほかに比べるものがなかった。壮麗な入口と広い庭に囲まれて、寶石に飾られ、彫刻をほどこした香柏、みがき上げた金をはりつめた神殿は、各時代を通じて神の型に従って、「金、銀、宝石」にたとえられた材料によって、「宮の建物のために刻まれる」地上の神の生ける教会を代表するのに、まことにふさわしいものであった(コリント第一・三ノ一二、詩篇一四四ノ一二)。キリストは、この霊的神殿の「隅のかしら石である。このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長」するのである(エペソ二ノ二〇、一二)。

ダビデ王が計画し、その子ソロモンが建築に当たった神殿がついに完成した。「ソロモンは主の家…について、しようと計画したすべての事を首尾よくなし遂げた」(歴代志下七ノ一一)。ダビデが切に望んだとおり、今、モリアの山の頂に位するこの宮が、「人のためではなく、主なる神のため」の住居となるためには、それを公に、主と主の礼拝に献げる厳粛な儀式が行われなければならなかった(歴代志上二九ノ一)。

神殿が建てられた場所は、昔から神聖な場所とされていた。信仰の父アブラハムが、主の命令に従って、彼のひとり子を喜んで献げる精神をあらわしたのは、ここであった。神は、ここで、アブラハムに神の祝福の契約を更新された。それには、至高者のみ子の犠牲によって、人類が救済されるという輝かしいメシヤの約束が含まれ

ていた（創世記二二ノ九、一六―一八参照）。また、ダビデが滅ぼす天使の復讐のつるぎをとどめるために、燔祭と酬恩祭を献げ、神がそれに天から火を下して答えられたのも、ここであつた（歴代志上二二章参照）。そして、主の礼拝者たちは、もう一度ここで神のみ前に出て、神に対する彼らの忠誠の誓いを更新するのであつた。

奉献式のために選ばれた時は最も好都合な七月であつた。それは全国各地から人々がエルサレムに集まつて来て、仮庵の祭りを祝うときであつた。この祭りは特に喜ばしい時であつた。収穫の仕事は終わり、新しい年の労苦はまだ始まつていなかった。人々は苦勞から解放されて、この時の神聖で喜ばしい雰囲気にはびたることのできたのである。

定められたときに、大勢のイスラエルの人々は立派な装いをした多くの外国の代表者たちとともに神殿の庭に集まつた。それはまれにしか見ることができない華麗な光景であつた。ソロモンは、イスラエルの長老たちや民の中の最も有力な人々とともに、町の別のところからもどつてきた。そこに契約の箱が移されていたのであつた。ギベオンの頂にあつた昔の聖所から、「会見の幕屋と、幕屋にあるすべて聖なる器」が移されたのである（歴代志下五ノ五）。そして、イスラエルの民の荒野の放浪とカナンの征服における初期の出来事の懐かしい思い出の品が移動式の建造物のかわりに建てられた壮麗な建物の中に、永久に保存されることになった。

十戒が神の指によって書かれた二枚の石の板を納めた聖なる箱を神殿に持ってきたということは、ソロモンが父ダビデの模範に従つたのであつた。彼は六歩進むごとに犠牲を献げた。歌と音楽と荘嚴な儀式のうちに、「祭司たちは主の契約の箱をその場所にかつぎ入れ、宮の本殿である至聖所のうちに……置いた」（同五ノ七）。彼らは至聖所から出て来て、彼らに定められた位置についた。歌をうたう人々、すなわち、レビ人たちは、亜麻布を着、

シンバルと、立琴と、琴をとって祭壇の東に立ち、百二十人の祭司は彼らと一緒に立ってラッパを吹いた(同五ノ一二参照)。

「ラッパ吹く者と歌うたう者とは、ひとりのように声を合わせて主をほめ、感謝した、そして彼らがラッパと、シンバルとその他の楽器をもって声をふりあげ、主をほめて『主は恵みあり、そのあわれみはとこしえに絶えることがない』と言ったとき、雲はその宮すなわち主の宮に満ちた。祭司たちは雲のゆえに立って勤めをすることができなかった。主の栄光が神の宮に満ちたからである」(同五ノ一二、一四)。

ソロモンは、この雲の意義を悟って、次のように言った。「主はみずから濃き雲の中に住まおうと言われた。しかしわたしはあなたのために高き家、とこしえのみすまいを建てた」(同六ノ一、一二)。

「主は王とられた。

もろもろの民はおののけ。

主はケルビムの上に座せられる。

地は震えよ

主はシオンにおられて大いなる神、

主はもろもろの民の上に高くいらせられる。

彼らはあなたの大いなる恐るべき名を

ほめたたえるであらう。

主は聖でいらせられる。…

われらの神、主をあがめ、

その足台のもとで拝みまつれ。

主は聖でいらせられる」（詩篇九九ノ一―五）。

神殿の「庭のまん中に」、「長さ五キュビト、幅五キュビト、高さ三キュビトの青銅の台」が設けられた。ソロモンはその上に立って、両手をあげて、彼の前にいるおびただしい群衆を祝福した。「その時イスラエルの全会衆は立っていた」（歴代志下六ノ一三、一四）。

ソロモンは叫んだ、「イスラエルの神、主はほむべきかな。主は口をもってわが父ダビデに約束されたことを、その手をもってなし遂げられた。…わが名を置くために、ただエルサレムだけを選ばれた」（同六ノ四―六）。それから、ソロモンは、その台の上でひざまずき、すべての人々が聞いているところで、奉献の祈りをささげた。会衆が顔を地につけてひざまずいている時に、王は両手を天にあげて嘆願した。「イスラエルの神、主よ、天にも地にも、あなたのような神はありません。あなたは契約を守られ、心をつくしてあなたの前に歩むあなたのしもべらに、いつくしみを施」されます。

「しかし神は、はたして人と共に地上に住まわれるでしょうか。見よ、天も、いと高き天もあなたをいれることはできません。わたしの建てたこの家などなおさらです。しかしわが神、主よ、しもべの祈と願いを顧みて、しもべがあなたの前にささげる叫びと祈をお聞きください。どうぞ、あなたの目を昼も夜もこの家に、すなわちあなたの名をそこに置くと言われた所に向かってお開きください。どうぞ、しもべがこの所に向かってささげる

第2章 エルサレム神殿の建設

祈をお聞きください。どうぞ、しもべと、あなたの民イスラエルがこの所に向かって祈る時に、その願いをお聞きください。あなたのすみかである天から聞き、聞いておゆるしください。…

もしあなたの民イスラエルが、あなたに対して罪を犯したために、敵の前に敗れた時、あなたに立ち返って、あなたの名をあがめ、この宮であなたの前に祈り願うならば、あなたは天から聞き、あなたの民イスラエルの罪をゆるして、あなたが彼らとその先祖に与えられた地に彼らを帰らせてください。

もし彼らがあなたに罪を犯したために、天が閉ざされて、雨がなく、あなたが彼らを苦しめられるとき、彼らがこの所に向かって祈り、あなたの名をあがめ、その罪を離れるならば、あなたは天にあって聞き、あなたのしもべ、あなたの民イスラエルの罪をゆるして、彼らに歩むべき良い道を教え、あなたの民に嗣業として賜わった地に雨を降らせてください。

もし国にききんがあるか、もしくは疫病、立ち枯れ、腐り穂、いなご、青虫があるか、または敵のために町の門の中に攻め囲まれることがあるか、どんな災害、どんな病気があっても、もし、ひとりか、あるいはあなたの民イスラエルが皆おのおのその心の悩みを知って、この宮に向かい、手を伸べるならば、どんな祈、どんな願いでも、あなたはそのすみかである天から聞いてゆるし、おのおのの人に、その心を知っておられるゆえ、そのすべての道にしたがって報いてください。…あなたがわれわれの先祖たちに賜わった地に、彼らの生きながらえる日の間、常にあなたを恐れさせ、あなたの道に歩ませてください。

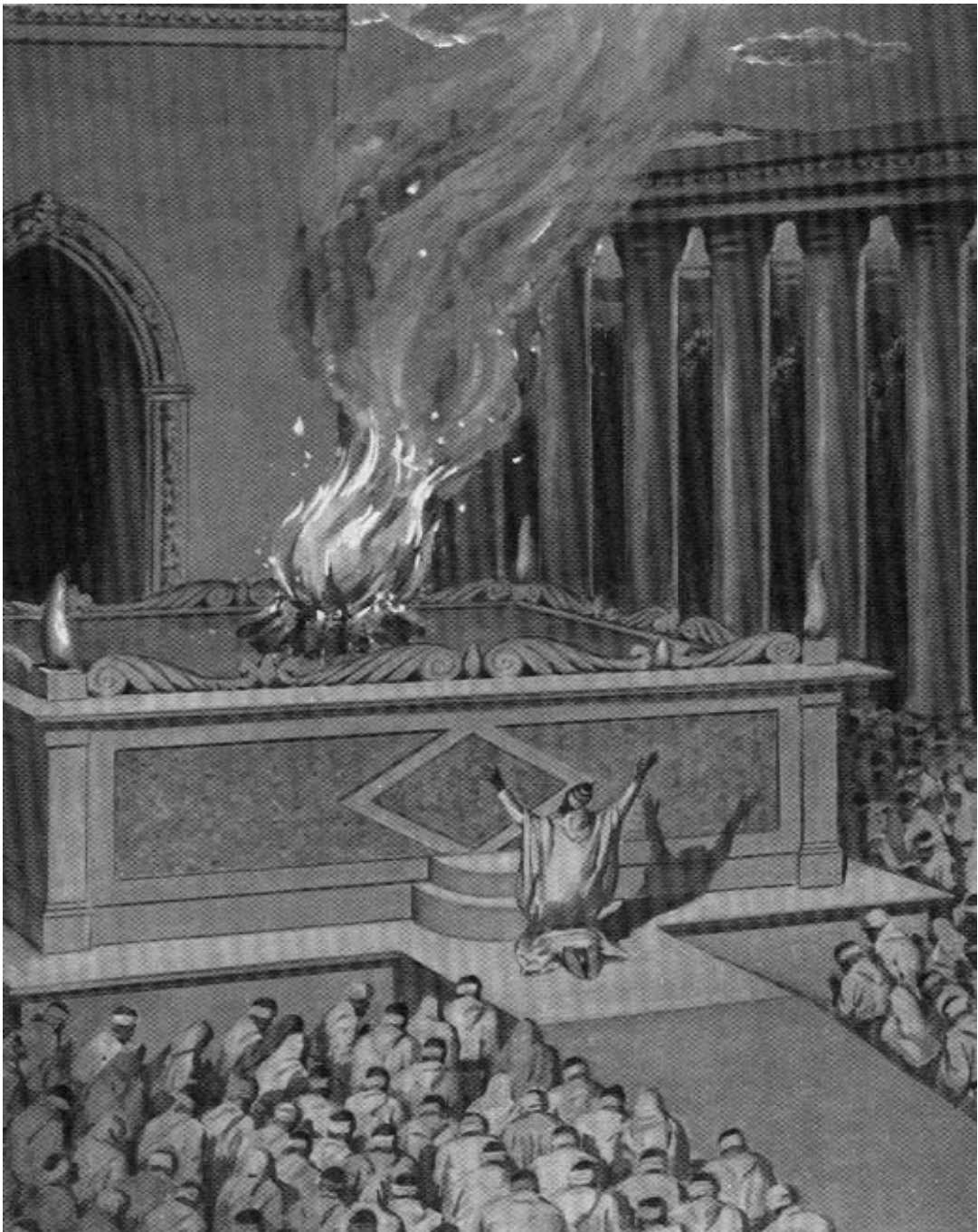
またあなたの民イスラエルの者でなく、他国人で、あなたの大きい名と、強い手と、伸べた腕のために遠い国から来て、この宮に向かって祈るならば、あなたは、あなたのすみかである天から聞き、すべて他国人があなた

に呼び求めるようにしてください。そうすれば地のすべての民はあなたの民イスラエルのように、あなたの名を知り、あなたを恐れ、またわたしが建てたこの宮が、あなたの名によって呼ばれることを知るにいたるでしょう。あなたの民が敵と戦うために、あなたがつかわれる道によって出るとき、もし彼らがあなたの選ばれたこの町と、わたしがあなたの名のために建てたこの宮に向かってあなたに祈るならば、あなたは天から彼らの祈と願いを聞いて彼らをお助けください。

彼らがあなたに対して罪を犯すことがあって、——罪を犯さない人はいないゆえ、——あなたが彼らを怒って、敵にわたし、敵が彼らを捕虜として遠い地あるいは近い地に引いて行くとき、もし、彼らが捕われて行った地で、みずから省みて悔い、その捕われの地であなたに願い、『われわれは罪を犯し、よこしまな事をし、悪を行いました』と言い、その捕われの地で心をつくし、精神をつくしてあなたに立ち返り、あなたが彼らの先祖に与えられた地、あなたが選ばれた町、わたしがあなたの名のために建てたこの宮に向かって祈るならば、あなたのすみかである天から、彼らの祈と願いを聞いて彼らを助け、あなたに向かって罪を犯したあなたの民をおゆるしてください。

わが神よ、どうぞ、この所でささげる祈にあなたの目を開き、あなたの耳を傾けてください。主なる神よ、今あなたと、あなたの力の箱が立って、あなたの安息所におはいりください。主なる神よ、どうぞあなたの祭司たちに救の衣を着せ、あなたの聖徒たちに恵みを喜ばせてください。主なる神よ、どうぞあなたの油そそがれた者の顔を退けないでください。あなたのしもべダビデに示されたいつくしみを覚えて下さい」(歴代志下六ノ一四—四二)。

第2章 エルサレム神殿の建設



ソロモン王は祭壇の前にひざまずき、すべての民衆の前で神殿を奉獻する祈りをささげた。彼は手を天にさしのべ、神のあわれみを請い求めた。

ソロモンが祈り終わったとき、「天から火が下って燔祭と犠牲を焼き、主の栄光が宮に満ちた」。「主の栄光が主の宮に満ちたので」、祭司たちは神殿にはいることができなかった。「イスラエルの人々はみな：主の栄光が宮に臨んだのを見て、敷石の上で地にひれ伏して拝し、主に感謝して言った、『主は恵みふかく、そのいづくしみはとこしえに絶えることがない』」（歴代志下七ノ一―三）。

そして、王と民は主の前に犠牲をささげた。「こうして王と民は皆神の宮をささげた」（同七ノ五）。「ハマテの入口からエジプトの川に至るまで」、王国の各地から集まった「非常に大きな会衆」と言われている群衆が、七日の間、喜ばしい祭りを行った。喜びに満ちた群衆は、その次の週に、仮庵の祭りを祝った。再献身と喜びの期間が終わったときに、人々は「主がダビデ、ソロモンおよびその民イスラエルに施された恵みのために喜び、かつ心に楽しんで去った」（同七ノ八、一〇）。

王は、神と神のご用のためにすべてを献げ、神の聖なるみ名を賛美するように民を励ますために彼のなしうる限りのことをしたのである。そして、イスラエルの王の治世の初期に、ギベオンにおけると同様に、ここでもう一度、彼が神に受け入れられ、祝福されるというしるしが与えられた。主は夜の幻のなかで彼に現れて、次のように言われた。「わたしはあなたの祈を聞き、この所をわたしのために選んで、犠牲をささげる家とした。わたしが天を閉じて雨をなくし、またはわたしがいなごに命じて地の物を食わせ、または疫病を民の中に送るとき、わたしの名をもってとなえられるわたしの民が、もしへりくだり、祈って、わたしの顔を求め、その悪い道を離れるならば、わたしは天から聞いて、その罪をゆるし、その地をいやす。今この所にささげられる祈にわたしの目を開き、耳を傾ける。今わたしはわたしの名をながくここにとどめるために、この宮を選び、かつ聖別した。

わたしの目とわたしの心は常にここにある」(同七ノ二一―一六)。

イスラエルが神に忠実であつたならば、この栄光に満ちた建物は、神の選民に対する神の特別な恵みの永遠のしるしとして、永遠に存続するのであつた。「また主に連なり、主に仕え、主の名を愛し、そのしもべとなり、すべて安息日を守つて、これを汚さず、わが契約を堅く守る異邦人は――わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、わが祈の家のうちで楽しませる、彼らの燔祭と犠牲とは、わが祭壇の上に受けいられる。わが家はすべての民の祈の家となえられるからである」と神は言われた(イザヤ書五六ノ六、七)。

こうした嘉納の確証に関連して、主は義務の道を非常に明瞭に王の前に示された。「あなたがもし父ダビデの歩んだようにわたしの前に歩み、わたしが命じたとおりにすべて行つて、わたしの定めとおきてとを守るならば、わたしはあなたの父ダビデに契約して『イスラエルを治める人はあなたに欠けることがない』と言つたとおりに、あなたの王の位を堅くする」(歴代志下七ノ一七、一八)。

もしソロモンが謙遜に主に仕えることを続けていったならば、彼の治世全体は、すでに彼の父ダビデの治世と彼の賢明な言葉や彼の初期の治世の壮大な事業によつて、非常な好感を抱いていた周囲の国々に強力な好影響を及ぼしたことであろう。神は、繁栄と世俗的栄誉に伴う恐るべき誘惑を予見して、ソロモンに背信の害悪に対する警告を発し、恐るべき罪の結果を予告したのである。もしイスラエルの人々が、「その先祖たちの神、主を捨てて」頑強に偶像礼拝を続けるならば、今、奉献されたばかりの美しい神殿さえも、「もろもろの民のうちにことわざとし、笑い草とする」と神は言われたのである(同七ノ二二、二〇)。

ソロモンは、イスラエルのための彼の祈りが聞かれたという天からの言葉に力づけられ、大いに励まされて、

彼の治世の最も輝かしい時代にはいったのである。「地のすべての王は神がソロモンの心に授けられた知恵を聞こうとして」彼の謁見を求めた(歴代志下九ノ二三)。彼の統治の方法や、困難な問題の扱い方について、教える受けるために来る者も多かった。

こうした人々がソロモンを訪ねて来たときに、彼は神が万物の創造主であることを教えた。そして、彼らはイスラエルの神と人類に対する神の愛について、はっきりした考えをもって彼らの故郷へ帰ったのである。彼らは今、自然界のみわざの中に、神の愛の表現と神のご品性の啓示をながめた。そして、多くの者は神を彼らの神として礼拝するようになったのである。

ソロモンが国事の責任を負ったときに、神の前で、「わたしは小さい子供である」(列王紀上二三ノ七)と認めた彼の謙遜、彼の神に対する著しい愛、神的事物に対する深い崇敬の念、また、彼が自己に信賴せず、万物の創造主であられる無限の神を高めたことなど、われわれが見習う価値のあるこれらの品性の特質はみな、神殿の完成を祝う儀式が行われ、彼が謙遜な嘆願者の姿勢をとってひざまずき、彼の奉獻の祈りをささげたときに、あらわされたのであった。今日、キリストの弟子たちは、神を恐れかしこぶ精神を失わないように、気をつけていなければならない。聖書は人々がどのようにして彼らの造り主に近づくべきか、すなわち、仲保者であられるお方を信じて、謙遜と畏敬の念をもって近づくべきことを教えている。詩篇記者は言った。

「主は大いなる神、

すべての神にまさって大いなる王だからである。…

さあ、われらは拝み、ひれ伏し、

われらの造り主、主のみにひざまずこう」。

(詩篇九五ノ三一六)

公的と私的の礼拝の両方において、われわれが神に嘆願するときには、神のみにひざまずくのが、われわれの特権である。われわれの模範であられるイエスは「ひざまずいて、祈って言われた」(ルカ二二ノ四一)。弟子たちについても、彼らは「ひざまずいて祈った」と記されている(使徒行伝九ノ四〇)。パウロは、われわれの主イエス・キリストの父なる神に「ひざをかがめ」と言った(エペソ三ノ一四)。エズラはイスラエルの罪を神に告白したときに、ひざまずいた(エズラ記九ノ五参照)。ダニエルは「一日に三度ずつ、ひざをかがめて神の前に祈り、かつ感謝した」(ダニエル書六ノ一〇)。

神に真の崇敬の念を抱くということは、神の無限の偉大さと神の臨在を自覚することによるのである。すべての者は見えない神に対して、こつした思いを心から抱かなければならない。祈りの時間と場所は神聖である。なぜならば、神がそこにおられるからである。そして、崇敬の念が態度とふるまいにあらわされるときに、その感じはさらに深まるのである。「そのみ名は聖にして、おそれおおい」と詩篇記者は言っている(詩篇一一ノ九)。そのみ名を語るとき、天使たちは彼らの顔をおおうのである。もしそうであるならば、墮落した罪深いわれわれは、どんな崇敬の念をもって、それを、われわれの口にしなければならぬことであろう。

神の特別の臨在があらわされた場所は、どんなに重要視すべきであるかを示す次のみ言葉を老いも若きもともによく考える必要がある。神は、燃えるしばのところ、「足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその

場所は聖なる地だからである」とモーセに言われた(出エジプト記三ノ五)。ヤコブは天使たちの幻を見たあとで、「まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった。…これは神の家である。これは天の門だ」と叫んだ(創世記二八ノ一六、一七)。

奉献の儀式のなかで語られた言葉によつて、ソロモンは臨席した人々の心の中から、創造主に関する迷信を除き、去しようと努めた。それは異教徒の心を暗くしていたものであった。天の神は、異教徒の神々とはちがって、手で造った神殿に閉じ込めておくことはできない。しかし神は、神の民が神の礼拝のために奉献された宮に集まるたびに、聖霊によつて彼らにお会いになるのである。

パウロは幾世紀も後になって、その同じ真理を次のように教えた。「この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない。また、何か不足でもしてあるかのように、人の手によつて仕えられる必要もない。神は、すべての人々に命と息と万物とを与え、…こうして、人々が熱心に追ひ求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない。われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである」(使徒行伝一七ノ二四―二八)。

「主をおのが神とする国はさいわいである。

主がその嗣業として選ばれた民はさいわいである。

主は天から見あるされ、

すべての人の子らを見、

第2章 エルサレム神殿の建設

そのおられる所から

地に住むすべての人をながめられる」。

「主はその玉座を天に堅くすえられ、

そのまつりごとはすべての物を統べ治める」。

「神よ、あなたの道は聖である。

われらの神のように大いなる神はだれか。

あなたは、くすしきみわざを行われる神である。

あなたは、もろもろの民の間に、その大能をあらわす」。

(詩篇三三ノ一二―一四、一〇三ノ一九、七七ノ一三、一四)。

神は、手で造った神殿にお住みにはならないが、神の臨在によつて神の民の集会を尊ばれる。神は、彼らが神を求め、罪を認め、互いのために祈るために集まるときに、聖霊によつて彼らに会々と約束されたのである。しかし、神を礼拝するために集まる者は、すべての悪事を捨て去らなければならない。彼らが、霊とまことをもつて、聖なる装いをして神を拝むのでなければ、彼らが集まるのは無益である。このような人々について主は、次のように言われる。「この民は、□さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている」(マタイ

一五ノ八)。神を礼拝する者は、「霊とまことをもって礼拝」しなければならない。「父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである」(ヨハネ四ノ二三)。

「主はその聖なる宮にいます、全地はそのみ前に沈黙せよ」(ハバクク書二ノ二〇)。

第二章 繁栄の落とし穴

ソロモンが天の律法を高めていた間、神は彼とともにおられた。そして、彼にはイスラエルを公平とあわれみをもって治める知恵が与えられていた。最初、富と世代的栄誉が与えられたとき、彼は謙遜な気持ちを失わず、彼の影響は広範囲に及んだ。「ソロモンはユフラテ川からペリシテびとの地と、エジプトの境に至るまでの諸国を治めた」。「彼は…周囲至る所に平安を得た。ソロモンの一生の間、ユダとイスラエルは…安らかにおのの自分たちのぶどうの木の下と、いちじくの木の下に住んだ」(列王紀上四ノ二一、二四、二五)。

しかし、彼の生涯は大いなる約束に輝く朝が過ぎたときに、背教によって暗くなつた。エデデア、「主に愛された者」(サムエル記下二二ノ二五、英文欄外注参照)と呼ばれた者、神の誉れを受け、著しい神の恵みの証拠が与えられて、彼の知恵と義とが世界的に名声を博し、イスラエルの神に栄えを帰すように他の人々を導いた者が、主の礼拝を捨てて異教徒の偶像の前にひざまずいたのである。

ソロモンが王位につく幾百年も前に、主はイスラエルの王として選ばれる人々を襲う危険を予見して、彼らを

導く教えをモーセにお与えになった。イスラエルの王位につく者は「レビびとである祭司の保管する書物から、この律法の写しを一つの書物に書きしるさせ」るようという指示が与えられた。主は言われた。「世に生きながらえる日の間、常にそれを自分のもとに置いて読み、こうしてその神、主を恐れることを学び、この律法のすべての言葉と、これらの定めとを守って行わなければならない。そうすれば彼の心が同胞を見くだして、高ぶることなく、また戒めを離れて、右にも左にも曲ることなく、その子孫と共にイスラエルにおいて、長くその位にとどまることができるであろう」(申命記一七ノ一八―二〇)。

主は、この教えと関連して、王として油を注がれる者は、「妻を多く持つて心を、迷わしてはならない。また自分のために金銀を多くたくわえてはならない」という特別の注意をお与えになった(同一七ノ一七)。

ソロモンはこうした警告を熟知していて、しばらくの間はそれに心を留めていた。彼はシナイ山において与えられた律法に従って生き、治めることを彼の何よりの願いとしていた。彼の王国の国事の扱い方は、彼の時代の諸国、すなわち、神を恐れない国々、またその王たちが神の聖なる律法を足の下にふみにじっていた国々の習慣と著しく異なっていた。

ソロモンはイスラエルの南に位する強力な王国との関係を強化しようとして、禁じられた所に足をふみ入れた。サタンは服従すればどんな結果が伴うかを知っていた。ソロモンが知恵と慈悲と真心をもって治めた初期の輝かしい時代に、サタンは陰険な方法で主義に対する忠誠心をソロモンに失わせ、彼を神から引き離そうとした。敵がこの点で成功したことは、次の記録で明らかである。「ソロモン王はエジプトの王パロと縁を結び、パロの娘をめとってダビテの町に連れてき」た(列王紀上三ノ一)。

この結婚は神の律法の教えには反していたけれども、人間的見地からすれば祝福になったように思われた。なぜならばソロモンの異教徒の妻は改心して、彼に加わって真の神の礼拝をしたからである。さらにバロはゲゼルを占領し、「その町に住んでいたカナンびとを殺し、これをソロモンの妻である自分の娘に与えて婚姻の贈り物としたので」大いにイスラエルに貢献したのである(同九ノ一六)。ソロモンはこの町を再建した。こうして、彼の王国が地中海沿岸において、大いに強化されたことは明らかである。しかし、異教国と同盟を結び、偶像教徒の王女と結婚の契りを結んだことにより、ソロモンは神が神の民の純潔を保つためにお設けになった賢明な規定を、軽率にも無視したのである。彼のエジプト人の妻が改心するだろうという希望は、この罪に対しては誠に薄弱な口実でしかなかった。

神はその慈悲深い恵みによって、しばらくの間この恐ろしい過ちをご支配なさった。とにかく、王は賢明な行動をとることによって、彼が無分別に引き起こした悪の影響力の大部分を阻止することができたのであった。しかし、ソロモンは彼の栄光と力との根源を見失い始めていた。心の傾向が理性よりも優勢になり、自己を過信するようになったとき、彼は主のみこころを自分自身の方法で行おうとした。彼は周囲の国々と政治的、通商的同盟を結ぶことは、これらの国々に真の神の知識を伝えることであると判断した。そして、相次いで、諸国と神聖ではない同盟を結んだ。これらの同盟は異教国の王女との結婚によって固められることがしばしばであった。周りの国民の習慣をとりいれるために主の命令は破棄された。

ソロモンは彼の知恵と模範の力が、彼の妻たちを偶像礼拝から真の神の礼拝に導き、こうして結ばれた同盟によって周囲の国々はイスラエルと親密になるだろうと、安易に考えていた。しかしそれはおなししい望みであった。

ソロモンが、自分は異教徒の影響に十分抵抗できると誤って判断したことは、致命的であった。また、自分は神の律法を無視したとしても、他の人々はその聖なる戒めを尊んで従うだろうという希望を彼に抱かせた欺瞞もまた、致命的なものであった。

王の異邦諸国との同盟と通商関係は、彼に名声と誉れとこの世の富をもたらした。彼はオフルから金、タルシシからはおびただしい銀を持つてくることができた。「王は銀と金を石のようにエルサレムに多くし、香柏を平野のいちじく桑のように多くした」(歴代志下一ノ一五)。ソロモンの時代に、ますます多くの人々が富を持ち、それに付随したあらゆる誘惑にさらされた。しかし、品性の精金はその色があせ損なわれた。

ソロモンは気がつかないうちに徐々に背信していつて、神から遠くさまよい出た。彼はほとんど無意識のうちに、徐々に神の導きと祝福に頼ることをやめて、自分自身の力に頼り始めた。彼はイスラエルを特選の民としたところの神へのゆるがぬ服従をしだいに怠り、ますます熱心に周囲の国々の習慣に同調していった。彼は成功と栄誉ある地位に付随した誘惑に負けて、繁栄の源であられる神を忘れた。彼は権力と威光において、他のあらゆる国々をしのぐという野望を抱いて、これまでは神の栄光のために用いられた神の賜物を、利己的目的のために悪用するようになった。援助すべき貧者たちのため、また、清い生活の原則を全世界に普及するために大切に確保しておかなければならない資金が、野心的事業のために利己的に流用された。

王は外面的虚飾において他の国々をしのぐという圧倒的野望に心を奪われて、品性の美と完全を得ることの必要を見過した。彼は世界の前で自己に栄光を帰すことを追求して、彼の名誉と誠実さとを犠牲にした。多くの国々との通商によって得た莫大な収入に、重税による収入が追加された。こうして、誇り、野心、浪費、放縱

は残酷と強要という実を結んだのである。彼の治世の初期に、人々を扱うときに彼が抱いていた、良心的で同情に満ちた精神は変わってしまった。彼は、最も賢明で最も恵み深かった王から、暴君に墮落してしまった。かつては、情け深く神を恐れる国民の指導者であった彼が、圧政的な独裁者になった。ぜいたくな宮廷の費用をまかなうために、税金が次から次へと徴集された。

国民は苦情を訴え出した。かつて人々が、彼らの王に対して抱いた尊敬と称賛は、不平と憎悪に変わった。

主はイスラエルを治める者が肉の腕に頼ることがないように、彼らを保護するために、自分たちのために馬を増加してはならないという警告を発しておられたのである。しかし、この命令を全く無視して、「ソロモンが馬を輸入したのはエジプト：からであつた」。「また人々はエジプトおよび諸国から馬をソロモンのために輸入した」。「ソロモンは戦車と騎兵とを集めたが、戦車一千四百両、騎兵一万二千あつた。ソロモンはこれを戦車の町とエルサレムの王のもとに置いた」(同一ノ一六、九ノ二八、列王紀上一〇ノ二六)。

王はますます、贅沢、放縱、世俗の支持などを偉大さのしるしであると考えようになった。美しく魅力的な女たちが、エジプト、フェニキヤ、エドム、モアブ、その他多くの所から集められた。このような女たちの数は数百人に上った。彼らの宗教は偶像礼拝であつて、残酷で下劣な儀式を行うように教育されていた。王は彼らの美しさに心を奪われて、神に対する義務と王国に対する義務とを怠った。

彼の妻たちは彼に強い影響を及ぼし、次第に彼らの礼拝に彼を参加させた。ソロモンは背信に対する防壁として、神がお与えになった教えを無視した。そして、今、彼は偽りの神々の礼拝に心を奪われてしまった。「ソロモンが年老いた時、その妻たちが彼の心を転じて他の神々に従わせたので、彼の心は父ダビデの心のように、

その神、主に真実でなかった。これはソロモンがシドンびとの女神アシタロテに従い、アンモンびとの神である憎むべき者ミルコムに従ったからである」(列王紀上――ノ四、五)。

ソロモンは、主の麗しい神殿が建っていたモリアの山の反対側にあるオリブ山の南の頂上に、偶像礼拝の殿堂として堂々たる建物を建設した。彼は妻たちを喜ばせるために、巨大な偶像や、木や石の不格好な像をミルトスやオリブの木立ちの中に置いた。「モアブの神である憎むべき者ケモシのために、またアンモンの人々の神である憎むべき者モレク」という異邦の神々の祭壇の前で、異教の最も下劣な儀式が行われていた(同――ノ七)。

ソロモンの歩いた道はその確かな報いをもたらした。彼が偶像礼拝者たちと交わって神から離反したことは、彼の滅亡であった。彼は神への忠誠を捨て去ったときに、自分自身を統御することができなくなった。彼の道徳的力はなくなった。彼の鋭敏な感覚はにぶり、彼の良心は麻痺した。その治世の初期において、大いなる知恵と同情をもって、無力な赤子をその不幸な母親に取りもどした彼が(同三ノ一六――一八参照)、はなはだしく墮落して、生きた子供を犠牲として献げる偶像の建立に同意するに至った。青年時代には分別と理解が与えられ、その力強い壮年時代には、「人が見て自ら正しいとする道でも、その終りはついに死に至る道となるものがある」と靈感によって書いた彼が、後年、純潔から遠くかけ離れて、ケモシとアシタロテの礼拝に関連したみだらで忌まわしい儀式を支持するに至った。神殿の奉献のときに、「あなたがたは：われわれの神、主に對して、心は全く真実で」なければならぬと人々に言った(同八ノ六一)彼自身が、彼自身の言葉をその心と生活において拒否して、それに違反する者となったのである。彼は放縦を自由と勘違いした。彼は光とやみ、善と悪、純潔と不純、キリストとベリアルとを一致させようと試みたが、彼はなんと大きな価を払ったことであろう。

ソロモンは世界の最大の王のひとりから道楽者となり、他の者たちの手先となり、奴隷となった。かつては、気高く雄々しかった彼の品性は、無気力になり柔弱になった。彼は生ける神に対する信仰を失って、無神論的疑惑を抱くようになった。不信は彼の幸福を損ない、原則を弱め、生活を墮落させた。彼の治世の初期の正義と雅量は、専制政治と圧政に変わった。人間の性質はなんともろく哀れなものだろう。神は、自分たちが神に依存していることを感じなくなった人々のためには、ほとんど何もおできにならない。

こうした背教の時代に、イスラエルは靈的にますます墮落していった。彼らの王がサタンの手下たちと結託したのであるから、どうしてそうならずにおれたであろうか。敵はこうした手下たちを用いて、真の礼拝と偽りの礼拝に関して、イスラエルの人々の心を混乱させようとした。そして、彼らはやすやすとその餌食になった。他の国々との通商によって、彼らは神を愛さない人々と密接に交わるようになり、彼ら自身の神に対する愛も大いに低下した。高く聖なる神のご品性についての、彼らの鋭敏な感覚も麻痺した。彼らは服従の道を歩むことを拒み、義の敵に忠誠をつくすようになった。偶像礼拝者との結婚は一般の習慣となり、イスラエルの人々は、急速に偶像礼拝に対する嫌悪感を失っていった。一夫多妻主義は黙認された。偶像教徒の母親は異教の儀式を守るように子供たちを育てた。ある人々の生活においては、神によって制定された純粋な礼拝の代わりに、最も墮落した偶像礼拝が行われた。

キリスト者は独自の立場を保ち、世俗とその精神と、その影響とから離れていなければならない。神はこの世において、われわれを十分に守って下さることができが、われわれは世のものであってはならない。神の愛は不確実で移り変わるものではない。神は無限の配慮をもって、神の子供たちを常に守っておられる。しかし、神

はわれわれが一心をもって忠誠をつくすことを求めになる。「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」(マタイ六ノ二四)。

ソロモンは驚くべき知恵を与えられたが、世が彼を神から引き難した。今日の人々も彼より強くはない。彼らもソロモンを陥れた影響に負けやすいのである。神がソロモンに危険の警告をお与えになったのと同じように、今日も、世と親しんで、魂を危険に陥れないように神の民に警告を発しておられるのである。「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、…汚れたものに触れてはならない。触れなければ、わたしはあなたがたを受けいれよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる」と神は訴えておられる(コリント第二・六ノ一七、一八)。

繁栄のただ中に危険が潜んでいた。いつの時代においても、富と栄誉には、謙遜と靈性を失う危険が伴っていたのである。運ぶのが難しいのは空のコップではない。注意深くバランスを保たなければならないのは、ふちまで満たされたコップである。苦難と逆境は悲しみをもたらすであろうが、靈的生活に最も危険なのは繁栄である。人間は常に神のみこころに従い、真理によって清められているのでなければ、繁栄の時に、生まれながら持っている自己信頼の傾向が必ず出てくるものである。

人々が屈辱の谷間で神の教えを仰ぎ、一步一步神の導きに依存している時は、比較的安全である。しかし、高い塔の上のようところに立ち、その地位のゆえに大きな知恵の持ち主であるかのように思われるときに、その人々は大きいなる危険にさらされているのである。彼らは神に寄り頼まない限り必ず倒れるのである。

誇りと野心を抱くときに、人は人生において必ず失敗する。というのは、誇りは必要を感じないので、天の無限の祝福に対して心を閉ざしてしまうからである。自分に栄光を帰することを求める者は、自分が神の恵みに欠けていることを見い出すであろう。われわれは神の力によって、真の富と最も満足感のある喜びを味わうことができるのである。すべてをキリストのために献げて、キリストのためにすべてをなす人は、「主の祝福は人を富ませる。主はこれになんの悲しみをも加えない」という約束が成就されるのを知るのである(箴言一〇ノ一二)。

救い主は恵みを静かに注ぎ、魂から不安と汚れた野心を追放し、敵意を愛に変え、不信を確信に変えて下さるのである。彼が人に向かって「わたしについてきなさい」と言われるときに、世俗の魅惑的魔力はその力を失ってしまうのである。彼の声の響きとともに、貪欲心と野心は心から逃げ去って、人々は解放されて立ち上がり、彼に従うのである。

第四章 権力者が倒れるとき

ソロモンを濫費と圧制に陥れた主な理由のうち、際だっていたのは、彼が自己犠牲の精神を維持し、促進することをしなかったことである。

モーセがシナイ山のふもとで、「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである」という神の命令を人々に告げたときに、イスラエルの人々は、それに答えてそれにふさわしい献げ物を持ってきた。「すべて心に感じた者、すべて心から喜んでする者は」献げ物を持ってきた（出エジプト記二五ノ八、三五ノ二一）。聖所を建てるためには、広範囲にわたる大準備が必要であった。最も尊く高価な材料が大量に必要であったが、主は心からの献げ物だけをお受け入れになった。「すべて、心から喜んでする者から、わたしにささげる物を受け取りなさい」とモーセは繰り返して会衆に命じた（同二五ノ二）。神に対する献身と犠牲の精神とは、至高者であられる神の住居を準備するための第一の必要な条件であった。

ダビデが神殿の建設の責任をソロモンにゆだねたときに、自己犠牲に対する同様の呼びかけが行われた。ダビ

デは集まった群衆に向かって、「だれかきょう、主にその身をささげる者のように喜んでささげ物をするだろうか」とたずねた（歴代志上二九ノ五）。献身と心からの奉仕に対するこの呼びかけは、神殿の建設に当たる者が常に心に留めていなければならないものであった。

荒野の幕屋の建設に当たっては、神からの特別の技能と知恵とが、選ばれた人々に与えられた。「モーセはイスラエルの人々に言った、『見よ、主はユダの部族に属する……ベザレルを名ざして召し、彼に神の霊を満たして、知恵と悟りと知識と諸種の工作に長ぜしめ、……また人を教えうる力を、彼の心に授けられた。彼とダン部族に属する……アホリアブとが、それである。主は彼らに知恵の心を満たして、諸種の工作をさせられた。すなわち彫刻、浮き織……縫取り、また機織など諸種の工作をさせ……られた。ベザレルとアホリアブおよびすべて心に知恵ある者、すなわち主が知恵と悟りとを授け……られた』（出エジプト記三五ノ三〇―三六ノ一）。神ご自身が選ばれた働き人に天使たちが協力した。

これらの働き人の子孫は、彼らの先祖たちに与えられた技能の大部分を受け継いだ。ユダとダン族のこれらの人々は、しばらくの間、謙遜で、無我の精神を保っていた。しかし彼らは知らず知らずのうちに神を見失って、無我の精神をもって神に奉仕しようとしなくなってしまった。彼らは、芸術的細工師として、優れた技能を持っていたので、彼らの働きに対して高い給料を要求した。あるときには、彼らの要求は容れられたが、彼らはまわりの国々で仕事を見つけることが多くなった。彼らのりっぱな先祖の心にあふれた気高い自己犠牲の精神の代わりに、彼らは貪欲心を抱いてますます多くのものを手に入れようとした。彼らは自分たちの利己的願望を満足させるために、神がお与えになった技能を、異教徒の王たちのために用い、創造主のみ名を汚す工事を完成するた

めに彼らの才能を役立てたのである。

ソロモンがモリア山上の神殿建設工事の監督を探したのは、このような人々の間からであった。聖なる建造物の各部に関する明細な指示が書き出されて王に委託された。そして、王は献身した援助者たちが与えられるように、信頼をもって神に助けを仰ぐことができたはずであった。この人々には要求された働きを正確になすための特別の技能が与えられたはずであった。しかし、ソロモンは、神に対する信仰を働かせるこの機会を見失った。ソロモンは、ツロの王に人をつかわして、「金、銀、青銅、鉄の細工および紫系、緋系、青系の織物にくわしく、また彫刻の術に巧みな工人ひとりわたしに送って、…ユダとエルサレムのわたしの工人たちと一緒に働かせてください」と頼んだ(歴代志下二ノ七)。

フェニキアの王はそれに答えて、「ダンの子孫である女を母とし、ツロの人を父とし」たヒラムを送ってきた(同二ノ一四)。ヒラムの母は、神が数百年前、幕屋を建設するために、特別の知恵をお与えになったアホリアブの子孫であった。

こうして、無我の精神に動かされて神に奉仕をしようとした者ではない人が、ソロモンの工人たちの頭に立てられたのである。彼はこの世の神、すなわち富に仕えていた。彼の性格のあらゆる点にまで利己主義が染み渡っていた。

ヒラムは特別の技能を持っていたので、高額給料を要求した。彼が抱いていた誤った考えが徐々に彼の同僚たちに受け入れられた。彼らが、毎日ヒラムとともに働いたときに、彼らは彼の給料を自分たちの給料と比較するようになって、彼らの働きの神聖さを見失い始めた。自己犠牲の精神は失せ去り、その代わりに貪欲心が起こ

ってきた。その結果は高い給料の要求となり、それが容れられたのである。

このようにして引き起こされた有害な影響が、主の働きのあらゆる分野に行き渡り、王国全体に広がった。彼らが高給を要求して与えられたことは、多くの人々にぜいたくと浪費にふける機会を与えた。金持ちは貧者を圧迫した。自己犠牲の精神はほとんど失われてしまった。かつては世界最大の賢者のひとりに数えられていた者の恐るべき背信の主な原因の一つは、このような影響が、広く行き渡った結果だと思われる。

荒野の幕屋を建てた人々と、ソロモンの神殿を建設した人々とは、その精神と動機が著しく異なっていたことは重大な教訓を教えている。神殿を建設した働き人たちが抱いていた利己主義は、今日においても同様に自己中心主義となって、世界にみなぎっている。貪欲の精神、高い地位や高い給料を求める精神は旺盛である。幕屋を建てた人々の心からの奉仕と、喜んで自己を犠牲にする精神はめったに見当たらない。しかしこれが、イエスに従う者たちを動かす唯一の精神でなければならない。われわれの主は、彼の弟子たちがどのように働くべきかについて、模範を示された。彼は「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」とお命じになった人々に、その奉仕の報酬として、一定の額を提供するということとはなさらなかった(マタイ四ノ一九)。彼らはイエスの克己と犠牲にあずからなければならなかった。

われわれは受ける給料のために働くべきではない。われわれを神のために働かせる動機の中には、利己心に類似したものは何一つあってはならない。無私の献身と犠牲の精神が、過去におけると同様に未来においても、常に神に喜ばれる奉仕の必要条件である。われわれの主、また教師であられるイエスは、彼の働きの中に、一すじの利己心も織り込まれることをご計画にならなかった。われわれは完全な神が、地上の幕屋の建設者たち

に要求された気転と技能、正確さと知恵とをわれわれの仕事の中に働かせなければならない。しかし、われわれはわれわれのすべての働きにおいて、どんなに偉大な才能であっても、または、どんなに驚くべき奉仕であつても、自己が、焼きつくされるべき生きた犠牲として、祭壇の上に置かれたときにのみ、神に受け入れられるものであることを覚えていなければならない。

ついに、イスラエルの王を墮落させたところのもう一つの正しい原則からの離反は、彼が、神にのみ属する栄光を自分に帰するという誘惑に負けたことである。

ソロモンが神殿建設の働きをゆだねられた日からその完成に至るまで、彼の公に宣言していた目的は、「イスラエルの神、主の名のために家を建てること」であつた（歴代志下六ノ七）。この目的は、神殿が奉献された時に集まつたイスラエルの軍勢の前で十分に認められた。王は、主が「わたしの名をそこに置く」と言われたのを、彼の祈りの中で感謝したのである（列王紀上八ノ二九）。

ソロモンの奉献の祈りの中で、最も感動的な部分の一つは、諸国の間に広く伝えられた神のことを聞くと思つて遠国から来る、異邦人のための神への嘆願である。王は嘆願して言った。「それは彼らがあなたの大いなる名と、強い手と、伸べた腕とについて聞き及ぶからです」。ソロモンは、これらのすべての異邦の礼拝者のために祈つた。「あなたは：天で聞き、すべて異邦人があなたに呼び求めることをかなえさせてください。そうすれば、地のすべての民は、あなたの民イスラエルのように、あなたの名を知り、あなたを恐れ、またわたしが建てたこの宮があなたの名によつて呼ばれることを知るにいたるでしょう」（同八ノ四二、四三）。

式の後でソロモンは、イスラエルの人々に、神に対して忠実であるように勧めた。「そうすれば、地のすべて

の民は主が神であることと、他に神のないことを知るに至るであろう」と彼は言った(同八ノ六〇)。

ソクモンよりも偉大なおかたが神殿を設計なさったのであった。そこに、神の知恵と栄光があらわされた。この事実を知らなかった人々は、その設計家であり、建設者であるソクモンを賞賛したのは当然のことであつた。しかし、王はその構想または建設に関する栄譽を自分に帰することをしなかった。

シバの女王が彼を訪問したときに、ソクモンはそのような状態であつた。彼女は、彼の知恵と彼が建てた壮麗な神殿のことを聞いて、「難問をもつてソクモンを試みよう」とした。そして、彼の有名な工事を自分の目で見ようとした。彼女は多くの従者を連れ「香料と、たくさん金と宝石とをらくだに負わせて」はるばるエルサレムにやって来た。「彼女はソクモンのもとにきて、その心にあることをごとごとく彼に告げた」。彼女は自然界の神秘について彼と語つた。そして、ソクモンは自然界の神、偉大な創造者、いと高き天に住んで、万物を支配しておられる神について、彼女に教えた。「ソクモンはそのすべての問に答えた。王が知らないで彼女に説明のできないことは一つもなかった」(同一〇ノ一三、歴代志下九ノ一、二)。

「シバの女王はソクモンのもろもろの知恵と、ソクモンが建てた宮殿、…を見て、全く氣を奪われてしまった」。「わたしは国であなただの事と、あなたの知恵について聞いたことは真実でありました。しかしわたしがきて、目に見るまでは、その言葉を信じませんでした。今見るとその半分もわたしは知らされていなかったのです。あなたの知恵と繁栄はわたしが聞いたうわさにまさっています」。「常にあなたの前に立って、あなたの知恵を聞く家来たちはさいわいです」と彼女は言った(列王紀上二〇ノ四一八、歴代志下九ノ三一六)。

シバの女王は、その訪問の終わりがくると、ソクモンから彼の知恵と繁栄の源について十分の教えを受け

たので、人間を高めるのではなくて、「あなたの神、主はほむべきかな。主はあなたを喜び、あなたをイスラエルの位にのぼらせられました。主は永久にイスラエルを愛せられるゆえ、あなたを王として公道と正義とを行わせられるのです」と叫ばずにはおられなかった(列王紀上^{一〇ノ九})。すべての国民にこのような印象が与えられることが、神のご計画であった。そして、「地のすべての王は神がソロモンの心に授けられた知恵を聞こうとしてソロモンに謁見を求めた」(歴代志下^{九ノ二三})。そのとき、ソロモンはしばらくの間ではあるが、彼らに天と地の創造主、宇宙の支配者、全知であられる神を敬虔深くさし示して神に栄誉を帰したのである。

もしソロモンが、謙遜に人々の注意を自分から引き離して、彼に知恵と富と栄誉とをお与えになった神に向けたならば、彼の経歴はどんなものになっていたことだろう。靈感による筆は彼の美德を記録するとともに、また彼の墮落をも忠実にあかししているのである。ソロモンは偉大さの頂点に達し、幸運という賜物にとり囲まれて目がくらみ、バランスを失って落ちたのである。彼は絶えず世界の人々からほめそやされて、ついに、その甘言に負けないでいることができなかった。彼はその与え主であられる神に栄光を帰すために、彼に託された知恵を自慢するようになった。彼は「イスラエルの神、主の名」の栄光のために設計され、建築された建物のその壮麗無比なことに対して、最も賞賛に価する者は自分であると人々が言うのを、ついに許すに至った。

このようなわけで、主の神殿は諸国の間で、「ソロモンの神殿」として知られるようになった。「位の高い人よりも、さらに高い者」であられる神に属する栄光を、人間が自分に帰してしまった(伝道の書^{五ノ八})。「わたしが建てたこの宮が、あなたの名によって呼ばれる」(歴代志下^{六ノ三三})とソロモンが宣言した神殿が、今日においてさえ、主の神殿ではなくて、「ソロモンの神殿」と一般に呼ばれているのである。

天から授かった賜物に対して、人々から栄誉を受けてそれを自分に帰してしまうことほど、人間の弱さを示すものはほかにない。真のキリスト者は、何事においても神を、最初であり最後であり、そして最上のものとするのである。どのような野心的動機も彼の神に対する愛を冷却させることはない。彼は着実に忍耐強く、彼の父なる神に栄光が帰せられるように努力するのである。われわれが忠実に神のみ名を高めているときに、われわれの衝動は神の統御のもとにあるのである。そして、われわれは霊的、知的能力を啓発することができるのである。

主イエスは天の父なる神のみ名を常に高められた。彼は弟子たちに「天にいますわれらの父よ、御名があがめられますように」と祈ることをお教えになった(マタイ六ノ九)。そして、彼らは「栄えは、とこしえにあなたのものだからです」と認めることを忘れてはならなかった(同六ノ一三新改訳)。大いなる医師イエスは人々の注意をご自分から、彼の力の源にお向けになったので、驚嘆した「群衆は、おしが物を言い、不具者が直り、足なえが歩き、盲人が見えるようになったのを見て」イエスに栄光を帰さずに「イスラエルの神をほめたたえた」(同一五ノ三一)。キリストは、十字架におかかりになるすぐ前に献げられた驚くべき祈りのなかで、次のように言われた。「わたしは…地上でああなたの栄光をあらわしました」。「あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい」。「正しい父よ、この世はあなたを知っていません。しかし、わたしはあなたを知り、また彼らも、あなたがわたしをおつかわしになったことを知っています。そしてわたしは彼らに御名を知らせました。またこれからも知らせましょう。それは、あなたがわたしを愛して下さったその愛が彼らのうちにあり、またわたしも彼らのうちにおるためであります」(ヨハネ一七ノ四、一、二五、二六)。

「主はこう言われる、『知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。』

富める者はその富を誇ってはならない。誇る者はこれを誇とせよ。すなわち、さとくあって、わたしを知っていること、わたしが主であって、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。わたしはこれらの事を喜ぶと、主は言われる』(エレミヤ書九ノ二三、二四)。

「わたしは…神の名をほめたたえ、

感謝をもって神をあがめます」。

「われらの主なる神よ、あなたこそは、

栄光とほまれと力とを受けるにふさわしいかた」。

「わが神、主よ、わたしは心をつくしてあなたに感謝し、

とこしえに、み名をあがめるでしょう」。

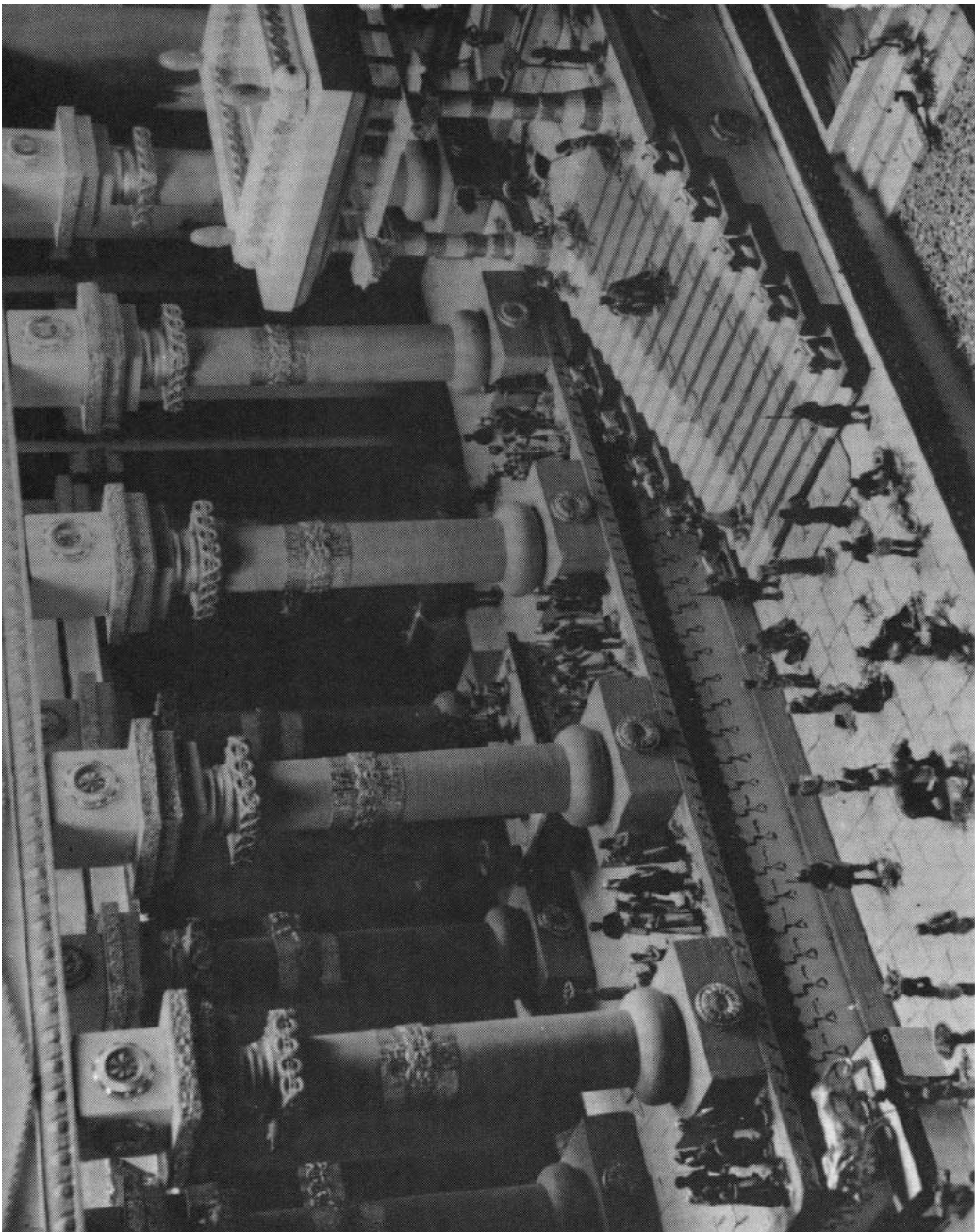
「わたしと共に主をあがめよ。

われらは共にみ名をほめたたえよう」。

(詩篇六九ノ三〇、黙示録四ノ一一、詩篇八六ノ一二、三四ノ三)。

犠牲の精神を捨て去って、自己賞揚の精神を起こさせる要素が取り入れられたときに、イスラエルに対する神の計画がさらにはなはだしく歪められることになった。神は神の民が世界の光となるように計画なされたのであった。生活の実際行動にあらわされた神の律法の栄光が、彼らから輝き出なければならなかった。こうした計画を遂行するために、神は選民が地上の諸国の中の戦略的位置を占めるようになさったのである。

第4章 権力者が倒れるとき



ソロモン王が建てた神殿は、イスラエル人の誇りになった。外国からの使節は、この賢明な王を訪問し、豊かな言を見た。

ソロモンの時代に、イスラエル王国は北はハマテから南はエジプト、また、地中海からユフラテ川にまで及んだ。この地域の中を昔ながらの通商路が数多く通っていた。そして、遠国からの隊商が絶えず行き来していた。こうして、ソロモンとその国民には、万国の人々に、王の品の性をあらわし、彼らに神をあがめて従うように教える機会が与えられていた。この知識は全世界に伝えられるべきであった。犠牲の献げ物の教えによって、キリストは国々の前で高められなければならなかった。それは生きようと望むものがみな生きることができるとであった。

ソロモンはまわりの国々に対する燈台として立てられた国家の首長の地位におかれていたので、神と神の真理を知らない人々に光を照らすための大運動を組織して、それを指導するために、神から与えられた知恵と影響力とを用いなければならなかった。そうするとき、多くの人々が神の戒めに忠誠をつくすようになり、イスラエルは異教徒の悪習慣から保護され、栄光の主は大いにあがめられたことであろう。ところが、ソロモンはこの大いなる目的を見失ってしまった。彼は彼の領地を絶えず通過し、主要な町々に滞在する人々に光を照らすばらしい機会を活用しなかったのである。

神がソロモンとすべての真のイスラエル人の心に植えつけられた伝道の精神は、商業主義の精神に取って換えられた。多くの国々との接触によって与えられた機会は、自己の勢力を増強するために用いられた。ソロモンは通商路に要塞を築いて、彼の政治的地位を強化しようとした。彼は、エジプトとシリア間の道に沿ってヨツパの近くにある、ゲゼルを建て直した。また、エルサレムの西方にあつて、ユダヤの中心部からゲゼルと海岸へ出る公道の要所を占めているベテホロン、ダマスコからエジプトへ通じる隊商路に位するメギド、東方の隊商路に沿

っている「荒野にタデモル」などを建てた(歴代志下八ノ四)。こうした町々はみな、防備が厳重に固められた。「エドムの地、紅海の岸の…エジオン・ゲベルで数隻の船を造った」ことによつて、紅海の奥にある港の商業的利益が開発された。ツロ出身の訓練を受けた水兵たちが、「ソロモンのしもべと共に」それらの船を繰縦して「オフルへ行つて、そこから金…をもつてきた」。また、「たくさんびゃくだんの木と宝石とを運んできた」(同八ノ一八、列王紀上九ノ二六―二八、一〇ノ一一)。

王と多くの国民の収入は大いに増加したが、そのためになんと大きな犠牲を払ったことであらう。神の言葉を託された人々が、貪欲で先を見ることができなかったために、旅の道に群がる無数の群衆に主のことを知らせなかった。

キリストがこの地上におられた時に歩まれた道は、ソロモンの道とは著しく異なったものであった。救い主は「いっさいの権威」を持つておられたが、この力を自己の勢力を伸ばすためにお用いになったことはない。地上の征服とか世俗的偉大さとかいった夢によつて、彼の人類に対する完全な奉仕がそこなわれたことはなかった。「きつねには穴があり、空の鳥には巢がある。しかし、人の子にはまくらする所がない」と彼は言われた(マタイ八ノ二〇)。この時代の召しにこたえて、大いなる働き人であられる主の奉仕に加わったものは、彼の方法をよく研究するとよい。彼は旅の大通りにおいて発見する機会を大いに活用されたのである。

彼はあちこち旅をなさったその合間は、「自分の町」として知られていたカペナウムにお住みになった(同九ノ一)。そこはダマスコからエルサレム、またエジプト、地中海へと通じる道に位していたので、救い主の働きを中心としては好適地であつた。多くの国々から来る人々がその町を通り、休息のために滞在した。そこで、イ

イスはあらゆる国、あらゆる階級の人々とお会いになった。こうして、彼の教えは他の国々と多くの家庭の人々に伝えられたのである。このような方法によって、メシヤを予告した預言に関する興味がわき起こり、救い主に人々の注意が向けられ、彼の任務が世界の前に示された。

このわれわれの時代においては、あらゆる階級の男女と多くの国民とに接する機会が、イスラエルの時代よりはるかに多いのである。交通の路線はおびただしく増加しているのである。

今日の至高者の使命者たちは、キリストのように世界のあらゆる所から来る群衆に接することができ、これらの主要道路に位置を占めていなければならない。彼らは主のように神の中に自己を隠して、福音の種をまき、他の人々に聖書の尊い真理を示さなければならない。それらは、人々の思いと心の中に根をおろし、芽生えて永遠の命に至るのである。

王も国民も彼らが達成するように召された、大いなる目的から離反していた時のイスラエルの失敗の教訓は、実に意義深いのである。彼らが弱く、失敗した点において、今日の神のイスラエル、すなわち、キリストの真の教会を構成する天の代表者たちは、強くなければならない。なぜならば、人間にゆだねられた働きを完結すること、最後の報復の日の到来を告げる任務が彼らにゆだねられているからである。しかし、ソロモンが国を治めていた時代にイスラエルを襲ったのと同じ勢力に、今日も当面しなければならぬ。すべての義の敵の軍勢は根強く陣をしいている。勝利はただ神の力によってのみ得ることができる。われわれの当面する争闘は、自己犠牲の精神を働かせて、自己に頼らず、ただ神のみに依存すること、また、人々を救うためにあらゆる機会を賢明に活用することなどを要求している。神の教会が罪過の暗黒のなかにある世界に対して、キリストの自己犠牲の精

神に飾られた聖なる美を示し、人間をあがめるのではなくて神をあがめ、福音の祝福を大いに必要としている人に対して愛と不屈の奉仕をなしつつ、一致して前進するとき、彼らには主の祝福が伴うのである。

第五章 ソロモン王の改心

ソロモンの治世中、主は彼に二回現れて、是認と勧告の言葉をお与えになった。すなわち、ギベアにおける夜の幻の中で、謙遜と服従に関する訓戒とともに、知恵と富と栄誉の約束が与えられた。次に、神殿の奉献のあとで、主は、もう一度、彼に忠実であるように勧告をお与えになった。ソロモンに与えられた訓戒は明白で、その約束は驚くべきものであった。それなのに、この任命に留意し、天の神の期待にすることが、その置かれた環境においても、その品性においても、その生涯においても、当然すぎるほど適任と思われた人について、次のように記されている。「彼は主の命じられたことを守らなかった」。「このようにソロモンの心が転じて、イスラエルの神、主を離れた…、この事について彼に、他の神々に従ってはならないと命じられた」（列王紀上一一ノ九、一〇）。彼の背信は、その極に達し、彼の心は罪のためにかたくなになり、その状態はほとんど絶望と思われたのである。

ソロモンは神との交わりの喜びを離れて、肉体的快樂に満足を見いだそうとした。この経験について、彼は次

のように言っている。

「わたしは大きな事業をした。わたしは自分のために家を建て、ぶどう畑を設け、園と庭をつくり、…わたしは男女の奴隷を買った。…わたしはまた銀と金を集め、王たちと国々の財宝を集めた。またわたしは歌うたう男、歌うたう女を得た。また人の子の楽しみとするそばめを多く得た。こうして、わたしは大いなる者となり、わたしより先にエルサレムにいたすべての者よりも、大いなる者となった。…

なんでもわたしの目の好むものは遠慮せず、わたしの心の喜ぶものは拒まなかった。わたしの心がわたしのすべての労苦によって、快樂を得たからである。…わたしはわが手のなしたすべての事、およびそれをなすに要した労苦を顧みたとき、見よ、皆、空であつて、風を捕えるようなものであつた。日の下には益となるものはないのである。

わたしはまた、身をめぐらして、知恵と、狂気と、愚痴とを見た。そもそも、王の後に来る人は何をなし得ようか。すでに彼がなした事にすぎないのだ。…わたしは生きることをつとめた。…わたしは日の下で労したすべての労苦を憎んだ」(伝道の書二ノ四―一八)。

ソロモンは自分自身の苦い経験から、地上の事物のなかに人生の最高の幸福を求めることのおなしさを学んだ。彼は異教の神々の祭壇を建てたが、それらが与える心の平安の約束がどんなにおなしものであるかを学んだに過ぎなかった。陰惨な心の悩みが、夜も昼も彼を苦しめた。彼にはもはや人生の喜びも心の平和もなく、将来は暗たんとしていた。

しかし、主は彼を見捨てられなかった、主は譴責の言葉と厳しい刑罰によって、王の行為の罪深さを彼に自覚

させようとなさった。主は主の保護の手を取りのけて、敵が王国を攻撃して、弱めることをお許しになった。「こうして主はエドムびとハダデを起して、ソロモンの敵とされた。…神はまた…レゾンを起してソロモンの敵とされた。…彼は…略奪隊の首領となった。…彼はイスラエルを憎んでスリヤを治めた」。「ヤラバームはソロモンの家来で」「非常に手腕のある人で」「あつたが、…彼もまたその手をあげて王に敵した」(列王紀上十一ノ一四―二八)。

ついに主は、預言者によつて、ソロモンに驚くべき言葉をお伝えになった。「これがあなたの本心であり、わたしに命じた契約と定めとを守らなかつたので、わたしは必ずあなたから国を裂き離して、それをあなたの家来に与える。しかしあなたの父ダビデのために、あなたの世にはそれをしないが、あなたの子の手からそれを裂き離す」(同十一ノ一、一二)。

ソロモンは彼と彼の家に対するこの刑罰の宣告によつて、夢からさめたかのように、本心に立ち返り、彼の愚行の真相を見始めた。彼は神の懲らしめを受け、精神も体も衰弱して疲れ果て、かわき切つて、世の水がめから離れて、もう一度生命の源の水を飲むために帰つてきた。ついに、苦難の懲戒は彼に対する務めをなしとげたのであつた。彼は愚かな行為から離れることができなかったために、長い間、永遠の滅びの恐怖にさいなまれていた。しかし、彼は今、彼に与えられた言葉のなかに希望の光を認めたのである。神は完全に彼を切り離されたのではなくて、彼を死よりも残酷な束縛から助けようとして、待ち構えておられたのである。そして、彼はそれから自分を解放する力を持っていなかったのである。

ソロモンは、「位の高い人よりも、さらに高い者」であられる神の力といつくしみを認めて感謝した(伝道の

書五ノ八）。彼は自分が遠く離反してしまった純潔と清さの高い水準に辛抱強く立ちもどり始めた。彼は罪の有害な結果を逃れて、自分がたどったあらゆる放縦の道を忘れ去ることはできなかった。しかし、愚かな道を歩かないように、熱心に他の人々に説き勧めるのであった。彼は謙遜に自分の歩いた道の誤りを告白し、彼が引き起こした害悪に影響されて、他の人々が回復の見込みもなく失われてしまわないように警告の声をあげた。

真に悔い改めた人は自分の過去の罪を忘れてしまわない。彼は平和が与えられるやいなや、自分の犯した誤りに関して無関心のままにすごすことはない。彼は自分の行為によって悪に引き入れられた人々のことを考え、できる限りのことをして、彼らを正しい道に引き返そうとするのである。彼が受けた光が明るければ明るいほど、他の人々の足を正しい道に導きたいという願いもまた強力なのである。彼は、自分の勝手気ままな行動をよく見せかけて彼の悪を軽々しいことにしたりせずに、危険信号をかがけて、他の人々に警告を与えるのである。

ソロモンは「人の心は悪に満ち、∴狂気がその心のうちに」あることを認めたのである（同九ノ三）。彼はまた次のように言った。「悪しきわざに対する判決がすみやかに行われないために、人の子らの心はもっぱら悪を行ふことに傾いている。罪びとで百度悪をなして、なお長生きするものがあるけれども、神をかしこみ、み前に恐れをいだく者には幸福があることを、わたしは知っている。しかし悪人には幸福がない。またその命は影のようであつて長くは続かない。彼は神の前に恐れをいだかないからである」（同八ノ二―二三）。

ソロモン王は靈感を受けて、後世の人々のために、彼の浪費した年月の記録を残し、警告の教訓を与えているのである。こうして、彼がまいた種は悪の収穫となつて、彼の国民に刈り取られたものではあつたが、彼の一生の事業が全くむだであつたのではなかった。ソロモンは、後年、柔和と謙遜の精神をもって、「知識を民に教えた。

彼はよく考え、尋ねきわめ、あまたの箴言をまとめた。伝道者は麗しい言葉を得ようとつとめた。また彼は真実の言葉を正しく書きしるした。知者の言葉は突き棒のようであり、またよく打った釘のようなものであって、ひとりの牧者から出た言葉が集められたものである。わが子よ、これら以外の事にも心を用いよ」(伝道の書一二ノ九—一二)。

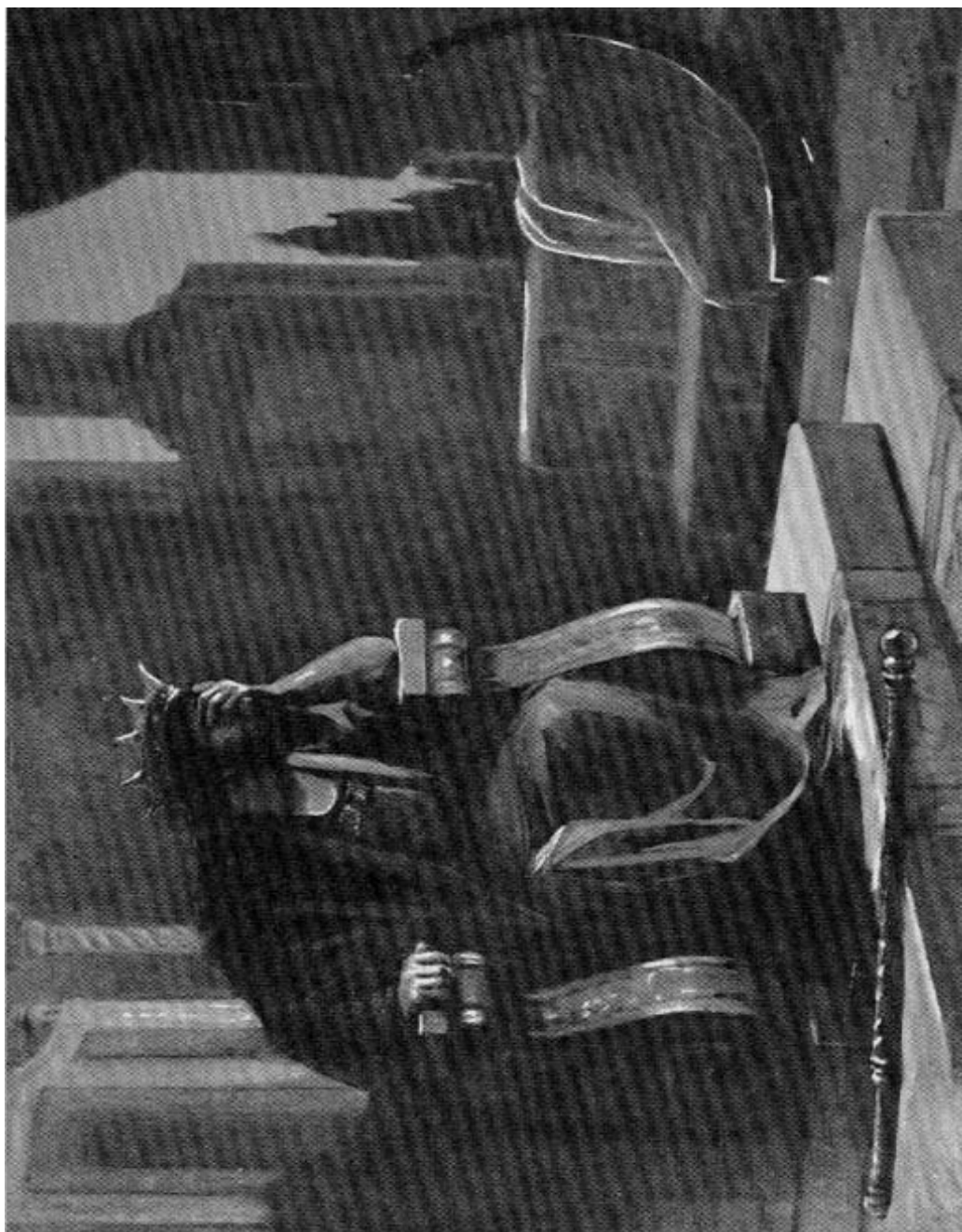
「事の帰する所は、すべて言われた。すなわち、神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである」と彼は書いた(同一二ノ一三、一四)。

ソロモンの後に書いたものは、彼が、ますます自分の歩んだ道の邪悪をさとって、天の最も尊い賜物を彼のよう浪費する誤りにおちいらぬように青年たちに警告を発することに特別の注意を払っていることを示している。彼は、彼の人生の最盛期、すなわち、彼が神を彼の慰め、支え、生命とすべきであったときに、天の光と神の知恵に背を向けて、主の礼拝のかわりに偶像を礼拝したことを、恥と悲しみのうちに告白した。そして今、こうした生活の愚かさを悲しい経験によって学んだ彼は、なんとかして、彼が経たような苦い経験に他の人びとが落ちないように助けたいと願ったのである。

彼は、哀愁をこめて、神の奉仕に当たっている青年たちの前で、その特権と責任について書いた。

「光は快いものである。目に太陽を見るのは楽しいことである。人が多くの年、生きながらえ、そのすべてにおいて自分を楽しませて、暗い日の多くあるべきことを忘れてはならない。すべて、きたらんとする事は皆空である。若い者よ、あなたの若い時に楽しめ、あなたの若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心の道に歩み、

第5章 ソロモン王の改心



ソロモン王の故やを思ひ、自分の過去の生活が罪
深じゆのこゝろであることを認めて、悪から離れた。

あなたの目の見るところに歩め。ただし、そのすべての事のために、神はあなたをさばかれることを知れ。あなたの心から悩みを去り、あなたのからだから痛みを除け。若い時と盛んな時はともに空だからである」(伝道の書一ノ七一〇)。

「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。悪しき日がきたり、年が寄って、『わたしにはなんの楽しみもない』と言うようにならない前に、また日や光や、月や星の暗くならない前に、雨の後にまた雲が帰らないうちに、そのようにせよ。その日になると、家を守る者は震え、力ある人はかがみ、ひきこなす女は少ないために休み、窓からのぞく者の目はかすみ、町の門は閉ざされる。その時ひきこなす音は低くなり、人は鳥の声によって起きあがり、歌の娘たちは皆、低くされる。彼らはまた高いものを恐れる。恐ろしいものが道にあり、あめんどうは花咲き、いなごはその身をひきずり歩き、その欲望は衰え、人が永遠の家に行こうとするので、泣く人が、ちまたを歩きまわる。その後、銀のひもは切れ、金の皿は砕け、水がめは泉のかたわらで破れ、車は井戸のかたわらで砕ける。ちりは、もとのように土に帰り、霊はこれを授けた神に帰る」(同二ノ一七)。

ソロモンの生涯は、青年たちだけでなく、壮年期の人々にも、また、人生の坂道を下って西の空に没する太陽を眺める人々にも、警告に満ちている。われわれは、青年たちが不安に襲われ、正義と悪の間をよるめき、邪悪な欲望の潮流に圧倒されそうになっているのを見聞きしている。分別盛りの年令層には、こうした不安と不忠実があるとは思わない。われわれは、彼らが、しっかりとした品性を持ち、固く原則に根ざしていることを当然のことと予期するのである。しかし、必ずしもそうであるとは限らない。ソロモンは榎の木のようにがんじょうな品性を持っているべきときに、誘惑に負けて、主義に固く立つことをしなかった。彼の力が最も強くあるべき

ときに、彼は最も弱かったのである。

このような例から、われわれは目をさまして祈ることだけが、若い者にも年とった者にも唯一の安全策であることを学ばなければならない。高い地位や大きな特権が与えられているから、安全であるというのではない。真のキリスト者経験を長年にわたって味わった人であっても、なお、サタンの攻撃にさらされるのである。内部の罪と外部の誘惑に対する戦いにおいて、知恵と力があつたソロモンでさえ敗北したのである。彼の失敗は、人間の知的特質がどんなにすぐれ、また、過去においてどんなに忠実に神に仕えたといっても、人間は自分自身の知恵と誠実さに安心して頼ることができないことを、われわれに教えているのである。

どの時代、また、どの国においても、品性建設の真の土台と模範とは常に同じであつた。「心をつくし……主なるあなたの神を愛せよ。……また……あなたの隣り人を愛せよ」という神の律法は、われわれの救い主の品性と生涯にあらわされた大原則であるが、これだけが唯一の安全な基礎であり、唯一の指導原理である(ルカ一〇ノ二七)。「また主は救と知恵と知識を豊かにして、あなたの代を堅く立てられる」(イザヤ書三三ノ六)。この知恵と知識は、神のみ言葉のみが与え得るものである。

神の戒めに従うことについてイスラエルに語られた言葉は、今日も、同様に真実である。「これは、もろもろの民にあなたがたの知恵、また知識を示す事である」(申命記四ノ六)。個人的誠実さ、家庭の純潔、社会の福祉、または、国家の安定に対する唯一の安全策がここにあるのである。人生のあらゆる混乱と危険、矛盾した主張のさ中であつて、唯一の安全で確実な規則は、神が言われることである。「主のさとしは正しくて」、「これらの事を行う者はとこしえに動かされることはない」(詩篇一九ノ八、一五ノ五)。

ソロモンの背信の教訓に留意する者は、彼をおとし入れたそれらの罪との最初の接触を避けるのである。天の神の要求に従うことだけが人間を背信から守るのである。神は人間に大きな光と多くの祝福をお与えになった。しかし、彼らがこの光とこれらの祝福を受け入れなければ、彼らは不服従と背信におちいらないように保護されることができない。高い信頼の地位に高められた人々が、神から離反して人間の知恵を求めるときに、彼らの光は暗くなる。彼らにゆだねられた能力はわなとなるのである。

争闘の終結に至るまで神から離反する人々があるものである。サタンはわれわれが神の力に保護されているのでなければ、巧みに環境を利用して、知らず知らずのうちに魂の防備を弱めてしまふのである。われわれは歩進むごとに、「これは、主の道であろうか」と尋ねてみなければならぬ。生命のある限り、断固とした目的をもって、愛情と情欲とを守らなければならない。われわれが神により頼み、いのちがキリストとともに隠されているのでなければ、一瞬でも安全ではあり得ないのである。目をさまして祈ることが純潔を保つための安全策である。

神の都に入る者はみな、狭い門、すなわち、激しく身を悩ますことによって入るのである。「汚れた者…は、その中に決してはいれない」(黙示録二二ノ二七)。しかし、だれひとりとして倒れたからといって、失望して挫折する必要はない。かつては神から栄誉を受けた年配の者が、情欲の祭壇の上で、美徳を犠牲にして魂を汚したとしても、もし彼らが悔い改めて罪を捨て、神に立ち返るならば、彼らにも、なお、希望はあるのである。「死に至るまで忠実であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう」と言われたおかたは、「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、

主は豊かにゆるしを与えられる」とも招いておられるのである（黙示録二ノ一〇、イザヤ書五五ノ七）。神は罪を憎まれるが、罪人をお愛しになる。「わたしは彼らのそむきをいやし、喜んでこれを愛する」と言われる（ホセア書一四ノ四）。

ソロモンの悔い改めは真実のものであった。しかし、彼が示した悪行の害毒は、取りかえすことができなかった。彼が背信した間にも、王国の中には、彼らにゆだねられた信頼にこたえて、純潔と忠誠を保った人々があつた。しかし、背信した者も多かった。そして、偶像礼拝と世俗の風習の導入によって引き起こされた悪の勢力は、王の悔い改めによって、簡単に阻止することはできなかったのである。

善事に対する彼の影響は大いに弱められた。彼の指導に全信的信頼をおくことをちゅうちよする者が多かった。彼は自分の罪を告白し、後世のために、彼の悪行と悔い改めの記録を残したのではあるが、彼の悪行の及ぼした害毒を完全にぬぐい去ることを望むことはできなかった。彼の背信に勢いを得て、ひたすら、ただ悪のみを行う者が多かったのである。そして、彼に続いた多くの王たちの墮落を見ると、そこに、ソロモンが神から与えられた能力を悪用したことの悲しい影響をたどることができるのである。ソロモンは自分の悪行の苦い思い出に苦しみ、「知恵は戦いの武器にまさる。しかし、ひとりの罪びとは多くの良きわざを滅ぼす」。「わたしは日の下に一つの悪のあるのを見た。それはつかさたる者から出るあやまちに似ている。すなわち愚かなる者が高い地位に置かれ」といると述べなければならなかった。

「死んだはえは、香料を造る者のあぶらを臭くし、少しの愚痴は知恵と誉よりも重い」（伝道の書九ノ一八、一〇ノ五、六、一）。

ソロモンの生涯が教えている多くの教訓の中で、善または悪に対する影響力ほど、強調されたものはない。われわれの範囲はどんなに狭いものであっても、われわれは、なお、善または悪に対して影響を及ぼすのである。それは、われわれの知識と支配の範囲を越えて、他の人々に祝福かのろいを与えるのである。それは、不満と利己心に満ちた陰うつなものでもあれば、また何か心に秘められた罪の恐ろしい毒気をもったものでもあり得る。それとも、それは、信仰と勇気と希望に満ち、生命力にあふれ、愛の甘い香りに満ちたものでもあり得るのである。確かに、善であれ、悪であれ、影響の力は大きいのである。

われわれの影響が、死に至らせる死のかおりになるということは恐ろしいことであるが、その可能性が十分あるのである。ひとりの魂が道を誤まり、永遠の祝福を見失うという大きな損失を、いったいだれが推測することができようか。しかし、われわれの向こう見ずな一つの行為、軽はずみな一つの言葉が、他の人の生涯に強い影響を及ぼして、その人を滅びにおとしいることがあるのである。品性の一つの欠陥が、多くの人々をキリストから引き離すことがあるのである。

種がまかれて収穫され、それが、またまかれて収穫は増し加わっていく。この法則はわれわれの他との交わりにおいても同じである。すべての行為、すべての言葉は、実を結ぶ種である。親切、服従、自己犠牲などの行為はみな、他の人々のなかに再現され、彼らによってさらに他の人々のなかに再現されていく。そのように、ねたみ、悪意、また紛争は、みな、多くの人が汚される「苦い根」を生やす種である（ヘブル二二ノ一五）。そして、その「多くの人」は、さらにどんなに多くの人々を毒することであろう。こうして、善と悪との種まきは、いつまでも続くのである。

第六章 王国の分裂

「ソロモンはその先祖と共に眠って、父ダビデの町に葬られ、その子レハベアムが代って王となった」（列王紀上一一ノ四三）。

レハベアムは王位につくと間もなく、シケムへ行き、そこで全部族から正式に認められることを期待した。「すべてのイスラエルびとが彼を王にしようとシケムへ行ったからである」（歴代志下一〇ノ一）。

集まった人々の中に、ネバテの子ヤラベアムがいた。このヤラベアムは、ソロモンの治世の時代に、「非常に手腕のある人」として知られていた。そして、シロびとである預言者アヒヤは、「見よ、わたしは国をソロモンの手から裂き離して、あなたに十部族を与えよう」という驚くべき言葉を彼に与えていたのであった（列王紀上一ノ二八、三一）。

主は、彼の使命者によつて、王国分裂の必要性について、ヤラベアムに明言されたのであった。この分裂は起こらなければならなかった。主は次のように言われた。「それは彼がわたしを捨てて、シドンびとの女神アシタ

ロテと、モアブの神ケモシと、アンモンの人々の神ミルコムを拝み、父ダビデのように、わたしの道に歩んで、わたしの目にかなう事を行い、わたしの定めと、おきてを守ることをしなかったからである」(列王紀上――ノ三三)。

さらにまた、王国の分裂はソロモンの治世が終わる前には起こらないことが、ヤラバアムに指示されていた。主は次のように言われた。「しかし、わたしは国をことごとくは彼の手から取らない。わたしが選んだ、わたしのしもべダビデが、わたしの命令と定めとを守ったので、わたしは彼のためにソロモンを一生の間、君としよう。そして、わたしはその子の手から国を取って、その十部族をあなたに与える」(同――ノ三四、三五)。

ソロモンは神の預言者が預言した危機を賢明に乗り切るように、彼の選ばれた後継者、レハバアムの心を準備したいと望んだのであったが、その幼少期の訓練がはなはだしくおろそかにされた彼の息子の心に、善に対する強力な建設的影響を及ぼすことができなかった。レハバアムはアンモンびとの母から優柔不断の特質を受けついだ。彼は神に仕えようと努力し、ある程度の繁栄が与えられたこともあった。しかし、彼は断固として立たなかった。彼はついに、幼少の時から彼をとりまいていた悪い影響に負けた。ソロモンが異教徒の女たちと結婚したことが、レハバアムの生涯の失敗と彼の最後の背信という恐ろしい結果を招いたのである。

部族の人々は以前の王の圧政下において、苛酷な取り扱いに苦しんだ。ソロモンが背信した時の濫費は、人々に重税を課し、彼らから多くの労役を要求するに至らせた。新しい王の戴冠式を行うに先立って、部族の中の主立った人々は、ソロモンの息子がこれらの重荷を軽くする心構えがあるかどうかを尋ねた。「そこでヤラバアムとすべてのイスラエルは来て、レハバアムに言った、『あなたの父は、われわれのくびきを重くしましたが、今

あなたの父のきびしい使役と、あなたの父が、われわれに負わせた重いくびきを軽くしてください。そうすればわたしたちはあなたに仕えましょう』（歴代志下一〇ノ三、四）。

レハベアムは、政策を発表する前に、助言者たちと相談したいと思って、「三日の後、またわたしの所に来なさい」と言った（同一〇ノ五）。それで民は去っていった。

「レハベアム王は父ソロモンの存命中ソロモンに仕えた長老たちに相談して言った、『あなたがたはこの民にどう返答すればよいと思いますか』。彼らはレハベアムに言った、『あなたがもしこの民を親切にあつかい、彼らを喜ばせ、ねんごろに語られるならば彼らは長くあなたのしもべとなるでしょう』（同一〇ノ六、七）。

しかし、レハベアムは、それには満足せずに、青少年のころ交わった青年たちに向かって言った。「この民がわたしにおかつて、『あなたの父がわれわれに負わせたくびきを軽くしてください』というのに、われわれはなんと返答すればよいと思いますか」（列王紀上一二ノ九）。青年たちは、彼が王国の民を厳格にあしらい、彼のだいと思うことを何にも妨害されるつもりがないことを、初めから明らかにするように進言した。

レハベアムは、至上権を行使できるということに心があごつて、王国の長老たちの勧告を無視して、青年たちを彼の助言者にすることに決めた。こうして、決められた日が来て、「ヤラベアムと民は皆」、彼の施政方針を聞こうとして、レハベアムのところに来た。すると、レハベアムは、「荒々しく民に答え、…彼らに告げて言った、『父はあなたがたのくびきを重くしたが、わたしはあなたがたのくびきを、さらに重くしよう。父はむちであなたがたを懲らしたが、わたしはさそりをもってあなたがたを懲らそう』（同一二ノ一二―一四）。

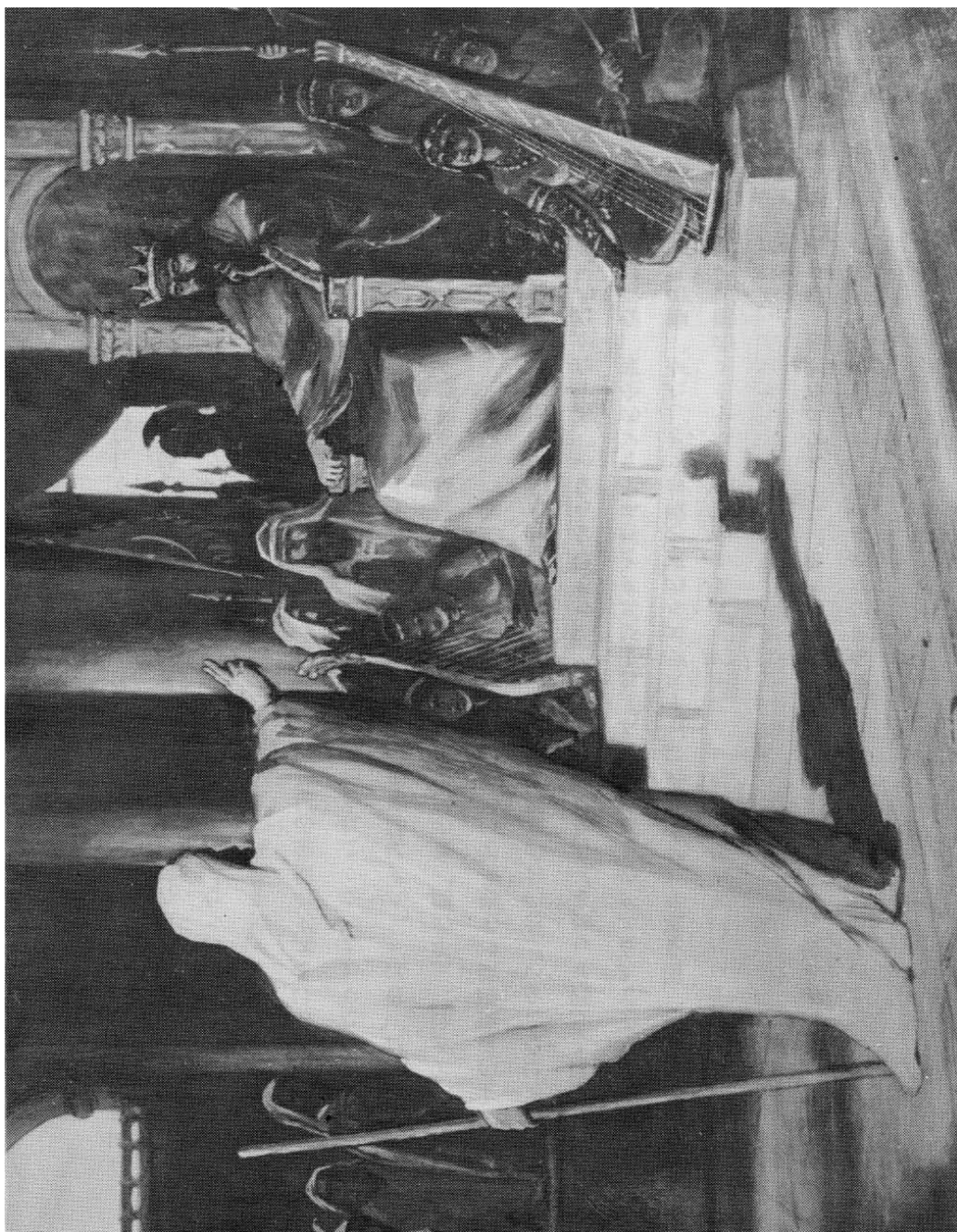
もしレハベアムと未経験な彼の助言者たちが、イスラエルに関する神のみこころを理解したならば、彼らは国

家の行政に決定的改革を求める国民の要求を聞き入れたことであろう。しかし、シケムの集会においてやってきた好機に際して、彼らは、原因から結果を推論することをしなかった。こうして、彼らは多くの人々に対する彼らの影響力を永久に弱めてしまった。ソロモンの時代に始まった圧政を継続し、さらにそれを重くするという彼らの決意の表明は、イスラエルに対する神の計画とは正反対のものであった。そして、それは人々に彼らの動機の実在性を疑わせる十分な理由であった。王と彼が選んだ助言者たちは、この愚かで無慈悲な方法で権利を行使することにより、自分たちの地位と権威を誇ったのである。

主は、レハベアムが宣言した政策を実施することをお許しにならなかった。各部族の中にはソロモンの治世の圧政的政策に十分目ざめた人々が幾千とあった。そして彼らは、今や、ダビデの家に反逆するほかには道がないと考えた。「イスラエルの人々は皆、王が自分たちの言うことを聞きいれないのを見たので、民は王に答えて言った、『われわれはダビデのうちに何の分があるつか、エッサイの子のうちに嗣業がない。イスラエルよ、あなだがたの天幕へ帰れ。ダビデよ、今自分の家の事を見よ』。そしてイスラエルはその天幕へ去っていった」(列王紀上一二ノ一六)。

レハベアムの軽率な言葉が作った裂け目は、とりかえしのつかないものとなった。この時以来、イスラエルの十二の部族は分裂し、ユダとベニヤミンの部族が、レハベアムの統治のもとに南のユダ王国となり、北方の十部族はヤラベアムの統治のもとに、別のイスラエル王国を建設して、それを保っていった。こうして、王国の分裂を預言した預言者の言葉は成就したのである。「これは：主が仕向けられた事であった」(同一二ノ一五)。

レハベアムは、十の部族が彼に対する忠誠をひるがえしたのを見て、行動を起こした。彼は「徴募の監督であ



預言者シムヤは北の十支族と戦つたといつた神の託言
をシハベアム王に伝えた。王はそれに従つた。

ったアドラム」という有力者をつかわして、彼らをなだめようとした。しかし、平和の使節の受けた取り扱いは、レハベアムに対する彼らの感情をあらわしたものであった。「イスラエルが皆、彼を石で撃ち殺した」のである。こうした強烈な反逆に驚いて、「レハベアム王は急いで車に乗り、エルサレムへ逃げた」(列王紀上一二ノ一八)。

「ソロモンの子レハベアムはエルサレムに来て、ユダの全家とベニヤミンの部族の者、すなわちえり抜きの人十八万を集め、国を取りもどすために、イスラエルの家と戦おうとしたが、神の言葉が神の人シマヤに臨んだ、『ソロモンの子であるユダの王レハベアム、およびユダとベニヤミンの全家、ならびにそのほかの民に言いなさい、「主はこう仰せられる。あなたがたは上っていつてはならない。あなたがたの兄弟であるイスラエルの人々と戦ってはならない。おのおの家に帰りなさい。この事はわたしから出たのである』」。それで彼らは主の言葉をきき、主の言葉に従って帰っていった」(同一二ノ二一—二四)。

レハベアムは、三年の間、彼の治世の最初に起こった苦い経験から利益を得ようと努めた。彼のこの努力は、順調に進んだ。彼は、「ユダに防衛の町町を建てた」。「彼はその要害を堅固にし、これに軍長を置き、糧食と油とぶどう酒をたくわえ、…これを非常に強化した」(歴代志下一一ノ五、一一、一二)。しかし、レハベアムの治世の初期におけるユダの繁栄の秘訣は、このような方策によったものではなかった。ユダとベニヤミンの部族を優位に立たせたのは、神を最高の支配者として認めたことであつた。多くの神を恐れる人々が、北方の部族の中から、彼らの数に加わつた。「またイスラエルのすべての部族のうちで、すべてその心を傾けて、イスラエルの神、主を求める者は先祖の神、主に犠牲をささげるために、レビびとに従つてエルサレムに來た。このように彼らはユダの国を堅くし、ソロモンの子レハベアムを三年の間強くした。彼らは三年の間ダビデとソロモンの道に

歩んだからである」(同二一ノ一六、一七)。

このような道を歩き続けることが、レハベアムの過去の誤りの大半のつぐないをなし、彼の賢明な統治力に対する信頼を回復する機会であった。しかし、靈感の筆は、ソロモンの後継者が、主に忠誠をつくすために強力な影響を及ぼさなかったという悲しい記録をとどめている。彼は生まれながら強情で、自己を過信し、わがままで、偶像礼拝を好んだのであったが、もし彼が神に心から信頼したならば、強い品性と堅い信仰と神の要求に服従する精神を啓発させることができたのであった。しかし、時が経過するにつれて、王は地位の権力と彼が建てた要害を頼りにするようになった。彼は、徐々に、生まれながらの弱点に負け、ついに、全く偶像礼拝の側に力を注ぐようになった。「レハベアムはその国が堅く立ち、強くなるに及んで、主のおきてを捨てた。イスラエルも皆彼にならった」(同二二ノ一)。

「イスラエルも皆彼にならった」という言葉は、なんと悲しく、なんと深い意義を持っていることだろう。周囲の国々に対する光として神が選ばれた民が、力の根源から離れて、周囲の国々と同じようになるうとしていた。ソロモンと同様に、レハベアムの悪影響も、多くの人々を神から離れさせた。悪にふける者は、今日においても、程度の差こそあれ、彼らと同じであって、悪行の影響は、それを行った者だけにとどまらない。だれひとりとして、自分だけで生きていないのである。また、だれひとりとして、その罪のなかでひとりで死なない。どの人の生涯も、他の人々の道を明るく楽しいものにする光となるか、それとも、失望と破滅をもたらす暗いみじめな影響力となるのである。われわれは、他の人々を幸福と永遠の生命に向上させるか、それとも、悲哀と永遠の死へと墮落させるかのどちらかである。そして、われわれが自分たちの行為によって、われわれのまわりにいる人々

の悪の力を強めて、活動を起こさせるならば、われわれは、彼らの罪にあずかるのである。

神はユダの王の背信を罰せずにはおかれなかった。「彼らがこのように主に向かって罪を犯したので、レハバーム王の五年にエジプトの王シシャクがエルサレムに攻め上ってきた。その戦車は一千二百、騎兵は六万、また彼に従ってエジプトから来た民は…無数であつた。シシャクはユダの要害の町々を取り、エルサレムに迫って来た。」

そこで預言者シマヤはレハバームおよびシシャクのゆえに、エルサレムに集まつたユダのつかさたちのもとに来て言った、『主はこう仰せられる、「あなたがたはわたしを捨てたので、わたしもあなたがたを捨ててシシャクにわたしたし」』（歴代志下二二ノ二―五）。

人々は、神の刑罰を侮るほど、はなはだしい背信におちいつてはいなかった。彼らは、シシャクの侵入によってこうむつた損害の中に神の手を認めて、しばらくの間へりくだつた。彼らは「主は正しい」と言った。

「主は彼らのへりくだるのを見られたので、主の言葉がシマヤにのぞんで言った、『彼らがへりくだつたから、わたしは彼らを滅ぼさないで、間もなく救を施す。わたしはシシャクの手によって、怒りをエルサレムに注ぐことをしない。しかし彼らはシシャクのしもべになる。これは彼らがわたしに仕えることと、国々の王たちに仕えることとの相違を知るためである』」。

エジプトの王シシャクはエルサレムに攻めのぼつて、主の宮の宝物と、王の家の宝物とを奪い去つた。すなわちそれらをことごとく奪い去り、またソロモンの造つた金の盾をも奪い去つた。それでレハバーム王は、その代りに青銅の盾を造つて、王の家の門を守る侍衛長たちの手に渡した。…レハバームがへりくだつたので主の怒

りは彼を離れ、彼をことごとく滅ぼそうとはされなかった。またユダの事情もよくなった」(同二一ノ六一一二)。
 しかし、苦難が取り除かれて国家がもう一度繁栄すると、多くの者は恐怖を忘れて、ふたたび、偶像礼拝におちいった。この人々の中にレハベアム王自身もはいつていた。彼は、襲って来た災難によって、へりくだりはしたけれども、この経験を彼の生涯の決定的転換期としなかったのである。彼は神が彼に教えようとなさった教訓を忘れ、国家に刑罰をもたらした罪に逆もどりしてしまった。「主を求めることに心を傾けないで、悪い事を行った」とあるこの数年の不名誉な年月の後で、「レハベアムはその先祖たちと共に眠って、ダビデの町に葬られ、その子アビヤが彼に代って王となった」(同二一ノ一四、一六)。

レハベアムの治世の初期に起こった王国の分裂によって、イスラエルの栄光は去り始め、ふたたび元の輝かしさを回復することはなかった。その後の幾世紀間において、時には道德的価値と遠大な識見をもった王が、ダビデの位につき、これらの王たちの時代にユダの人々に与えられた祝福が、まわりの国々にも及んでいた。時には、主のみ名が他のすべての神々よりもあがめられ、神の律法は尊敬された。時折、大いなる預言者が現れて、王たちの手を強め、忠誠を維持するように国民を激励したのである。しかし、レハベアムが、王位についた時に、すでに芽生えていた悪の種は、完全に抜き取ることができなかった。そして、時には、かつては神に恵まれた民であったものが、異教徒間の物笑いになるほどに墮落するに至ったのである。

しかし、偶像礼拝に走った人々のかたくなさにもかかわらず、神は、彼らをあわれんで、分裂した王国が、全滅におちいらないように、全力をつくされた。そして、月日が経過し、サタンの勢力に動かされた人々の策略によって、イスラエルに対する神の計画が全く挫折したように思われたときにもなお、神は選民の捕囚と回復とに

よって、神の恵み深い計画をあらわされたのである。

王国の分裂は驚くべき歴史の糸口に過ぎず、そこに、神の忍耐と豊かなあわれみが示された。神が良いわざに熱心な選びの民をご自分のものとして聖別しようとしておられる人々は、彼らの先天的後天的悪への傾向のために、通過しなければならぬ苦難のつばにおいて、ついに、こう認めるのである。

「主よ、あなたに並びうる者はありません。あなたは大きいなる者であり、あなたの名もその力のために大いなるものであります。万国の王であるあなたを、恐れない者がありませんか。…万国のすべての知恵ある者のうちにも、その国々のうちにも、あなたに並びうる者はありません」。「しかし主はまことの神である。生きた神であり、永遠の王である」(エレミヤ書一〇ノ六、七、一〇)。

そして、偶像礼拝者たちは、偽りの神々が、人を高めることも救うこともできないという教訓をついに学ぶのである。「天地を造らなかつた神々は地の上、天の下から滅び去る」(同二〇ノ一一)。人々は、生ける神、万物の創造主、万物の統治者に忠誠をつくすことによってのみ、休みと平安を得ることができるのである。イスラエルとユダの懲らしめを受けて悔い改めた人々は、ついに声を合わせて、彼らの先祖の神、万軍の主と彼らの契約関係を更新するのであった。そして、彼らは、こう宣言するのであった。

「主はその力をもって地を造り、

その知恵をもって世界を建て、

その悟りをもって天をのべられた。

彼が声を出されると、

天に多くの水のざわめきがあり、

また地の果から霧を立ちあがらせられる。

彼は雨のために、いなびかりをおこし、

その倉から風を取り出される。

すべての人は愚かで知恵がなく、

すべての金細工人は

その造った偶像のために恥をこうむる。

その偶像は偽り物で、

そのうちに息がないからだ。

これらは、むなしいもので、迷いのわざである。

罰せられる時に滅びるものである。

ヤコブの分である彼はこのようなものではない。

彼は万物の造り主だからである。

イスラエルは彼の嗣業としての部族である。

彼の名を万軍の主という」。

(同10ノ21ー26)

第七章 悲劇の王ヤラベアム

ダビデの家に反逆したイスラエルの十部族に推されて、王位についたかつてのソロモンの家来、ヤラベアムは、政治と宗教の両方の面において、賢明な改革を行う立場に置かれた。彼は、ソロモンの治世下において、よい素質と健全な判断力を持っていることを示したのである。そして、彼が忠実に王に仕えた年月の間に得た知識は、彼を思慮深く支配するに適した者にしたのである。ところが、ヤラベアムは神に信頼しなかった。

ヤラベアムが何よりも恐れたことは、やがて将来において、国民の心が、ダビデの位を占める王の方に引かれていってしまうのではないかということであつた。もし十部族が、昔ながらのユダ王国の首都をたびたび訪れることを許されるならば、宮では、ソロモンの時代と同様に礼拝が行われていたので、多くの者はエルサレムに首都をおく政府に忠誠をつくしたいと思うかも知れなかった。ヤラベアムは、助言者たちの勧告を受け入れて、彼の支配に対する反逆の可能性をできるだけ少なくするために、断固とした一撃を加えることにした。彼は、新し

く形成された王国の国境内にベテルとダンの二か所に礼拝の中心を設けて、これを達成しようとした。十部族は、エルサレムではなくて、こうした場所に、神を礼拝するために招かれるのであった。

このような移動を行うに当たって、ヤラバムは、目に見えない神の臨在を象徴する目に見える何物かを置くことによって、イスラエルの人々の想像力に訴えようと考えた。そこで彼は、二つの金の子牛を造らせて、それを礼拝の中心地に定められた場所の堂内にすえさせた。ヤラバムは、神を代表するものを作って、明らかに主がお命じになった戒めを犯した。「あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。…それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない」(出エジプト記二〇ノ四、五)。

ヤラバムは、十部族をエルサレムから引き離すことを強く願うあまりに、彼の計画の基本的弱点を見のがした。イスラエルの人々の先祖たちがエジプトの奴隷であったときに親しんだ神の偶像的象徴を彼らの前に置くことによって、彼らをどんなに大きな危険にさらしているのかを、彼は考慮しなかったのである。最近、ヤラバムがエジプトに滞在していたことは、人々の前にこうした異教の偶像を置くことの愚かさを教えたはずであった。しかし、北方の部族を毎年、聖なる都に行くことをやめさせようとする彼の固い決意は、最も無分別な方法を彼にとらせた。「あなたがたはもはやエルサレムに上るには、およばない。イスラエルよ、あなたがたをエジプトの国から導き上ったあなたがたの神を見よ」と彼は言った(列王紀上二二ノ二八)。こうして彼らは金の像の前に身をかがめ、異なった礼拝の形態を採用するように招かれた。

王は、新しくベテルとダンに建てられた神殿で祭司として奉仕するように彼の領地内に住んでいたレビびとたちに訴えたが、彼の努力は失敗に終わった。そこで彼は「一般の民」を祭司に任命しなければならなかった(同

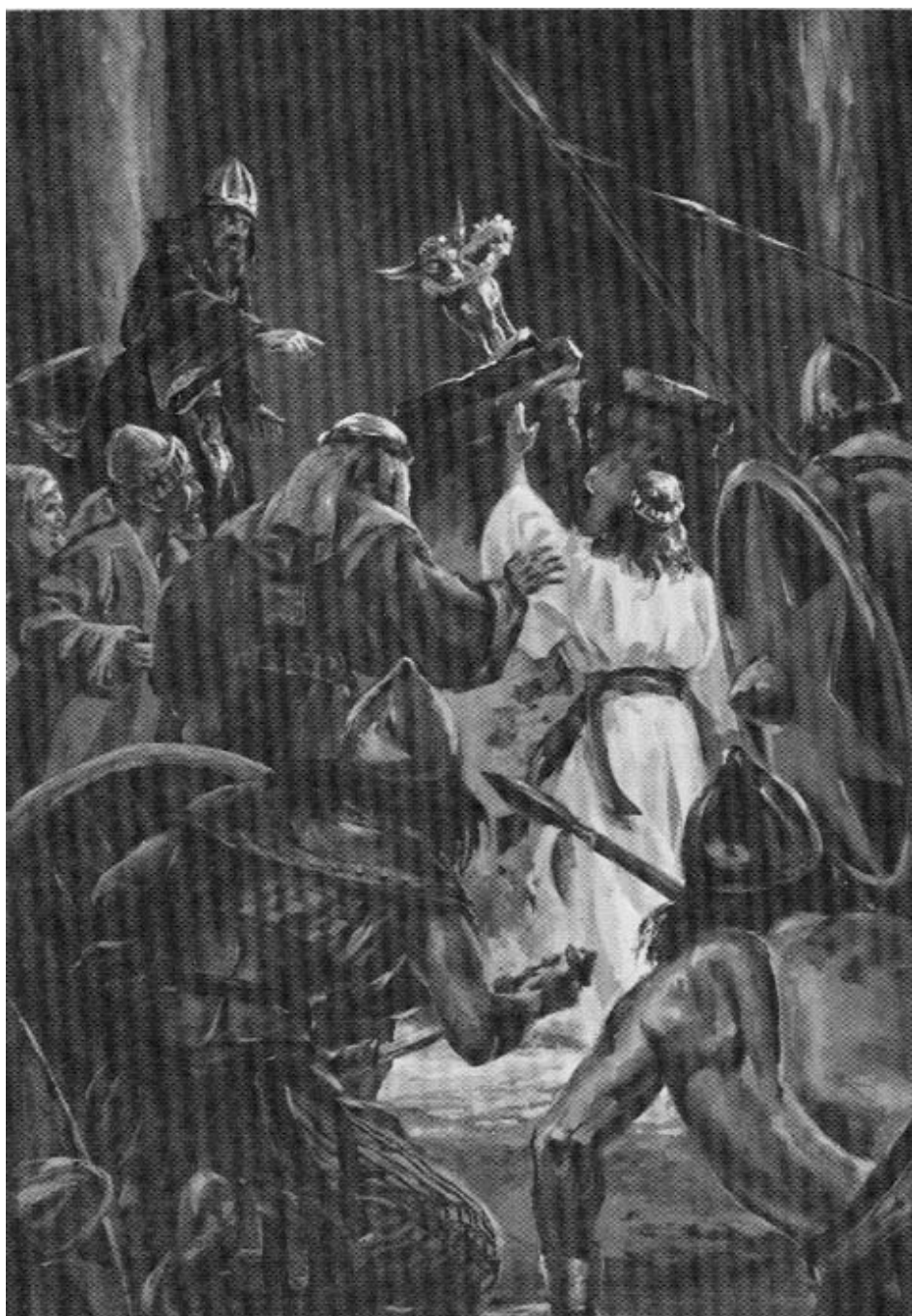
一二ノ三一。多くのしびびとをも含んだ数多くの忠実な人々は、将来を心配して、神の戒めに従って礼拝することが出来るエルサレムに逃れて行つた。

「またヤラバムはユダで行う祭と同じ祭を八月の十五日に定め、そして祭壇に上つた。彼はベテルでそのように行い、彼が造つた子牛に犠牲をささげた。また自分の造つた高き所の祭司をベテルに立てた」(列王紀上一二ノ三二)。

このようにして、神が定められた制度を破棄した王の大胆な神への反抗的態度は、譴責を受けずにすまずことはできなかった。王がベテルで建てた異教の神の祭壇の奉獻の式をつかさどり、香をたいていたさなかに、ユダの王国から、神の人が彼の前に現れた。この人は、新しい礼拝制度を始めようと試みた王を告発するために送られたのであつた。預言者は、「祭壇にむかい：呼ばわつて言つた、『祭壇よ、祭壇よ、主はこう仰せられる、』
「見よ、ダビデの家にひとりの子が生れる。その名をヨシヤという。彼はおまえの上で香をたく高き所の祭司らを、おまえの上にささげる。また人の骨がおまえの上で焼かれる」』。

その日、彼はまた一つのしるしを示して言つた、『主の言われるしるしはこれである、「見よ、祭壇は裂け、その上にある灰はこぼれ出るであらう』」。直ちに「神の人が主の言葉をもつて示したしるしのように祭壇は裂け、灰は祭壇からこぼれ出た」(同一三ノ二、三、五)。

ヤラバムは、これを見て、神に対する反抗的精神に満たされ、彼に使命を伝えた者を止めようとした。彼は怒つて、「祭壇から手を伸ばして、『彼を捕えよ』と言つたが」、彼の性急な行動は、直ちに譴責を受けた。主の使命者に向かって伸ばした手は、急に力がぬけて、枯れ、ひっ込めることがでなくなつた。



神の預言者は異教の祭壇の奉献式に現れ、偶像礼拝を非難した。王の目の前で祭壇はくずれ、灰はこぼれた。

王は驚いて、彼のために神に祈ってほしいと、預言者に訴えた。『あなたの神、主に願い、わたしのために祈って、わたしの手をもとに返らせてください』。神の人が主に願ったので、王の手はもとに戻って、前のようになった（列王紀上一三ノ四、六）。

異教の神の祭壇を厳粛に奉獻しようとしたヤラバムの努力はむだに終わった。それを尊敬するということは、エルサレムにある主の神殿の礼拝を敬わないことになるのであった。イスラエルの王は、預言者の言葉を聞き、神の礼拝から人々を引き離していた彼の邪悪な目的を悔い改めて捨て去るべきであった。しかし、彼は心をかたくなにして、自分勝手な道を歩こうと決意したのである。

ベテルの祭りの時には、イスラエルの人々の心はまだ、かたくなになり切っていたのではなかった。多くの者は、聖霊の力に感じやすい心を持っていた。主は、急速に背信の道を歩んでいる者が、とりかえしがつかなくなる前にその歩みを止めるように計画された。主は、偶像礼拝の儀式を中断するために神の使者を送り、王と国民とに、この背信がどのような結果をもたらすかを示されたのである。祭壇が裂けたことは、イスラエルの中で行われていた憎むべきことに対する神の怒りのしるしであった。

主は、滅ぼすことではなくて、救おうと努めておられる。主は罪人を救うことを喜ばれる。「わたしは生きています。わたしは悪人の死を喜ばない」（エゼキエル書三三ノ一一）。彼は警告と嘆願とによって、心のかたくなな人々が、彼らの悪い行いを離れて神に帰り、生きるように呼びかけておられる。神は、お選びになった使命者に、聖なる大胆さをお与えになる。それは、聞く人々が恐れを抱いて、悔い改めに至るためである。神の人は、なんと厳然と王を譴責したことであろう。そして、この確固不動の態度は必要であった。これ以外に、当時の罪悪を

譴責する方法はなかった。主は、聞く者の心に忘れ得ない印象を与えるために、彼のしもべに大胆さをお与えになったのである。主の使命者は、人の顔を恐れずに、正義のために、ひるまず立たなければならない。彼らは、神に信頼しているかぎり、恐れる必要はない。なぜならば、任命を彼らにお与えになるかたは、また、彼の守護の確証をお与えになるからである。

預言者が、彼のメッセージを語り終えて帰ろうとしたときに、ヤラベアムは彼におかつて、「わたしと一緒に家にきて、身を休めなさい。あなたに謝礼をさしあげましょう」と言った。預言者は答えて言った、「たとい、あなたの家の半ばをくださっても、わたしはあなたと一緒にまいりません。またこの所では、パンも食べず水も飲みません。主の言葉によってわたしは、『パンを食べてはならない、水を飲んではいけません。また来た道から帰ってはならない』と命じられているからです」(列王紀上二三ノ七―九)。

遅延させずにユダヤに帰ろうという計画どおりに行動したならば、預言者は安全だったのである。彼が別の道を通って家に帰っていると、自分も預言者であると主張するひとりの老人が彼に追いつき、神の人に向かって、偽りの証言をなし、次のように言った。「わたしもあなたと同じ預言者ですが、天の使が主の命によってわたしに告げて、『その人を一緒に家につれ帰り、パンを食べさせ、水を飲ませよ』と言いました」。くりかえし虚偽の言葉が語られ、しつこく招かれたので、ついに神の人は説得されて引き返すことになった。

真の預言者が、義務の命じるところとは反対の道を歩んだために、神は、彼が罪の罰を受けることをお許しになった。彼と彼をホテルに引き返すように招いた者とが、食事についていたとき、全能者の靈感が、偽りの預言者に臨んだ。「彼はユダからきた神の人にむかい呼ばわって言った、『主はこう仰せられます、「あなたが主の

言葉にそむき、あなたの神、主がお命じになった命令を守らず、…水を飲んだゆえ、あなたの死体はあなたの先祖の墓に行かないであろう』」(列王紀上二一三ノ一八―二二)。

この運命の預言は、間もなく文字通り成就した。「そしてその人がパンを食べ、水を飲んだ後、彼はその人のため、…ろばにくらを置いた。こうしてその人は立ち去ったが、道でししが彼に会って彼を殺した。そしてその死体は道に捨てられ、ろばはそのかたわらに立ち、ししもまた死体のかたわらに立っていた。人々はそこをとあつて、…かの老預言者の住んでいる町にきてそれを話した。その人を道からつれて帰った預言者はそれを聞いて言った、『それは主の言葉にそむいた神の人だ』」(同二一三ノ二二―二六)。

不忠実な使命者にくだった刑罰は、祭壇にむかつて発せられた預言の真実性をさらに証拠だてるものであつた。もし、預言者が主の言葉にそむいた後でもなお、安全に道を行くことを許されたならば、王は、この事実を自身への不服従を正当化するために用いたことであろう。裂けた祭壇、枯れた手、主の明白な命令にあえてそむいた者の恐るべき死などによって、ヤラベアムは、神の怒りの速やかなことを悟り、これらの刑罰を見て、悪行をいつまでも続けないように、自らに対する警告とすべきであつた。しかし、ヤラベアムは、悔い改めるどころか、「一般の民を、高き所の祭司に任命した。すなわち、だれでも好む者は、それを立てて高き所の祭司とした」。こうして、彼は、自分自身が大きな罪を犯すばかりでなくて、「イスラエルに(罪を)犯させた」。「この事はヤラベアムの家の罪となって、ついにこれを地のおもてから断ち滅ぼすようになった」(同二一三ノ三三、三四、一四ノ一六)。

ヤラベアムは、二十二年の騒然とした治世の末期近くになって、シハベアムの後継者アビヤと戦って、惨敗し

た。「ヤラバムは、アピヤの世には再び力を得ることができず、主に撃たれて死んだ」(歴代志下一三ノ二〇)。
ヤラバムの治世に始まった背信は、ますます著しくなつて、ついにイスラエル王国を全く滅亡させるに至つた。ヤラバムの死ぬ前に、ヤラバムが王位につくことを以前に預言したシロの老預言者アヒヤは、次のように言った。「主はイスラエルを撃つて、水に揺らぐ葦のようにし、イスラエルを、その先祖に賜わつたこの良い地から抜き去つて、ユフラテ川の向こうに散らされるでしょう。彼らがアシラ像を造つて主を怒らせただからです。主はヤラバムの罪のゆえに、すなわち彼がみずから犯し、またイスラエルに犯させたその罪のゆえにイスラエルを捨てられるでしょう」(列王紀上一四ノ一五、一六)。

それでも、主は、彼らを主に対する忠誠に引きもどすために、なし得る限りのことをまずしたうえでなければ、イスラエルをお捨てにならなかつた。王たちが次々と天の神に大胆に反逆してイスラエルをさらに邪惡な偶像礼拝におとし入れていた長い暗黒時代を通じて、神は、背信した人々に、次々と使命をお送りになった。神は、預言者たちによって、背信の潮流を止め、神に立ち返るようあらゆる機会を彼らにお与えになった。王国分裂後の時代に、エリヤとエリシャが生存して働き、ホセア、アモス、オバデヤなどのあわれみに満ちた訴えが国中に聞こえるのであつた。罪から人々を救う神の大きな力についての気高い証言を与えることなくして、イスラエル王国は放棄されてしまふのではなかつた。最も暗黒の時代においてさえ、天の支配者に忠実な人々がいくら残っていて、偶像礼拝のさなかにあつてさえ、聖なる神の前に潔白な生活を送つたのである。これらの忠実な人びとは、主の永遠のみこころが、ついに成就される多くの残りの民の中に数えられるのであつた。

第八章 急速にひろがった背信

ヤラベアムの死からエリヤガアハブの前に現れる時まで、イスラエルの人々は霊的衰退の一路をたどった。主を恐れず、異なった形式の礼拝を奨励した王たちの支配下にあつて、大多数の人々は急速に、生きた神に対する礼拝の義務を忘れて、偶像礼拝の習慣を種々取り入れた。

ヤラベアムの子のナダブは、イスラエルの王位をわずか数か月占めたに過ぎなかった。彼の邪惡な一生は、政權を手に入れようとして反乱を起こした彼の將軍のひとりのバアシヤによつて、突然、終わってしまった。ナダブと彼の家に属するものは、みな殺されてしまった。「主がそのしもべシロびとアヒヤによつて言われた言葉のとおりであつて、これはヤラベアムがみずから犯し、またイスラエルに犯させた罪のため」であつた(列王紀上一五ノ二九、三〇)。

こうして、ヤラベアムの家は滅びた。彼によつて始められた偶像礼拝は、罪深い者たちの上に天からの刑罰を招いたのである。それにもかかわらず、そのあとに続いたバアシヤ、エラ、ジムリ、オムリなどの王は、四十年

近くの間、同じような致命的悪行の道を歩んだ。

イスラエルのこうした背信期間の大半にわたってアサがユダ王国を治めた。長年の間、「アサはその神、主の目に良しと見え、また正しと見えることを行った。彼は異なる祭壇と、もろもろの高き所を取り除き、石柱をこわし、アシラ像を切り倒し、ユダに命じてその先祖たちの神、主を求めさせ、おきてと戒めとを行わせ、ユダのすべての町々から、高き所と香の祭壇とを取り除いた。そして国は彼のもとに穏やかであった」(歴代志下一四ノ二―五)。

「エチオピアびとゼラが、百万の軍隊と三百の戦車を率いて」攻めて来たときに、アサの信仰ははげしく試みられた(同一四ノ九)。アサは、こうした危機において、彼が建てた石垣とやぐらと門と貫の木のあるユダの「要害の町」や、訓練された彼の軍勢の「大勇士」たちにも頼らなかった(同一四ノ六―八)。王は万軍の主によりたのだ。主の名によって、驚くべき救いが、古代イスラエルのために行われたのである。アサは、彼の軍隊を戦闘体勢にしておいて、神の助けを仰いだのである。

今や、敵軍は眼前に迫ってきた。これは、主に仕える者にとって試練の時であった。すべての罪を告白したであろうか。ユダの人々は神の救いの力に全的に信頼したであろうか。指導者はこのような事を考えていたのである。人間的考えからすれば、エジプトの大軍はその前にあるものをみな一掃するように思われたのである。しかし、アサは、平和の時に、娯楽と快楽にふけていなかった。彼は、どんな緊急事態にも対処できるように準備していたのである。彼は戦闘の準備のできた軍隊をもっていた。彼は国民に神との平和を結ばせるように努力したのであった。そして、今、彼の軍隊は、敵軍よりも数は少なかったが、彼が信頼した神に対する信仰は少しも

衰えなかった。

王は、繁栄の時に主を求めていたのであるから、こうした逆境の時においても、主によりたのおことができた。彼の嘆願は、彼が、神の驚くべき力を知らない人でなかったことを示している。彼は嘆願した。「主よ、力のある者を助けることも、力のない者を助けることも、あなたにおいては異なることはありません。われわれの神、主よ、われわれをお助けください。われわれはあなたに寄り頼み、あなたの名によってこの大軍に当ります。主よ、あなたはわれわれの神です。どうぞ人をあなたに勝たせないでください」(歴代志下二四ノ一一)。

アサの祈りは、すべてのキリスト者が祈るにふさわしい祈りである。われわれは、血肉に対してではなくて、もろもろの支配と、権威と天上にいる悪の霊に対して戦うのである(エペソ六ノ一二参照)。われわれは、人生の戦いにおいて、正義に反抗する悪の勢力に立ち向かわなければならない。われわれの希望は人間ではなくて、生ける神にある。われわれは、神が、み名の栄光のために、神の全能の力を人間の器の努力に結びつけてくださることを、心から確信して期待することができる。われわれは、神の義の武具をまとして、すべての敵に勝利することができるのである。

アサ王の信仰は著しく報われた。「そこで主はアサの前とユダの前でエチオピアびとを撃ち敗られたので、エチオピアびとは逃げ去った。アサと彼に従う民は彼らをゲラルまで追撃したので、エチオピアびとは倒れて、生き残った者はひとりもなかった。主と主の軍勢の前に撃ち破られたからである」(歴代志下二四ノ一二、一三)。ユダとベニヤミンの勝ち誇った軍勢が、エルサレムに帰っていたとき、「神の霊がオデデの子アザリヤに臨んだので、彼は出ていってアサを迎え、これに言った、『アサおよびユダとベニヤミンの人々よ、わたしに聞きな

さい。あなたがたが主と共にある間は、主もあなたがたと共におられます。あなたがたが、もし彼を求めるならば、彼に会うでしょう。しかし、彼を捨てるならば、彼もあなたがたを捨てられるでしょう。」「しかしあなたがたは勇気を出しなさい。手を弱くしてはならない。あなたがたのわざには報いがあるからです」(同一五ノ一、二、七)。

アサはこれらの言葉を聞いて、大いに勇気づけられて、まもなく、ユダにおける第二の改革を始めた。「憎むべき偶像をユダとベニヤミンの全地から除き、また彼がエフライムの山地で得た町々から除き、主の宮の廊の前にあつた主の祭壇を再興した。

彼はまたユダとベニヤミンの人々およびエフライム、マナセ、シメオンから来て、彼らの間に寄留していた者を集めた。その神、主がアサと共におられるのを見て、イスラエルからアサのもとに下つた者が多くあつたからである。彼らはアサの治世の十五年の三月にエルサレムに集まり、携えてきたぶんどり物のうちから牛七百頭、羊七千頭をその日主にささげた。そして彼らは契約を結び、心をつくし、精神をつくして先祖の神、主を求めること」を約した。「主は彼らに会い、四方で彼らに安息を賜わつた」(同一五ノ八一、一五)。

アサの忠実な奉仕の長い記録は、時折、彼が神に全く信頼しなかつたという誤りによって、損なわれた。ある時、イスラエルの王が、ユダ王国に侵入して、エルサレムからわずか五マイルのところにある要塞ラマを占領したときに、アサは、スリヤの王ベネハダデと同盟を結んで救いを求めた。こうして、危急の場合に、神のみに信頼しなかつたことを、預言者ハナニは、アサの前に現れて厳しく譴責し、次のように言った。

「あなたがスリヤの王に寄り頼んで、あなたの神、主に寄り頼まなかつたので、スリヤ王の軍勢はあなたの手

からのがれてしまった。かのエチオピアびとと、リビアびとは大軍で、その戦車と騎兵は、はなはだ多かったではないか。しかしあなたが主に寄り頼んだので、主は彼らをあなたの手に渡された。主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かつて心を全うする者のために力をあらわされる。今度の事では、あなたは愚かな事をした。ゆえにこの後、あなたに戦争が臨むであろう」(歴代志下一六ノ七―九)。

自分の間違いを認めて、神の前に心を低くするかわりに、「アサはその先見者を怒って、獄屋に入れた。この事のために激しく彼を怒ったからである。アサはまたそのころ民のある者をしえたげた」(同一六ノ一〇)。

「アサはその治世の三十九年に足を病み、その病は激しくなったが、その病の時にも、主を求めないで医者求めた」(同一六ノ一一)。王は、その治世の四十一年に死んだ。そして、彼の子ヨシヤパテが王位についた。

アサが死ぬ二年前に、アハブが、イスラエル王国を治め始めた。彼の治世は、初めから、奇怪な恐るべき背信が目立っていた。彼の父、オムリはサマリヤの建設者で、「主の目の前に悪を行い、彼よりも先にいたすべての者にまさって悪い事をした」(列王紀上一六ノ二五)。しかし、アハブの罪はそれよりも大きかった。「彼はネバテの子ヤラバアムの罪を行うことを、軽い事とし、…彼よりも先にいたイスラエルのすべての王にまさってイスラエルの神、主を怒らせることを行った」(同一六ノ三一、三三)。ベテルとダンで行われている礼拝形式を奨励するだけで満足せず、主の礼拝を廃止して、バアル礼拝を取りいれ、臆することなく人々を最も墮落した偶像礼拝に引き入れた。

「シドンびとの王エテバアルの娘イゼベルを妻にめとり」アハブは、「バアルに仕え、これを拝んだ。彼はサマリヤに建てたバアルの宮に、バアルのために祭壇を築いた」(同一六ノ三一、三二)。

アハブは、首都において、バル礼拝を始めたばかりでなく、イゼベルの指示のもとに、多くの「高き所」に異教の祭壇を築いた。そして、それを取り巻く木立の陰で、祭司たちやこの魅惑的偶像礼拝に関係した人々が、悲しむべき悪影響を及ぼし、ついには、ほとんどイスラエル全国が、バルに従うに至ったのである。「アハブのように主の目の前に悪を行うことに身をゆだねた者はなかった。その妻イゼベルが彼をそのかしたのである。彼は主がイスラエルの人々の前から追い払われたアモリびとがしたように偶像に従って、はなはだ憎むべき事を行った」(同二一ノ二五、二六)。

アハブは、道徳的能力が弱かった。彼が、勝気で積極的性格の持ち主であつた異邦の女と結婚したことは、彼自身と国家とに悲惨な結果をもたらした。主義をもたず、正しい行為に対する高い標準も持っていなかった。彼の性格は、イゼベルの決然とした気質にやすやすと動かされていた。彼の利己的な性質は、神のイスラエルに対するあわれみや、選民の保護者であり指導者である彼自身の責任を理解することができなかった。

イスラエルは、アハブの治世の破壊的影響の下にあつて、生ける神から遠く離れ、神の前で悪を行った。彼らは、長年の間、神を敬い恐れる心を失つてきていた。そして、今となっては、広く行きわたった神を汚す精神に公然と反対して立ち上がり、彼らの生活を大胆に暴露するものはひとりもいなくなったように見えた。背信の黒い影が全国をおおった。バルとアシタロテの像は至るところにあつた。人間の手のわざが礼拝された偶像礼拝の神殿と奉献された木立とは増し加えられた。空気は、偽りの神々に献げられる犠牲の煙で汚染された。日、月、星に犠牲を献げた異教の祭司たちの酒に酔った叫びが、丘や谷にこだましていた。

イゼベルと彼女の邪悪な祭司たちの影響を受けて、人々は、神としてあがめられている偶像が、その神秘的な

力によって、地、火、水などの宇宙の構成要素を支配していると教えられた。天のあらゆる境界、流れる小川、わき出る泉の流れ、静かにくだる露、地をうるおし、田畑に豊かな実りをもたらす雨などは、みな、あらゆる良い完全な賜物の与え主であられる神からのものではなくて、バアルとアシタ□テの恵みによるものとされたのである。人々は、丘や谷、流れや泉などが、生ける神の手のうちにあること、また、神は、太陽、空の雲、その他すべての自然の力を支配しておられることを忘れた。

主は、忠実な使命者によって、背信した王と国民とに何度も警告を発せられたが、こうした譴責の言葉はむだであった。靈感を受けた使命者が、イスラエルの唯一の神が主であることを唱えたがむだであった。また、使命者たちは主が彼らにゆだねられた律法を高めたのであったがむだであった。人々は、偶像礼拝の豪華な虚飾と魅惑的儀式に心を奪われて、王や宮廷の例にならない、肉感的礼拝の興奮的で墮落的快楽にふけてしまった。彼らは愚かにも、神と神の礼拝を拒絶した。豊かな恵みのうちに、与えられた光は、暗くなった。精金の色はあせてしまった。

ああ、イスラエルの栄光は、どのようにして失われたのだろうか。神の選民が、背信してこのように墮落したことはこれまでになかった。「バアルの預言者四百五十人、ならびにアシラの預言者四百人」がいたのである(列王紀上一八ノ一九)。国家を壊滅から救うためには、神の奇跡的力によるほかにはなかった。イスラエルは、自ら進んで、主から離れたのであるが、それでもなお、主は罪に陥れられた人々をあわれんで追い求められた。そして、今や、神の預言者中の最大の預言者のひとりを経るに送ろうとしておられた。多くの者は、この預言者によって、彼らの先祖の神に対する忠誠へと導き返されるのであった。

第九章 預言者エリヤの出現

本章は列王紀上二七章一―七節に基づく

アハブの時代に、ヨルダン川の東のギレアデの山中に、信仰と祈りの人が住んでいて、彼の大胆な活動によって、急速に進んでいたイスラエルの背信は阻止されるのであった。テシベびとエリヤは、有名な都市から遠く離れて住み、高い地位を占めてはいなかったけれども、神が彼の前に道を備えて、豊かな成功をお与えになることを確信して、仕事に着手したのである。彼は信仰と力に満ちた言葉を語った。そして、彼はその全生涯を、改革の事業に献げていた。彼は、罪を譴責し、罪悪の潮流を押しとどめるために、荒野に呼ばれる者の声であった。彼は罪の譴責者として、人々のところに來たのではあったが、彼の言葉は、癒しを願うすべての悩める人々に、ギレアデの乳香を与えたのである。

イスラエルがますます偶像礼拝の深みに落ち込むのを見たエリヤの心は、大きな悲しみと憤りを覚えた。神は、神の民のために、大いなる事を行われたのであった。神は、彼らを奴隷から解放して、「もろもろの国びとの地を彼らに与え、…彼らが主の定めを守り、そのおきてを行う」ことができるようになさった(誌篇一〇五ノ四

四、四五）。しかし、主の恵み深いみこころは、もうほとんど忘れ去られてしまった。不信は、選民を彼らの力の源であられる神から、急速に引き離していた。エリヤは、こうした背信を、彼の山の中のかくれがから眺めて、悲しみに沈んだ。彼は心を悩まして、かつては神に恵まれた民の悪行を神が阻止されるように祈り求めた。そして、もし必要ならば、彼らに罰を下してでも、彼らに天の神からの離反が何であるかを悟らせようとした。彼は、彼らが悪行の果て、ついに神の不興を招いて、全く滅ぼされるに至る前に、彼らが悔い改めることを願ったのである。

エリヤの祈りは聞かれた。訴えや忠告や警告が何度となく繰り返されたにもかかわらず、イスラエルを悔い改めさせることができなかった。刑罰によって、神が彼らに語るべき時が来たのである。バアルの礼拝者たちは、露や雨などの天の宝は主がお与えになるものではなくて、自然の法則によるものであり、また、地が肥沃になつて、豊かな実りをもたらすのは、太陽の創造的エネルギーによるものであると主張していたので、汚染された地上に、神ののろいがきびしく下ることになったのである。背信したイスラエルの部族は、物質的祝福をバアルの力に依存した愚かさを知らされるのであった。彼らが悔い改めて神に立ち返り、神がすべての祝福の源であることを認めない限り、地には、雨も降らなければ露もおりなくなるのであった。

天からの刑罰の言葉をアハブに伝える任務が、エリヤに負わせられた。彼は主の使命者になることを求めたのではなかった。主の言葉が彼に臨んだのである。彼は神の働きの栄誉のために熱心だったので、従うことは悪王の手にかかって、速やかに殺されることを招くようなものであったが、神の召しに従うことをためらわなかった。預言者はただちに出発して、夜も昼も旅をして、ついに、サマリヤに到着した。彼は、宮殿において、入場の許

第9章 預言者エリヤの出現



預言者エリヤは案内も請わないで、アハブ王の宮殿に現れ、今後イスラエルに雨は降らないと告げた。

可を求めもしなければ、彼が来たことが知られるのも待たなかった。彼は、当時の預言者たちが着ていた荒布の衣を着て、だれにも気づかれずに護衛兵たちを通りすぎ、あつという間に王の前に立って、彼を驚かせた。

エリヤは、彼の突然の出現に対して、なんの弁解もしなかった。イスラエルの王ではなくて、創造主が、彼に語ることをお命じになったのである。そして、彼は手を天に向けて、生ける神に誓って厳肅に、今や至高者である神の刑罰がイスラエルに降ろうとしていることを断言した。「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます。わたしの言葉のないうちは、数年雨も露もないでしょう」と彼は宣言した(列王紀上一七ノ一)。

エリヤが彼の言葉を語ったのは、神のみことばの確実な力に対して強い信仰を働かせたからにほかならなかった。もし彼が自分が仕える神に絶対的信頼を持っていなかったならば、アハブの前に立つことはしなかったであろう。エリヤはサマリヤへ行く途中で、水のつきない流れや、緑におおわれた山々や、かんばつに襲われそうもない堂々とした森林を通過した。彼が見たものは、すべて、美におおわれていた。預言者は、どのようにして、流れの水が止まって干からび、山々や谷が、かんばつで焼けつくようになるだろうかと、怪しむこともできた。しかし、彼は、不信仰におちいらなかった。彼は、神が背信したイスラエルを卑しめて、刑罰によって彼らを悔い改めさせることを疑わずに信じていた。天の神の厳命が出されたのである。神の言葉に誤りはあり得なかった。エリヤは自分の生命の危険をもかえりみずに、恐れることなく、彼の任務を果たしたのである。刑罰の切迫を告げる言葉は、あたかも青天のへきれきのごとくに、悪王の耳にひびいた。しかし、アハブが驚きから立ち直り、返答をすることができる前に、エリヤは、彼の言葉の結果を待って目撃しようともせず、彼が現れた時と同様に、

忽然と姿を消してしまった。そして、主は彼の前に行かれて、道を平らにされた。預言者は次のように命じられた。「ここを去って東におもむき、ヨルダンの東にあるケリテ川のほとりに身を隠しなさい。そしてその川の水を飲みなさい。わたしはからすに命じて、そこであなたを養わせよう」(同一七ノ三、四)。

王は熱心にさがし求めたが、エリヤを見つけることはできなかった。王妃イゼベルは、天の宝を閉じ込めてしまった言葉に対して腹を立てて、直ちにバアルの預言者たちと謀った。彼らは彼女と一緒にあって、預言者エリヤをのろい、主の怒りに反抗した。彼らは、災いの言葉を発した者を発見しようと思ったけれども、それは失望に終わるにきまっていた。また、広くはびこった背信のために、刑罰がくだされたということを、隠しておくこともできなかった。エリヤがイスラエルの罪を弾劾したことで、速やかに刑罰がくだるといふ彼の預言の知らせは、急速に全国に広がった。恐れを抱いたものもあつたけれども、一般の人々は、天からの言葉をさげすみ、あざ笑った。

エリヤの言葉は直ちに実施された。初め、災害が起こることを嘲笑した人々は、間もなく、まじめに考えなければならなくなった。露や雨にうるおされていた地が、ほんの数か月のうちに、干からびて、植物は枯れてしまった。時が経過するにつれて、枯れたことのない川が減水し始めて、小川は乾き始めた。しかし、指導者たちは、バアルの力に信頼し、エリヤの無益な預言の言葉を無視するように人々に訴えた。祭司たちは、なおも、雨が降るのはバアルの力によるのだと主張した。エリヤの神を恐れるな、また、神の言葉におののくな、季節ごとに収穫を実らせて、人間と動物を養うのはバアルであると彼らは力説したのである。

アハブに対する神の言葉は、イゼベルと彼女の祭司たち、そしてバアルとアシタロテに従うすべての者に、彼

らの神の力を試めす機会を与え、もしできることならば、エリヤの言葉が誤りであることを証明する機会を与えた。幾百の偶像礼拝の祭司たちの確信に対して、エリヤの預言は、孤立した存在であった。預言者エリヤが宣言したにもかかわらず、もしバアルが雨や露をふらし、川の水を流し続けて、植物を繁茂させることができるならば、その時には、イスラエルの王はバアルを礼拝し、国民はバアルが神であると言えよのである。

バアルの祭司たちは、人々をだましておくことに心を決めて、彼らの神々に犠牲を献げ、地に雨を降らせるように、夜も昼も彼らの神々に祈り続けた。祭司たちは高価な供え物を献げて、彼らの神々の怒りを和らげようとした。彼らは、もっと有益なこのために用いられたいと思われる熱心さと忍耐力をもって、異教の神々の祭壇のまわりを去ろうとせず、真剣になって、雨を祈り求めた。のろわれた国土全体において、夜ごとに、彼らの叫びと嘆願の声があがった。しかし、燃えるような昼間の太陽の光線をさえぎる雲は空に現れなかった。乾燥した地をうるおす雨も露もなかった。バアルの預言者たちがどんなことをしても、主の言葉は何の変わりもなく成就するのである。

一年が経過したが、雨は降らなかった。地は火で焼かれたように干からびた。焼けつく太陽の熱は、わずかに残った植物を枯らしてしまふ。川の流れは乾き、羊の群れや家畜は、苦しんで鳴き声をあげながら、あちらこちらをさ迷い歩く。これまで青々と繁っていた野原が、焼けつく砂漠となり、不毛の荒野と化した。偶像の礼拝に献げられた緑の木々は葉が落ちた。ただ、枯枝だけになってしまった林の木々に木陰はない。空気は乾燥して、窒息しそうである。砂塵の暴風は視界をさえぎり、息も止まりそうである。かつては、繁栄した都市や村落が、悲しむべき場所になってしまった。飢えとかわきとが、人間と動物を苦しめ、恐ろしい勢いで、彼らの生命を奪

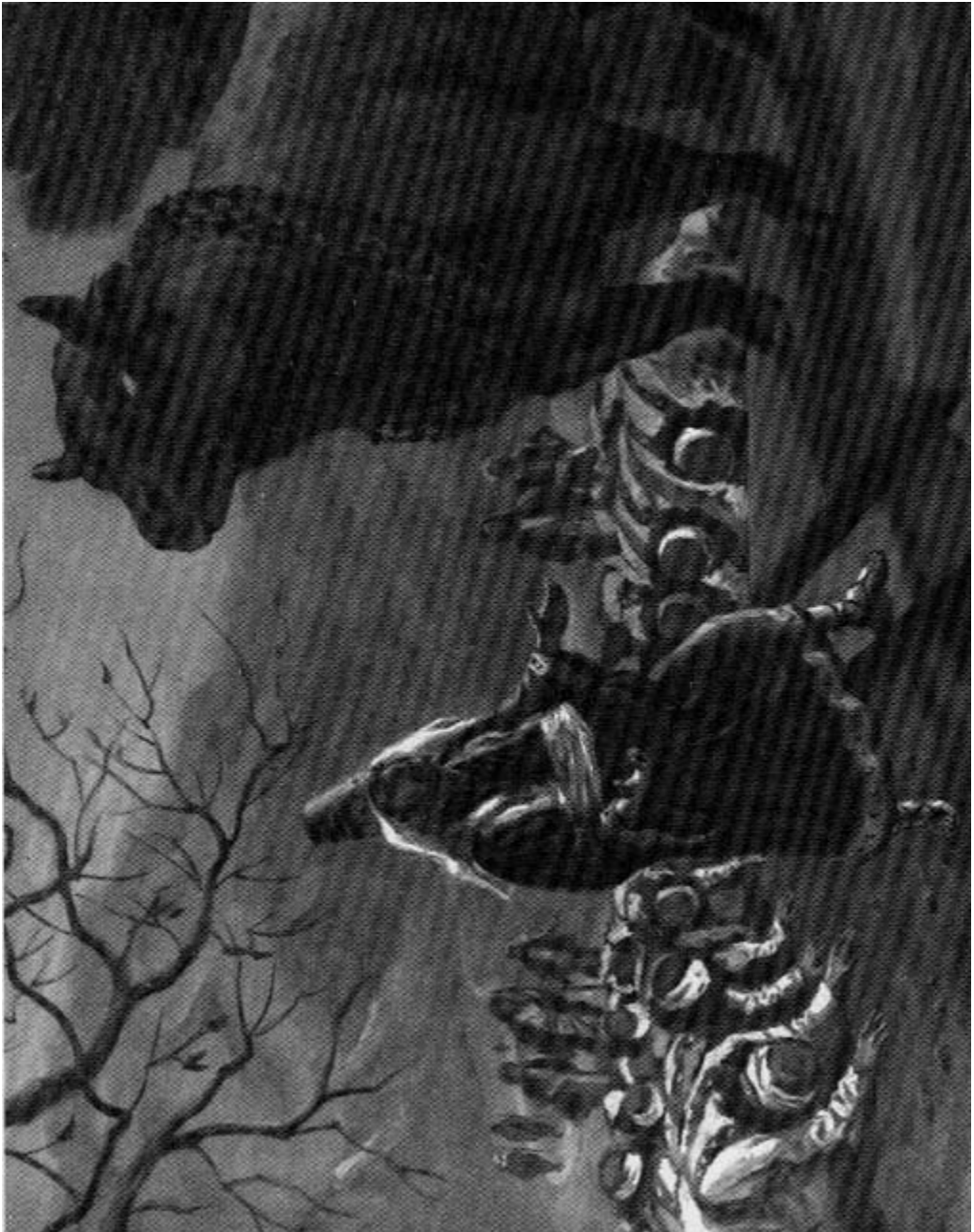
っている。戦慄すべき飢饉が刻々と切迫している。

しかし、イスラエルは、こうした神の力の証拠を与えられたにもかかわらず、悔い改めず、神が彼らに学ばせようと望まれた教訓を学ばなかった。彼らは、自然を創造された神が自然の法則を支配なさること、また、彼らを祝福の器にすることも、あるいは破滅の器にすることもおできになることを悟らなかった。彼らは、高慢で、偽りの礼拝に心を奪われてしまい、神の大いなる手のもとでへりくだることを快しとしなかった。そして、彼らは彼らの災害の理由とすべき何か他の原因をさがし始めた。

イゼベルはかんばつが主の刑罰であることを全然認めようとしなかった。彼女は不屈の決意をもって、天の神に反抗し、ほとんどすべてのイスラエル国民と一つになって、エリヤが彼らのすべての災害の原因であると非難した。エリヤが彼らの礼拝を非難する証言をしたのではなかったか。もし彼を片づけることさえできれば、彼らの神々の怒りは静められて、災害は終わるのだとイゼベルは主張した。

アハブは王妃に迫られて、預言者のかくれがをくまなく搜索し始めた。彼は自分が憎み、また恐れている人間を搜索するために、方々の隣国に使者をつかわした。そして、彼は、搜索をできるだけ完ぺきなものにするために、これらの王国や国家から預言者の行方は不明であるという宣誓を要求した。しかし、搜索はむだであった。預言者は、王の敵意から安全に守られていた。王の罪が神の怒りを招き、地に神の告発が下ったのであった。

イゼベルはエリヤを捕らえようとする努力が失敗したのを見て、イスラエルにおける主の預言者を全部殺して、復讐しようとした。だれひとり生かしておいてはならなかった。激怒したイゼベルは、多くの神のしもべたちを虐殺して、自分の目的を達成した。しかし、全滅したわけではなかった。アハブの家づかきであったが神に忠実



天の神に挑戦して、アヒノ王はバアル神の祭司を喰
ひ集め、夜更けにえさをもち、雨乞いをした。

に仕えていたオバデヤは、自分の生命の危険もかえりみず、「百人の預言者を救い出して五十人ずつほら穴に隠し、パンと水をもって彼らを養った」(列王紀上一八ノ四)。

飢饉の二年目が過ぎててもなお天は無情にも雨のしるしを見せなかった。かんばつと飢饉は、全国に悲惨な災いを及ぼし続けていた。父親も母親も、子供たちの苦しみを和らげることができず、彼らが死んでいくのをどうすることもできなかった。それでも背信したイスラエルは、神の前にへりくだることを拒み、彼らの上にこつした恐ろしい罰をくだした者に対して不平を言い続けた。彼らは、その苦難と悩みが、悔い改めの招きであり、彼らが天の神のゆるしの限界を越えて致命的一步を踏み出すのを止める神の介入であることを認め得なかったようである。

イスラエルの背教は、飢饉の数多い恐怖のすべてよりも恐るべき害悪であった。神は、人々を欺瞞から解放放って、彼らの生命とすべてのものの与え主であられる神に対する責任が、彼らに負わせられていることを理解させようとなさった。神は、彼らが失った信仰を回復させようとしておられた。そして、彼らに大きな苦難を与えなければならなかったのである。

「主なる神は言われる、わたしは悪人の死を好むであろうか。むしろ彼がそのおこないを離れて生きることを好んでいるではないか」。「あなたがたがわたしに対しておこなったすべてのとがを捨て去り、新しい心と、新しい霊とを得よ。イスラエルの家よ、あなたがたはどうして死んでよかるうか。わたしは何人の死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」。「あなたがたは心を翻せ、心を翻してその悪しき道を離れよ。イスラエルの家よ、あなたはどのようにして死んでよかるうか」(エゼキエル書一八ノ二三)。

三一、三二。三三ノ一。

神は、イスラエルに使命者たちを送って、彼らに神への忠誠に立ち返るように訴えられたのであった。もし彼らが、こうした訴えに心を留め、バアルから生きた神に立ち返ったならば、エリヤの刑罰に関する言葉は、語られなかったことであろう。しかし、いのちからのちに至らせるかおりであった警告が、彼らにとって死から死に至らせるかおりとなってしまうたのである。彼らは自尊心が傷つけられた。そして、彼らは使命者に対して怒りを抱き、今や、預言者エリヤを極度に憎むようになった。もし彼らがエリヤを捕らえることができさえすれば、彼らは喜んで彼をイゼベルに引き渡し、彼の声を沈黙させることによって、彼の言葉の成就を阻止することができるとも思っただのである。彼らは、災害にもかかわらず、彼らの偶像礼拝を固守し続けた。こうして、彼らは天の刑罰を地にくだした罪を増し加えていた。

苦難のうちにあるイスラエルの救いの道は、ただ一つしかなかった。それは、彼らに全能の神の懲罰の手を伸べさせた罪を離れて、一心をもって主に立ち返ることであつた。彼らには、次のような確証が与えられていた。「わたしが天を閉じて雨をなくし、またはわたしがいなごに命じて地の物を食わせ、または疫病を民の中に送るとき、わたしの名をもってとなえられるわたしの民が、もしへりくだり、祈って、わたしの顔を求め、その悪い道を離れるならば、わたしは天から聞いて、その罪をゆるし、その地をいやす」(歴代志下七ノ二三、一四)。決定的改革が起こるまで、神が、雨や露をとどめて、彼らにお与えにならなかったのは、こうした祝福された結果をもたらすためであつた。

第十章 罪を責める声

本章は列王紀上一七章八一―二四節、一八章一一―一九節に基づく

エリヤはしばらくの間、ケリテ川の近くの山の中に隠れていた。そこで彼は三か月の間、奇跡的に食物が備えられた。後になって、かんばつが続き、川が乾いてしまった時に、神はエリヤに異邦の地に避難所を見つけるようにお命じになった。「立ってシドンに属するザレパテ（新約時代にはサレプタと呼ばれた）へ行つて、そこに住みなさい。わたしはそのところのやもめ女に命じてあなたを養わせよう」と神は彼にお命じになった。（列王紀上一七ノ九）。

この女はイスラエル人ではなかった。彼女は神の選民が享受した特権と祝福を受けたことはなかった。しかし、彼女は真の神を信じ、彼女の道を照らしたすべての光に従って歩いていた。そこで、イスラエルの地にエリヤが安心して住むところがなくなつたときに、神はエリヤを彼女の家に送り、そこに避難させられた。

「そこで彼は立ってザレパテへ行つたが、町の門に着いたとき、ひとりのやもめ女が、その所でたぎぎを拾っていた。彼はその女に声をかけて言った、『器に水を少し持つてきて、わたしに飲ませてください』。彼女が行っ

て、それを持ってこようとした時、彼は彼女を呼んで言った、『手に一口のパンを持ってきてください』（列王紀上一七ノ一〇）。

飢饉はこの貧困にうちひしがれた家庭をきびしく傷めつけ、哀れにも乏しい食糧はなくなりかけていた。やもめ女が生きるための戦いをやめなければならぬと思ったその時に、エリヤがやって来たことは、なくてはならぬものを備えて下さるという、彼女の生ける神の力を信じる信仰に対する最大の試練であった。しかし、彼女は、貧窮の極に達していても、彼女の最後の食事を分けてほしいと願う旅人の要求に応じて、彼女の信仰のあかしを立てたのである。

食事と水を求めるエリヤの願いに応じて、やもめ女は言った。「あなたの神、主は生きておられます。わたしにはパンはありません。ただ、かめに一握りの粉と、びんに少しの油があるだけです。今わたしはたきぎ二、三本を拾い、うちへ帰って、わたしと子供のためにそれを調理し、それを食べて死のうとしているのです」（同一七ノ一二）。エリヤは、彼女に言った、「恐れるにはおよばない。行って、あなたが言ったとおりになさい。しかしまず、それでわたしのために小さいパンを、一つ作って持つてきなさい。その後、あなたと、あなたの子供のために作りなさい。『主が雨を地のおもてに降らす日まで、かめの粉は尽きず、びんの油は絶えない』とイスラエルの神、主が言われるからです」（同一七ノ一三、一四）。

これ以上に大きな信仰のテストを要求することはできなかった。やもめ女は、これまで、すべての旅人を親切に手厚くもてなしたのであった。今、彼女は、自分と子供が苦しみ会うことをも顧みず、イスラエルの神が、彼女のすべての必要を満たしてくださることを信じて、「エリヤが言ったとおりに」行い、旅人をもてなすこと

についてのこの最高のテストに耐えたのである。

このフェニキアの女が神の預言者に示した歓待の精神は、実に驚くべきものであった。そして、彼女の信仰と寛大な心とは、驚くばかりに報われたのである。「彼女と彼および彼女の家族は久しく食べた。主がエリヤによって言われた言葉のように、かめの粉は尽きず、びんの油は絶えなかった。

これらの事後、その家の主婦であるこの女の男の子が病気になる。その病気はたいそう重く、息が絶えたので、彼女はエリヤに言った、『神の人よ、あなたはわたしに、何の恨みがあるのですか。あなたはわたしの罪を思い出させるため、またわたしの子を死なせるためにおいでになったのですか』。

エリヤは彼女に言った、『子をわたしによこしなさい』。そして彼女のふところから子供を取り、自分のいる屋上のへやへかかえて上り、自分の寝台に寝かせ、…そして三度その子供の上に身を伸ばし、主に呼ばわって言った、…主はエリヤの声を聞きいれたので、その子供の魂はもとに帰って、彼は生きかえった。

エリヤはその子供を取って屋上のへやから家の中につれて降り、その母にわたして言った、『ごらなさい。あなたの子は生きかえました』。女はエリヤに言った、『今わたしはあなたが神の人であることと、あなたの口にある主の言葉が真実であることを知りました』(同一七ノ一五―二四)。

ザレパテのやもめ女は、彼女の乏しい食物をエリヤに分け与えた。そして、その返礼として、彼女と彼女の息子の生命が保護されたのである。そして、試練と欠乏のときに、われわれよりさらに困窮状態にある人々に同情と援助を与えるすべての者に、神は大きな祝福を約束しておられる。神は、お変わりにならないのである。神の力は、エリヤの時代と比べて、今、少しも衰えていない。「預言者の名のゆえに預言者を受けいれる者は、預言

者の報いを受け」という約束は、それが救い主によって語られたときと少しも変わらず確実なものである(マタイ一〇ノ四一)。

「旅人をもてなすことを忘れてはならない。このようにして、ある人々は、気づかないで御使たちをもてなした」(ヘブル一三ノ二)。これらの言葉は、時の経過によって、少しもその効力を失っていないのである。われわれの天の父は、今もなお、神の子供たちの道に、わざわざいのように見えるが、祝福となる機会をお備えになる。こうした機会を活用する人々は、大いなる喜びを味わうのである。「飢えた者にあなたのパンを施し、苦しむ者の願いを満ち足らせるならば、あなたの光は暗きに輝き、あなたのやみは真昼のようになる。主は常にあなたを導き、良き物をもってあなたの願いを満ち足らせ、あなたの骨を強くされる。あなたは潤った園のように、水の絶えない泉のようになる」(イザヤ書五八ノ一〇、一一)。

キリストは今日の忠実な彼のしもべたちに言われる。「あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをおつかわしになったかたを受け入れるのである」。み名によって行われた親切な行為は、どれひとつとして、賞賛と報酬を受け損じることはない。そして、キリストは、神の家族のどんなに弱く卑しい者をも、同じように情け深くお認めになるのである。「この小さい者のひとり」、すなわち、信仰とキリストを知る知識において子供のような人々に、「冷たい水一杯でも飲ませてくれる者は、よく言うておくが、決してその報いからもれることはない」と彼は言われる(マタイ一〇ノ四〇、四二)。

長年のかんばつと飢饉の間、エリヤは、イスラエルの人々が偶像礼拝を離れて神に忠誠をつくすように、熱心に祈っていた。主のみ手が、災禍に苦しむ地上に置かれていた間、預言者エリヤは忍耐強く待っていた。至ると

ころに、苦難と欠乏のきざしを見たときに、彼の心は悲しみに締めつけられ、速やかに改革を起こす力が与えられることを熱望した。しかし、神ご自身が神のご計画を実行しておられるのであった。そして、神のしもべのなし得ることは信仰をもって祈りつづけて、決定的行動を起こす時がくるのを待つだけであった。

アハブの時代にはびこった背信は、長年の邪悪な行為の結果であった。イスラエルは、年ごとに一步一步、正しい道から離反していったのであった。彼らは、幾世代にもわたって、彼らの足のために、真つすぐな道をつくることを拒んだのであった。そして、ついに、大半の人々が暗黒の力の導くがままに従っていった。ダビデ王の治世下にあつて、イスラエルが、神の日ごとの恵みに全的に依存していることを認めて、喜ばしい声をあげ、至高者であられる神に賛美の歌を歌つて以来、約一世紀が経過したのである。彼らが歌った賛美の言葉を聞いてみよう。

「われらの救の神よ、…

あなたは朝と夕の出る所をして

喜び歌わせられる。

あなたは地に臨んで、これに水をそそぎ、

これを大いに豊かにされる。

神の川は水で満ちている。

あなたはそのように備えて

彼らに穀物を与えられる。

あなたはその田みぞを豊かにうるおし、
そのうねを整え、夕立をもつてそれを柔らかにし、
そのもえ出るのを祝福し、

またその恵みをもって年の冠とされる。

あなたの道にはあぶらがしたたる。

野の牧場はしたり、小山は喜びをまとい、

牧場は羊の群れを着、

もろもろの谷は穀物をもつておおわれ、

彼らは喜び呼ばわつて共に歌う」。

(詩篇六五ノ五、八一―三)

その時、イスラエルは、神が「地をその基の上にすえ」たかたであることを認めていた。彼らはその信仰を表して次のように歌った。

「あなたはこれを衣でおおうように大水でおおわれた。

水はたたえて山々の上を越えた。

あなたのとがめによって水は退き、

あなたの雷の声によって水は逃げ去った。

山は立ちあがり、

谷はあなたが定められた所に沈んだ。

あなたは水に境を定めて、これを越えさせず、

再び地をおおうことのないようにされた」。

(詩篇一〇四ノ五―九)

地と海と大空の自然の力が、定められた境のなかにおかれているのは、無限の神の大いなる力によるのである。そして、神は、こうした力を、神がお造りになったものの幸福のためにお用いになるのである。「その宝の蔵」は惜しみなく費やされて「雨を季節にしたがって：降らせ」人の手の「すべてのわざを祝福される」のである
(申分記二八ノ一二)。

「あなたは泉を谷にわき出させ、

それを山々の間に流れさせ、

野のもろもろの獣に飲ませられる。

野のろばもそのかわきをいやす。

空の鳥もそのほとりに住み、

こずえの間にさえぎり歌う。・・・

あなたは家畜のために草をはえさせ、

また人のためにその栽培する植物を与えて、

地から食物を出させられる。

すなわち人の心を喜ばすぶどう酒、

その顔をつややかにする油、

人の心を強くするパンなどである。…

主よ、あなたのみわざはいかに多いことであろう。

あなたはこれらをみな知恵をもって造られた。

地はあなたの造られたもので満ちている。

かしこに大いなる広い海がある。

その中に無数のもの、大小の生き物が満ちている。…

彼らは皆あなたが時にしたがって

食物をお与えになるのを期待している。

あなたがお与えになると、彼らはそれを集める。

あなたが手を開かれると、彼らは良い物で満たされる」

（詩篇一〇四ノ一〇―一五、二四―二八）。

イスラエルは喜び理由を数限りなく持っていたのである。主が彼らを導きいれられた地は、乳と蜜の流れる国

であった。荒野を放浪していたときに、神は彼らが雨の不足に苦しまねばならぬことは全くない国に彼らを導くという確証をお与えになったのであった。神は彼らに言われた。「あなたがたが行って取ろうとする地は、あなたがたが出てきたエジプトの地のようにではない。あそこでは、青物畑できるように、あなたがたは種をまき、足でそれに水を注いだ。しかし、あなたがたが渡って行って取る地は、山と谷の多い地で、天から降る雨で潤っている。その地は、あなたの神、主が顧みられる所で、年の始めから年の終りまで、あなたの神、主の目が常にその上にある」。

豊かな雨の約束は服従を条件にして与えられたのである。主は次のように言われた。「もし、きょう、あなたがたに命じるわたしの命令によく聞き従って、あなたがたの神、主を愛し、心をつくし、精神をつくして仕えるならば、主はあなたがたの地に雨を、秋の雨、春の雨ともに、時にしたがって降らせ、穀物と、ぶどう酒と、油を取り入れさせ、また家畜のために野に草を生えさせられるであろう。あなたは飽きるほど食べることができであろう」。

主は彼の民に警告して言われた。「あなたがたは心が迷い、離れ去って、他の神々に仕え、それを拝むのではないよう、慎まなければならない。おそらく主はあなたがたにむかい怒りを発して、天を閉ざされるであろう。そのため雨は降らず、地は産物を出さず、あなたがたは主が賜わる良い地から、すみやかに滅びうせるであろう」

(申命記一一ノ一〇—一七)。

イスラエルには次のような警告が与えられていた。「しかし、あなたの神、主の声に聞き従わず、きょう、わたしに命じるすべての戒めと定めとを守り行わないならば」、「あなたの頭の上の天は青銅となり、あなたの下の

地は鉄となるであろう。主はあなたの地の雨を、ちりと、ほこりに変らせ、それが天からあなたの上にくだって、ついにあなたを滅ぼすであろう」(申命記二八ノ一五、二三、二四)。

主は古代のイスラエルにこうした賢明な勧告をお与えになったのである。「それゆえ、これらのわたしの言葉を心と魂におさめ、またそれを手につけて、しるしとし、目の間に置いて覚えとし、これを子供たちに教え、家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、それについて語」らなければならぬ(同一ノ一八、一九)。これらの言葉は明白であつたにもかかわらず、幾世紀かが経過して、世代が移り変わるにつれて、彼らの霊的繁栄のために設けられた条件が見失われて、背信という破壊的影響力が神の恵みの障壁を一つ残らず一掃しようとしていた。

このようなわけで、神は、今、神の民に神の最も峻厳な刑罰を下されたのである。エリヤの預言は恐ろしいまでに成就していた。三年の間、災害を宣告した使命者の搜索は、町から町へ、国から国へとつづけられた。アハブの命令によって、多くの王たちは、見なれぬ預言者が彼らの国にはいないという宣誓をしなければならなかった。それでも搜索は続けられた。というのは、イゼベルとバアルの預言者たちは、エリヤを極度に憎んで、あらゆる手段を講じて彼を自分たちの手中に陥れようとしていたからである。それでもなお雨は降らなかつた。

ついに、「多くの日を経て」、「行つて、あなたの身をアハブに示しなさい。わたしは雨を地に降らせる」という主の言葉がエリヤに臨んだ(列王紀上一八ノ一)。

エリヤは、その命令に従つて、「その身をアハブに示そうとして行つた」。預言者エリヤが、サマリヤに向かつて旅に出たちょうどそのころ、アハブは、家づかさオバデヤに飢えた群れや家畜のための草をさがすために、国

中の水の源と小川を調査するように命じた。宮殿においてさえ、長く続いたかんばつの影響が痛切に感じられた。王は自分の家族の将来を深く憂えて、自分みずから、彼のしもべに加わって、適当な牧場をさがしに出かけることにした。「彼らは行き巡る地をふたりで分け、アハブはひとりでこの道を行き、オバデヤはひとりで他の道を行った」(同一八ノ六)。

「オバデヤが道を進んでいた時、エリヤが彼に会った。彼はエリヤを認めて伏して言った、『わが主エリヤよ、あなたはここにられるのですか』」(同一八ノ一七)。

イスラエルが背信していた間、オバデヤは忠実さを持ち続けていた。彼の主であつた王も、彼を生ける神に背かせて、その忠誠心を失わせることはできなかった。ここで、彼は、「行つて、あなたの主人に、エリヤはここにいと告げなさい」というエリヤの伝言を伝える光榮に浴した(同一八ノ八)。

すると、オバデヤは非常に恐れて、「わたしにどんな罪があつて、あなたはしもべをアハブの手にわたして殺そうとされるのですか」と言った。こうした伝言をアハブに伝えるということは、死を招くことになることは確かであつた。オバデヤは預言者に説明して言った。「あなたの神、主は生きておられます。わたしの主人があなたを尋ねるために、人をつかわさない民はなく、国もあります。そしてエリヤはいないという時は、その国、その民に、あなたが見つからないという誓いをさせるのです。あなたは今『行つて、エリヤはここにいと主人に告げよ』と言われます。しかしわたしがあなたを離れて行くと、主の霊はあなたを、わたしの知らない所へ連れて行くでしょう。わたしが行つてアハブに告げ、彼があなたを見つけることができなければ、彼はわたしを殺すでしょう」(同一八ノ九―一二)。

オバデヤは、エリヤが、彼を強いてつかわさないように熱心に嘆願して言った。「しかし、しもべは幼い時から主を恐れている者です。イゼベルが主の預言者を殺した時に、わたしが行った事、すなわち、わたしが主の預言者のうち百人を五十人ずつほら穴に隠して、パンと水をもって養った事を、わが主は聞かれませんでしたか。ところが今あなたは『行つて、エリヤはここにいると主人に告げよ』と言われます。そのようなことをすればわたしを殺すでしょう」(列王紀上一八ノ二一―二四)。

エリヤは、厳粛に誓つて、この伝言が、むだになることはないことをオバデヤに約束した。「わたしの仕える万軍の主は生きておられる。わたしは必ず、きょう、わたしの身を彼に示すであろう」。こうした確証のもとに、「オバデヤは行つてアハブに会い、彼に告げた」(同 一八ノ二五、一六)。

王は、彼が恐れ憎んでいたエリヤからの伝言を、恐怖の入り混じった驚きをもって聞いた。王は、彼を必死になつて捜し求めていたのであつた。王は、エリヤが、ただ、王に会うことだけのために、彼の生命を危険にさらすことをしないのを、よく知っていた。エリヤは、イスラエルに対して、もう一つの災害を宣言しようとしているのであろうか。王の心は恐怖に襲われた。彼はヤラバアムの手が枯れたことを思い出した。アハブは召しに従うことを避けることもできなければ、神の使者に対して手を上げることでもできなかった。そこで、恐怖におののく王は護衛の兵隊たちを連れて、エリヤに会うために出かけた。

王と預言者はたがいに向かい合つて立っている。アハブは激しい憎しみを抱いているにもかかわらず、エリヤの前では、女々しく、力がぬけたように思われる。彼は、まず、どもりながら、「イスラエルを悩ます者よ、あなたはここにいるのですか」と言い、無意識のうちに、彼の心の奥にひそむ感情をあらわすのである。アハブ

は、天が青銅のようになったのは、神の言葉によるものであったことを知ってはいたが、それでもなお、彼は、地に下った厳しい刑罰の責任を預言者に負わせようとしていたのである。

悪を行う者たちは、義の道を離れた当然の結果として下る災害を神の使命者たちのせいにするものである。サタンの権力下に身をおくものは、神がごらんになるように、物事を見ることができない。真理の鏡が彼らの前にさし出されるときに、彼らは譴責を受けたと思って腹を立てる。彼らは罪に目をくらまされて、悔い改めることを拒否する。彼らは、神のしもべたちが彼らに敵対し、厳しい非難を受けるに値すると考える。

エリヤは自分の潔白なことを意識して、アハブの前に立ち、自分を弁解しようとも、また、王にへつらおうともしないのである。また、かんばつは、ほとんど終わったというよい知らせによって、王の怒りを避けようともしないのである。彼は何の謝罪もしないのである。彼はいきどおりと神のみ栄えのための熱意に燃えて、アハブの告発を彼に帰して、この恐ろしい災害をイスラエルにもたらしたのは、**彼の**罪であり、**彼の**先祖の罪であると、恐れることなく王に宣言するのである。「わたしがいすラエルを悩ますものではありません。あなたと、あなたの父の家が悩ましたのです。あなたがたが主の命令を捨て、バアルに従ったためです」とエリヤは、勇敢に断言した(同一八ノ一八)。

今日、断固とした譴責の声が必要である。なぜならば、悲しむべき罪が、人々を神から引き離れたからである。不信が急速に広く行きわたっている。幾千という人々は、「この人が王になるのをわれわれは望んでいない」というのである(ルカ一九ノ一四)。よく聞く耳ざわりのよい説教は、心に永続的印象を与えない。ラッパは音をはっきり出さない。人々は、神の言葉の明白で鋭い真理によって、心が切り裂かれない。

もしその本心を表現するならば、そのように明白に語る必要があろうか、という自称キリスト者たちが多くいる。彼らは、また、バプテスマのヨハネがパリサイ人に、「まむしの子らよ、迫ってきている神の怒りから、のがれられると、おまえたちにだれが教えたのか」と言う必要があったのだろうかとたずねる（ルカ三ノ七）。また、ヨハネは、なぜヘロデに、兄弟の妻と共に住むことは正しくないと行って、ヘロデヤの怒りを招く必要があったのだろうか。キリストの先駆者は、はっきり物を言ったために、その生命を失ったのである。彼は、罪のうちに生活している人々の怒りを引き起こさないで、通りすぎすことはできなかったのだであろうか、と彼らはたずねるのであろう。

このように、神の律法の忠実な擁護者として立つべき者が論じ合い、ついに、忠実さのかわりに方策が取りいれられて、罪が譴責されずにまかり通っている。教会の中に、忠実な譴責の声がもう一度聞かれるのは、いったい、いつのことであろうか。

「あなたがその人です」（サムエル記下一一ノ七）。ナタンが、ダビデに語ったこうした明白で間違つ余地のない言葉が、今日、教会の講壇から聞かれることはほとんどなく、また、公の印刷物にもほとんど見ることができないのである。もし、こうした言葉が、これほどまれでなかったならば、もっとわれわれの間に神の力があらわれるのを見ることであろう。主の使命者たちは、賞賛を愛する心と、人の歡心を得たいと思う心を悔い改めるのでなければ、彼らの努力が実を結ばないことをつぶやくべきではない。こうした精神が、彼らに真理を抑圧させるのである。

神が平安をお語りにならないのに、平安、平安と叫んで人を喜ばせるこうした牧師たちは、神の前に心を低く

して、彼らの不誠実と道徳的勇氣の欠乏についてゆるしを求めるべきである。彼らが、彼らにゆだねられた言葉をなめらかにしたのは、彼らが隣人を愛したためではなくて、彼らが、放縱で、安逸を愛していたからである。眞の愛はまず神の栄えと魂の救いを求める。この愛をもっている人々は、率直に語るために引き起こされる不快な結果を避けようとして、眞理を回避することはない。魂が危機に陥っているならば、神の使者たちは、自分たちのことを考えず、悪を弁解したり、取り繕ったりしないで、彼らに与えられた言葉を語るのである。

すべての牧師が、その地位とその働きの神聖さを自覺して、エリヤが示したような勇氣を示してほしいものである。牧師たちは、神の任命を受けた使者として、大きな責任のある地位におかれている。彼らは、「あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧め」なければならない(テモテ第二・四ノ二)。彼らは、キリストにかわって、天の奥義の管理者として働き、従順なものを励まし、不従順なものに警告を与えなければならない。彼らは世俗の策略を重んじてはならない。彼らはイエスが彼らにお命じになった道から足を踏み外してはならない。彼らは多くの証人に雲のように囲まれていることを覚えて、信仰をもって前進しなければならない。彼らは、自分自身の言葉を語るのではなくて、地上の王たちより偉大なおかたが語るようにお命じになった言葉を語らなければならない。彼らの言葉は、「主はこう言われる」でなければならない。神は、エリヤ、ナタン、バプテスマのヨハネのような人々、すなわち、結果がどうなるうとも、忠実に神の言葉を伝える人々を召しておられる。また、所有するすべてのものを犠牲にすることを要求されても、勇敢に眞理を語る人々を、神は召しておられるのである。

すべての者の力と勇氣と影響力とが必要な危機において、神は、正義のために固く立つことを恐れる人々をお

用いになることはできない。神は、悪と忠実に戦い、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また、天上にいる悪の霊と戦う人々を召しておられるのである。神は、このような人々に対して、「良い忠実な僕よ、よくやった。…主人と一緒に喜んでくれ」と言われるのである（マタイ二五ノ二三）。

第十一章 カルメル山の対決

本章は列王紀上一八章一九―四〇節に基づく

エリヤはアハブの前に立って、イスラエルのすべての人、およびバアルの預言者とアシタロテの預言者が、カルメル山で彼のところに集まることを求めた。「それで今、人をつかわしてイスラエルのすべての人およびバアルの預言者四百五十人、ならびにアシラの預言者四百人、イゼベルの食卓で食事する者たちをカルメル山に集めて、わたしの所にこさせなさい」と彼は命じた(列王紀上一八ノ一九)。

命令はあたかも主のみ前に立っているかと思われた人が発したのである。そしてアハブは、預言者が王であつて、自分は家来であるかのように直ちにそれに従った。急使たちが国に送られ、エリヤおよびバアルとアシタロテの預言者たちのところに集合するように伝えた。人々はすべての町々村々で、指示された時に集まる準備をした。彼らがその場所に向かつて進んでいったときに、多くの人々は不思議な予感を感じた。何か異常な事態が起ころうとしていた。でなければ、カルメルに集まれというこの命令はなぜだろうか。どんな新しい悲惨な災害が人々と地上に下ろうとしているのだろうか。

カルメル山はかんばつの前には美しい所であった。尽きない泉の水が流れを満たし、肥沃な斜面は美しい花や繁った森におおわれていた。しかし今、その美しさはかんばつの被害のためにしぼんでしまった。バアルとアシタロテを礼拝するために建てられた祭壇は、今や葉が枯れ落ちた木々の中に立っていた。これらとは著しく対照的に、最も高い峰の頂上には荒廃した主の祭壇があった。

カルメルはあたり一面の地域を広く見下ろしていた。その頂上はイスラエルの国の各地から見るこゝができた。山の麓には上で行われることを、ほとんどみな見ることができると都合な場所があった。また山の斜面の木陰で行われた偶像礼拝によって、神の栄光は著しく汚されていた。そしてエリヤは、神の力のあらわれと神のみ名の栄えを擁護するために、最も目立った場所としてこの山を選んだのである。

指定された日の早朝から、背信したイスラエルの群衆が山の頂上近くに集まってくる。イゼベルの預言者たちは敵めしく並んで進んでいく。王は華麗な王衣をまとってあらわれ、祭司たちの先頭の位置につく。すると偶像礼拝者たちは、彼に対する歓迎の叫びをあげる。しかし祭司たちの心はエリヤが語ったときに、イスラエルの国に三年半の間雨も露もふらなかったことを思い出して恐れを感じる。彼らは何か恐るべき危機が迫っていると感じるのである。彼らが信頼してきた神々は、エリヤが偽りの預言者であることを証明することができなかった。彼らの狂気の叫び、彼らの祈りと涙、彼らの屈辱、彼らの忌まわしい儀式、彼らの絶え間なく捧げられる高価な犠牲などに対して、彼らの礼拝する神々は奇妙に無関心であった。

エリヤは集まったイスラエルの群衆に囲まれながら、アハブと偽りの預言者たちと顔を合わせて立っている。彼は主の栄誉を擁護するためにただひとりで現れたのである。恐ろしい災害を引き起こした本人として全国の子

難を受けている彼が、今イスラエルの王とバアルの預言者たち、軍人たち、取り巻く群衆の前に、一見何の防備もなく立っている。しかし、エリヤはただひとりではない。天の保護天使たち、力に満ちた天使たちが、彼の上にも彼のまわりにもいるのである。

預言者エリヤは神の命令を実行することが自分に委ねられていることを十分に自覚して、恥じず恐れず群衆の前に立っている。彼の顔は恐るべき厳肅さに輝いている。人々は不安な予感を抱きながら、彼が語るのを待っている。エリヤはまず崩れた主の祭壇を眺めてから、群衆を眺めてラッパのような明瞭な声で、「あなたがたはいつまで二つのものの間に迷っているのですか。主が神ならばそれに従いなさい。しかしバアルが神ならば、それに従いなさい」と叫ぶ(列王紀上二八ノ二二)。

人々はひと言も彼に答えない。大群衆の中でだれひとりとして、主に対する忠誠を表明する者はいないのである。欺瞞と無知とが暗雲のようにイスラエルをおおってしまったのである。すべての者が、一時にこうした致命的背信に陥ったのではなかったが、主が警告と譴責の言葉を彼らに送られたときに、それに心を留めないことが度重なるうちに、徐々にそうなったのである。義を行うことを離れ悔い改めを拒否する度に、彼らの罪は深まり彼らを天から遠く引き離れた。そして今、この危機において彼らは、頑強に神のために立つことを拒んだ。

主は神の働きの危機における無関心と不忠実を憎まれる。全宇宙は善悪の大争闘の最後の場面を、言葉では表現することができない深い関心をもって眺めている。神の民は永遠の世界の境界に近づいている。彼らにとつて天の神に忠誠であることより重大なことがほかにあろうか。神は各時代を通じて道徳的英雄を持ってあられたが、今もなおヨセフ、エリヤ、ダニエルのように、自分たちが神の特選の民であることを認めるのを恥としない人々

を持つておられる。神の特別の祝福は、行動する人々の働きに伴うのである。彼らは真つすぐな義務の道から離れず、神の力によって「すべて主につく者は」だれかと尋ねる人々である（出エジプト記三二ノ二六）。また彼らはただ単にそう聞くだけにとどまらず、神の民の側に立つことを選ぶものは進み出て、明白に王の王、主の主に對する彼らの忠誠を表すように要求する人々である。このような人々は彼らの意志や計画を、神の律法に従属したものにす。彼らは神に對する愛のゆえに、生命も惜しいとは思わない。彼らの働きはみ言葉から光を得て、それを世界に燦然と輝かすことである。彼らの標語は、神に對する忠誠ということである。

カルメル山上のイスラエルが疑い、ためらっているときに、再びエリヤの声が沈黙を破った。「わたしはただひとり残つた主の預言者です。しかしバアルの預言者は四百五十人あります。われわれに二頭の牛をください。そして一頭の牛を彼らに選ばせ、それを切り裂いて、たきぎの上に載せ、それに火をつけずにおかせなさい。わたしも一頭の牛を整え、それをたきぎの上に載せて火をつけずにおきましょう。こうしてあなたがたはあなたがたの神の名を呼びなさい。わたしは主の名を呼びましょう。そして火をもって答える神を神としましょう」（列王紀上一八ノ二二―二四）。

エリヤの提案は全く道理になつていたので、人々はそれを避けることができずにやつの思いで、「それがよからう」と答える。バアルの預言者たちは、あえて反対の声をあげない。エリヤは彼らに向かつて、「あなたがたは大ぜいだから初めに一頭の牛を選んで、それを整え、あなたがたの神の名を呼びなさい。ただし火をつけてはなりません。」と命じるのである（同一八ノ二五）。

偽りの預言者たちは、外面は大胆で反抗的な態度をとっていたが、彼らのやましい心は恐怖におののいて祭壇

の用意をし、たぎぎと生けにえをのせる。そして彼らは呪文を唱え始める。彼らが彼らの神の名を呼んで、「バアルよ、答えてください」という甲高い叫び声は、回りの森や山々にこだまして、隈なくひびき渡る。祭司たちは彼らの祭壇の回りに集まり、踊ったり、体をねじったり、叫んだり、髪の毛をむいたり、身を傷つけたりして彼らの神の助けを願い求めるのである。

朝は過ぎ昼になるが、それでもバアルは彼の惑わしに陥った信奉者たちの叫びに答えるきざしを示さない。彼らの気も狂わんばかりの祈りに対して何の声も答えない。犠牲は焼かれないままそこに残されている。

彼らが熱狂的な祈りを捧げているときに、悪賢い祭司たちは何かの方法で祭壇に火をつけて、人々に火が直接バアルから来たように信じさせようと、ためまず努力している。しかし、エリヤはすべての行動を見ている。それでも祭司たちは、なんとかして人々を欺く機会を捕らえようとして、彼らの無意味な儀式を続けるのである。

「昼になってエリヤは彼らをあざけって言った。『彼は神だから、大声をあげて呼びなさい。彼は考えにふけているのか、よそへ行ったのか、旅に出たのか、または眠っていて起されなければならないのか』。そこで彼らは大声に呼びわり、彼らのならわしに従って、刀とやりで身を傷つけ、血をその身に流すに至った。こうして昼が過ぎても彼らはなお叫び続けて、夕の供え物をささげる時にまで及んだ。しかしなんの声もなく、答える者もなく、また顧みる者もなかった」(同一八ノ二七―二九)。

サタンは彼に欺かれて彼の礼拝に身を捧げている人々を、喜んで助けに来たことであろう。彼は犠牲に火を点じるために喜んで稲妻を送ったことであろう。しかし、主はサタンの活動範囲を定め、彼の力を制限された。だから敵のどんな策略によっても、バアルの祭壇に一つの火を点じることでもできなかった。

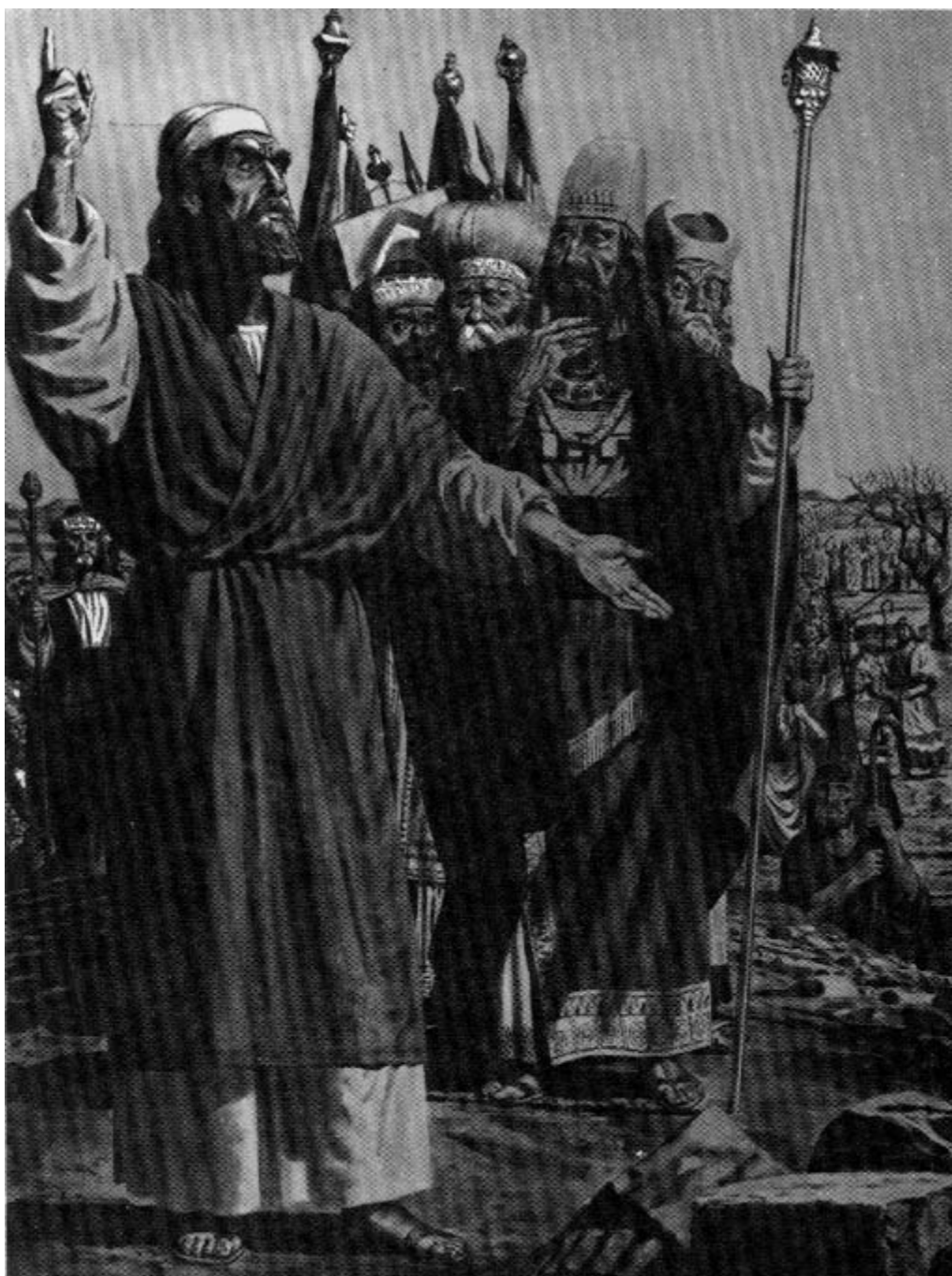
ついに祭司たちは、大声でわめき立てたために声がかれ、その衣は自らの身を傷つけた血にまみれて、絶望状態に陥る。彼らの熱狂ぶりは衰えを見せない。今や彼らの嘆願には、彼らの太陽神に対する恐ろしいのろいの言葉が混じる。エリヤはそれを一心に見守っているのである。なぜならば、もし祭司たちが何かの方法で祭壇に火をつけることに成功するならば、彼はただちに引き裂かれてしまうのであった。

夕方近づいてくる。バアルの預言者たちは疲労のため倒れて混乱に陥る。ある者が何かを言うと、他の者が別のことを言うので、ついに彼らはその騒ぎをやめてしまう。彼らの叫びとろいの声は、もうカルメル山上に響かなくなる。彼らは絶望してこの争論から引き下がる。

人々は敗れた祭司たちの示威運動を、一日中目撃していた。彼らは、祭司たちが自分たちの願いをかなえるために、太陽の燃えさかる光線を手につかむかのように、熱狂的に祭壇の回りを飛びはねるのを見た。彼らは、祭司たちが自分たちの身を傷つけるという恐ろしい光景をふるえながら眺めて、偶像礼拝の愚劣さを反省する機会が与えられた。群衆の中の多くの者は、魔神信仰の示威運動には退屈し、今やエリヤの運動に深い関心を抱いて待機するのである。

夕の供え物を捧げる時になり、エリヤは人々に向かって、「わたしに近寄りなさい」と命じる。彼らがふるえながら近づいてくると、彼はかつて人々が天の神を礼拝していた、壊れている祭壇のところへ行ってそれを繕うのである。彼にとってこの瓦礫の上は、どんなに壮麗な偶像礼拝の祭壇よりも尊いのである。

エリヤはこの昔ながらの祭壇を修復することによって、イスラエルがヨルダン川を渡って約束の地にはいつたときに、主が彼らと結ばれた契約を尊重していることをあらわしたのである。彼は、「ヤコブの子らの部族の数



カルメル山上で、群衆とバアルの預言者を前にして、預言者エリヤは真の神のくずれた祭壇を指さし、「あなたがたはいつまで二つのものの間に迷っているのですか」と叫んだ。

にしたがって十二の石を取り、……主の名によって祭壇を築いた(列王紀上一八ノ三〇)。

むだな骨折りに疲れ果てた失意のバアルの祭司たちは、エリヤが何をするのかを見ようと待っている。彼らはエリヤが、彼らの神々の弱さと無力さを暴露したテストを提案したことを憎むが、彼の力を恐れている。人々もまた恐怖心を抱き、息をのむばかりの期待をもってエリヤが準備をつづけるのを見守っている。バアルの信奉者たちの、熱狂的で無意味な狂乱さとは著しく対照的に、預言者エリヤの態度は静かである。

祭壇が出来上がると、預言者はその回りにみぞを作る。そして薪を並べ、牛を切り裂き、その犠牲を祭壇の上に載せて、人々に犠牲と祭壇とに水を十分かけるように命じるのである。『四つのかめに水を満たし、それを燔祭とたきぎの上に注げ』。また言った、『それを二度せよ』。一度それをする、また言った、『三度それをせよ』。三度それをした。水は祭壇の周囲に流れた。またみぞにも水を満たした(同一八ノ三三―三五)。

エリヤは主の怒りを招いた長い間の背信を人々に思い起こさせ、イスラエルの国からのろいが取り除かれるように、心を低くして彼らの先祖の神に立ち返るように呼びかける。そして、彼は目に見えない神の前につややしく身をかがめ、手を天にあげて簡単な祈りを捧げるのである。バアルの預言者たちは、朝早くから午後遅くまで大声で叫び、あわを吹いて踊った。しかしエリヤが祈ったときには、カルメル山上に無意味な叫び声は響かなかった。彼は、主がその場の目撃者としてそこにおられて、彼の訴えを聞いておられるということを自覚しているかのように祈るのである。バアルの預言者たちは狂気じみて、つじつまの合わないことを祈った。エリヤはイスラエルの人々が神に立ち返ることと、神がバアルよりも優れた神であることを示してくださいと、簡単に熱をこめて祈るのである。

「アブラハム、イサク、ヤコブの神、主よ、イスラエルでは、あなたが神であること、わたしがあなたのしもべであって、あなたの言葉に従ってこのすべての事を行ったことを、今日知らせてください。主よ、わたしに答えてください、わたしに答えてください。主よ、この民にあなたが神であること、またあなたが彼らの心を翻されたであることを知らせてください」(同一八ノ三六、三七)。

すべての者は、重苦しい厳粛な気持ちで沈黙している。バアルの預言者たちは、ふるえおのいている。彼らは罪を意識し、今にもその罰が下るものと考えている。

エリヤの祈りが終わるか終わらないうちに、火の炎が稲光の明るいひらめきのように天から下って、高く築かれた祭壇の上の燔祭を焼きつくし、みぞの水をなめつくし、祭壇の石さえ焼きつくすのである。その炎の輝かしさは山々を照らし、群衆の目を眩惑させる。下の谷間では多くの者が、山上の人々の行動を不安な気持ちで見守っているが、火の下るのが明らかに見えて、すべての者はその光景に驚きの目を見張る。それは紅海において、イスラエルの人々とエジプトの軍勢とを隔てた、火の柱に似ているのである。

山上の人々は畏敬の念に満たされて、目に見えない神の前にひれ伏すのである。彼らは天から下った火を、あえて見つづけようとはしない。彼らは自分たち自身も焼きつくされるのではないかと恐れる。そしてエリヤの神を彼らの先祖たちの神として認め、その神に忠誠をつくさなければならぬことを悟る。彼らはみな声をそろえて、「主が神である。主が神である」と叫ぶのである。その叫びは驚くばかり明瞭に山に響き渡り、下の谷間にこだまする。ついにイスラエルは迷いから覚めて、罪を悔いるのである。ついに人々は、自分たちがどれほどはなだしく神のみ名を汚したかを自覚する。真の神が要求される霊的な礼拝と対照して、バアル礼拝の特質が完

全に暴露されているのである。人々は、彼らが神のみ名を告白するに至るまで、雨や露をおとどめになった神の義とあわれみとを認める。彼らは今エリヤの神は、他のすべての偶像にまさっていることを認める準備ができたのである。

バアルの祭司たちは、主の力の不思議なあらわれを眺めて驚く。しかし彼らは、自分たちの失敗と神の栄光のあらわれを見てもなお、悪行を悔い改めようとはしない。彼らはなおも、バアルの預言者でありたいのである。こうして彼らは滅びの時が熟したことを示した。悔い改めるイスラエル人は、彼らにバアル礼拝を教えた者の惑わしから保護されるのであるが、エリヤはこれらの偽りの教師を滅ぼす指示を主から受ける。罪を犯した指導者たちに対する人々の怒りは、すでに燃え上がっていた。そしてエリヤが「バアルの預言者を捕えよ。そのひとりも逃がしてはならない」と命令したときに、彼らはすぐに従う用意がある。彼らは祭司たちを捕えて、キシヨン川に連れていく。そして、決定的改革が始まったその日の終わる前に、バアルの預言者たちは殺される。そのひとりも生かしておいてはならない。

第十二章 砂漠へ逃れる預言者

本章は列王紀上一八章四一―四六節、一九章一―八節に基づく

バアルの預言者たちを殺すことによって、北王国の十部族の間に大いなる霊的改革を推進する道が開かれた。エリヤは人々に彼らの背信を指摘した。そして、心を低くして主に立ち帰るように彼らに呼びかけたのである。天の神の刑罰が執行された。人々は彼らの罪を告白して、彼らの先祖の神が生ける神であることを認めた。そして今や、天の神ののろいは取り除かれ、生命の物質的祝福が回復されるのであった。地は雨で潤されるのであった。「大雨の音がするから、上って行って、食い飲みしなさい」とエリヤはアハブに言った(列王紀上一八ノ四一)。それから預言者エリヤは、祈るために山の頂に登っていった。

エリヤがこのような確信をもってアハブに雨の準備をするように命じたのは、雨が降りそうな外面的証拠が何かあったためではなかった。エリヤは空に雲を見なかった。雷の音も聞かなかった。彼はただ彼自身の強い信仰に答えて、主の霊が彼を動かして語らせられた言葉を語ったに過ぎなかった。彼は一日中、びくともしないで神のみこころを行い、神の言葉の預言に対する絶対的信頼をあらわしてきた。そして今、彼は力のなし得る限りの

ことをなし終えた。そこで彼は、天の神が預言された祝福を豊かにお与えになることを知っていた。かんばつをお与えになった同じ神が、正しい行為の報いとして豊かな雨を約束されたのである。そしてエリヤは今、約束された雨が注がれるのを待った。彼は「顔をひざの間に入れ」て謙遜な態度をとり、悔い改めたイスラエルのために、神にとりなしの祈りを捧げた。

エリヤは神が彼の祈りを聞かれたというしるしがあらわれたかどうかを知るために、幾度もしもべを地中海を見下ろす岬につかわした。その度にしもべは帰ってきて、「何もありません」と言った。エリヤは気短になったり信仰を失ったりせずに、熱心に祈りつづけた。しもべは、青銅のような空には雨の降るしるしは何もないと言って六回も帰ってきた。エリヤは臆することなく、もう一度彼を送り出した。するとしもべは、今度は帰ってきて「海から人の手ほどの小さな雲が起っています」と言った(列王紀上二八ノ四三、四四)。

これで十分であった。エリヤは空が暗くなるまで待たなかった。彼は信仰によって、その小さな雲のなかにあふるばかりの雨を見た。そして彼は、その信仰に従って行動した。彼はすぐにしもべをアハブに送って、「雨にとどめられないように車を整えて下れ」と伝えさせたのである(同二八ノ四四下句)。

イスラエルの歴史におけるこの重大な危機において、神がエリヤをお用いになることができたのは、彼が大きな信仰の人であったからである。彼は祈り、信仰の手をのばして天の神の約束をつかんだ。そして彼は祈りが聞かれるまで祈りつづけた。彼は神が祈りをお聞きになったという十分な証拠が与えられるまで待たず、神の恵みのほんのわずかなしるしにすべてをかけるのであった。しかし彼が神の助けによってなし得たことは、すべての者がそれぞれの神の奉仕における範囲内においてなし得ることなのである。ギレアドの山から出て来た預言者に

ついて、次のように記されている。「エリヤは、わたしたちと同じ人間であつたが、雨が降らないようにと祈をささげたところ、三年六か月のあいだ、地上に雨が降らなかつた」(ヤコブ五ノ一七)。

このような信仰、すなわち、神のみ言葉の約束をつかんで、天の神がお聞きになるまで、どんなことがあつても手を離さない信仰が、今日世界に必要なものである。このような信仰がわれわれを天の神と密接に結びつけ、悪の勢力と闘う力をわれわれに与えるのである。神の民は信仰によって、「国々を征服し、義を行い、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせた」(ヘブル一ノ三三、三四)。われわれも今日、信仰によってわれわれに対する神のみこころの高い水準に到達しなければならない。「信ずる者には、どんな事でもできる」(マルコ九ノ二三)。

信仰は、力ある祈りの重要な要素である。「神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。」「わたしたちが何事でも神の御旨に従って願い求めるなら、神はそれを聞きいれて下さることである。そして、わたしたちが願い求めることは、なんでも聞きいれて下さるとわかれば、神に願い求めたことはすでにかなえられたことを、知るのである」(ヘブル一ノ六。ヨハネ第一・五ノ一四、一五)。

われわれはヤコブの不撓不屈の信仰、エリヤのたゆまぬ忍耐力とをもって、われわれの願いを天の父に申し上げ、彼が約束されたすべてのことを自分のものとすればよいのである。神はそのみ座の名誉にかけて、ご自分のみ言葉を成就してくださるのである。

アハブが山を下る準備をしたときには、カルメル山の回りには夜の闇が迫っていた。「すると間もなく、雲と

風が起り、空が黒くなって大雨が降ってきた。アハブは車に乗ってエズレルへ行った」(列王紀上一八ノ四五)。アハブは暗黒と大雨の中を王の都に向かって進んで行ったが、道をよく見ることができなかった。エリヤはその日、神の預言者としてアハブを国民の前で辱め、偶像礼拝の祭司たちを殺したのであるが、なお彼をイスラエルの王として認めた。そして今、彼は神の力に強められて、尊敬の行為として王の戦車の前を走って、都の門まで王を案内したのである。

神の使命者のこうした慈悲深い行為は、神のしもべであると主張しながら、自分たちを高く評価しているすべてのものに対する教訓である。自分には、そのような卑しい仕事はできないと感じる人々がある。彼らはしもべの仕事をしているのを発見されることを恐れて、必要な任務を行うことすらためらうのである。こうした人々はエリヤの模範から多くの教訓を学ばなければならない。彼の言葉によって、天の宝が三年の間地に降らなかった。彼は特別に神の栄誉を受け、カルメル山上の彼の祈りの応答として、天から火が降って犠牲を焼きつくした。彼の手は偶像礼拝の預言者たちを殺して、神の刑罰を執行したのである。エリヤは公の奉仕において神の栄誉を受け、著しい勝利を収めたあとで、快くしもべの仕事をしたのである。

エズレルの門のところで、エリヤとアハブは別れた。彼は城壁の外に残り、外套にくるまってそのまま土の上に寝ることにした。王は中に入行って行って、間もなく王宮についた。そこで彼は、その日の驚くべき事と、神の驚くべき力のあらわれを王妃に話した。それは主が真の神であり、エリヤが神に選ばれた使命者であることを証明したのである。アハブが、偶像礼拝の預言者たちを殺したことをイゼベルに話したときに、心かたくなで改める気持ちのない彼女は激しく怒った。イゼベルは、カルメル山上において神が摂理のみ手をもって働かれたこと

を認めず、なお反抗的態度をとって、大胆にエリヤの死を要求するのであった。

その晩ひとりの使者が疲れた預言者を起こして、イゼベルの言葉を彼に伝えた。「もしわたしが、あすの今ごろ、あなたの命をあの人々のひとりの命のようにしていないならば、神々がどんなにでも、わたしを罰してくださるように」(同一九ノ二)。

あのように不屈の勇気を示し、国王や祭司たちや国民に対してあのように完全な勝利を収めたエリヤは、その後落胆したり、おじ気づいたりすることはあり得ないかのように思われる。しかし、このように多くの神の愛の保護の証拠を与えられた彼も、人間的弱さに勝つことができず、この暗黒の時に信仰と勇気を失ってしまった。彼はあわてて飛び起きた。雨は空から降っていた。そしてあたり一面真っ暗であった。エリヤは三年前に、イゼベルの憎しみとアハブの追跡を避けるために、神が彼を隠れ家へと導かれたことを忘れて、今必死になって逃げたのである。彼はベエルシバに着いて、「しもべをそこに残し」、「自分は一日の道のりほど荒野にはいつて行つた」(同一九ノ三、四)。

エリヤは彼のいるべき場所を逃げ出してはならなかった。彼は主の栄誉を擁護することを彼にお命じになった。お方の保護を仰ぎ求めて、イゼベルの威嚇に立ち向かわなければならなかった。彼は自分が信頼している神が、女王の怒りから彼を保護してくださることを、使者に告げるべきであった。彼が驚くべき神の力のあらわれを目撃してから、まだほんの数時間しか経っていないかった。そしてこれは、彼が今捨て去られることはないという確証を彼に与えるはずであった。彼がその場にとどまり、神を彼の避け所、また力として真理のために固く立ったならば、彼は危害を受けることなく守られたことであろう。主はイゼベルに刑罰をお与えになって、もう一つの



王妃イゼベルの脅迫を受けたエリヤは、神に対する義務を忘れ、かくれ場所を求めて逃げ去った。

著しい勝利をお与えになったことであろう。そしてそれは、王や国民に深い感銘を与えて、大いなる改革を引き起こしたことであろう。

エリヤはカルメル山上において行われた奇跡によって、大いなることが起こることを期待した。彼はこうした神の力のあらわれのあとでは、イゼベルがアハブの心に影響を及ぼすこともなく、イスラエル全土に改革が速やかに行われるであろうと望んだのであった。彼はカルメル山上において、食事もとらず一日中祈ったのである。しかしアハブの車をエズレルの門まで案内したとき、彼の体は骨折りに疲れていたにもかかわらず、心は勇気にあふれていた。

ところが、大いなる信仰と輝かしい成功の後によくあり勝ちな、反動的な気持ちでエリヤを襲っていた。彼はカルメル山において始まった改革が、長続きしないのではないかという絶望感に陥った。彼はピスガの峰まで高められたのであったが、今は谷間に落ちていた。彼は全能者の靈感を受けて、最もきびしい信仰の試練に耐えたのである。しかし、イゼベルのおどしが耳に鳴りひびき、サタンが今なお、この邪悪な女の策略によって、勝ち誇るかのように見えたこの失望の時に、彼は神に対する信頼を失った。彼は著しく高められたので、その反動もはなはだしかった。エリヤは神を忘れて、遠くへ逃げ去って行った。そしてついに、荒涼とした荒野にただひとりでいるのに気づいた。彼は疲れ果てて、れだまの木の下に座って休んだ。彼はそこに座って、自分の死を求めたのである。「主よ、もはや、じゅうぶんです。今わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません」と彼は言った(列王紀上一九ノ四下句)。失望落胆して人里遠く落ち延びたエリヤは、二度と人間の顔を見たいとは思わなかった。ついに彼は、疲れ切って眠ってしまった。

だれでも時には、激しい失望と絶望に陥る時があつて、心は悲しみに満たされ、神が今でも地上の子供たちの慈悲深い保護者であられることを信じ難い日々があるものである。心は悩みにさいなまれて、生きているよりは死んだほうがましだと思われる時がある。そうした時に多くの者は、神に対する信頼を失つて、疑いと不信の奴隷になるのである。そのような時に、もしわれわれが靈的洞察力をもつて、神の摂理の意味を悟ることができたならば、天使たちがわれわれを助けて、われわれの足を永遠の山よりも堅い基礎の上におこうと努めているのを見ることができるであらう。そして、新しい信仰と新しい生命がわき上がることであらう。

忠実なヨブは、苦難と暗黒の時にも、次のように言った。

「わたしの生れた日は滅びうせよ。」

「どうかわたしの憤りが正しく量られ、

同時にわたしの災も、はかりにかけられるように。」

「どうかわたしの求めるものが獲られるように。

どうか神がわたしの望むものをくださるように。

どうか神がわたしを打ち滅ぼすことをよしとし、

み手を伸べてわたしを断たれるように。

そうすれば、わたしはなお慰めを得」る。

「それゆえ、わたしはわが口をおさえず、

わたしの霊のもだえによって語り、

わたしの魂の苦しさによって嘆く。」

「わたしは息の止まることを願い…、

わたしは命をいとう。

わたしは長く生きることを望まない。

わたしに構わないでください。

わたしの日は息にすぎないのだから。」

(ヨブ記三ノ三。六ノ二、八一〇。七ノ二、一五、一六)

ヨブは人生にうみ疲れたとは言っても、死ぬことを許されなかった。ヨブには将来の可能性が示され、希望の言葉が与えられたのである。

「堅く立って、恐れることはない。

あなたは苦しみを忘れ、

あなたのこれを覚えることは、

流れ去った水のようになる。

そしてあなたの命は真昼よりも光り輝き、

たとい暗くても朝のようになる。

あなたは望みがあるゆえに…、

保護されて……

あなたは伏してやすみ、

あなたを恐れさせるものはない。

多くの者はあなたの好意を求めるであらう。

しかし悪しき者の目は衰える。

彼らは逃げ場を失い、

その望みは息の絶えるにひとしい。」

(ヨブ記一一ノ一五―二〇)

ヨブは失望と落胆のどん底から、神のあわれみと救いの力に絶対的に信頼するという高尚な境地に昇った。彼は勝ち誇って言った。

「見よ、神が私を殺しても、

私は神を待ち望み、……

神もまた、私の救いとなってくださる。」

「私は知っている。

私を贖う方は生きておられ、

後の日に、ちりの上に立たれることを。

私の皮が、このようにはぎとられて後、

私は、私の肉から神を見る。

この方を私は自分自身で見る。

私の目がこれを見る。ほかの者の目ではない。」

（ヨブ記二三ノ一五、一六。一九ノ二五―二七。新改訳）

「主はつむじ風の中からヨブに答えられた」（同三八ノ一）。そしてそのしもべに、神の力の勢いをあらわされた。ヨブは創造主のお姿を拝見したときに、自分自身を忌み嫌って、ちり灰の中で悔い改めた。その時に主は、彼に豊かな祝福を与え、彼の最後の年月を、彼の生涯の最良のものとするのがおできになったのである。

希望と勇氣は、神に完全な奉仕をするために、ぜひ必要なものである。これらは信仰の実である。神はご自分のしもべたちが試練に遭ったときに必要な力を、豊かに彼らに与えることがおできになる。そしてそうしようと望んでおられるのである。神の働きに対する敵の策略は、よく計画され確立しているように見えるであろう。しかし神は、これらの計画の最も強力なものでも、覆すことがおできである。そして神はしもべたちの信仰が十分に試めされたことをごらんになるときに、神ご自身の時と方法においてこれをなさるのである。

気落ちしている者に対して、信頼できる救済策がある。それは信仰と祈りと行いである。信仰と活動は、日毎に増大する確信と満足とを与える。あなたは不吉な予感に恐れを感じ、失望落胆に陥ろうとしているであろうか。一見絶望的で、最悪の事態にあっても恐れてはならない。神を信じよう。神はあなたの必要を知っておられる。



神はエリヤに天使を送り、食物と水を与えた。彼は食べて寝、また食べて疲れをいやし、四十日もかかる旅に出ていたのであった。

神はすべての力を持っておられる。神の無限の愛とあわれみは、消耗することがない。神はその約束をなし遂げられないのではないかと恐れてはならない。神は永遠の真理である。神は、神を愛する人々と結ばれた契約を變更なさない。そして神は、忠実なしもべたちが必要とするだけの能力をお与えになる。使徒パウロは、次のようにあかししている。『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる』。…だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである」(コリント第二・一二ノ九、一〇)。

神はエリヤを、試練の時にお捨てになったであろうか。いや、そうではない。神はエリヤの祈りに答えて、天から火を降らせて山の頂を照らされたときと同様に、彼が神と人に捨てられたと感じたときにも、彼を愛しておられた。さてエリヤが眠っていると、静かに手を触れて快い声で呼びかける者があるので目が覚めた。彼は敵が彼を見つけたのかと思って、驚いて逃げ出そうとした。しかし、彼の上にかがんでいるあわれみ深い顔は、敵の顔ではなくて友の顔であった。神はしもべのために食物を持って、天からの使いをお送りになったのである。

「起きて食べなさい」と天の使いは言った。「起きて見ると、頭のそばに、焼け石の上で焼いたパン一個と、一びんの水があった」(列王紀上一九ノ五、六)。

エリヤは彼のために備えられた食物を食べたあとでまた眠った。もう一度天使が来た。天使は疲れ果てたエリヤにさわって、あわれみ深く言った。『起きて食べなさい。道が遠くて耐えられないでしょうから』。彼は起きて食べ、かつ飲み、その食物で力づいて四十日四十夜行って、神の山ホレブに着いた」(同一九ノ七)。そこで彼はほら穴に隠れた。

第十三章 失敗から立ちあがる

本章は列王紀上一九ノ九―一八節に基づく

エリヤがホレブ山に隠れたことは、人間にはわからなかったが、神は知っておられた。そして疲労し、絶望に陥った預言者はそこにただひとり残されて、押し寄せる悪の勢力と戦うのではなかった。神は大いなる天使をつかわして、エリヤが避難しているほら穴の入口で彼に会い、彼の必要をたずね、イスラエルに対する神のみこころを明らかにされるのであった。

エリヤは神に全く信頼することを学ぶまでは、バアル礼拝に欺かれた人々に対する彼の働きを完成することができなかった。カルメル山上での驚くべき勝利は、さらに大きな勝利への道を開くはずであった。それにもかかわらず、エリヤはイゼベルに脅かされて、彼の前に開かれた驚くべき機会に背を向けていたのである。エリヤは、主が彼に占めることを望んでおられる有利な立場と比較して、現在彼がどんなに貧弱な状態にあるかを理解する必要があった。

神は疲れたしもべに、「あなたはここで何をしているのか」とおたずねになった(列王紀上一九ノ九)。わたしは

あなたをケリテ川に送り、その次にはザレパテのやもめのところに送った。わたしはあなたにイスラエルに帰って、カルメル山上で偶像礼拝の祭司たちの前に立つことを命じた。そして、王の車をエズレルの門まで導く力をあなたに与えた。しかしこんなにあわててあなたを荒野に逃亡させたのは、いったいだれなのか、あなたはここで何の用があるのか。

エリヤは悲痛な気持ちでつぶやいて言った。「わたしは万軍の神、主のために非常に熱心でありました。イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、刀をもってあなたの預言者たちを殺したのです。ただわたしだけ残りましたが、彼らはわたしの命を取ろうとしています」(同一九ノ一〇)。

天使はエリヤにほら穴から出て来て、山の上で主の前に立ち、主の言葉を聞くように命じた。「その時主は通り過ぎられ、主の前に大きな強い風が吹き、山を裂き、岩を砕いた。しかし主は風の中におられなかった。風の後に地震があつたが、地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火があつたが、火の中にも主はおられなかった。火の後に静かな細い声が聞えた。エリヤはそれを聞いて顔を外套に包み、出てほら穴の口に立った」(同一九ノ一一―一三)。

神はご自分を彼のしもべにあらわすのに、大いなる神の力のあらわれではなくて、「静かな細い声」をお選びになったのである。最も効果的に神のみこころを達成するのは、何も最も華々しい活動を行う働きであるとは限らないことを、神はエリヤに教えようとなさつたのである。エリヤが主の啓示を待っていた間、嵐が吹きたけり、雷光がひらめき、焼きつくす火が通り過ぎた。しかし神は、こうしたすべてのものの中にはおられなかった。その次に静かな細い声が聞こえた。そして預言者エリヤは、主のみ前で頭を覆つたのである。彼のつぶやきはなく

なり、心は和らげられ、鎮められた。今彼は、静かに神に信頼して固く寄り頼んでいれば、必要な時にはすぐに助けが与えられることを知ったのである。

人々の心に罪を悟らせて悔い改めに導くのは、神のみ言葉の最も博学な講演であるとは限らない。人々の心に触れるのは雄弁や論理ではなくて、聖霊の芳しい影響力である。聖霊は静かにしかも確実に働きかけて、品性を改変し啓発するのである。人の心を変える力があるのは、神の聖霊の静かな細い声である。

「あなたはここで何をしているのか」とその声はたずねた。エリヤはふたたびそれに答えた。「わたしは万軍の神、主のために非常に熱心でありました。イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、刀であなたの預言者たちを殺したからです。ただわたしだけ残りしましたが、彼らはわたしの命を取ろうとしています」(列王紀上一九ノ一四)。

主はエリヤに、イスラエルの悪人たちは、罰せられずにはすまされないと答えられた。偶像を礼拝する国家を罰して神のみこころを達成するために、特別な人々が選ばれなければならなかった。すべての者が、真の神の側につく機会を与えられるために、厳正な処置が取られなければならなかった。エリヤ自身がイスラエルに帰り、改革を起こすために、他の人々とともに重荷を負わなければならなかったのである。

主はエリヤにお命じになった。「あなたの道を帰って行って、ダマスコの荒野におもむき、ダマスコに着いて、ハザエルに油を注ぎ、スリヤの王としなさい。またニムシの子エヒウに油を注いでイスラエルの王としなさい。またアベルメホラのシャパテの子エリシャに油を注いで、あなたに代って預言者としなさい。ハザエルのつるぎをのがれる者をエヒウが殺し、エヒウのつるぎをのがれる者をエリシャが殺すであろう」(同一九ノ一五―一七)。

エリヤはイスラエルの中で、自分だけが真の神の礼拝者であると考えていた。しかしすべての人々の心を読まれる神は、長くつづいた背信のなかにあって神に忠誠を保った者が多くいたことをエリヤに示された。「わたしはイスラエルのうちに七千人を残すであろう。皆バアルにひざをかがめず、それに口づけしない者である」と神は言われた(同一九ノ一八)。

一見、失望と敗北と思われる時におけるエリヤの経験から多くの教訓を学ぶことができる。すなわち、人々が一般に正義から離反している、現代の神のしもべたちに非常に貴重な教訓を教えている。今日広く行きわたっている背信は、預言者の時代にイスラエルに広がった背信とよく似ている。今日多くの人々は神よりも人間を高め、人気ある指導者を称賛し、富を礼拝し、啓示の真理よりも科学を尊重してバアルに従っている。疑惑と不信は人の心に悪影響を及ぼし、多くの者は人間の理論を神の言葉の代わりにしている。彼らは、人間の理性が神の言葉の教え以上に高められるべき時が来たと、公然と教えている。義の標準である神の律法は、もうその効力を失ったと言われている。すべての真理の敵は欺瞞的力をもって働きかけ、神の占めるべき位置に人間の制度を設け、人類の幸福と救いのために定められたものを彼らに忘れさせようとしている。

しかしこの背信は、広がっているとは言っても、普遍的なものではない。世界中のすべての人が不法で罪深いのではない。すべての者が敵の側に加担したのではない。神は、バアルにひざをかめない者を幾千人も持っておられる。また、キリストや律法についてもっと深く理解しようとして熱望している者、イエスが速やかに来られて、罪と死の支配を終わらせてくださることを切望している者を多く持っておられる。バアルを知らずに礼拝している者も多くあって、聖霊はなお彼らに働きかけているのである。

このような人々は、神を知り、神のみ言葉の力を知った人々の個人的な援助を必要としている。このような時に、神の子供はみな活発に他人を助けていなければならない。聖書の真理を知っている者が、光を熱望する男女をたずね求めるときに、神の天使は彼らに伴っていく。そして天使たちの行くところには、だれでも恐れることなく前進することができる。献身した働き人の忠実な努力の結果として、多くの人々が偶像礼拝から生きた神の礼拝に立ち返るのである。多くの人々は人間が作った制度を崇敬することをやめて、恐れることなく神と神の律法の側に立つのである。

真実で忠実な人々のたゆまぬ活動に負うところが多いのである。そのためにサタンは、服従する人々によって行われる神のみこころを、なんとかして妨げようと努力するのである。サタンはある者に、彼らの崇高で聖なる任務を見失わせて、この世の快楽に満足を味わわせようとする。サタンは彼らを安楽に定住させるか、それとも大きな世俗的利益を求めて、よい感化を及ぼすことができる場所から、彼らを移動させようとするのである。彼はまた他の人々を、反対や迫害のゆえに失望させて、義務を行うことを回避させる。しかし天の神は、こつしたすべての人々を、この上もない慈悲深い心をもって見守られるのである。魂の敵によってその声を沈黙させられたすべての神の子に対して、「あなたはここで何をしているのか」という質問が投げかけられている。わたしはあなたに、全世界に出て行って福音を宣べ伝え、人々に神の日のための備えをさせるように任命したのである。あなたは、なぜここにいるのか。だが、あなたを送り出したのか。

キリストの前にあった喜び、犠牲と苦難の中にあつて彼を支えた喜びは、罪人が救われるのを見る喜びであった。これがキリストに従うすべての者の喜びであり、彼の大望をかき立てるものでなければならない。贖罪が、

彼らと彼らの同胞にとって、どんなことを意味するものであるかをたとえわずかでも自覚する者は、人類の必要の大きさが幾分か理解できよう。彼らは、恐ろしい運命のもとにある幾千という人々の道徳的、霊的欠乏を見るときに、彼らに対して深いあわれみの情を抱くであろう。それと比較するならば、肉体的苦痛はなんでもなくなるのである。

個人と同様に家族に対しても、「あなたはここで何をしているのか」という質問がなされている。多くの教会の中には、神のみ言葉の真理についてよく教えられた家族がある。そのような人々は、彼らのできる奉仕を必要としている場所へ移っていった、彼らの影響力の範囲を広げるとよいのである。神はキリスト者の家族が、地上の暗黒の場所へ出ていった、霊的暗黒に閉ざされている人々のために、賢く忍耐強く働くように招いておられる。こうした召しにこたえるのには、自己犠牲が必要である。多くの人々がすべての障害物の取り除かれるのを待っている間に、魂は望みなく、神なく死んでいる。世俗的利益のためや科学的知識獲得のために、人々は喜んで伝染病の多い地域へ入って行って、苦難と欠乏とに耐えるのである。救い主のことを他の人々に伝えるために、喜んでそれと同じことをする人々がどこにいたのであるうか。

もし霊的力に満ちた人が、困難な状況のもとで極度の苦しみに遭い、失望落胆して生きがいを全く見失ってしまっただとしても、これは不思議でも新しいことでもないのである。そうした人々はみな、最大の預言者のひとり、激怒する女の怒りを避けて命からがら逃げ出したことを思い出すとよい。放浪に疲れ果てた逃亡者である彼は、失望落胆して死ぬことを願ったのである。しかし希望は失せ去り、一生の働きは敗北に終わったかと思われるたびに、彼はその生涯における最も尊い教訓の一つを学んだのである。彼はその最も弱かったときに、どのよ

うに忌まわしい状況のもとにあっても、神に信頼することの必要とその可能性について学んだのである。

自分たちの生命のエネルギーを自己犠牲的働きのために使い尽くしながらも、落胆と疑惑に打ちひしがれそうになる者は、エリヤの経験から勇気を得るとよい。神の保護、神の愛、神の力は、その熱意が理解されず、感謝されず、その勧告と譴責が重んじられず、その改革のための努力が憎しみと反対をもって報いられる神のしもべたちのために、特別にあらわされるのである。

サタンが最も激しい攻撃をしてくるのは、魂が最も弱っている時である。サタンはこのようにして、神のみ子に勝利しようとしたのである。なぜならば、サタンはこのような方法によって、多くの人々に勝利したからであった。意志の力が弱まり、信仰がくじけたときに、長く勇敢に正義のために立った人々が誘惑に負けたのである。モーセは四十年間の放浪と不信に疲れ果てて、一瞬、無限の力をもった神を見失った。彼は約束の国の瀬戸際で失敗した。エリヤも同様であった。かんばつと飢饉の年月の間主に信頼しつづけ、恐れることなくアハブの前に立ち、カルメル山上におけるあの試練の日に、イスラエル全国民の前に真の神のただひとりの証人として立った彼が、疲れ果てたときには死の恐怖に襲われて、彼の神に対する信仰を失ってしまった。

今日においてもそのとおりである。われわれも疑惑に襲われ、窮地に陥り、貧苦に悩むとき、サタンはわれわれの主に対する確信を動揺させようとするのである。彼がわれわれの誤りをわれわれの前に並べ立て、神に対する不信を抱かせ、神の愛を疑わせようとするのはこの時である。彼は魂を失望させ、神から手を離させようとするのである。

争闘の最前線に立って聖霊に特別の働きをするように促されている者は、時々圧力が除かれたときに、その反

動を感じるものである。落胆はどんなに英雄的な信仰をも動揺させ、どんなに堅固な意志をもぐらつかせるのである。しかし神は理解し、なおあわれみ、愛されるのである。神は心の動機と目的とお読みになる。万事が暗澹としているときに、忍耐強く待ち信頼することは、神の働きの指導者たちが学ばなければならない教訓である。神は逆境の中にある彼らをお見捨てにならない。自分の無価値なことを知って全く神に寄り頼む魂ほど、一見無力に見えるが、真にこれほどに打ち勝つことができないものはほかにないのである。

試練の時に神に信頼することを改めて学ぶというエリヤの経験の教訓は、大きな責任の地位にある人々のためだけではない。エリヤの力であられたお方は、どんなに弱い者であっても、苦闘する神のすべての子供を支える力を持つておられる。神はすべての者に忠誠をお求めになり、すべての者に必要な力をお授けになるのである。人間は自分だけの力では無力である。しかし人間は神の力によって悪に勝利する力を持ち、他の人々をも勝利するように助けることができる。サタンは神を防御とする者に勝つことはできない。「人はわたしについて言う、『正義と力とは主にのみある』と」(イザヤ書四五ノ二四)。

キリスト者の友よ、サタンはあなたの弱点を知っている。だからイエスにしっかりとつかまっていなさい。神の愛のうちにつながっているならば、すべての試練に耐えることができる。キリストの義だけが、世界を襲っている悪の潮流をとどめる力をあなたに与えることができる。信仰をあなたの経験の中に持ち込みなさい。信仰は、すべての重荷を軽くし、すべての疲労を和らげる。今不可解な摂理は、神に絶えず信頼することによって解決することができる。神がお定めになった道を、信仰によって歩きなさい。試練は来るであろう。しかし前進しなさい。これはあなたの信仰を強め、あなたを奉仕に適した者にする。聖なる歴史の記録は、われわれがただそれを読ん

で驚くだけではなく、古代の神のしもべたちの中に働いたのと同じ信仰が、われわれのうちに働くために書かれたのである。主の力の通路となる信仰の人々がいるところならどこでも、主は今も同様の著しい方法でお働きになるのである。

ペテロと同様にわれわれに対しても、「サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った」という言葉が語られている（ルカ二二ノ三二、三三）。キリストは、ご自分が身代わりになって亡くなられたその人々をお捨てになることはない。われわれは彼を去り、誘惑に打ち負かされることであろう。しかしキリストは、ご自分の生命という贖いの代価を払われた人から、離れ去ることはおできにならない。もしわれわれの霊的視界が開かれるならば、穀物の束をのせた車のように圧さえられ、悲しみに打ちひしがれてうなだれ、失望して今にも死んでしまいそうになっている魂を見ることがあろう。またわれわれは、天使が急いで飛んで行って、こうした試みに遭っている人々を助け、彼らを取りまいて悪の軍勢を追い返し、彼らの足を確かな土台の上に置いているのを見るであろう。二つの軍勢の間の戦いは、この世の軍勢の戦いと同様に現実のものである。そして霊的争闘の結果いかに、永遠の運命がかかっているのである。

預言者エゼキエルの幻のなかに、ケルビムの翼の下に手のようなものがあつた。これは神のしもべたちに成功を与えるのは、神の力であるということをお教えるためである。神がご自分の使命者としてお用いになる人々は、神の働きが彼らに依存していると考えてはならない。有限な者が、この責任の重荷を担うように放置されているのではない。まどろむことなく、常にこの計画の達成のために働いておられるお方が、彼の働きを推進されるので

ある。彼は悪人たちの計画を阻止し、神の民に対して害を加えようとする者たちの策略を混乱させられる。王であり、主の主であられるお方が、ケルビムの間に座しておられる。そして、国々の争鬭と動乱のなかにあって、今なお神の民を守っておられるのである。王たちの城砦が破壊され、怒りの矢が神の敵の心臓を射し貫くときに、神の民は神のみ手のうちに安全に守られるのである。

第十四章 預言者エリヤの力

エリヤの時代から幾世紀の長きにわたって、彼の生涯の記録は、背信のさなかにあつて正義のために立つように召された人々に、靈感と勇気を与えてきた。そして「世の終りに臨んでいる」われわれに、それは特別の意義を持つていたのである（「リント第一・一〇ノ一一」）。歴史は繰り返されている。今日の世界にもアハブやイゼベルのような人物がいる。現代はエリヤが生存していた時と全く同じように、偶像礼拝の時代である。外面的殿堂はなく、目を向けるべき偶像はないかもしれない。しかし幾千という人々が、富、名声、快樂、また生まれ変わらない心の傾向のままに生きることを許す、耳ざわりのよい話などの、この世の神々に従っている。多くの人々は神と神の属性について誤った考えを抱き、全くバアルの礼拝者たちと同様に偽りの神を礼拝しているのである。キリスト者であると主張している多くの人々でさえも、神と神の真理に絶えず対抗している勢力と結託しているのである。こうして彼らは神から離れて、人間を高めるようになってしまふのである。

現代広く行きわたっているのは、不信と背信の精神である。それは真理を知り啓蒙された精神であると言われ

ているのであるが、実は途方もない人間の思いあがりである。人間の理論が高められて、神と神の律法があるべきところにおかれている。サタンは不服従には人々を神のようにする自由と解放があると約束して、彼らを不従徒な生活に誘惑する。神の明白な言葉に対する反対の精神があらわれ、神の啓示よりも人間の知恵が偶像のように賛美されている。人々は世俗の習慣と影響に従ったために心が暗くなり、混乱に陥って光と闇、真理と誤りを区別する力を全く失ってしまったようである。彼らは正しい道から遠く離れ去って、いわゆる哲学者と呼ばれているわずかの人々の意見を、聖書の真理よりもはるかに信頼する価値があると考ええる。神のみ言葉の訴えと約束、み言葉への不服従と偶像礼拝とに対する刑罰の警告などは、彼らの心をとかす力がないように思われる。彼らはパウロ、ペテロ、ヨハネを動かした信仰は時代遅れで、不可解で、現代の思索家たちの知性に訴える価値がないと思っている。

はじめに神は、人類が幸福と永遠の生命を得る方法として、神の律法を彼らにお与えになった。サタンが神のみこころを妨害することができるのは、この律法に人々を従わせないようにすることだけである。そして彼の絶え間ない努力は、その教えを誤って解釈し、その重要性を過小評価することであった。彼の最大の攻撃は、律法そのものを変更して、人々にそれに従っていると公言しつつ、その教えに違反させることであつた。

ある著者は神の律法を変更しようとすることを、重要な二つの道の別れ道に立っている道標を、間違つた方向に変える昔ながらの悪習にたとえている。こうしたいはずらはしばしば、大きな混乱と苦しみを引き起こしたのである。

道標はこの世界を旅する人々のために、神がお立てになったものであつた。この道標の一方は、創造主に喜ん

で従うことが幸福と生命の道であることを示し、他方は不服従が不幸と死の道であることを示している。幸福への道は、モーセの律法が行われていた時代に逃れの町への道が明らかに指示されていたように、はっきりと示されていた。しかし、人類にとってこの邪悪な時代においては、あらゆる幸福の大敵が道標を反対にしまった。そして、多くの者が道を誤ってしまった。

主はモーセによって、イスラエルに次のようにお教えになった。「あなたがたは必ずわたしの安息日を守らなければならない。これはわたしとあなたがたとの間の、代々にわたるしるしであって、わたしがあなたがたを聖別する主であることを、知らせるためのものである。それゆえ、あなたがたは安息日を守らなければならない。これはあなたがたに聖なる日である。すべてこれを汚す者は必ず殺され…すべて安息日に仕事をする者は必ず殺されるであろう。ゆえに、イスラエルの人々は安息日を覚え、永遠の契約として、代々安息日を守らなければならない。これは永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである。それは主が六日のあいだに天地を造り、七日目に休み、かつ、いこわれたからである」(出エジプト記三二ノ一二―一七)。

主はこれらの言葉によって、服従が神の都への道であることをはっきりと指示されたのである。しかし、不法の者が道標を変えて、間違った方向に向けてしまった。彼は偽の安息日を制定して、その日に休めば創造主の命令に従っているのだと人々に思わせた。

神は七日目が主の安息日であると宣言なさったのである。「天と地が…完成した」ときに、神はこの日を神の創造の働きの記念として高められたのである。神は「そのすべての作業を終って第七日に休まれた。神はその第七日を祝福して、これを聖別された」(創世記二ノ一―三)。

安息日の制度は出エジプトの時に、神の民の前にひときわ目立つようにもたらされた。彼らがまだ奴隷であったときに、彼らの監督は毎週要求される仕事の量を増加して、強制的に安息日にも働かせようとした。幾度となく労働条件は変えられ、苛酷になっていった。しかし、イスラエル人は奴隷生活から救われて、何の妨げもなく主のすべての戒めを守ることが出来る所に導かれたのである。シナイにおいて律法が語られた。そしてその写しが、二枚の石の板に「神が指をもって書かれ」てモーセに授けられた(出エジプト記三二ノ一八)。そしてイスラエルの人々は、四十年近くにわたる彼らの放浪生活において、七日目ごとにマナが降らなかったことと、備え日に降った二倍の量が奇跡的に保存されたことによつて、神がお定めになった休みの日を常に思い起こさせられたのである。

イスラエルの人々は、約束の国に入る前に「安息日を守つてこれを聖と」せよという訓戒をモーセから受けた(申命記五ノ一二)。主はイスラエルが安息日の戒めを忠実に守ることにより、彼らの創造主であり贖い主である主に対する彼らの責任を、常に思い起こすように計画されたのである。彼らが安息日を正しい精神をもって守るならば、偶像礼拝は起こり得ないのであつた。ところが、十戒のこの戒めの要求には従わなくてもよいと言つてそれを破棄してしまえば、人々は創造主を忘れて、他の神々を礼拝するのである。「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである」と神は言われた。しかし、「彼らがその心に偶像を慕つて、わがおきてを捨て、わが定めに歩まず、わが安息日を活した」。そして神は、人々に神に立ち返るよう訴えて、安息日を清く守ることの重要性を改めて指摘したのである。「主なるわたしはあなたがたの神である。わが定めに歩み、わがおきてを守つてこれを行



シナイ山で律法が語られ、それは神の指をもって二枚の石の板に書かれた。モーセはシナイ山頂で律法の石の板を神の手から受けた。



キリストは安息日は祝福であって重荷ではないと教えた。彼は律法を廃するために来たのではないと明言された。

い、わが安息日を聖別せよ。これはわたしとあなたがたとの間のしるしとなって、主なるわたしがあなたがたの神であることを、あなたがたに知らせるためである」と神は言われた(エゼキエル書二〇ノ一二、一六、一九、二〇)。

主はついに、ユダをバビロンの捕囚に陥れた罪に、彼らの注意を引いて言われた。「あなたは…わたしの安息日を汚した。」「それゆえ、わたしはわが怒りを彼らの上に注ぎ、わが憤りの火をもって彼らを滅ぼし、彼らのおこないを、そのこうべに報いた」(同二二ノ八、三二)。

ネヘミヤの時代にエルサレムが回復されたとき、安息日を破る人々は、次のように厳しく問いただされた。「あなたがたの先祖も、このように行つたので、われわれの神はこのすべての災を、われわれとこの町に下されたではないか。ところがあなたがたは安息日を汚して、さらに大いなる怒りをイスラエルの上に招くのである」(ネヘミヤ記一三ノ一八)。

キリストはこの地上の伝道生涯において、安息日を守るべきものであることを強調なさった。彼はそのすべての教えにおいて、彼ご自身がお定めになった制度に対する崇敬の念をあらわされた。彼の時代に安息日ははなはだしく曲解されていて、その順守は神の品性ではなくて、むしろ利己的で独裁的人間の品性を反映していた。キリストは、神を知っていると主張する人々の、神に対する誤った偽りの教えを破棄された。キリストは冷酷な敵意をもったラビたちにつけ回されながらも、彼らの要求に従うふりすらせずに、神の律法に従って断固として安息日を守り通されたのである。

彼は明白な言葉で、神の律法に対する彼の尊敬について証しされた。「わたしが律法や預言者を廃するため

きた、と思つてはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。よく言っておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである。それだから、これらの最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。しかし、これをおこないまたそう教える者は、天国で大いなる者と呼ばれるであろう」(マタイ五ノ一七一―一九)。

福音時代を通じて人類の大敵は、第四条の安息日の戒めを特別攻撃の目標にしてきた。サタンは言っている。「わたしは神とは反対の目的をもつて働く。わたしは神の記念である七日目の安息日を破棄するように、わたしの手下たちに権限を与える。こうしてわたしは、神によつて聖別され、祝福された日が変更されたことを世界に示そう。その日が人々の心に覚えられることはない。わたしはその記憶を消し去る。そのかわりに神の証明のない日、神と神の民との間のしるしとなることができない日を設けることにしよう。わたしはその日を受け入れる人々を導いて、神が第七日にお与えになった神聖さをその日に与えるようにさせよう。

わたしはわたしの代表者によつて、わたし自身を高めよう。第一日が尊ばれて、プロテスタント教会は、この偽の安息日を本物として受け入れる。わたしは神が制定された安息日を順守しないことによつて、神の律法を侮辱する。『これはわたしとあなたがたとの間の、代々にわたるしるしである』という言葉を、わたしのがわの安息日に活用しよう。

こうして世界はわたしのものになる。わたしは地上の支配者となり、この世の君となる。わたしはわたしの権力下にある者の心を支配して、安息日を特別に侮辱するようにしむける。しるしであるか。わたしは第七日を順

守することを、地上の権力に対する不忠実のしるしとする。人間の法律が非常な厳しさで施行されるので、人々は第七日の安息日を守ろうとしなくなる。食糧や衣類の欠乏を恐れて、彼らは世といっしょになって神の律法に違反する。地は全くわたしの支配するところとなる。」

敵は偽の安息日を設けることによって、時と律法とを変えようとした。しかし、敵はほんとうに神の律法の変更成功したであろうか。出エジプト記三一章の言葉がその答えである。昨日も今日も永遠に変わることはない。あなたが、第七日について宣言された。「これはわたしとあなたがたとの間の、代々にわたるしるしである」。「これは永遠に……しるしである」(出エジプト記三・一三、一七)。変更された道標は間違った方向を指してはいが、神はお変わりにならない。神は今なお、イスラエルの大なる神である。「見よ、もろもろの国民は、おけの一しずくのように、はかりの上のちりのように思われる。見よ、主は島々を、ほこりのようにあげられる。レバノンには、たぎぎに足りない、またその獣は、燔祭に足りない。主のみ前には、もろもろの国民は無きにひとしい。彼らは主によって、無きもののように、おなしのもののように思われる」(イザヤ書四〇・一五―一七)。そして神は、アハブとエリヤの時代におけると同様に、今日においても神の律法を真剣に擁護されるのである。しかしその律法は、なんと無視されていることであろう。見よ、今日、世界は公然と神に反逆している。まことに今日は、忘恩と形式主義、不誠実と誇りと背信に満ちた邪悪な時代である。人々は聖書をおろそかにし、真理を憎んでいる。イエスは彼の律法が拒否され、彼の愛が侮辱され、彼の使者たちが冷淡に扱われるのをごらんになる。彼はあわれみ深い言葉を語られたにもかかわらず、それを認める者はなかった。彼は警告を寄せられたにもかかわらず、それを心にとめる者はいなかった。人の心の神殿の庭は、汚れた商売の場と化してしまった。

利己心、ねたみ、誇り、悪意などがみな心の中に秘められている。

少しのためらいもなく神の言葉を嘲笑する者が多い。み言葉をそのまま信じる者は、笑いものにされている。法と秩序がますます軽蔑される傾向にあるが、これは直接、主の明白な命令を破ったことにその原因がある。暴力と犯罪は、服従の道を逸れた結果である。偶像の神殿で礼拝して、いたずらに幸福と平和を求めている群衆の悲惨と不幸を見よ。

見よ、安息日の戒めはほとんど全世界的に無視されている。また、週の第一日のいわゆる神聖さを擁護するために法令を制定するとともに、酒類売買を合法化する法律をつくっている人々の大胆な不信心さを見よ。彼らは聖書のみ言葉よりも自分たちが賢明であると考えて、人間の良心を強制しようとする。その反面においては、神のかたちに造られた人間を動物化し、破壊する害悪に賛成しているのである。このような法令の制定を思いつかせたのは、サタン自身である。彼は、神の法令よりも人間の法令を高める者の上に、神ののろいが下ることをよく知っている。そして彼は、できる限りの力を尽くして、人々を滅びに至る広い道へと導こうとするのである。

人間は長い間、人間の意見と人間の制度とを礼拝してきたために、ほとんど全世界が偶像に従っている。そして神の律法を変えようとした者は、あらゆる欺瞞的策略を用いて人々を神に対抗させ、また、義人であることを示すしるしに対して反抗させるのである。しかし主は、その律法が何の罰も受けることなくいつまでも破られ、軽蔑されることをお許しにならないのである。「その日には目をあげて高ぶる者は低くせられ、おごる人はかためられ、主のみ高くあげられる」という時が来る(イザヤ書二ノ一一)。懷疑論者は、神の律法の要求をあざ笑って拒否することであろう。世俗の精神は多くの人々を汚染し、少数の人々を支配するに至るだろうが、神の働き

は非常な努力とたゆまぬ犠牲によってのみ、その地歩を確保することができる。しかし真理は、ついには輝かしい勝利を収めるのである。

この地上における神の最後の働きにおいて、神の律法の標準はふたたび高められる。偽りの宗教は普及し、不法ははびこり、多くの人の愛は冷え、カルバリーの十字架は見失われ、死のとばりのような暗黒が世界を覆うことであろう。一般の風潮は、あげて真理に反対するであろう。神の民を滅ぼすために次々と策略がめぐらされることであろう。しかし最大の危機において、エリヤの神は、沈黙させ得ない使命の伝達者を起こされるのである。人口稠密な都市において、また、至高者に反対して語ることがその頂点に達した場所において、厳しい譴責の声が聞かれるのである。神の任命を受けた人々が、大胆に教会と世俗との結合を非難するのである。彼らは人間が造った制度を守ることをやめて、真の安息日を守るように熱心に人々に訴えるのである。「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め。」…「おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲む」と、彼らはすべての国に宣言するのである（黙示録一四ノ七一〇）。

神はご自分の契約をお破りにならず、またみ口から出たことをお変えにならない。神の言葉は、神のみ座のようにならなくなる、永遠に固く立つのである。審判のときに、神の指によって明らかに書かれたこの契約が持ち出されて、世界は無限の神の審判廷に引き出されて、宣告を受けるのである。

エリヤの時代と同様に今日も、神の戒めを守る人々と偽りの神の礼拝者との間の境界線は、はっきり引かれている。「あなたがたはいつまで二つのものの間に迷っているのですか。主が神ならばそれに従いなさい。しかし

バアルが神ならば、それに従いなさい」(列王紀上二八ノ二二)。そして今日に対する使命は次のとおりである。「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。……」「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ。彼女の罪は積み積って天に達しており、神はその不義の行いを覚えておられる」(黙示録一八ノ二、四、五)。

すべての人に試練がやってくる時は、あまり遠くはない。われわれは偽の安息日を守るように強制される。それは、神の戒めと人間の戒めとの間の争いである。一步一步世俗の要求に屈伏して、世俗の習慣に妥協した人々は、その時、嘲笑、侮辱、投獄と死の脅威にさらされるよりは、地上の権力に従ってしまうのである。その時、金が不純物から分離される。真の敬神深さが、ただうわべだけの見せかけからはっきりと区別される。われわれが輝かしさを賛美した多くの星が、その時暗黒の中に消えていく。聖所の飾りのようなふうをしてはいたが、キリストの義をまもっていなかった人々は、その時裸の恥をさらす。

各地に散在する地の住民のなかには、バアルにひざをかかめない者がある。夜だけ現れる空の星のように、これらの忠実な人々は、暗きが地を覆い、やみがもろもろの民を覆うときに輝き出るのである。異教のアフリカ、ヨーロッパ、南米のカトリックの国々、中国、インド、海の島々、地のあらゆる暗黒の隅々に、神は、なお、暗黒のただ中に輝き出る選ばれた人々の星空を保っておられる。彼らを通して背信した世界に、神の律法に従うとき得られる人格を改変する力を、明瞭に示しておられるのである。彼らは今でさえ、あらゆる国民、国語、民族のなかにあらわれている。そしてサタンが、「小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に」、違反者は死刑に処すると言って、偽の休日に対する忠誠のしるしを受

けさせる最も暗黒な時に、これらの忠実な人々は、「責められるところのない純真な者となり…傷のない神の子」として、「星のようにこの世に輝いている」（黙示録一三ノ一六。ピリピ二ノ一五）。夜が暗ければ暗いほど彼らは明々と輝くのである。

神の刑罰が背信した人々の上にくだっていたときに、エリヤはイスラエルの数を数えて、何と奇妙なことをしたことであろう。彼は主のがわには、ただひとりしか数えることができなかった。しかし、彼が「ただわたしだけが残りましたが、彼らはわたしの命を取ろうとしています」と言ったときに、「わたしはイスラエルのうちに七千人を残すであろう。皆バアルにひざをかがめない者である」という主の言葉に彼は驚いた（列王紀上一九ノ一四、一八）。

であるから、今日だれもイスラエルの数を数えることなく、すべての者は肉の心、暖かい同情心、キリストのような心をもって失われた世界の救いのために手をさしのべよう。

第十五章 妥協するヨシヤパテ王

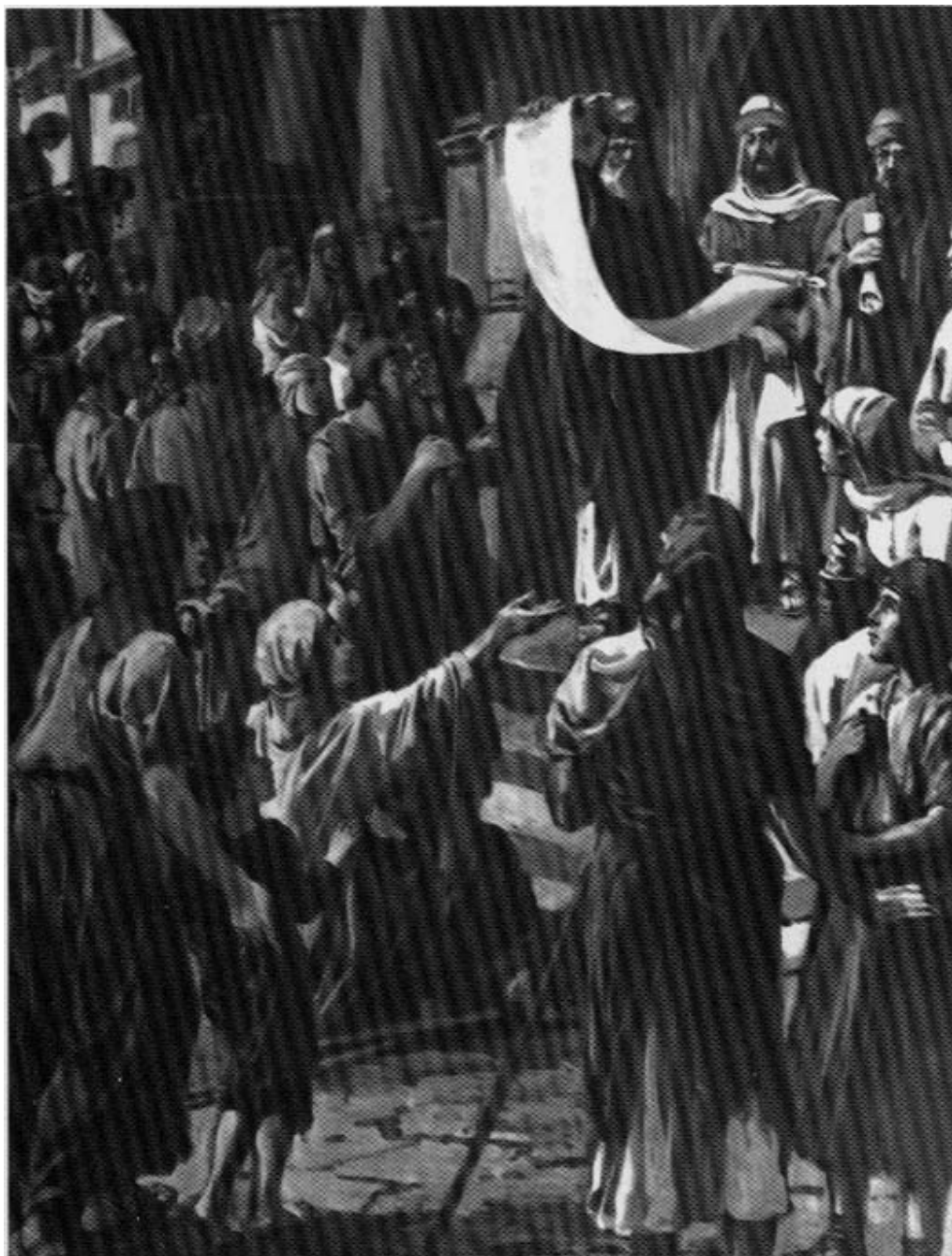
ヨシヤパテは三十五歳で即位したが、それまで彼の前には、善良な王アサの模範があった。アサは彼の当面した大抵の危機において「主の目にかなう事をし」たのである（列王紀上二五ノ一）。ヨシヤパテは二十五年の栄えた治世において「父アサのすべての道に歩み、それを離れ」なかった（同二二ノ四三上句）。

ヨシヤパテは賢明に国を統治することに励み、偶像礼拝の風習に対して断固とした態度をとるように国民に説いた。王国内の多くの人々は、「なお高き所で犠牲をささげ、香をたいた」（同二二ノ四三下句）。王はこれらの聖堂を直ちに破壊してしまわなかった。しかし彼は最初から、アハブの治世においてはなはだしかった北王国の罪からユダ王国を守ろうと努めた。彼はアハブとは永年同時代に生きた王であった。ヨシヤパテは彼自身、神に対して忠誠であった。彼は「バアルに求めず、その父の神に求めて、その戒めに歩み、イスラエルの行いにならわなかった」。主は彼が誠実であつたために彼とともにあられて、「国を彼の手に堅く立てられ」た（歴代志下七ノ三一五）。

「ユダの人々は皆ヨシャパテに贈り物を持ってきた。彼は大きいなる富と誉とを得た。そこで彼は主の道に心を励まし」た。時の経過とともに改革が行われて、王は「高き所とアシラ像とをユダから除いた」（同一七ノ五、六）。「彼は父アサの世になお残っていた神殿男娼たちを国のうちから追い払った」（列王紀上二二ノ四六）。こうしてユダの住民は、彼らの霊的進歩を遅らせようとしていた多くの危険から徐々に解放されていったのである。

王国の全土において、人々は神の律法について教えを受ける必要があつた。彼らの安全はこの律法を理解することにかかつていた。その要求に人々の生活を合致させることによって、彼らは神と人間との両方に対して誠実になるのであつた。ヨシャパテはこの事を知っていたので、聖書に関する教育を十分に人々に与える方法を講じた。彼の王国の各地域を担当していたつかさたちは、教育の任に当たる祭司たちが忠実に人々を教える段取りをとるように指示を受けた。こうした教師たちは、王の任命のもとにつかさたちの直接の指導を受けて働き、「ユダの町々をことごとく巡回して、民の間に教をなした」（歴代志下一七ノ九）。そして多くの人々が、神の要求を理解することに努めて、罪を捨て去るに及んでリバイバルが起こつたのである。

ヨシャパテが王として繁栄したのは、彼が国民の霊的必要のために賢明な処置をとつたことに負うところが多かつたのである。神の律法に従ふことには大いなる利益がある。神の要求に従うときに改変の力が働いて、人々の間に平和と善意をもたらすのである。神のみ言葉の教えがすべての人々の生活の支配的影響力となり、心と思いとがその抑制力のもとにおかれるならば、今日、国家的また社会的な生活の中に存在している罪惡は消滅してしまふことであろう。各家庭からは人々に強い霊的洞察力と道德力を与える感化があふれ出て、国家も個人も優位に立つことであろう。



ヨシヤパテ王の命令を受けて、教師たちがユダ王国のすみずみまで行き、人々に律法を教えた。その結果、改革が行われた。

ヨシャパテは永年にわたって、周囲の国々の妨害を受けることなく平和に過ごした。「ユダの周囲の国々は皆主を恐れ」た(歴代志下一七ノ一〇)。彼はペリシテ人から金銭や贈り物を受けた。アラビヤ人からは多数の羊や山羊を受けとった。「こうしてヨシャパテはますます大になり、ユダに要害および倉の町を建て、…大勇士である軍人たちを持っていた。…このほかにまたユダ全国の堅固な町々に、王が駐在させた者があつた」(同一七ノ一二―一九)。彼は豊かな「富と誉」とに恵まれて、真理と義のために大いなる力をふるうことができたのである(同一八ノ一)。

ヨシャパテは王位についてから数年後の繁栄の絶頂において、息子ヨラムがアハブとイゼベルとの娘、アタリヤと結婚することを承諾した。この結婚によってユダとイスラエルの二国間に同盟が結ばれたが、これは神の指示によるものではなかった。それは危機が臨んだときに、王と多くの国民を不幸にしたのである。

ある時ヨシャパテは、サマリヤにいるイスラエルの王をたずねた。エルサレムの王は特別の優遇を受けた。そしてその訪問の終わりに当たって、彼はイスラエルの王と同盟してスリヤと戦うように説得された。アハブはユダの軍勢と自分の軍勢を連合させることによって、おかしな逃れの町の一つであるラモテを奪還しようと思った。彼はこの町は当然イスラエルに属するものであると主張したのである。

ヨシャパテは弱気になっていったとき、イスラエルの王と同盟を結んでスリヤと戦うことを軽率にも約束してしまった。しかし彼は思いかえして、この企てについて神のみこころをたずねることにした。ヨシャパテはアハブに、「まず主の言葉を求めなさい」と言った。アハブはそれに答えて、サマリヤの偽預言者四百人を集めて彼らに言った「われわれはラモテ・ギレアデに、戦いに行くべきか、あるいは控えるべきか。」彼らは言った、「上っ

て行きなさい。神はそれを王の手にわたされるでしょう」(歴代志下一八ノ四、五)。

ヨシャパテはそれに満足せず、神のみこころをはつきりと知りたいと思った。「ほかにわれわれが問うべき主の預言者はここにいませんか」と彼はたずねた(同一八ノ六)。アハブは答えて言った、「われわれが主に問うことのできる人が、まだひとりいます。イムラの子ミカヤです。彼はわたしについて良い事を預言せず、ただ悪い事だけを預言するので、わたしは彼を憎んでいます」(列王紀上二二ノ八)。ヨシャパテは神の人をぜひ呼んでもらいたいと願った。ミカヤは彼らの前に現れて、アハブから「主の名をもって、ただ真実のみを：告げる」ように命じられて言った。「わたしはイスラエルが皆、牧者のない羊のように、山に散っているのを見ました。すると主は『これらの者は飼主がいらない。彼らをそれぞれ安らかに、その家に帰らせよ』と言われました」(同一二ノ一六、一七)。

預言者の言葉は王たちに、彼らの計画が神のお喜びにならないものであることを示すのに十分なはずであったが、王たちはどちらも警告に耳を傾けようとしなかった。アハブはすでに自分の行動を決定していて、それを遂行する決意であった。ヨシャパテは「わたしはあなたと一緒に戦いに臨みましょう」と誓ったのであった(歴代志下一八ノ三)。彼はこうした約束をしたあとで、彼の軍勢を撤退させることを好まなかった。「こうしてイスラエルの王とユダの王ヨシャパテはラモテ・ギレアデに上っていった」(列王紀上二二ノ二九)。

続いて起こった戦闘の中で、アハブは矢に当たって、夕暮になって死んだ。「日の没するころ、軍勢の中に呼ばわる声がした、『めいめいその町へ、めいめいその国へ帰れ』」(同一二ノ三六)。こうして預言者の言葉は成就したのである。

ヨシャパテはこの悲惨な戦闘からエルサレムへ帰った。彼が都に近づく、預言者エヒウが彼を迎えて譴責した。「あなたは悪人を助け、主を憎む者を愛してよいのですか。それゆえ怒りが主の前から出て、あなたの上に臨みます。しかしあなたには、なお良い事もあります。あなたはアシラ像を国の中から除き、心を傾けて神を求められました」(歴代志下一九ノ二、三)。

ヨシャパテの治世の晩年は、主としてユダの国家的、靈的防衛の強化のために費やされた。彼は「また出て、ベエルシバからエフライムの山地まで民の中を巡り、先祖たちの神、主に彼らを導き返した」(同一九ノ四)。

王がとった重大な処置の一つは、有力な裁判所を設置してそれを維持することであった。「彼はまたユダの國中、すべての堅固な町ごとに裁判人を置いた。」そして、その任に当たった人々に彼は訴えた。「あなたがたは自分のする事に気をつけなさい。あなたがたは人のために裁判するのではなく、主のためにするのです。あなたがたが裁判する時には、主はあなたがたと共におられます。だからあなたがたは主を恐れ、慎んで行いなさい。われわれの神、主には不義がなく、人をかたより見ることなく、まいないを取ることもないからです」(同一九ノ五―七)。

裁判制度はエルサレムに控訴院を設けて完成された。ヨシャパテは「レビびと、祭司、およびイスラエルの氏族の長たちを選んでエルサレムに置き、主のために裁判を行い、争議の解決に当らせた」(同一九ノ八)。

王はこれらの裁判官たちに忠実であるように訓戒を与え、彼らに命じて言った。「あなたがたは主を恐れ、真実と真心とをもって行わなければならない。すべてその町々に住んでいるあなたがたの兄弟たちから、血を流した事または律法と戒め、定めとおきてなどの事について訴えてきたならば、彼らをさとして、主の前に罪を犯さ

せず、怒りがあなたがたと、あなたがたの兄弟たちに臨まないようにしなさい。そのようにすれば、あなたがたは罪を犯すことがないでしょう。見よ、祭司長アマリヤは、あなたがたの上にいて、主の事をすべてつかさどり、イシマエルの子、ユダの家のつかさぜバデヤは王の事をすべてつかさどり、またレビとはあなたがたの前にあって役人となります。雄々しく行動しなさい。主は正直な人と共におられます」(歴代志下一九ノ九―一一)。

ヨシヤパテは国民の権利と自由を大切に擁護するために、すべてを支配しておられる正義の神から人間家族のすべての者が受けている愛護を強調した。「神は神の会議のなかに立たれる。神は神々のなかで、さばきを行われる。」そして神のもとにあつて裁判官として任務を果たすように命じられた者は、「弱い者と、みなしごとを公平に扱い、苦しむ者と乏しい者の権利を擁護」し、「彼らを悪しき者の手から助け出」さなければならぬ(詩篇八二ノ一、三、四)。

ヨシヤパテの治世の晩年においてユダ王国は敵軍の侵略を受け、地の住民はそれの前にして震えおののいた。「モアブびと、アンモンびとおよびメウニびとらがヨシヤパテと戦おうと攻めてきた。」ひとりの使者がこの侵入の知らせを王に告げ、次のような驚くべき言葉を語った。「海のかなたのエドムから大軍があなたに攻めて来ます。見よ、彼らはハザゾン・タマル(すなわちエングデ)にいます」(歴代志下二〇ノ一、二)。

ヨシヤパテは勇猛果敢な人であつた。彼は永年にわたつて、軍隊と要害の町々を強化してきた。彼はどんな敵にも対応する準備が整っていた。しかし彼はこの危機において、肉の腕に頼らなかつた。彼は訓練された軍隊や城壁をめぐらした町々ではなくて、イスラエルの神に対する生きた信仰によって諸国民の前で、ユダを辱めようとして力を誇示するこれらの異教徒に勝とうと望んだのである。

「そこでヨシャパテは恐れ、主に顔を向けて助けを求め、ユダ全国に断食をふれさせた。それでユダはこぞって集まり、主の助けを求めた。すなわちユダのすべての町から人々が来て主を求めた」(同二〇ノ三、四)。

ヨシャパテは人々の前で、神殿の庭に立って心を注ぎ出して祈り、イスラエルの無力さを告白して神の約束を願い求めた。「われわれの先祖の神、主よ、あなたは天にいます神ではありませんか。異邦人のすべての国を治められるではありませんか。あなたの手には力があり、勢いがあって、あなたに逆らいうる者はありません。われわれの神よ、あなたはこの国の民をあなたの民イスラエルの前から追い払って、あなたの友アブラハムの子孫に、これを永遠に与えられたではありませんか。彼らはここに住み、あなたの名のためにここに聖所を建てて言いました。『つるぎ、審判、疫病、ききんなどの災がわれわれに臨む時、われわれはこの宮の前に立って、あなたの前にあり、その悩みの中であなたに呼びわります。すると、あなたは聞いて助けられます。』今アンモン、モアブ、およびセイル山の人々をごらんなさい。昔イスラエルがエジプトの国から出てきた時、あなたはイスラエルに彼らを侵すことをゆるさなかったで、イスラエルは彼らを離れて、滅ぼしませんでした。彼らがわれわれに報いるところをごらんください。彼らは来て、あなたがわれわれに賜ったあなたの領地からわれわれを追い払おうとしています。われわれの神よ、あなたは彼らをさばかれないのですか。われわれはどのように攻めて来る大軍に当る力がなく、またいかになすべきかを知りません。ただ、あなたを仰ぎ望むのみです」(同二〇ノ六―一二)。

ヨシャパテは確信をもって、「ただあなたを仰ぎ望むのみです」と言うことができた。彼はむかし神の選民を全滅から救うために度々介入された神に信頼するように、永年にわたって人々を教えてきた。そして今、王国が

危機にひんしたときに、ヨシャパテはただひとりで立ったのではなかった。「ユダの人々はその幼な子、その妻、および子供たちと共に皆主の前に立っていた」(歴代志下二〇ノ一三)。彼らは一つになって断食して祈った。彼らは一つになって、主が彼らの敵を混乱させ、主の名があがめられるように願い求めたのである。

「神よ、沈黙を守らないでください。」

神よ、何も言わずに、黙ってしないでください。

見よ、あなたの敵は騒ぎたち、

あなたを憎む者は頭をあげました。

彼らはあなたの民にむかつて

巧みなはかりごとをめぐらし、

あなたの保護される者にむかつて相ともに計ります。

彼らは言います。

『さあ、彼らを断ち滅ぼして国を立てさせず、

イスラエルの名を

ふたたび思い出させないようにしよう』。

彼らは心をひとつにして共にはかり、

あなたに逆らって契約を結びます。

すなわちエドムの天幕に住む者とイシマエルびと、

モアブとハガルびと

ゲバルとアンモンとアマレク、…

あなたがミデアンにされたように、

キシヨン川でシセラとヤビンにされたように、

彼らにしてください。…

彼らをとこしえに恥じ恐れさせ、

あわて惑って滅びうせさせてください。

主という名をおもちになるあなたのみ、

全地をしろしめすいと高き者であることを

彼らに知らせてください。」

(詩篇八三篇)

人々が王とともに、神の前にへりくだって神の助けを求めたときに、主の霊が「アサフの子孫であるレビびと」やハジエルに臨んだ。そして彼は言った。

「『ユダの人々、エルサレムの住民、およびヨシャパテ王よ、聞きなさい。主はあなたがたにこう仰せられる、
「この大軍のために恐れてはならない。おののいてはならない。これはあなたがたの戦いではなく、主の戦いだからである。あす、彼らの所へ攻め下りなさい。見よ、彼らはチツの坂から上って来る。あなたがたはエルエル

の野の東、谷の端でこれに会うであろう。この戦いには、あなたがたは戦うに及ばない。ユダおよびエルサレムよ、あなたがたは進み出て立ち、あなたがたと共におられる主の勝利を見なさい。恐れてはならない。おのいてはならない。あす、彼らの所に攻めて行きなさい。主はあなたがたと共におられるからである』。

ヨシヤパテは地にひれ伏した。ユダの人々およびエルサレムの民も主の前に伏して、主を拝した。その時コハテびとの子孫、およびコラびとの子孫であるレビびとが立ち上がり、大声をあげてイスラエルの神、主をさんびした。

彼らは朝早く起きてテコアの野に出て行った。その出て行くとき、ヨシヤパテは立って言った。『ユダの人々およびエルサレムの民よ、わたしに聞きなさい。あなたがたの神、主を信じなさい。そうすればあなたがたは堅く立つことができる。主の預言者を信じなさい。そうすればあなたがたは成功するでしょう』。彼はまた民と相談して人々を任命し、聖なる飾りを着けて軍勢の前に進ませ、主に向かって歌をうたい、かつさんびさせ^た（歴代志下二〇ノ一四―二一）。これらの歌う人々は軍勢の前に進んで、勝利の約束が与えられたことに対して神に賛美の声をあげたのである。

歌を歌って主を賛美し、イスラエルの神をあがめながら敵軍に向かっていくというのは、奇妙な方法であった。これは彼らの戦いの歌であった。彼らは聖なる飾りを身に着けていた。もしわれわれが、今もっと神を賛美するならば、希望と勇気と信仰が増しつづけることであろう。そしてこれは、今日真理を擁護して立っている勇敢な兵士たちを奮起させるのではなからうか。

「主は伏兵を設け、かのユダに攻めてきたアンモン、モアブ、セイル山の人々に向かわせられたので、彼らは

打ち敗られた。すなわちアンモンとモアブの人々は立ち上がって、セイル山の民に敵し、彼らを殺して全く滅ぼしたが、セイルの民を殺し尽すに及んで、彼らもおのおの互に助けて滅ぼしあった。

ユダの人々は野の物見やぐらへ行って、かの群衆を見たが、地に倒れた死体だけであって、ひとりものかれた者はなかった」(同二〇ノ二二―二四)。

神はこの危機においてユダの避け所であられたが、今日も神の民の避け所であられる。われわれはもろもろの君たちに頼ったり、人間を神の位置に立てたりしてはならないのである。われわれは、人間は倒れ、誤りを犯すものであること、全能の神がわれわれの力強い防御のとりであることを忘れてはならない。あらゆる危機において、戦いは神のものであると思わなければならない。神の資源は無限である。そしていかにも不可能と思われる事態は、それだけ勝利を大いなるものにするのである。

「われわれの救の神よ、われわれを救い、

もろもろの国民の中から

われわれを集めてお救いください。

そうすればあなたの聖なるみ名に感謝し、

あなたの誉を誇るでしょう。」

(歴代志上一六ノ三五)

ユダの軍勢は、多くの戦利品をたずさえて、「喜んでエルサレムに帰ってきた。主が彼らにその敵のことによ

って喜びを与えられたからである。すなわち彼らは立琴、琴およびラツパをもってエルサレムの主の宮に来た」（歴代志下二〇ノ二七、二八）。彼らには大いに喜ぶわけがあった。「あなたがたは進み出て立ち、…主の勝利を見なさい。恐れてはならない。おののいてはならない」という命令に従って、彼らは全く神に信頼したのであった（同二〇ノ一七）。そして神は彼らの城となり、彼らを救う者となられたのである。今彼らは、ダビデの靈感によって書かれた賛美の歌を理解しながら歌うことができたのである。

「神はわれらの避け所また力である。

悩める時のいと近き助けである。…

主は…弓を折り、やりを断ち、戦車を火で焼かれる。

『静まって、わたしこそ神であることを知れ。

わたしはもろもろの国民のうちにあがめられ、

全地にあがめられる』。

万軍の主はわれらと共にあられる、

ヤコブの神はわれらの避け所である。」

（詩篇四六篇）

「神よ、あなたの誉は、あなたのみ名のように、

地のはてにまで及びます。

あなたの右の手は勝利で満ちています。

あなたのさばきのゆえに、

シオンの山を喜ばせ、ユダの娘を楽しませてください。…

これこそ神であり、

世々かぎりなくわれらの神であって、

とこしえにわれらを導かれるであらう。」

(詩篇四八ノ一〇―一四)

ユダの王と彼の軍勢の信仰によって、「もろもろの国の民は主がイスラエルの敵と戦われたことを聞いて神を恐れた。こうして神が四方に安息を賜ったので、ヨシャパテの国は穩やかであつた」(歴代志下二〇ノ二九、三〇)。

第十六章 アハブ家の没落

本章は列王紀上二二章、列王紀下二章に基づく

イゼベルが最初にアハブに及ぼした悪影響は、彼の生涯の後年にも続き、聖書歴史において、その類を見ない恥ずべき行為と暴力行為となってあらわれた。「アハブのように主の目の前に悪を行うことに身をゆだねた者はなかった。その妻イゼベルが彼をそのかしたのである」(列王紀上二二ノ二五)。

アハブは生まれながら強欲な性質であつたので、イゼベルの悪行に勢いと支持を得て、彼の邪悪な心の欲するままにふるまい、ついに、彼は利己心の支配下に完全に陥つてしまった。彼は自分の欲求が拒まれるのに耐えられなかった。彼は、欲しいと思つたものは当然自分のものにする権利があると考えた。

彼のこうした顕著な性質は、アハブの王位を継いだ王たちの時代に、王国の運命に悲劇的影響を及ぼすことになるのであつたが、それは、エリヤが、まだ、イスラエルの預言者であつたときに起こつた出来事にあらわされている。王の宮殿のかたわらに、エズレルびとナボテに属するぶどう畑があつた。アハブはこのぶどう畑を手に入れたと思つた。そして、それを買うか、それとも、それを他の土地と取りかえようと申し出た。「あなたの

ぶどう畑はわたしの家の近くにあるので、わたしに譲って青物畑にさせてください。その代り、わたしはそれよりも良いぶどう畑をあなたにあげましょう。もしお望みならば、その価を金でさしあげましょう」とアハブはナボテに言った(同二二ノ二)。

ナボテは、彼のぶどう畑が先祖からのものであったので、それを高く評価し、手放すことを拒否した。「わたしは先祖の嗣業をあなたに譲ることを断じていたしません」と彼はアハブに言った(同二二ノ三)。レビ記の律法によれば、どんな土地も永久に売却したりまたは取り替えたりしてはならなかった。イスラエルの民のすべての者は、「おのおのその父祖の部族の嗣業をかたく保つべきだからである」(民数記三六ノ七)。

ナボテの拒否は利己的な王の心を害した。「アハブはエズレルびとナボテが言った言葉を聞いて、悲しみ、かつ怒って家にはいった。…アハブは床に伏し、顔をそむけて食事をしなかった」(列王紀上二二ノ四)。

イゼベルは、やがて、事件の詳細を聞いて、王の要求を拒む者があることを怒り、アハブにもう悲しむ必要はないと言った。「あなたが今イスラエルを治めているのですか。起きて食事をし、元気を出してください。わたしがエズレルびとナボテのぶどう畑をあなたにあげます」と彼女は言った(同二二ノ七)。

アハブは彼の妻がどんな方法でほしい物を手に入れようが気にしなかった。イゼベルは直ちに彼女の邪悪な策略を実行に移した。イゼベルは王の名で手紙を書き、彼の印を押して、それをナボテが住んでいる町の長老たちと身分の尊い人々に送って言った。「断食を布告して、ナボテを民のうちの高い所にすわらせ、またふたりのよこしまな者を彼の前にすわらせ、そして彼を訴えて、『あなたは神と王とをのろった』と言わせなさい。こうして彼を引き出し、石で撃ち殺しなさい」(同二二ノ九、一〇)。

人々はこの命令に従った。「その町に住んでいる長老たちおよび身分の尊い人々は、イゼベルが言いつかわしたようにした。彼女が彼らに送った手紙に書きしるされていたように」した(列王紀上二一ノ一一)。すると、イゼベルは王のところに行つて、彼に立つてぶどう畑を取るように言った。アハブはその結果がどうなるかも考えずに、盲目的に彼女の勧告に従い、ほしくてたまらない地所を取るために出かけて行つた。

王は欺瞞と流血によつて得たものを、なんの譴責も受けることなく、楽しむことは許されなかった。「主の言葉がテシベびとエリヤに臨んだ、『立つて、下つて行き、サマリヤにいるイスラエルの王アハブに会いなさい。彼はナボテのぶどう畑を取ろうとしてそこへ下っている。あなたは彼に言わなければならない、「主はこう仰せられる、あなたは殺したのか、また取つたのか」と』(同二一ノ一七一九)。そして、主はアハブに恐るべき刑罰の宣告をすることをエリヤに命じられたのである。

預言者は神の命令を実行するために急いだ。罪深い王はぶどう畑で主の厳しい使者に面と向かつて出会い、驚き恐れて、「わが敵よ、ついに、わたしを見つけたのか」と言った(同二一ノ二〇上句)。

主の使者はためらうことなく、「見つけました。あなたが主の目の前に悪を行うことに身をゆだねたゆえ、わたしはあなたに災を下し、あなたを全く滅ぼす」と言った(同二一ノ二〇下句―二一)。あわれみの情は何ひとつ示されなかった。アハブの家は、「ネバテの子ヤラバアムの家のようにし、アヒヤの子バアシャの家のように」全く滅ぼされるのであった。主はそのしもべによつて、「これはあなたがわたしを怒らせた怒りのゆえ、またイスラエルに罪を犯させたゆえ」であると言われた(同二一ノ二二)。

そして、主はイゼベルについては、「犬がエズレルの地域でイゼベルを食うであろう」。「アハブに属する者は、

町で死ぬ者を犬が食い、野で死ぬ者を空の鳥が食う」であろうと言われた(同二一ノ二三)。

王はこの恐るべき言葉を聞いたときに、「衣を裂き、荒布を身にまとい、食を断ち、荒布に伏し、打ちしおれて歩いた。

この時、主の言葉がテシベびとエリヤに臨んだ、『アハブがわたしの前にへりくだっているのを見たか。彼がわたしの前にへりくだっているゆえ、わたしは彼の世には災を下さない。その子の世に災をその家に下すであろう』(同二一ノ二七―二九)。

その後三年足らずで、アハブ王はスリヤびとの手にかかって死んだ。彼に続いて王になったアハジヤは、「主の目の前に悪を行い、その父の道と、その母の道、および：ヤラバアムの道に歩み、バアルに仕えて、それを拝み、イスラエルの神、主を怒らせた。すべて彼の父がしたとおりであった」(同二一ノ五二、五三)。しかし、刑罰は神にそむいた王の罪にすぐ続いて起こった。モアブとの悲惨な戦いと彼自身の生命を脅かした事故は、神の怒りが彼に注がれているしるしであった。

アハジヤは、「高殿のらんかんから落ちて」ひどいけがをした。そして、その結果が心配だったので、回復するかどうかを尋ねるために、エクロンのバアル・ゼブブに彼のしもべたちの幾人かをつかわした。エクロンの神はその祭司たちによって、将来の出来事を告げるものと思われていた。多くの人々がそれを聞くために出かけた。しかし、そこで語られた預言や与えられた知識は、暗黒の君から出たものであった。

アハジヤのしもべたちは神の人に会った。彼は王のところに帰って次のように言うように命じた、『あなたがたがエクロンの神バアル・ゼブブに尋ねようとして行くのは、イスラエルに神がないためか』。それゆえ主はこう

仰せられる、『あなたは、登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであろう』（列王紀下一ノ四）。預言者は、こう言つて、去つていった。

驚いたしもべたちは、急いで王のところへ帰り、神の人の言葉を彼に伝えた。王は、「どんな人であつたか」とたずねた。彼らは、「その人は毛ごろもを着て、腰に皮の帯を締めていました」と答えた。アハジヤは、「その人はテシベびとエリヤだ」と叫んだ（同一ノ七、八）。彼はもし彼のしもべたちが会つた見知らぬ人がエリヤであつたならば、語られた宣告の言葉は必ずそのとおりになることを知っていた。彼はできることならば差し迫つた刑罰を避けようとして、預言者を呼びに使者をつかわした。

アハジヤは二度も預言者をおどすために兵隊たちをつかわしたが、二度とも彼らの上に神の刑罰が下つた。第三番目の兵隊たちは神の前に心を低くした。その隊長は、主の使者に近づいて、「エリヤの前にひざまずき、彼に願つて言つた、『神の人よ、どうぞ、わたしの命と、あなたのしもべであるこの五十人の命をあなたの目に尊いものとみなしてください』（同一ノ一三）。

「その時、主の使はエリヤに言つた、『彼と共に下りなさい。彼を恐れてはならない』。そこでエリヤは立つて、彼と共に下り、王のもとへ行つて、王に言つた、『主はこう仰せられます、「あなたはエクロンの神バル・ゼブに尋ねようと使者をつかわしたが、それはイスラエルに、その言葉を求むべき神がないためであるか。それゆえあなたは、登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであろう』（同一ノ一五、一六）。

アハジヤは彼の父の治世の間、至高者であられる神の驚くべきみわざを目撃したのであつた。彼は、守るべき神の律法の要求を無視する人々を神がどう扱われるかという恐るべき証拠が、背信したイスラエルに示されたの



使者がアハジヤ王に預言者エリシャのことばを伝えた。この病気の王に対する神の使信は「あなたは必ず死ぬ」であった。

を見た。アハジヤは、こうした恐るべき現実があたかも愚かな話であるかのように行動した。彼は主の前に彼の心を低くするかわりに、バアルに従い、ついに、この最も大胆な不信行為に走ってしまったのである。反逆的で悔い改めようとしなかったアハジヤは、「エリヤが言った主の言葉のとおりに死んだ」(列王紀下一ノ一七上句)。アハジヤ王の罪とその刑罰の物語は、だれでも律法を無視するならば、必ず罰を受けるという警告である。今日、人々は異教の神々をあがめてはいないであろうが、幾千という人々が、イスラエルの王が行ったのと全く同じようにサタンの神殿で礼拝している。今日は、科学と教育が進歩したにもかかわらず、アハジヤがエクロンの神を求めた時代よりもっと洗練され、魅力的な形態をとって、偶像礼拝が盛んに世界で行われている。日ごとに、預言の確かな言葉に対する信仰が薄れ行く悲しむべき徴候が増し加わり、それにかわって、迷信とサタンの魔力が多くの人々の心を捕らえている。

今日、異教礼拝の神秘的儀式にかわって、秘密結社、降神術の集会、心霊術の霊媒などの薄暗さと不可解さがある。神のみ言葉、または、聖霊による光を拒否する幾千という人々が、これらの霊媒の言うことを熱心に受けいれている。心霊術の信者たちは、古代の魔術を軽蔑して語るであろうが、大欺瞞者は、彼らが別の形の彼の策略に陥るのを、勝ち誇って喜ぶのである。

心霊術の霊媒の勧告を求めることを嫌悪する多くの人々が、さらに好ましい形態の心霊術に心をひかれているのである。他の人々は、クリスチャンサイエンスの教えや、神知学の神秘主義や、その他東洋の宗教にまどわされている。

ほとんどすべての種類の心霊術の主唱者たちは、いやしの力を持っていると主張する。彼らは、この能力を電

気、磁気の力、いわゆる「共感治療」または、人間の心の中にある潜在力によるものであると言っている。このキリスト教時代にあつてさえ、生きた神の力と資格をもった医師の技術に信頼せず、こうした治療者のところへ行く人が多くある。子供の病床で見守っている母親は、「もうわたしにはこれ以上何もできない。わたしの子供を治して下さる力を持った医師はないものだろうか」と叫ぶ。彼女は、千里眼的磁気治療者が驚くべきいやしを行っている聞いて、彼女の愛する子供を彼にゆだねるのであるが、これは、正しく彼女のかたわらに立っているも同然のサタンにゆだねることである。多くの場合、子供の将来はサタンの力に支配されて、それからぬけ出ることは、ほとんど不可能になるのである。

神がアハジヤの不信仰に対してお怒りになるには理由があつた。神はイスラエルの人々の心を捕らえ、彼らに神に対する確信を抱かせるために、なさらなかつた事が何かあつただろうか。神は、長年にわたつて、神の民に、ほかのだれにも示されなかつた寛容と愛をあらわされた。神は、最初から、ご自分が「世の人を喜」ばれることをお示しになつた(箴言八ノ三二)。神は心から神を求めるすべての者にとつて、いと近き助けであられた。それにもかかわらず、イスラエルの王は神をすてて、神の民の最悪の敵の助けを求め、天の神よりは異教徒の偶像の方を信頼していることを、彼らに宣言したのである。それと同様に、人々が力と知恵の源泉であられる神を離れて、暗黒の君の援助や勧告を求めるときに、神のみ栄えを汚すのである。もし神がアハジヤの行為をお怒りになつたとするならば、もっと大きな光を持った者が、同様の道を歩くことを選ぶならば、神はそのような人々を、どのようにごらんになることであろう。

サタンの魔術に身をゆだねたものは、大きな利益にあづかつたと誇ることであろう。しかし、それが、賢明で

安全な道であることの証明であろうか。生命が延ばされたならどうなるだろうか。物質的利益が与えられたらどうなるだろうか。それは、最後に、神のみこころを無視したことの埋め合わせになるだろうか。一見、利益と見えたことは、みな、最後に取りかえしのつかない損失となるのである。神がサタンの力から神の民を守るために設けられた防壁を一つでも破壊するならば、必ず罰を受けるのである。

アハジヤには息子がなかったので、彼の兄弟のヨラムが彼の後を継ぎ、十部族を十二年間治めた。その期間を通じて、彼の母のイゼベルがなお生きていて、国家の政治に悪い影響を及ぼした。国民の多くは、まだ、偶像的習慣を行っていた。ヨラムは、「主の目の前に悪をおこなったが、その父母のようではなかった。彼がその父の造ったバアルの石柱を除いたからである。しかし彼はイスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの罪につき従って、それを離れなかった」(列王紀下三ノ二、三)。

ヨラムがイスラエルを治めていた時代に、ヨシヤパテは死んだ。そして、同じくヨラムというヨシヤパテの息子が、ユダの王位についた。しかし、アハブとイゼベルの間に生まれた娘と結婚していたので、ユダのヨラムはイスラエルの王と深い関係にあった。そして、その治世において、「彼はアハブの家がしたように」バアルに従った。「彼はまたユダの山地に高き所を造って、エルサレムの民に姦淫を行わせ、ユダを惑わした」(歴代志下二ノ一六、一一)。

ユダの王は彼の恐ろしい背信を、何の譴責も受けずに続けることは許されなかった。預言者エリヤは、まだ、天に移されていなかった。彼は、北王国を滅亡させたのと同じ道をユダ王国がたどっているのを見て、黙っていることができなかった。預言者は、ユダのヨラムに一通の手紙を送った。その中で、悪王ヨラムは次のような恐

ろしい言葉を読んだのである。

「あなたの先祖ダビデの神、主はこう仰せられる、『あなたは父ヨシヤパテの道に歩まず、またユダの王アサの道に歩まないで、イスラエルの王たちの道に歩み、ユダとエルサレムの民に、かのアハブの家がイスラエルに姦淫を行わせたように、姦淫を行わせ、またあなたの父の家の者で、あなたにまさっているあなたの兄弟たちを殺したゆえ、主は大いなる災をもつてあなたの民と子供と妻たちと、すべての所有を撃たれる。あなたはまた…大病に』」なる(同二一ノ二二―一五)。

この預言の成就として、「主はヨラムに対してエチオピアびとの近くに住んでいるペリシテびととアラビヤびとの霊を振り起されたので、彼らはユダに攻め上って、これを侵し、王の家にある貨財をことごとく奪い去り、またヨラムの子供と妻たちをも奪い去ったので、末の子エホアハズ〔注・別名アハジヤまたはアザリヤ〕のほかには、ひとりも残った者がなかった。

このもろもろの事後、主は彼を撃って内臓にいえがたい病気を起させられた。時がたって、二年の終りになり、…重い病苦によって死んだ」。「その子アハジヤ〔注・別名エホアハズ〕が代って王となった」(同二一ノ一六―一九。列王紀下八ノ二四)。

アハブの息子、イスラエルの王ヨラムのおいアハジヤがユダの王になったとき、ヨラムはまだイスラエルを治めていた。アハジヤはわずか一年しか治めなかったが、その母アタリヤが「彼の相談相手となって悪を行わせ」た。彼は「アハブの家がしたように主の目の前に悪を行った」(歴代志下二一ノ三、四。列王紀下八ノ二七)。彼の母イゼベルはなお生きていた。そして、彼は彼のおじイスラエルの王ヨラムと大胆に同盟を結んだ。

ユダのアハジヤは間もなく悲劇的な死にかたをした。「その父が死んだ後」、アハブの家の残った者が彼の相談役になった(歴代志下二二ノ四)。アハジヤが、エズレルにいる彼のおじを訪問しているときに、預言者エリシャは神の靈感を受けて、ラモテ・ギレアドより預言者のともがらのひとりをつかわして、油を注いでエヒウをイスラエルの王とするように命じられた。その時、ユダとイスラエルの連合軍はラモテ・ギレアドでスリヤびとと戦っていた。ヨラムは戦いで傷つき、エズレルに帰り、エヒウに王の軍隊の指揮をゆだねていた。

エリシャの使者はエヒウに油を注いで「わたしはあなたに油を注いで主の民イスラエルの王とする」と言った。そして彼は、厳粛に、天からの特別の任命を彼に与えた。主は彼のしもべによって言われた。「あなたは主君アハブの家を撃ち滅ぼさなければならない。それによってわたしは、わたしのしもべである預言者たちの血と、主のすべてのしもべたちの血をイゼベルに報いる。アハブの全家は滅びるであろう」(列王紀下九ノ六―八)。

エヒウは軍隊によって王としての宣言を受けた後で、エズレルに急いで行き、そこで、故意に罪を犯し続け、また、他の者にも罪を犯させていた人々の処刑を始めた。イスラエルのヨラム、ユダのアハジヤ、そして、皇太后のイゼベルは、「アハブの家に属する者でエズレルに残っている者」、「またそのすべてのおもだった者、その親しい者およびその祭司たち」とともに殺された。サマリヤの近くのバアル礼拝の中心地に住んでいた「バアルのすべての預言者、すべての礼拝者、すべての祭司」は、つるぎをもって撃ち殺された。偶像は取り出されて、焼かれた。そして、バアルの宮は廃虚と化した。「このようにエヒウはイスラエルのうちからバアルを一掃した」

(列王紀下二〇ノ二一、一九、二八)。

こうして、いっせいに処刑が行われたことが、イゼベルの娘アタリヤに聞こえた。彼女はまだユダ王国に支配

的地位を占めていた。彼女が自分の息子のユダの王が死んだのを見て、「立ってユダの家の王子をことごとく滅ぼした」。この虐殺によって王位継承者であったダビデの子孫は、ひとりを除いて皆殺されてしまった。大祭司エホヤダの妻は、ヨアシという赤子を神殿の中に隠したのである。「アタリヤが国を治めた」間、この子は六年の間隠されていた(歴代志下二三ノ一〇、一二)。

その後、「レビびとおよびユダの人々は」(同二三ノ八)大祭司エホヤダとともに幼児ヨアシを王にして油を注ぐことに同意して、彼を彼らの王であると宣言した。「人々は手を打って『王万歳』と言った」(列王紀下一ノ一二)。

「アタリヤは民の走りながら王をほめる声を聞いたので、主の宮に入り、民の所へ行つた」(歴代志下二三ノ一二)。「見ると、王は慣例にしたがって柱のかたわらに立ち、王のかたわらには大将たちとラツパ手たちが立ち、また国の民は皆喜んでラツパを吹いていた」。

「アタリヤはその衣を裂いて、『反逆です、反逆です』と叫んだ」(列王紀下一ノ一四)。しかし、エホヤダは、アタリヤと彼女に従うすべての者を捕らえて、宮から刑場に引き出して、そこで彼らを殺すことを命じた。

こうして、アハブの家の最後に残った者が滅びうせた。彼がイゼベルと結んで及ぼした恐るべき悪影響は、彼の最後の子孫が滅ぼされるまで続いた。真の神の礼拝が、正式に廃されたことのなかったユダ王国においてさえ、アタリヤは多くの者を欺いたのである。悔い改めることをしなかった女王の処刑後、「国の民は皆バアルの宮に行つて、これをこわし、その祭壇とその像を打ち碎き、バアルの祭司マッタンをその祭壇の前で殺した」(同一ノ一八)。

それに続いた改革が起こった。ヨアシを王であると宣言した人々は、厳粛に、彼らが「主の民となるとの契約を結んだ」。ユダ王国からは、イゼベルの娘の悪影響が除去され、バアルの祭司たちは殺され、その宮は焼かれたのであるから、「国の民は皆喜んだ。町は…穏やかであった」(歴代志下二三ノ一六、二一)。

第十七章 預言者エリシャの召し

神はエリヤに、もうひとりの人に油を注ぎ彼のかわりに預言者とするように、お命じになった。神は言われた、「シヤパテの子エリシャに油を注いで、あなたに代って預言者としなさい」(列王紀上一九ノ一六)。エリヤはこの命令に従ってエリシャをさがしに行った。彼が北に向かって旅をしていくと、景色はついさきほどまでとはなると変わったことであろう。その時は三年半の間、露も雨も降らなかったで、地は乾き、農地は耕されていなかった。ところが今は、どちらを向いても青々としていて、かんばつと飢饉の時を取り返そうとしているかのようであった。

エリシャの父は富裕な農夫であった。そして彼の家族はほとんどすべてのものが背信している時にも、バアルにひざをかがめなかった人々であった。彼らの家では神をあがめ、昔ながらのイスラエルの信仰に忠誠をつくすことが、毎日の生活の規律であった。このような環境の中で、エリシャはその幼少時代を過ごしたのである。彼は静かな田舎の生活の中で、神と自然の教えと有用な働きの鍛練を受け、単純な習慣を養って両親と神に服従す

ることを学んだ。これが後に彼が占める高い地位に彼をふさわしくする助けとなったのである。

預言者への召しがエリシヤに与えられたのは、彼が父のしもべたちと畑を耕していたときであった。彼は自分の最も手近にある仕事をしていた。彼は人々の間で指導者となる能力もあれば、また常に快く仕える謙遜な気持ちも兼ね備えていた。彼は静かで温和な性質であつたけれども、精力的で着実な精神も持ち合わせていた。彼は高潔忠実で、神に対する愛と畏敬の念を持っていた。そして、日常生活のいやしい仕事の中で、確固とした目的と気高い品性を養い、常に恵みと知識を増し加えていった。彼は家庭における務めを果たして、父親と力を合わせているうちに、神とともに働くことを学んでいたのである。

エリシヤは小事を忠実に行うことによつて、より重い信任を受ける準備をしていた。彼は毎日、実際の経験を通して、より広くより高貴な働きに適したものとなつていった。彼は奉仕することを学んだ。そして彼はこれら学びながら、いかに教え導くかをも学んだのである。これはすべての者が学ばなければならない教訓である。神はどのような目的をもつて、われわれに訓練をお与えになるのかはだれにもわからない。しかし、小事に忠実であることがより大きな責任を負わせられるのにふさわしい証拠であることは、だれにも明白である。人生の行爲は、すべて、品性をあらわす。そして、小事を忠実に行い、「恥じるところのない鍊達した働き人」となる者だけが、より大いなる働きをゆだねられて、神の榮譽を受けることができるのである（テモテ第二・二二―二五）。

小さな務めをどのように行おうと重大なことではないと感じる者は、さらに榮譽ある地位につくのには不適任であることを証明しているのである。その人は大きな任務を果たす力が自分に十分あると考えることであらうが、神は表面よりさらに深いところを知らんになる。

試めされ吟味された上で、「あなたがはかりで量られて、その量の足りないことがあらわれた」という宣告が、彼に対して書かれるのである。彼の不忠実は彼自身に返ってくる。彼は何一つ保留することのない服従によって与えられる恵みと能力と品性の力とを受け損じるのである。

何か直接宗教的な働きに携わっていないという理由で、自分たちの生涯はなんの役にも立たず、神の国の進展のために何もしていないと感じる者が多い。もし彼らが何か偉大なことをすることができれば、どんなに喜んでそれをするであろう。しかし、彼らはただ小さい事しかできないから、何もしないでいてよいと考える。これは誤りである。人は、伐採、開墾、耕作などの日常の普通の仕事をしていながら、神のために活発な奉仕に携わることができるのである。子供をキリストのために訓練する母親は、講壇に立つ牧師と同様の働きを神のためにしているのである。

もし行えば、人生を香ばしいものにする身近の義務を見過ごしにしていながら、何か驚くべき働きをする特別の才能を待望している者が多い。そのような人々は、彼らのすぐ手近にある義務を行うとよいのである。成功は才能ではなくてむしろ、活動力と快く事に当たる精神によるのである。われわれが神に喜ばれる奉仕ができるのは、りっぱな才能を持っているからではなくて、日ごとの務めを良心的に果たし、満足感を持ち、素朴さを失わずに、心から他の人々の幸福を願うことにあるのである。どんなに卑しいと思われる境遇においても真の美徳を見出すことができる。愛のこもった忠実さをもって行われるごく平凡な務めが、神の目に麗しいのである。

エリヤは神の指導のもとに後継者を求めながら、エリシャが働いていた畑を通り過ぎ、青年の肩に献身の外套をかけた。シャパテの家族は、飢饉の間に、エリヤの働きと任務とをよく知るようになった。そして、今、神の

霊は預言者の行動が何であるかを、エリシャの心に印象づけたのである。彼にとって、これは、神が彼をエリヤの後継者として召されたしるしであった。

「エリシャは牛を捨て、エリヤのあとに走ってきて言った、『わたしの父母に口づけさせてください。そして後あなたに従いましょう』。エリヤは彼に言った、『行つてきなさい。わたしはあなたに何をしましたか』」（列王紀上一九ノ二〇）。これは拒絶ではなくて、信仰の試練であった。エリシャは事前によく状況を見きわめて、召しを受けるか拒絶するかを自分で決定しなければならなかった。もしも彼が家庭とその利益とに執着することを望むならば、家庭にとどまることも彼の自由であった。しかし、エリシャは召しの意味を理解した。彼は召しが神から出たものであることを知り、それに従うことをちゅうちよしなかった。彼はどんな世俗的利益のためであるうとも、神の使命者となる機会を見逃したり、または、神のしもべと交わる特権を犠牲にしたりしなくなかったのである。エリシャは、「ひとくびきの牛を取つて殺し、牛のくびきを燃やしてその肉を煮、それを民に与えて食べさせ、立つて行つてエリヤに従い、彼に仕えた」（同一九ノ二一）。彼はちゅうちよしすることなく、彼を愛した家庭を去つて、預言者の不安定な生活につき従つていった。

もしエリシャが彼に何が期待されているか、彼の仕事は何であるかをエリヤに聞いたならば、彼は次のような答えが与えられたことであろう。神は知っておられる。神があなたに知らせてくださるであろう。あなたが神にあたずねするならば、神はあなたのすべての質問に答えてくださることであろう。もし神があなたを召されたという証拠があれば、わたしと一緒に来たらよいだろう。わたしの背後には神があられること、そして、あなたの聞いているのは、神の声であることをよく悟りなさい。もし、あなたが、神に喜ばれるために、すべてのものを

全く無価値なものと思うことができるならば、来なさい。

キリストは、「永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか」とたずねた若いつかさに対して、エリシャに与えられたのと同様の召しを与えられた。「もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになる。そして、わたしに従ってきなさい」(マタイ一九ノ一六、一一)。

エリシャは後に残した楽しみと慰めとを振り返ろうともせず、奉仕への召しを受け入れたのである。若いつかさは救い主の言葉を聞いて、「悲しみながら立ち去った。たくさん資産を持っていたからである」(同一九ノ二二)。彼は犠牲を払おうとしなかった。彼の財産に対する愛着は、神に対する愛よりも大きかったのである。彼はキリストのためにすべてを放棄することを拒むことによって、自分自身が主の奉仕をする価値のないことを証明したのである。

奉仕の祭壇にすべてを献げるようにという召しは、すべての者に与えられる。われわれすべてのものは、エリシャのように奉仕することも、また、持っているものを皆売るようにも求められてはいない。しかし、神は、われわれが神への奉仕をわれわれの生活の第一のものとし、この地上において、神の働きを進展させるために、一日に何かを必ず行うことを求めておられるのである。神はわれわれがみな同じ種類の働きをすることを期待しておられない。外国で働くように召される者もあれば、福音の事業を支えるために、財産を献げるように求められる者もある。神は各自の献げ物をお受けになる。必要なのは生涯とそのすべての影響力とを献げることである。このような献身をする者は、天の神の召しを聞いて、従うのである。

神の恵みにあずかる者となったすべての者に、神は他の人々のためになすべき働きをお命じになる。各自はそれぞれの立場において、「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」と言わなければならない。み言葉を伝える牧師、または医師、商人、農夫、専門職、技師であっても、人はみな責任が負わせられている。自分が救われた福音を他の人々に伝えることがその人の務めである。どのような仕事に従事していても、それはこの目的のための手段でなければならないのである。

最初、エリシヤに要求されたのは、大きな仕事ではなかった。普通一般の務めが、なお、彼の訓練を構成する要素であつた。彼はその師、エリヤの手に水を注いだと言われている。彼は主がお命じになることを何でも喜んで行つた。そして、そのたびに、彼は謙遜と奉仕の教訓を学んだ。彼は、預言者の個人的な付き添いとして、小事を忠実に行つた。それとともに、彼は、日ごとに強い信念をもって、神が彼に命じられた任務に専心した。

エリシヤは、エリヤに従つてから後の生涯において、誘惑を受けなかったわけではなかった。彼は多くの試練を受けた。しかし、その危急の時に、彼はいつも神によりたのんだ。あとに残した家庭のことを考えるように誘惑されたが、彼はこの誘惑に心を留めなかった。彼は手をすきにつけてから、後ろを見るまいと決心した。そして、さまざまな試練を経て、ゆだねられた任務に忠実であることを示した。

伝道の仕事はみ言葉の説教よりもはるかに多くの事を含んでいる。それはエリヤがエリシヤを訓練したように、青年たちを一般の職業から召し出して、まず初めは小さな責任を負わせ、彼らが力と経験を得るに従つて大きな責任を負わせるというふうにして、神の働きにおいて、責任を負うように訓練することである。伝道の働きには、信仰と祈りの人、「初めからあつたもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手でさわつたもの、

すなわち、いのちの言について――、…すなわち、わたしたちが見たものを、聞いたものを、あなたがたにも告げ知らせる」と言うことができる人々がいる(ヨハネ第一・一ノ一―三)。若い未経験な働き人は、こうした経験のある神のしもべたちと実際に一緒に働いて、訓練を受けなければならない。こうして、彼らは重荷を負うことを学ぶのである。

若い働き人にこのような訓練を与える人々は、高貴な任務に携わっている。主ご自身が彼らの努力に協力なするのである。そして、献身の言葉が語りかけられ、熱心で敬神深い働き人と密接に交わる特権が与えられた青年たちは、この機会を最善に利用しなければならない。神は彼らを神のご用のために選び、彼らがその働きにさらに適した者になることができる場所に彼らを配置して、彼らに栄誉をお与えになった。そして、彼らは、謙遜、忠実、従順で、喜んで犠牲を払う精神をもたなければならない。もし彼らが神の訓練に従い、神の指令を実行し、神のしもべたちを彼らの助言者として選ぶならば、彼らは、正しく、高い原則に従った着実な人々となり、神から責任を負わせられるに足る人々となることができる。

福音が純粹に宣言されるとき、人々は農園から、また、人々の心の大半を占領している普通の実業から召し出されるのである。そして、彼らは経験のある人々とともに働いて教育を受ける。彼らは効果的に働くことを学ぶにつれて、真理を力強く宣言するようになる。最も驚くべき神の摂理の働きによって、困難の山が動かされて海の中に投げ入れられる。地の住民たちは、実に重大な使命を聞いて理解するのである。人々は真理が何であるかを知るようになる。働きはますます前進してついに全世界に警告が発せられ、それから終わりがくるのである。

エリシャが召されてから後、数年の間、エリヤとエリシャとはともに働き、若者は、日ごとに彼の働きに対す

る準備を深めた。エリヤははなはだしい罪惡をくつがえすための神の器であつた。アハブと異邦の女イゼベルの支持を受けて國民を欺いた偶像礼拝は、決定的打撃を受けた。バアルの預言者たちは殺された。イスラエルの民は、みな、非常に心を動かされ、多くの者は神の礼拝に立ち返つた。エリシヤはエリヤの後継者として、注意深く、忍耐強い教えによつて、イスラエルを安全な道に導くように努力しなければならなかつた。彼はモーセ以来の最大の預言者との交わりによつて、彼がやがてひとりでしななければならない働きの準備が与えられた。

こうして、彼らが一緒に働いていたときに、時々、エリヤは厳しい譴責をもつて惡名高い惡事に対処するために召された。惡王アハブがナボテのぶどう畑を手に入れたとき、アハブの運命と彼の家のすべての者の運命を預言したのはエリヤの声であつた。そして、父アハブの死後、アハジヤが生ける神を離れてエクロンの神バアル・ゼブブに従つたときに、もう一度、熱烈な抗議をしたのは、エリヤの声であつた。

サムエルが建設した預言者の学校は、イスラエルの背信の時代に衰微してしまつてゐた。エリヤはこつした学校を再建し、若い人々が律法を大いなるものとし、かつ光榮あるものとする教育を受けられるようにしたのである。これらの学校のうち、ギルガルとベテルとエリコにあつたものが記録に記されている。エリヤが天に携え上げられる直前に、エリヤとエリシヤは、これらの教育の中心地を訪問した。神の預言者は、以前に訪れたときに与えた教訓を、今、また繰り返した。特に、彼は天の神に対して彼らが、真心から忠誠をつくすという彼らの大いなる特權について教えた。彼はまた、彼らの教育のあらゆる面が、簡素を特徴とすべきであることの重要性を彼らの心に印象づけた。このようにして彼らは、初めて天の型を受け、主の道に従つて働くために出て行くことができたのである。



エリシヤはエリヤといっしょに行つた。二人がヨルダン川に来たとき、エリヤは外套を取り水を打った。すると水は左右に分かれた。

エリヤはこれらの学校が達成していることを見て励まされた。改革の働きはまだ完全ではなかった。しかし、彼は、「わたしはイスラエルのうちに七千人を残すであろう。皆バアルにひざをかがめ」ないという主の言葉が、全国において証明されるのを見ることができた(列王紀上一九ノ一八)。

エリヤが預言者エリヤに従って学校を巡回したときに、彼の信仰と決心とがもう一度試みられた。ギルガルまたベテルとエリコにおいても、預言者は、彼に引き返すように勧めるのであった。「どうぞ、ここにどまってください。主はわたしをエリコにつかわされるのですから」とエリヤは言った。しかし、若い時に畑をすきで耕したときに、エリヤは失望落胆してはならないことを学んでいた。そして今、別の方面の務めに手をつけているのであるから、彼はその目的からそれることを好まなかった。彼はさらに奉仕のための準備の機会がある限り、彼の主人から離れようとしなかった。エリヤにはわからなかったが、預言者の学校の彼の弟子たち、特にエリヤには、彼が生きながら天にあげられるという啓示が与えられていた。そこで、神の人のしもべは、試みられても彼のそばを離れなかった。引き返すようにというすすめが与えられるたびに、彼は「主は生きておられます。またあなたも生きておられます。わたしはあなたを離れません」と答えるのであった。

「そしてふたりは進んで行った。：彼らふたりは、ヨルダンのほとりに立つたが、エリヤは外套を取り、それを巻いて水を打つと、水が左右に分れたので、ふたりはかわいた土の上を渡ることができた。彼らが渡ったとき、エリヤはエリヤに言った、『わたしが取られて、あなたを離れる前に、あなたのしてほしい事を求めなさい』」。

エリヤは世的栄誉や地上の偉人たちの間の高い地位を求めなかった。彼が渴望したのは、今まさに天に移さ

れる栄誉にあずかるうとしているエリヤに豊かに注がれていた聖霊が豊かに与えられることであった。彼は、神が彼を召されたイスラエルにおける地位に彼を適したものにするのは、エリヤに宿っていた聖霊以外にないことを知っていた。そして彼は「どうぞ、あなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください」と願ったのである。

この要求に対してエリヤは言った、『あなたはむしろかしい事を求める。あなたがもし、わたしが取られて、あなたを離れるのを見るならば、そのようになるであろう。しかし見ないならば、そのようにはならない』。彼らが進みながら語っていた時、火の車と火の馬があらわれて、ふたりを隔てた。そしてエリヤはつむじ風に乗って天にのぼった」(列王紀下二ノ一一参照)。

エリヤは、キリストの再臨の時に地上に生きていて、死を味わうことなく「終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられ」る聖徒の典型である(コリント第一・一五ノ五一、五二)。キリストの地上の生涯の終わりが近づいたころ、変貌の山においてエリヤがモーセとともに救い主のかたわらに立つことを許されたのは、このようにして天にあげられる人々の代表としてであった。このように栄化された人々は、あがなわれた者の王国を代表するひな型であることを弟子たちは見たのである。彼らはイエスが天の光に包まれておられるのを見た。彼らは彼を神の子と認める声が「雲の中から」出るのを聞いた(ルカ九ノ三五)。彼らは、再臨の時に死からよみがえる人々を代表するモーセを見た。そこには、また、地上歴史の最後において、死ぬべき者が死なぬ者に変えられて、死を見ることなく天に移される人々を代表するエリヤが立っていたのである。

エリヤは砂漠の中で寂しさと失望のあまり、もはやじゅうぶんであると言い、彼の命がとられることを願ったのであった。しかし、主は彼をあわれんで、その言葉をお受けにならなかった。エリヤにはまだなすべき大きな

働きがあった。そして、その働きが終わったときに、彼は失望と孤独のうちに死んでしまうのではなかった。彼は墓に下るのではなくて、天使とともに神の栄光のみに昇っていくのであった。

「エリシヤはこれを見て『わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ』と叫んだが、再び彼を見なかった。そこでエリシヤは自分の着物をつかんで、それを二つに裂き、またエリヤの身から落ちた外套を取り上げ、帰ってきてヨルダンの岸に立った。そしてエリヤの身から落ちたその外套を取って水を打ち、『エリヤの神、主はどこにられますか』と言い、彼が水を打つと、水は左右に分れたので、エリシヤは渡った。エリコにいた預言者のともがらは彼の近づいて来るのを見て、『エリヤの霊がエリシヤの上にとどまっている』と言った。そして彼らは来て彼を迎え、その前に地に伏し」た(列王紀下二ノ二一―二五)。

主はみ摂理のうちに彼が知恵をお授けになった人々を、神の働きから取り除くことをよしとされる場合、もしもその後継者たちが、神の助けを仰ぎ望んで神の道に歩くならば、彼らを助け、力をお与えになるのである。彼らはその先輩たちよりも賢くさえるのである。なぜならば、彼らは先輩たちの経験から利益を得、その誤りから知恵を学ぶことができるからである。

その後、エリシヤはエリヤの代わりとなった。小事に忠実であった彼は、大事においても忠実であることを証明するのであった。

第十八章 悪水を良水にかえる

家長たちの時代に、ヨルダンの谷は「主の園のように：すみずみまでよく潤っていた」。ロトが彼の家庭を作るために選んだのは、この美しい谷であった。彼は「天幕をソドムに移した」（創世記二三ノ一〇、一二）。平原の町々が滅ぼされたときに、この地域一帯は不毛の荒地となり、それ以来、ユダの荒野の一部となった。

美しい谷間の一部分が残り、その生気を与える泉と小川とが人の心を喜ばせていた。イスラエルの軍勢はヨルダン川を渡ったあとで、穀類が豊かに実り、なつめやしや他の実のなる木々の林が茂っているこの谷に陣営を張り、約束の国の実を初めて食べたのであった。彼らの眼前に異教のとりで、カナンのあらゆる偶像礼拝の形態の中で最も汚れ墮落していたアシタロテの礼拝の中心地、エリコの城壁が立っていた。やがて、その城壁はくつがえされ、その住民は殺された。そして、その陥落の時に、全イスラエルの前で、厳粛な宣言がなされたのである。「おおよそ立って、このエリコの町を再建する人は、主の前にのろわれるであらう。その礎をすえる人は長子を失い、その門を建てる人は末の子を失うであらう」（ヨシユア記六ノ二六）。

五世紀が過ぎ去った。その場所は、神にのろわれ、荒れすたれていた。谷間のこの地域に住むことを楽しいものにした泉にさえ、のろいの暗い影がさした。しかし、アハブの時代にイゼベルの影響によってアシタロテの礼拝が復興し、建設者は恐ろしい代価を払わなければならなかったが、その礼拝の中心地、エリコが再建されたのである。ベテルびとヒエルは「エリコを建てた。彼はその基をすえる時に長子アビラムを失い、その門を立てる時に末の子セグブを失った。主がヌンの子ヨシユアによって言われた言葉のとおりである」(列王紀上一六ノ三四)。

エリコからほど遠くないところにある実り豊かな林の中に、預言者の学校の一つがあった。そして、エリシヤはエリヤの昇天後そこへ出かけた。彼がそこに滞在していたときに町の人々が預言者のところに来て言った。「見られるとおり、この町の場所は良いが水が悪いので、この地は流産を起すのです」。以前は、純粋で生命を与え、町とその回りの地域に、大いに水を供給していた泉が、今は、使用することができなくなっていた。

エリシヤはエリコの人々の願いに応じて「新しい皿に塩を盛って、わたしに持ってきなさい」と言った。彼はそれを受けとると、「水の源へ出て行って、塩をそこに投げ入れて言った、『主はこう仰せられる、わたしはこの水を良い水にした。もはやここには死も流産も起らないであろう』」(列王紀下二ノ一九―二二)。

エリコの水が良い水になったのは人間の知恵によるものではなくて、神の奇跡的介入によるものであった。町を再建した人々は神の恵みを受ける価値がなかった。しかし、「悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さる」神は、この際、このあわれみのしるしによって、イスラエルの霊的病を喜んでいやそうとしておられることを示されたのである(マタイ五ノ四五)。

それは永久的回復であった。「こうしてその水はエリシャの言ったとおりの良い水になって今日に至っている」(列王紀下二ノ一二)。泉の水は、時の移り変わりを越え流れつづけ、谷間のその地域を美しいオアシスにしたのである。

われわれは、水が良くなった物語から、多くの霊的教訓を学ぶことができる。新しい皿、塩、泉などは、みな大いに象徴的である。

エリシャは苦い水の源に塩を投げ入れることによって、数世紀後、救い主が「あなたがたは、地の塩である」と言って、弟子たちに教えられたのと同じ霊的教訓を教えたのである(マタイ五ノ一二)。汚染された泉に混ぜられた塩は、その水を清めて、これまで暗い影と死をもたらしていたところに、生命と祝福をもたらすようになった。神が神の民を塩にたとえられたのは、神が彼らに恵みをほどこされたのは、彼らが他の人々を救う器になるためであるという神のみこころを彼らに教えるためであった。神が全世界の前で一つの民を選ばれたということは、ただ彼らを神の息子、娘として受け入れるだけでなく、彼らによって世界が救いをもたらす恵みを受けるようになるためであった。神がアブラハムを選ばれた目的は、彼をただ神の特別の友とするだけではなく、彼を、主が国々に与えようと望まれた特別の特権の仲介者とするためであった。

世界は、真のキリスト教とは何であるかという証拠を必要としている。罪の害毒が社会の中心部をおしぼんでいる。都市も町々も、罪と道德的墮落に沈んでいる。世界は病氣と苦難と罪惡に満ちている。近くにも遠くにも、貧困と苦悩にあえぐ魂がいて、心は罪感到打ちひしがれて、救いの力も受けられずに滅んでいる。真理の福音は常に彼らの前におかれている。それにもかかわらず、彼らに対して、生命の香りとなるべき人々の模範が死の香

りとなっていたために、彼らは滅びるのである。彼らが泉となって、永遠の命に至る水がわきあがるべきであったのに、水の源が汚染されていたために、この人々は苦い水を飲むのである。

塩はそれを加えた物質とよく混ぜねばならない。保存するためには塩は浸透しなければならない。そのように人々に福音の救済の力が及ぶのは、個人的な接触と交わりによってである。人々は集団としてではなく、個人として救われるのである。個人的な感化には力がある。それは、キリストの感化とともに働き、キリストが高められるものを高め、正しい原則を人々に伝え、世界の腐敗の進行をとどめるべきである。それは、キリストだけが与えになることができる恵みを普及させなければならない。それは、熱心な信仰と愛を伴った純粋な模範の力によって、他の人々の生活と品性を高め、美化しなければならない。

主はエリコの汚染されていた泉に対して「わたしはこの水を良い水にした。もはやここには死も流産も起らないであろう」と言われた。汚染された水は神から離れた魂を代表している。罪は人を神から切り離すだけでなく、神を知ろうとする願いと能力とを人間の心の中からうせ去らせてしまう。罪によって、人間全体が変調をきたし、精神は邪悪になり、想像力は腐敗した。人間の機能も墮落した。純粋の宗教と心の清さが欠けている。悔い改めに導く神の力が品性を改変させるに至っていない。魂は弱い。そして、勝利しようとする道德力の欠けているために、魂は汚れ、墮落している。

清められた心にとってはすべてのものが変わっているのである。品性の改変が行われたことによって、その人の中にキリストが宿っておられることが、世界に向かって、証拠立てられたのである。神の霊が魂のうちに新しい生命を生じさせて、思いと願いとをキリストのみ心に従わせるのである。そして、内なる人は神のかたちに変

えられる。人々の罪をあがなう恵みの力は、欠陥の多い人間を、均斉のとれた実り豊かな者にすることができるといふことを、弱く、過ちにおちいり勝ちな男女が世界に示すのである。

神の言葉を受けいれる人は、蒸発してしまう水たまりや、大切な水を失ってしまうこわれた水ためのようなものではない。それは、つきない泉を源とする山間の流れのようなもので、岩間に飛び散って輝くその冷たい水は、疲れた人や、のどの渴いた人、重荷を負っている人々を活気づけるのである。それは絶え間なく流れる川のようなものである。そして、それは流れていくにつれて、ますます深く広くなって、ついにその生命を与える水は全地をおおうに至るのである。さざめき流れる小川はそのあとに緑と豊かな実りの賜物を残してくれる。岸辺はあざやかな緑に映え、樹木は深い緑を装い、草花は色とりどりに咲き誇る。焼けつくような暑さのもとで、地上の草木が枯死しようとしているとき、川の流れに沿って緑が一つの線をえがく。

神の真の子供もそれと同じである。キリスト教は、活気にみなぎった普遍的原則、生きた活動的霊的活力となつてあらわれる。真理と愛という天の影響に心が開かれるときに、これらの原則は、再び砂漠の中の川のように流れ始めて、今、不毛と飢饉に悩む地に、豊かな実りをもたらすのである。

聖書の真理の知識によつて洗い清められて、聖化された人々が、心から救霊の働きに従事するならば、彼らは、真にいのちからのちに至らせる香りとなるのである。そして、彼らが日ごとくに恵みと知識のつきない泉から飲むときに、彼らは自分たちの心が、主イエスの霊に満ちあふれるのに気づく。そして、彼らの無我の奉仕によつて、多くの者が肉体的に、知的に、霊的に祝福を受けるのを見るのである。疲れた者は力づけられ、病人はいやされて健康になり、罪の重荷を負っていた者は解き放たれるのである。はるか遠国における罪の奴隷から義の奉

仕へと立ち返った人々の唇から感謝の声があがるのである。

「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう」。神の言葉は、「園の泉、生ける水の井、またレバノンから流れ出る川である」（ルカ六ノ三八、雅歌四ノ一五）。

第十九章 平和をつくり出す人

本章は、列王紀下四章に基づく

エリシヤの働きは、ある点においては、エリヤの働きと非常に異なっていた。エリヤには断罪と審判の言葉がゆだねられた。彼の働きは恐れを知らぬ譴責の声となって、王と国民とに呼びかけて、彼らをその惡の道から立ち返らせることであつた。エリシヤの働きはもつと穏やかな任務であつた。彼の働きはエリヤが始めた働きを盛り立て強化し、人々に主の道を教えることであつた。靈感は彼が預言者のともがらに囲まれて、人々と個人的に接触し、彼の奇跡と教えとによつて、いやしと喜びをもたらしたことを描いている。

エリシヤは穏やかで、親切な心の持ち主であつた。しかし、彼がまた厳しい態度をとることができたことは、彼がベテルへ行く途中で、町から出て来た神を敬わない青年たちにあざけられたときにとつた行動によつて示されている。この青年たちはエリヤの昇天のことを聞いていた。そして、彼らはこの嚴肅な出来事をあざ笑つて、「はげ頭よ、のぼれ。はげ頭よ、のぼれ」と言った(列王紀下二ノ二三)。預言者は彼らの声を聞いてふり返つてみた。そして、全能者であられる神の靈感によつて、彼らをのろつた。続いて起こつた恐ろしい刑罰は神からの

ものであった。「すると林の中から二頭の雌ぐまが出てきて、その子供らのうち四十二人を裂いた」(列王紀下二ノ二四)。

もし、エリシャが、あざけりを見過ごしにしたならば、彼は引き続いて乱暴者たちにあざけり、ののしられて、厳粛な国家的危機における彼の教育と救済の任務が挫折するかもしれないのである。このただ一度の恐怖すべき厳格さのあらわれは、彼の一生を通じて人々の尊敬を勝ち得るのに十分な出来事であった。彼は五十年間にわたって、ベテルの門に出入りし、国内の至るところの町々を往き来し、怠惰で乱暴で、放蕩に身を持ちくずした若者たちの群れの間を通り過ぎた。しかし、だれひとりとして、彼をあざけり、または、彼が持つ至高者である神の預言者としての資格をさげすむ者はなかった。

親切さにも限度がなければならない。断固とした厳しさによって、権威を維持しなければならない。さもないと、権威は多くの者にあなごられ、軽蔑されることであろう。親や保護者たちが、青年に、いわゆる優しい態度を示し、なだめすかし、わがままなことをするままにさせておくことは、彼らにとって、これにまさる有害なものはないのである。どの家族にも断固とした態度と決断と積極的な要求が必要である。

エリシャをあざ笑った青年たちに欠けていた尊敬の念は、注意深く育てなければならない美德である。どの子供にも神に対する真の崇敬の念を教えなければならない。神の名を軽々しく、または、不注意に口にしている。天使たちはそれを語るときに、彼らの顔をおおうのである。われわれ墮落した罪深い人間は、どんな敬虔な態度をとってそれを口にすべきなのであろうか。

神の代表者、すなわち、神に代わって語り行動するように召された牧師、親、教師に対して、尊敬をあらわさ

なければならぬ。彼らに尊敬をあらわすことによって、神があがめられるのである。

礼儀もまた、御霊の結ぶ美德の一つであって、すべての者が養うべきものである。礼儀はともすれば激しく粗暴になり勝ちな性質をやわらかにする力がある。キリストの弟子であると言いながら、粗暴で、不親切で、礼儀に欠けているものは、まだイエスから学んでいないのである。彼らは疑いもなく誠実で、その高潔さについても疑念はないであろう。しかし、誠実と高潔とは、親切と礼儀の欠けていることのつぐないとはならない。

エリシャがイスラエルの多くの人々に強力な影響を及ぼすことができた親切な心は、シユネムに住んでいた家族との親しい交わりの物語に示されている。彼が全国をあちこちら旅行したときに、「ある日エリシャはシユネムへ行ったが、そこにひとりの裕福な婦人がいて、しきりに彼に食事をすすめたので、彼はそこを通るごとに、そこに寄って食事をした」。その家の主婦は、エリシャが「神の聖なる人」であることを認めて、彼女の夫に言った。「わたしたちは屋上に壁のある一つの小さいへやを造り、そこに寝台と机といすと燭台とを彼のために備えましょう。そうすれば彼がわたしたちの所に来るとき、そこに、はいることができます」。エリシャは、しばしば、この憩いの場に来て、その静かな平和を感謝した。神も彼女の親切な行為をお忘れにならなかった。彼女の家庭には子供がなかった。そして、今、主は彼女のもてなしに対して息子という賜物をお与えになったのである(同四ノ八一—〇)。

幾年かが過ぎ去った。子供は刈り入れびとと一緒に畑に出るくらいに大きくなった。ある日、子供は熱病にかかって「父におかたて『頭が、頭が』と言った」。父親は、子供を母親のところへ連れていくように命じた。「彼を背負って母のもとへ行くと、昼まで母のひざの上にすわっていたが、ついに死んだ。母は上がって行って、こ

れを神の人の寝台の上に置き、戸を閉じて出てきた」(列王紀下四ノ一九―二二)。

シユネムの女はこの嘆きのなかにあつて、エリシャの助けを求めに行く決心をした。そのとき、預言者はカルメル山にいた。そして、女はしもべを連れて直ちに出發した。「神の人は彼女の近づいてくるのを見て、しもべゲハジに言った、『向こうから、あのシユネムの女が来る。すぐ走って行って、彼女を迎えて言いなさい、「あなたは無事ですか。あなたの夫は無事ですか。あなたの子供は無事ですか』」。ゲハジは言われたとありにした。しかし、苦しんでいる母親は、エリシャのところに来るまでは彼女の悲しみの理由を明かさなかった。エリシャは彼女が息子を失ったことを聞いて、ゲハジに命じた、「腰をひきからげ、わたしのつえを手にとって行きなさい。だれに会っても、あいさつしてはならない。またあなたにあいさつする者があっても、それに答えてはならない。わたしのつえを子供の顔の上に置きなさい」(同四ノ二五、二六、二九)。

しかし、母親はエリシャ自身が彼女と共に来るのでなければ満足しなかった。彼女は言った。「主は生きておられます。あなたも生きておられます。わたしはあなたを離れません」。そこでエリシャはついに立ちあがって彼女のあとについて行つた。ゲハジは彼らの先に行つて、つえを子供の顔の上に置いたが、なんの声もなく、生きかえつたしるしもなかったので、帰つてきてエリシャに会い、彼に告げて『子供はまだ目をさましません』と言つた」(同四ノ三〇、三一)。

彼らが家に着いたとき、エリシャは死んだ子供が寝かしてある部屋に入つた。「彼ははいって戸を閉じ、彼らふたりだけ内にいて主に祈つた。そしてエリシャが上がつて子供の上に伏し、自分の口を子供の口の上に、自分の目を子供の目の上に、自分の両手を子供の両手の上にあて、その身を子供の上に伸ばしたとき、子供のからだ

は暖かになった。こうしてエリシヤは再び起きあがって、家の中をあちらこちらと歩み、また上がって、その身をお子の上に伸ばすと、子供は七たびくしゃみをして目を開いた」(同四ノ三三―三五)。

エリシヤはゲハジを呼んで、母親を彼のところへ呼ぶように命じた。「彼女がはいって来るとエリシヤは言った、『あなたのお子をつれて行きなさい』。彼女ははいって来て、エリシヤの足もとに伏し、地に身をかがめた。そしてその子供を取りあげて出ていった」(同四ノ三六、三七)。

こうして、この女の信仰は報われた。大いなる生命の与え主キリストが、彼女に息子を返されたのである。同様に、彼に忠実な人々は、キリストが再臨されて、死がそのとげを失い、墓が勝ち誇った勝利を奪い去られる時に、報いを受けるのである。その時に、キリストは死によって取り去られた子供たちを彼のしもべたちに返されるのである。「主はこう仰せられる、『嘆き悲しみ、いたく泣く声がラマで聞える。ラケルがその子らのために嘆くのである。子らがもはやいないので、彼女はその子らのことで慰められるのを願わない』。主はこう仰せられる、『あなたは泣く声をとどめ、目から涙をながすことをやめよ。あなたのわざに報いがある。彼らは敵の地から帰ってくる。…あなたの将来には希望があり、あなたのお子たちは自分の国に帰ってくると主は言われる』」(エリミヤ書三ノ一五―一七)。

イエスは、死者に対するわれわれの悲しみを、限らない希望の言葉をもって慰めてくださる。「わたしはよみの力から、彼らを解き放ち、彼らを死から贖おう。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。よみよ、おまえの針はどこにあるのか」(ホセア書一三ノ一四・新改訳)。「わたしは…生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。そして、死と黄泉とのかぎを持っている」(黙示録一ノ一八)。

「すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあつて死んだ人々が、まず最初によりみえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであらう」(テサロニケ第一・四ノ一六、一七)。

エリシヤは人類の救い主の型であつた。そして、彼は救い主のように、彼の働きにおいていやしの働きと教えの働きを結合させた。エリシヤはその長期にわたる力強い活動を通じて、預言者の学校によって行われていた重要な教育の働きを育成発展させるために、たゆまず、忠実に努力した。彼が、集まって来た熱心な青年たちに語つた教えの言葉は、神の摂理と、聖霊の深い感動により、また、時には、彼が主のしもべとしての彼の権威の別の明確な証拠によつて確認された。

彼が毒のはいつたかまをもとどおりになおしたのは、彼がギルガルに設立された学校を訪問中のことであつた。「その地にきさんがあつた。預言者のともがらが彼の前に座していたので、エリシヤはそのしもべに言つた、『大きなかまをすえて、預言者のともがらのために野菜の煮物をつくりなさい』。彼らのうちのひとりが畑に出ていつて青物をつんだが、つる草のあるのを見て、その野うりを一包つんできて、煮物のかまの中に切り込んだ。彼らはそれが何であるかを知らなかつたからである。やがてこれを盛つて人々に食べさせようとしたが、彼らがその煮物を食べようとした時、叫んで『ああ神の人よ、かまの中に、たべると死ぬものがはいっています』と言つて、食べることができなかつたので、エリシヤは、『それでは粉を持つてきなさい』と言つて、それをかまに投げ入れ、『盛つて人々に食べさせなさい』と言つた。かまの中には、なんの毒物もなくなつた」(列王紀下四ノ三八

一四一。

また、エリシャは、まだきんが地にあつたときに、「バル・シャリシャ」の人から贈られた「初穂のパンと、大麦のパン二十個と、新穀一袋」とによつて、百人に食を与えた。ぜひ食事をしなければならない人々が彼と共にいたのである。献げ物が来たとき、彼はしもべに、『人々に与えて食べさせなさい』と言つたが、その召使は言つた、『どうしてこれを百人の前に供えるのですか』。しかし彼は言つた、『人々に与えて食べさせなさい。主はこう言われる、「彼らは食べてなお余すであらう』。そこで彼はそれを彼らの前に供えたので、彼らは食べてなお余した。主の言葉のとおりであつた」(同四ノ四二―四四)。

キリストが彼の使者によつて、飢えを満たすためにこの奇跡を行われるとは、何というキリストの慈悲深さであらう。主イエスは必ずしもこれほど著しく、また、感知できるものではなくても、その時以来、何度となく、人間の必要を満たすために働かれたのである。もし、われわれがもっと明確な霊的洞察力をもっていたならば、人の子らに対する神のあわれみ深い取り扱いを、もっとたやすく認めることができるであらう。

少量のものの上に注がれる神の恵みが、それを満ち足りたものにする。神のみ手はそれを百倍に増すことができる。神はその資源の中から、荒野において食事の用意をすることがおできである。神はみ手を触れて、わずかの食物を増加させて、すべての者を満ち足らせるのである。預言者のともがらの手の中でパンと穀物とを増し加えたのは、神の力であつた。

キリストの地上の伝道生活中、彼が、同様の奇跡によつて群衆を養われたときに、昔の預言者と一緒にいた人びとがあらわしたのと同じ不信があらわされた。「どうしてこれを百人の前に供えるのですか」とエリシャのし



飢饉のとき、エリシャはバアル・シャ
リシャからきた人が持ってきたわずかな
食物で、預言者の学校から来た百人の人
たちを養った。

もべは言った。そして、イエスが弟子たちに、群衆に食べさせるようにお命じになったときに、彼らは、「わたしたちにはパン五つと魚二ひきしかありません、この大ぜいの人のために食物を買いに行くかしなければ」と言った（ルカ九ノ一二）。こんなに多くの人々のなかで、これが何になるうか。

これは各時代の神の民のための教訓である。主がなすべき働きをお与えになるときに、その命令が道理にかなったものであるか、または、従おうと努力すれば、どんな結果が生じるかなどを、人間は問うてはならない。手もとにあるものは、満たすべき必要のためには、十分でないかもしれない。しかし、主の手の中にあればあり余ったものとなるのである。しもべは「それを彼らの前に供えたので、彼らは食べてなお余した。主の言葉のとおりであった」（列王紀下四ノ四四）。

神がみ子という賜物によって買い取られた人々に対する神の関係をもっと深く悟り、この地上における神の働きの前進に対して、もっと大きな信仰を持つことが、今日、教会の大きな必要である。だれひとりとして目に見える資源の乏しさを嘆いて、時間を浪費してはならない。外見は有望ではないかもしれないが、活動と神に対する信頼は、資源をつくり出すのである。神は感謝と祝福を祈り求めつつ神に献げるものを預言者のともがらや疲れた群衆に与えられた食物を増し加えられたように増し加えてくださるのである。

第二十章 大国シリヤからの訪問者

本章は列王妃下五章に基づく

「スリヤ王の軍勢の長ナアマンはその主君に重んじられた有力な人であった。主がかつて彼を用いてスリヤに勝利を得させられたからである。彼は大勇士であつたが、らい病をわずらつていた」(列王紀下五ノ一)。

スリヤの王ベネハダデはイスラエルの軍勢を打ち破り、その戦いにおいてアハブは死んだ。その時以来、スリヤ人はイスラエルに対して絶えず国境付近の戦争をいどみ続けた。そして、そのような襲撃の際に、彼らはひとりの少女を連れ去つた。この少女は捕らえられて行つた地で「ナアマンの妻に仕えた」。この少女は家庭から遠く離れた奴隷であつたけれども、神の証人のひとりで、神がご自分の民としてイスラエルを選ばれた目的を無意識のうちに達成したのである。彼女がその異教の家庭で仕えていたときに、彼女の主人を気の毒に思つた。そして、エリシヤが行つた驚くべきいやしの奇跡を思い出して、その女主人に向かつて、「ああ、御主人がサマリヤにいる預言者と共にあられたらよかったでしょうに。彼はそのらい病をいやしたことでしょう」と言つた(同五ノ三)。彼女は、エリシヤには天の神の力が宿っているのを知っていた。そして、この力によってナアマンはいやされる

と信じたのである。

異教の家庭における捕らわれの少女の行動とその態度は、初期の家庭訓練の力を力強く証明している。父親と母親にゆだねられた任務の中で、子供の保護と訓練ほど重要なものはない。両親は習慣と品性の基礎そのものを築かなければならない。彼らの模範と教育によって、子供たちの将来の大半が決定されてしまうのである。

その生活が真に神を反映し、神の約束と命令が子供の中に感謝と崇敬の念を起こさせるような両親は幸福である。また、そのやさしさと正義と忍耐とが、神の愛と正義と忍耐を子供たちに解明し、彼らに対する愛と信頼と服従を教えることによって、天の神に対する愛と信頼と服従を教える両親は幸福である。このような賜物を子供に与える両親は、あらゆる時代のすべての富よりも尊い宝、永遠に至る宝を子供に授けるのである。

われわれは子供たちがどのような奉仕に召されるかを知らない。彼らは家庭の中で一生を過ごすかもしれない。また人生の一般の職業に従事することであろう。あるいは、異教の地に福音の教師として出かけるであろう。しかし、すべての者は同じく神のための伝道者、世界に対するあわれみの使者として召されているのである。彼らは、キリストの側に立つて無我の奉仕をするための教育を受けなければならないのである。

このヘブルの少女の両親は、彼女に神のことを教えたときに、彼女がどんな運命をたどるかを知らなかった。しかし、彼らはゆだねられた任務に忠実であった。そして、スリヤの軍勢の長の家庭において、彼らの子供は彼女が尊ぶことを学んだ神のためのあかしを立てたのである。

ナアマンは彼女が女主人に言った言葉を聞いた。そして、王の許可を得ていやしを求めて出かけた。「彼は銀十タラントと、金六千シケルと、晴れ着十着を携えて行った」(同五ノ五)。また、彼はスリヤの王からイスラエ

ルの王への手紙を持って行ったが、それには、「わたしの家来ナアマンを、あなたにつかわしたと御承知ください。あなたに彼のらい病をいやしていただくためです」と書いてあった。イスラエルの王は、その手紙を読んだ時、「衣を裂いて言った、『わたしは殺したり、生かしたりすることのできる神であろうか。どうしてこの人は、らい病人をわたしにつかわして、それをいやせと言うのか。あなたがたは、彼がわたしに争いをしかけているのを知って警戒するがよい』」と(列王紀下五ノ六、七)。

エリシャはこのことを聞いて、王に人をつかわして言った。「どうしてあなたは衣を裂いたのですか。彼をわたしのもとにこさせなさい。そうすれば彼はイスラエルに預言者のあることを知るようになるでしょう」(同五ノ八)。

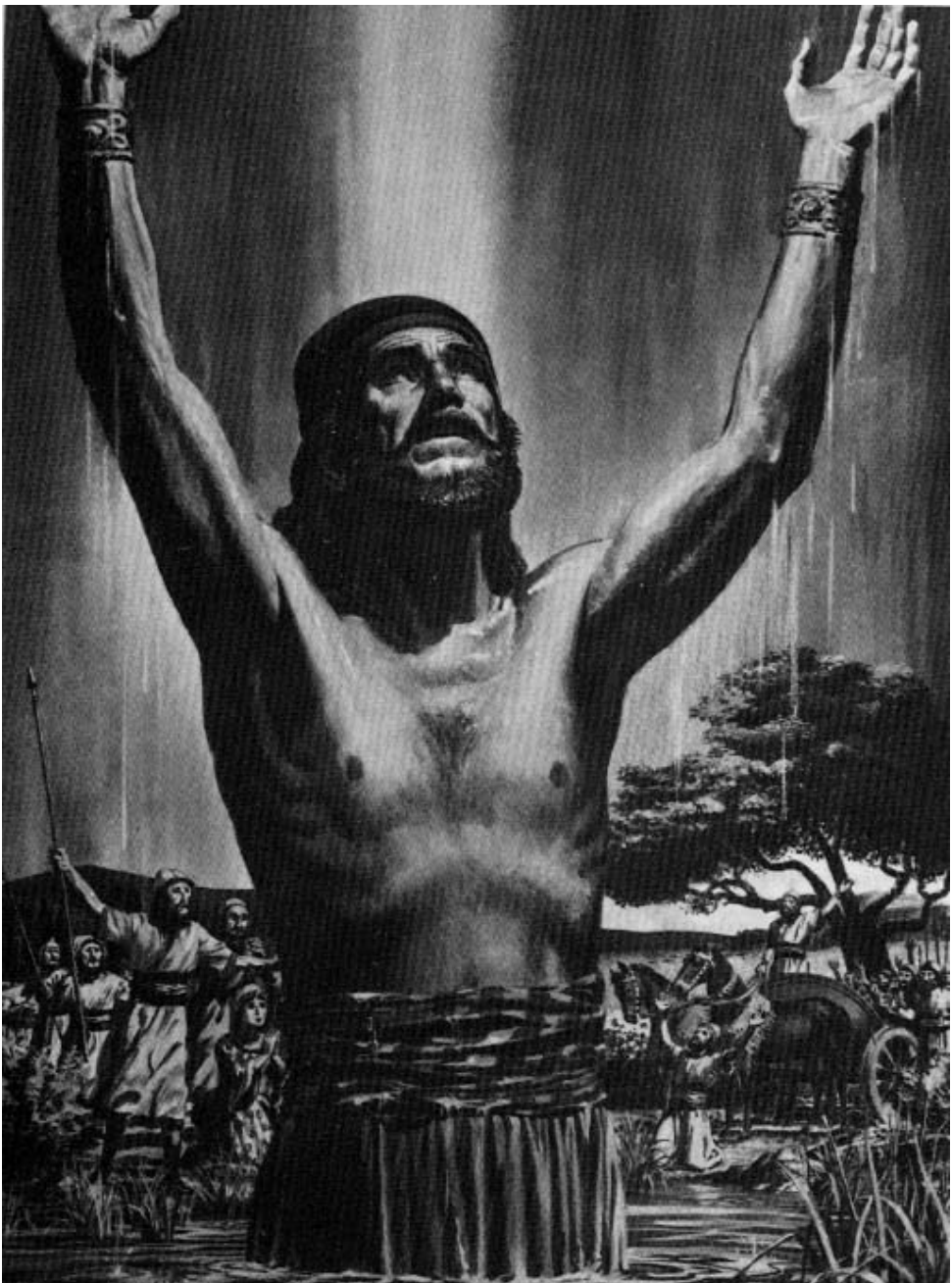
「そこでナアマンは馬と車とを従えてきて、エリシャの家の入口に立った」。するとエリシャは、使者を通じて、「あなたはヨルダンへ行つて七たび身を洗いなさい。そうすれば、あなたの肉はもとにかえって清くなるでしょう」と言った(同五ノ九、一〇)。

ナアマンは、何か驚くべき天からの力のあらわれを見るものと期待していた。「わたしは、彼がきつとわたしのもとに出てきて立ち、その神、主の名を呼んで、その箇所の上に手を動かして、らい病をいやすのだろつと思つた」と彼は言った。ヨルダンに行つて洗うように言われたときに、彼の誇りが傷つけられた。そして、屈辱と失望のあまり、「ダマスコの川アバナとパルパルはイスラエルのすべての川水にまさるではないか。わたしはこれらの川に身を洗つて清まることのできないのであるうか」と叫んだ。「こうして彼は身をめぐらし、怒つて去つた」(同五ノ一一、一二)。

ナアマンの高慢心はエリシャが命じた方法に従おうとしなかった。スリヤの大將があげた川は、その周囲の木立ちによって美しくされ、多くの人々はこれらの心地よい川の岸边に集まって、彼らの偶像の神々を礼拝した。ナアマンにとって、こうした川にくだつていくことは、大きな屈辱感を与えるものではなかった。しかし、彼がいやされるのは預言者の特別の指示に従うことによつてのみであつた。喜んで服従することによつてのみ、願っているいやしが与えられるのであつた。

ナアマンのしもべたちはエリシャの指示に従うように彼に嘆願した。「預言者があなたに、何か大きな事をせよと命じても、あなたはそれをなさらなかったでしょう。まして彼はあなたに『身を洗つて清くなれ』と言うだけではありませんか」と彼らはしきりに勧めた。ナアマンの誇りが頭をもたげてきていた一方において、彼の信仰が試められていたのである。しかし信仰が勝利した。そして高慢なスリヤのナアマンは誇りを捨てて、主の啓示されたみこころにへりくだつて従つた。彼は「神の人の言葉のように七たびヨルダンに身を浸」した。すると彼の信仰は報われた。「その肉がもとにかえつて幼な子の肉のようになり、清くなつた」(同五ノ一三、一四)。感謝に満ちて、「彼はすべての従者を連れて神の人のもとに帰ってきて、その前に立つて言った、『わたしは今、イスラエルのほか、全地のどこにも神のおられないことを知りました』」(同五ノ一五)。

ナアマンは当時の習慣に従つて、高価な贈り物を受けてくださいとエリシャにたのんだ。ところが、預言者はそれを拒んだ。彼は、神があわれみのうちにお与えになった祝福に対する支払いを受けるべきではなかった。彼は「わたしの仕える主は生きておられる。わたしは何も受けません」と言った。ナアマンは「しいて受けさせようとしたが、それを拒んだ」(同五ノ一六)。



スリヤの將軍ナアマンは、いやいやながらエリシャのことばに従って、ヨルダン川で七回水浴した。そこで彼は癒された。

「そこでナアマンは言った、『もしお受けにならないのであれば、どうぞ驟馬に二駄の土をしもべにください。これから後しもべは、他の神には燔祭も犠牲もささげず、ただ主にのみささげます。どうぞ主がこの事を、しもべにおゆるしくださるよう。すなわち、わたしの主君がリンモンの宮にはいつて、そこで礼拝するとき、わたしの手によりかかることがあり、またわたしもリンモンの宮で身をかがめることがありましよう。わたしはリンモンの宮で身をかがめる時、どうぞ主がその事を、しもべにおゆるしくださるよう』」（列王紀下五ノ一七、一八）。

「エリシヤは彼に言った、『安んじて行きなさい』。ナアマンが、エリシヤを離れて少し行った」（同五ノ一九）。エリシヤのしもべゲハジはこの年月の間に、彼の主人の生涯の働きの特徴であった自己犠牲の精神を養う機会が与えられていた。彼は主の軍勢の気高い旗手となる特権が与えられていた。天からの最高の賜物が長い間彼の手の届くところにあつた。それにもかかわらず、彼はそれらに背を向けて、その代わりに世俗の富という卑しい合金をおさぼった。ここで彼は心にひそんだ強欲心のために、圧倒的誘惑に負けてしまった。ゲハジは心の中で考えた。「主人はこのスリヤびとナアマンをいたわって、彼が携えてきた物を受けなかった。…わたしは彼のあとを追いかけて、彼から少し、物を受けよう」。こうして、ひそかに、「ゲハジはナアマンのあとを追った」（同五ノ二〇、二一上句）。

「ナアマンは自分のあとから彼が走ってくるのを見て、車から降り、彼を迎えて、『変った事があるのですか』と言うと、彼は言った、『無事です』」。ここで、ゲハジは計画的な偽りを言った。「主人がわたしをつかわして言わせます、『ただいまエフライムの山地から、預言者のともがらのふたりの若者が、わたしのもとに来ました

ので、どうぞ彼らに銀一タラントと晴れ着二着を与えてください』。ナアマンはこの願いを喜んできき、銀一タラントのかわりに銀二タラントと「晴れ着二着を添えて」ゲハジに与えて、しもべたちにその宝物を背負っていくように命じた（列王紀下五ノ二一下句―二三）。

ゲハジはエリシヤの家近づくとしもべたちを先に帰して、銀と晴れ着を隠した。そうしておいて「彼がはいって主人の前に立つ」た。そして、彼はとがめ立てされないために、もう一つのうそを言った。預言者のどこへ行ってきたのかという質問に答えて、ゲハジは、「しもべはどこへも行きません」と答えた（同五ノ二五）。

その時、厳しい非難の声が聞こえて、エリシヤがすべての事を知っていることを示した。「あの人が車をはなれて、あなたを迎えたとき、わたしの心はあなたと一緒にそこにはいたではないか、今は金を受け、着物を受け、オリブ畑、ぶどう畑、羊、牛、しもべ、はしためを受ける時であろうか。それゆえ、ナアマンのらい病はあなたに着き、ながくあなたの子孫に及ぶであろう」。罪ある人に対する天罰はてきめんであった。彼がエリシヤの前を出ていくとき、「らい病が発して雪のように白くなっていた」（同五ノ二六、二七）。

高く聖なる特権が与えられた者のこの経験は、実に厳粛な教訓を教えている。ゲハジの行為は、驚くべき光が心にさし、生ける神の礼拝に対して好感を持ったナアマンの道につまずきの石を置くようなものであった。ゲハジが行った欺瞞行為は、弁解の余地がない。彼は死ぬまでらい病であった。そして、神にのろわれ、人々からいみ嫌われた。

「偽りの証人は罰を免れない、偽りをいう者はのがれることができない」（箴言一九ノ五）。人々は、その悪行を、人間の目から隠すことができると考えるであろうが、彼らは神を欺くことはできない。「すべてのものは、

神の目には裸であり、あらわにされているのである。この神に対して、わたしたちは言い開きをしなくてはならない」（ヘブル四ノ一二）。ゲハジはエリシヤを欺くことができると考えたが、神はゲハジがナアマンに語った言葉と彼ら二人の間に起こった出来事を詳しく神の預言者に示されたのである。

真理は神からのものである。種々様々の形態を装うあらゆる欺瞞はサタンからのものである。であるから、どんな方法においても、真理のまっすぐな道から離れるものは、悪魔の力に自分を売り渡しているのである。キリストの教えを受けた者は「実を結ばないやみのわざに加わらない」（エペソ五ノ一二）。彼らは生活における同様、言葉も単純、正直、誠実である。彼らはその口に偽りがいない聖なる人々との交わりに入る準備をしているのである（黙示録一四ノ五参照）。

ナアマンが肉体をいやされ、心は悔い改めてスリヤの家庭に帰ってから幾世紀も後に、救い主は、神に仕える主張するすべての者への実物教訓として、彼の驚くべき信仰を例に引き賞賛されたのである。「預言者エリシヤの時代に、イスラエルには多くのらい病人がいたのに、そのうちのひとりもきよめられないで、ただシリヤのナアマンだけがきよめられた」（ルカ四ノ二七）。神はイスラエルに多くのらい病人がいたが、彼らが不信仰におちいり、幸福への扉を閉ざしてしまっただけのために、彼らを見過ごしにされた。自分が正しいと信じたことに忠実で、助けの必要を感じた異邦の將軍は、神から与えられた特権を侮辱し軽蔑したイスラエルの病人たちより、神の目にははるかに神の祝福にあずかる価値があつたのである。神は神の恵みを感謝し天から与えられた光に答える者のために働かれるのである。

今日、各地に、心の正しい人々がいる。そして、そのような人々に天の光が輝いている。もし、彼らが、義務

であること知ったことに忠実に従っていったならば、彼らはもつと光が与えられて、ついに昔のナアマンのように、生ける神、創造主のほかに「全地のどこにも神のおられない」ことを認めないわけにいかなくなるのである。

「暗い中を歩いて光を得な」いすべてのまじめな人に対して、「なお主の名を頼み、おのれの神にたよ」れという招きが発せられている。「いにしえからこのかた、あなたのほか神を待ち望む者に、このような事を行われた神を聞いたことはなく、耳に入れたこともなく、目に見たこともない。あなたは喜んで義を行い、あなたの道にあって、あなたを記念する者を迎えられる」(イザヤ書五〇ノ一〇、六四ノ四、五)。

第二十一章 預言者エリシャの貢献

アハブがまだ治めていたところに、預言者の務めに召されたエリシャは、イスラエルの国に起こった多くの変化を見るまで生きのびた。スリヤのハザエルの治世中、イスラエル人には次々と刑罰が下った。ハザエルは背信した国家を懲らしめるおちとして召されたのであった。エヒウが始めた厳格な改革方策によって、アハブの全家が殺されてしまった。エヒウの後継者エホアハズは、スリヤとの長期戦によって、ヨルダンの東の町々をいくつか失った。一時はスリヤびとが全国を支配するかのようになってしまった。しかし、エリヤが開始し、エリシャが実行に移した改革によって、多くの人々は神を求めるようになった。バアルの祭壇は顧みられなくなり、神のみこころは心から神に仕えようとする人々の生活の中に徐々に、しかしながら着実になしとげられていった。

神がスリヤびとにイスラエルをむちうつことをお許しになったのは、誤りに陥ったイスラエルを神が愛されたためであった。神がエヒウを起こして邪悪なイゼベルとアハブの全家を殺されたのは、道徳力の弱い人々を神があわれまれたからであった。神のあわれみ深い摂理によって、バアルとアシタロテの祭司たちが除かれて、彼ら

の異教の祭壇が破壊されたのである。知恵に富んでおられる神は、もし誘惑が除かれるならば、異教を捨てて、その顔を天に向けるようになる者があることを予見された。災禍が次々に彼らの上にくだることを神が許されたのは、このためであつた。神の刑罰には、あわれみが混じっていた。神は、神のみこころが達成されたときに神を求めることを学んだ人々のために、形勢を一変されたのである。

善と悪の勢力がその優劣を争い、サタンがアハブとイゼベルの治世においてなしとげた破壊を完べきなものにしようと全力をあげているときに、エリシヤは彼のあかしを立て続けた。彼は反対に遭つたが、だれひとり彼の言葉に反駁できる者はなかつた。彼は全国においてあがめられ、尊敬された。彼のところに勧告を求めてくる者が多かつた。イゼベルがまだ生きていたとき、イスラエルの王ヨラムが彼の勧告を求めた。そして、ダマスコにいたときにはスリヤの王、ベネハダデの使者が彼のところを訪れたことが一度あつた。スリヤ王はその時かかつていた病気が死に至るものかどうかを聞きたかつたのである。預言者は至るところで真理がまげられ、大部分の人々が天の神に公然と反逆していたとき、すべての人に忠実なあかしを立てた。

そして、神は神が選ばれた使者をお見捨てにならなかつた。スリヤの侵略が行われたある時、スリヤの王は、エリシヤが敵の計画をイスラエルの王に通告したことを理由に、彼を殺そうとしたのである。スリヤの王は家来たちと評議して「しかじかの所にわたしの陣を張ろう」と言つた。主はこの計画をエリシヤに示された。そこで彼は「イスラエルの王に『あなたは用心して、この所をとあつてはなりません。スリヤびとがそこに下つてきますから』』と言ひ送つた。それでイスラエルの王は神の人が自分に告げてくれた所に人をつかわし、警戒したので、その所でみずからを防ぎえたことは一、二回にとどまらなかつた。

スリヤの王はこの事のために心を悩まし、家来たちを召して言った、『われわれのうち、だれがイスラエルの王と通じているのか、わたしに告げる者はないか』。ひとりの家来が言った、『王、わが主よ、だれも通じている者はいません。ただイスラエルの預言者エリシャが、あなたが寝室で語られる言葉でもイスラエルの王に告げるのです』(列王紀下六ノ八一―一二)。

スリヤの王は、エリシャを殺そうとして命じた。『彼がどこにいるか行つて捜しなさい。わたしは人をやって彼を捕えよう』。時に『彼はドタンにいる』と王に告げる者があったので、王はそこに馬と戦車および大軍をつかわした。彼らは夜のうちに来て、その町を囲んだ。神の人の召使が朝早く起きて出て見ると、軍勢が馬と戦車をもつて町を囲んでいた(同六ノ一三一―一五)。

エリシャの召使は驚いてエリシャに知らせに来た。「ああ、わが主よ、わたしたちはどうしましょうか」と彼は言った(同六ノ一五下句)。

エリシャは答えた。「恐れることはない。われわれと共にいる者は彼らと共にいる者よりも多いのだから」。そして、召使が自分でこの事を知ることができるよう、エリシャが祈つて『主よ、どうぞ、彼の目を開いて見させてください』と言うと、主はその若者の目を開かれたので、彼が見ると、火の馬と火の戦車が山に満ちてエリシャのまわりにあつた(同六ノ一六、一七)。神のしもべと武装した敵兵の軍勢との間には、天使たちの軍勢がいて、彼らを取り囲んでいた。天使たちは大いなる力をもつて下ってきたが、それは滅ぼすためでも、人からの尊敬を強要するためでもなくて、主の弱い無力な人々のまわりに陣をしいて仕えるためであつた。

神の民が窮地に陥り、一見、逃げ場がないかのように思われるときに、ただ神だけが彼らの頼りでなければな

らない。

スリヤの軍勢が天の見えない軍勢の存在も知らずに、大胆に前進してきたときに、「エリシヤは主に祈って言った、『どうぞ、この人々の目をくらましてください』。するとエリシヤの言葉のとおりに彼らの目をくらまされた。そこでエリシヤは彼らに、『これはその道ではない。これはその町でもない。わたしについてきなさい。わたしはあなたがたを、あなたがたの尋ねる人の所へ連れて行きましょう』と言って、彼らをサマリヤへ連れて行った。

彼らがサマリヤにはいったとき、エリシヤは言った、『主よ、この人々の目を開いて見させてください』。主は彼らの目を開かれたので、彼らが見ると、見よ、彼らはサマリヤのうちに来ていた。イスラエルの王は彼らを見て、エリシヤに言った、『わが父よ、彼らを撃ち殺しましょうか。彼らを撃ち殺しましょうか』。エリシヤは答えた、『撃ち殺してはならない。あなたはつるぎと弓をもって、捕虜にした者どもを撃ち殺すでしょうか。パンと水を彼らの前に供えて食い飲みさせ、その主君のもとへ行かせなさい』。そこで王は彼らのために盛んなふるまいを設けた。彼らが食い飲みを終ると彼らを去らせたので、その主君の所へ帰った」(列王紀下六ノ一八―二三)。

この後しばらくの間、イスラエルはスリヤの攻撃を受けなかった。しかし、決然と立ち上がった王ハザエルの強力な指揮のもとに、スリヤの軍勢はサマリヤを包囲した。イスラエルはこの包囲の時ほど大きな苦難に陥ったことはなかった。実に、父の罪が子のまた子に報いられたのである。長く続いた恐ろしいきんのために、イスラエルの王は非常手段をとろうとしていた。その時、エリシヤは、翌日、救いが与えられることを予告したのである。

次の朝、夜明けごろ、主は、「スリヤびとの軍勢に戦車の音、馬の音、大軍の音を聞かせられた」。そこで彼らは恐れおののいて、「たそがれに立って逃げ」、「その天幕と、馬と、ろばを捨て、陣営をそのままにしておいて」豊富な食糧を残していった。彼らは「命を全うしようと逃げ」ヨルダンを渡ってしまうまでは途中で休まなかった(同七ノ六、七)。

軍隊が逃亡した夜、町の門にいた四人のらい病人は、ひもじさの余り、スリヤの陣営に行こうと話し合った。そして、包囲軍に投降して、彼らのあわれみの情に訴えて、食物を得たいものであると望んだ。ところが、彼らが陣営に入ったときに、「そこにはだれもいなかった」のを見て、彼らはどんなに驚いたことであろう。妨げる者も禁じる者もないので、彼らは「一つの天幕にはいつて食い飲みし、そこから金銀、衣服を持ち出してそれを隠し、また来て、他の天幕に入り、そこからも持ち出してそれを隠した。そして彼らは互に言った、『われわれのしている事はよくない。きょうは良いおとずれのある日であるのに、黙って』」いる。彼らは喜ばしい知らせをもって急いで町に帰った(同七ノ五下句、八、九)。

ぶんどり物は多かった。食糧は非常に多く、前日エリシャが予告したとおり、その日「麦粉一セアは一シケルで売られ大麦一セアは一シケルで売られ」た。イスラエルの主の預言者によって語られた「主の言葉のとおり」に神のみ名がもう一度、異教徒の前で高く掲げられたのである(同七ノ一六)。

こうして、神の人エリシャは、毎年、忠実に務めを行って、人々と親しく接触して働き続けた。そして、危機においては王たちの傍に立って、賢明な助言者となった。王たちと国民が背信して偶像を礼拝したことは悲しむべき結果を生んだ。背信の暗い影はなお、至るところに明白ではあったが、ここかしこに断固としてバアルにひ

ざをかめめることを拒否した人々があつた。エリシヤが彼の改革事業を続けたときに、多くの人々が異教主義から改宗した。そして、彼らは真の神の礼拝の喜びを知つたのである。エリシヤはこうした神の恵みの奇跡に勇気づけられて、心の正しいすべての人々に救いの手をのばそうという大望をいだいた。彼はどこへ行っても、義の教師となるように努力したのである。

人間的見地からするならば、国家の靈的再生を期待することは、今日、世界の暗黒な場所で働いている神のしもべたちの前の展望と同様に、絶望的なものであつた。しかし、キリストの教会は真理を宣べ伝えるための神の代理者である。教会は特別の働きをするように神の力が授けられているのである。そして、もし教会が神に忠実で、神の戒めに服従するならば、教会の中に卓越した神の力が宿るのである。もしも教会がその忠誠の誓いに忠実であるならば、どんな権力も教会に対抗して立つことはできないのである。敵の勢力は、もみがらがつむじ風に立ち向かうことができないように、教会を圧倒することはできないのである。

もし教会が、キリストの義の衣を着て、世俗に忠誠をつくすことをすべてやめるならば、教会の前には明るく輝かしい夜明けがある。

神は、不信仰で、希望を失つた人々を勇気づけるように、神を信じる忠実な人々に呼びかけておられる。あなたがた、望みをいだく捕われ人よ、主に帰れ。生ける神であられる神から力を求めなさい。心を低くして、神の力と神の豊かな救いに対する確固とした信仰を表しなさい。われわれが、信仰をもって、神の力をしっかりと把握するときに、神はどのような失望落胆すべき状態をも、不思議に変えてくださるのである。神は神のみ名の栄光のためにこうしてくださるのである。

エリシャはイスラエル国内をあちろちろと旅行することが可能なかぎり、預言者の学校を盛り立てていくために、活発な関心を持ち続けた。彼のいくところへは、どこでも神が彼と共にあられて、彼に語る言葉と奇跡を行う力をお与えになった。あるとき、「預言者のともがらはエリシャに言った、『わたしたちがあなたと共に住んでいる所は狭くなりましたので、わたしたちをヨルダンに行かせ、そこからめいめい一本ずつ材木を取ってきて、わたしたちの住む場所を造らせてください』」（列王紀下六ノ一、二）。エリシャは彼らと一緒に行って、そこにいることによって、彼らに励ましを与え、指示を与えた。そして、彼らの働きを助けるために奇跡さえ行った。「ひとりが材木を切り倒しているとき、おのの頭が水の中に落ちたので、彼は叫んで言った、『ああ、わが主よ、これは借りたものです』。神の人は言った、『それはどこに落ちたのか』。彼がその場所を知らせると、エリシャは一本の枝を切り落し、そこに投げ入れて、そのおのの頭を浮ばせ、『それを取りあげよ』と言ったので、その人は手を伸べてそれを取った」（同六ノ五―七）。

エリシャの働きは非常に力に満ち、広範囲に及んでいたので、彼が死ぬ病氣にかかったときには、敬神の念に欠け、偶像を礼拝していた若い王ヨアシでさえ、預言者エリシャが彼らの間にいることは、危急の場合に騎兵や戦車を持つてゐることよりもっと価値があることを認めたほどであった。次のように記録されている。「さてエリシャは死ぬ病氣にかかつていたが、イスラエルの王ヨアシは下つてきて彼の顔の上に涙を流し、『わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ』と言った」（同二三ノ一四）。

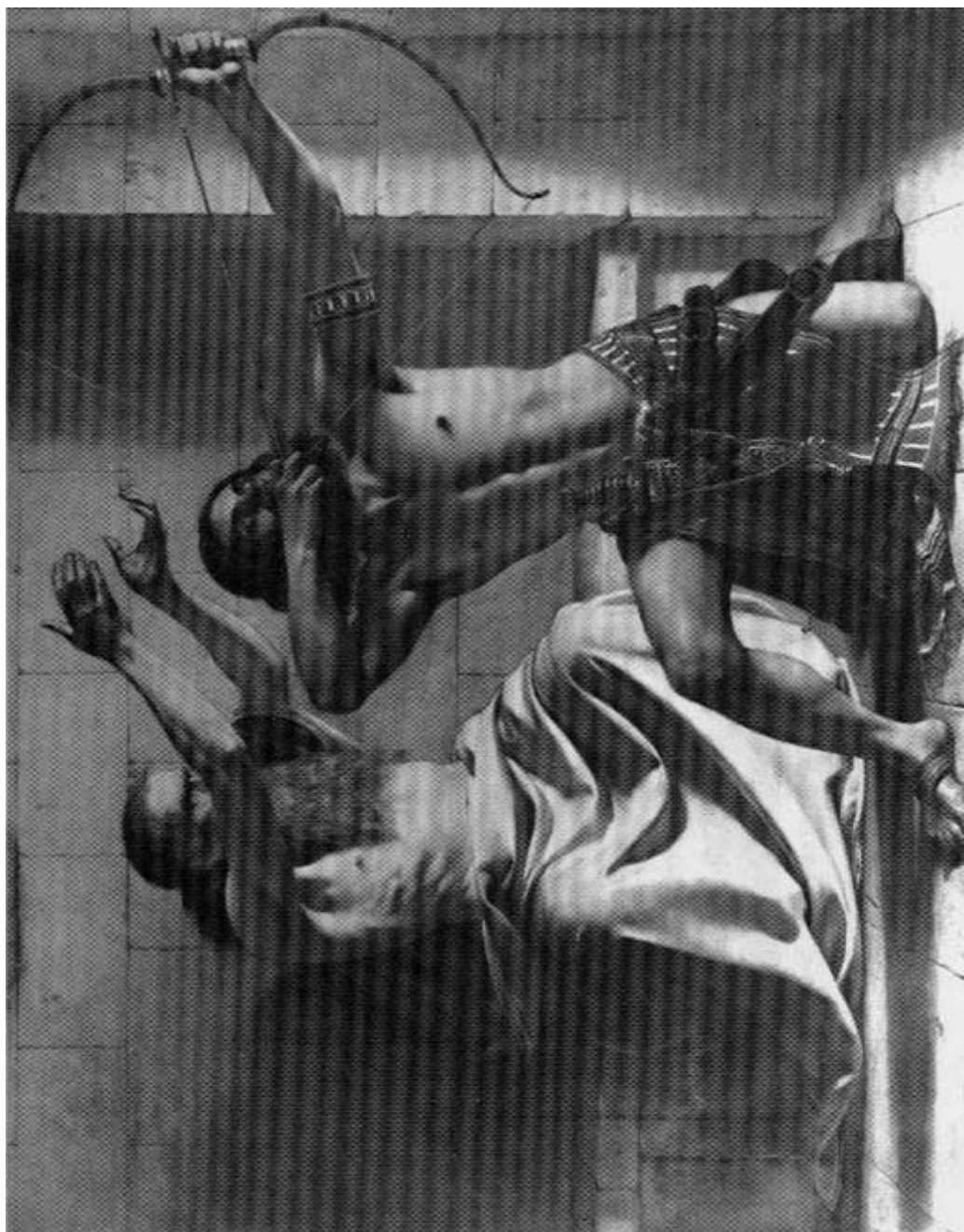
助けを必要とする多くの悩みの中にある魂に、エリシャは賢明で思いやりのある父親の役を果たした。この場合、彼は彼の前にいる神を信じない青年を見捨てることをしなかった。ヨアシは信任の地位を占める価値はな

ったのであるが、なお、彼には大いなる勧告の必要があったのである。神は摂理の中に過去の失敗の償いをなし、王国を有利な立場に置く機会を王に与えておられたのである。今、ヨルダンの東の領地を占領していたスリヤの軍勢を追い払わなければならなかった。もう一度、神の力が過ちに陥ったイスラエルのためにあらわされなければならなかった。

死の床にあつた預言者は、王に命じた。「エリシヤは彼に『弓と矢を取りなさい』と言ったので、弓と矢を取った。エリシヤはまたイスラエルの王に『弓に手をかけなさい』と言ったので、手をかけた。するとエリシヤは自分の手を王の手の上におき、『東向きの窓をあけなさい』と言った」。それは、スリヤに占領されているヨルダンの向こう側の町々に向かった方角であつた。王が窓をあけると、エリシヤは射なさいと命じた。矢が飛んでいくと、エリシヤは靈感に動かされて言った。「主の救の矢、スリヤに対する救の矢。あなたはアペクでスリヤびとを撃ち破り、彼らを滅ぼしつくすであろう」(列王紀下二二ノ一五―一七)。

ここで、預言者は、王の信仰を試みたのであつた。彼はヨアシに、矢を取り、「それをもって地を射なさい」と命じた。王は、三度射てやめた。エリシヤは落胆して叫んだ。「あなたは五度も六度も射るべきであつた。そうしたならば、あなたはスリヤを撃ち破り、それを滅ぼしつくすことができたであろう。しかし今あなたはそうしなかったので、スリヤを撃ち破ることはただ三度だけであろう」(同二二ノ一八、一九)。

これは、すべて信任の地位にある者のための教訓である。神が何かの働きを達成するために道を開き、成功の確証をお与えになるときに、選ばれた器は約束された成果をもたらすために全力をつくさなければならぬ。働きを推進するために示す熱心と忍耐に相応した成功が与えられるのである。神は、神の民がたゆまず努力して、



モアブ王が病床のエリシャを見舞ったとき、預言者は抱いた王に窓から矢を射るよつに命じた。それはエリシャに对する勝利のしるしであつた。

その分を果たすときにのみ、奇跡を行うことがおできになる。神は、神の働きに献身した人、道徳的勇氣のある人、魂を熱愛する人、冷えることのない熱意をもった人を招いておられる。こうした働き人は、どんな働きも困難とは思わず、どんな状態も絶望とは考えない。彼らはひるむことなく働き続けて、一見敗北と思われることを輝かしい勝利とするのである。牢獄の壁、あるいは、殉教の死が待っているようにとも、彼らは動揺することなく、神のみ国の建設のために神と共に働くのである。

エリシヤの働きはヨアシに勧告と励ましを与えて終わった。エリヤに宿っていた霊が満ちあふれるばかりに与えられたエリシヤは、最後まで忠実であつた。彼は動揺しなかつた。彼は、全能者の力に対する信頼を失わなかつた。彼は前途が全く閉ざされたかのように思われたときにも、常に、信仰をもって前進していった。そして、神は彼の確信に答えて、彼の前に道を開かれたのである。

エリシヤには火の車に乗って、彼の師に従うことは許されなかつた。主は彼が長い病の床に伏すことをお許しになつた。長時間にわたる人間的弱さと苦しみの中で、彼の信仰はしっかりと神の約束を把握し、彼の回りに慰めと平和をもたらす天使たちを常に眺めた。ドタンの高原において、陣をしく天の軍勢と、イスラエルの火の戦車とその騎兵たちを見たのと同じように、彼は今、思いやり深い天使たちの存在を感じて支えられたのである。彼はその一生を通じて強い信仰を働かせた。そして、神の摂理と神の慈悲深い寛容とが十分に理解されるにつれて、その信仰は神に対する永続的信頼となつていった。そして、死が迫ってきたとき、彼にはその働きを休む用意ができていたのである。

「主の聖徒の死はそのみ前において尊い」(詩篇一一六ノ一五)。「義者はその死ぬる時にも望あり」(箴言一

四ノ三二文語訳)。エリシャは、詩篇記者とともに、確信をもって、「しかし神はわたしを受けられるゆえ、わたしの魂を陰府の力からあがなわれる」と言うことができた(詩篇四九ノ一五)。彼は喜びをもって、「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、後の日に彼は必ず地の上に立たれる」(ヨブ記一九ノ二五)。「しかしわたしは義にあつて、み顔を見、目ざめる時、みかたちを見て、満ち足りるでしょう」とあかしすることができた(詩篇一七ノ一五)。

第二十二章 アッスリヤの首都ニネベ

イスラエル王国が分裂していた時代の古代世界の都市の中で、アッスリヤ帝国の首都ニネベは最大の都市の一つであった。バベルの塔から人々が離散して行つた後、間もなく、チグリス川の肥沃な岸に建設されたこの都は、その後、幾世紀も繁栄を続けて、「これを行きめぐるには、三日を要するほど」の大きな町になつた(ヨナ書三ノ三)。

ニネベは、その物質的に繁栄すると共に、犯罪と不正の中心地であつた。靈感は、ニネベを「血を流す町。その中には偽りと、ぶんどり物が満ち」ているとその特色を描写している。預言者ナホムは、象徴的言葉を用いて、ニネベを残忍な飢えた獅子にたとえている。「あなたの悪を常に身に受けなかつたような者が、だれひとりあるか」(ナホム書三ノ一、一九)。

しかし、ニネベは、悪に染まつたとは言つても、全く罪惡に満ちてしまつたのではなかつた。「すべての人の子らを見」られるかた、そして、「もろもろの尊い物を見」られるおかたは、その町の多くの人々が、より良く

より高尚な何物かを得ようとしており、もし生ける神を知る機会が与えられれば、その悪い行いを捨てて、神を礼拝するようになることを、ごらんになった(詩篇三三ノ一二、ヨブ記二八ノ一〇)。そこで、神は、神の知恵をもって、間違いない方法で、ご自分を彼らに現し、できることならば、彼らを悔い改めに導こうとされた。この働きのために召された器は、アミッタイの子、預言者ヨナであった。彼に主の言葉が臨んで言った。「立つて、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって呼ばわれ。彼らの悪がわたしの前に上ってきたからである」(ヨナ書一ノ一、二)。

ヨナは、この任命の困難さと、一見不可能に思われるところから、この召しが賢明かどうかを疑うように誘惑された。人間的見地からするならば、あの傲慢な町に、このような使命を宣言しても、何の益するところもないように思われた。彼は、自分の仕えている神が、全知全能の神であることを、一時忘れたのである。彼が、なおも、ためらい、疑っているうちに、サタンは、彼を失望に陥れてしまった。ヨナは、大きな恐怖心に襲われて、「タルシシへのがれようと」した。ヨッパへ行くと、すぐ出帆する船があつたので、「船賃を払い、…人々と共にタルシシへ行こうと船に乗った」(同一ノ三)。

ヨナは、この任命が与えられて、大きな責任を負わせられたのであつた。しかし、彼に行けと命じられたお方は、彼のしもべを支え、彼に成功を与えることがおできになるのであつた。もしヨナが、何の疑いもはさまずに従つたならば、彼は多くの苦い経験に遭うこともなく、豊かに祝福されたことであろう。しかし、ヨナが失望に陥つたときにも、主は、彼をお見捨てにならなかつた。種々の試練と不思議な摂理によって、神とつきることのない神の救いの力に対するヨナの確信は、回復されるのであつた。

召しが最初に与えられたときに、もしヨナが立ちどまって冷静に考えたならば、彼に負わせられた責任を逃れようとする彼の努力が、どんなに愚かなものであるかを知ることができたのであった。彼の狂的逃亡は、なんの妨げも受けずに、長く続くことは許されなかった。「時に、主は大風を海の上に起されたので、船が破れるほどの激しい暴風が海の上にあった。それで水夫たちは恐れて、めいめい自分の神を呼び求め、また船を軽くするため、その中の積み荷を海に投げ捨てた。しかし、ヨナは船の奥に下り、伏して熟睡していた」(ヨナ書一ノ四、五)。

水夫たちが彼らの異教の神々に助けを祈り求めているときに、船長は、困り果てて、ヨナをさがし出して言った。「あなたはどうして眠っているのか。起きて、あなたの神に呼びわりなさい。神があるいは、われわれを顧みて、助けてくださるだろう」(同一ノ六)。

しかし、義務の道から離れ去った人の祈りは、助けをもたらさなかった。水夫たちは、嵐があまりにも激しいので、これは、彼らの神の怒りによるものであると考えた。そして、最後の手段として、くじを引くことにした。彼らは言った。『この災がわれわれに臨んだのは、だれのせいかわかるために、さあ、くじを引いてみよう』。そして彼らが、くじを引いたところ、くじはヨナに当たった。そこで人々はヨナに言った、『この災がだれのせいで、われわれに臨んだのか、われわれに告げなさい。あなたの職業は何か。あなたはどこから来たのか。あなたの国はどこか。あなたはどの民か』。

ヨナは彼らに言った、『わたしはヘブルびとです。わたしは海と陸とお造りになった天の神、主を恐れる者です』。

そこで人々ははなはだしく恐れて、彼に言った、『あなたはなんたる事をしてくれたのか』。人々は彼がさきに彼らに告げた事によつて、彼が主の前を離れて、のがれようとしていた事を知っていたからである。

人々は彼に言った、『われわれのために海が静まるには、あなたをどうしたらよからうか』。それは海がますます荒れてきたからである。ヨナは彼らに言った、『わたしを取つて海に投げ入れなさい。そうしたら海は、あなたがたのために静まるでしょう。わたしにはよくわかっています。この激しい暴風があなたがたに臨んだのは、わたしのせいです』。

しかし人々は船を陸にこぎもどそうとつとめたが、成功しなかった。それは海が彼らに逆らつて、いよいよ荒れたからである。そこで人々は主に呼ばわつて言った、『主よ、どうぞ、この人の生命のために、われわれを滅ぼさなさい。主よ、これはみ心に従つて、なされた事だからです』。そして彼らはヨナを取つて海に投げ入れた。すると海の荒れるのがやんだ。そこで人々は大いに主を恐れ、犠牲を主にささげて、誓願を立てた。

主は大いなる魚を備えて、ヨナをのませられた。ヨナは三日三晩その魚の腹の中にいた。

ヨナは魚の腹の中からその神、主に祈つて、言った、

『わたしは悩みのうちから主に呼ばわると、

主はわたしに答えられた。

わたしが陰府の腹の中から叫ぶと、

あなたはわたしの声を聞かれた。

あなたはわたしを淵の中、

海のまん中に投げ入れられた。

大水はわたしをめぐり、

あなたの波と大波は皆、わたしの上を越えて行った。

わたしは言った、

「わたしはあなたの前から追われてしまった、

どうして再びあなたの聖なる宮を望みえようか」。

水がわたしをめぐって魂にまでおよび、

淵はわたしを取り囲み、

海草は山の根元でわたしの頭にまといついた。

わたしは地に下り、

地の貴の木はいつもわたしの上にあった。

しかしわが神、主よ、

あなたはわが命を穴から救いあげられた。

わが魂がわたしのうちに弱っているとき、

わたしは主をおぼえ、

わたしの祈はあなたに至り、

あなたの聖なる宮に達した。

むなしい偶像に心を寄せる者は、

そのまことの忠節を捨てる。

しかしわたしは感謝の声をもって、

あなたに犠牲をささげ、わたしの誓いはたす。

救は主にある』」。(ヨナ書一ノ七一―二ノ九)

ついに、ヨナは、「救は主のもの」であることを学んだ(詩篇三ノ八)。彼が、悔い改めて、神の救いの恵みを悟ったときに、救いが与えられた。ヨナは、大いなる淵の危険から解放されて、陸地に吐き出されたのである。

神のしもべヨナはもう一度、ニネベに警告の言葉を発するように命じられた。「時に神の言葉は再びヨナに臨んで言った、『立つて、あの大きな町ニネベに行き、あなたに命じる言葉をこれに伝えよ』。こんど、彼は、問い返すことも疑惑をさしはさむこともせず、ためらうことなく従ったのである。」「そこでヨナは主の言葉に従い、立つて、ニネベに行った」(ヨナ書三ノ一―三)。

ヨナは、町にはいるや否や、「これに向かって呼ばわ」り、「四十日を経たらニネベは滅びる」と言った(同三ノ四)。彼は、警告の言葉を発しながら、通りから通りを進んだ。

その使命はむだではなかった。神を信じない町の通りに鳴りひびいた叫びは、口から口に伝えられて住民全体は、驚くべき宣言を聞いたのである。神の霊が、すべての人の心にこの使命を強く印象づけて、多くの人々が彼らの罪のためにふるえおののいて、深く恥じいり、悔い改めるに至った。

「ニネベの人々は神を信じ、断食をふれ、大きい者から小さい者まで荒布を着た。このうわさがニネベの王に達すると、彼はその王座から立ち上がり、朝服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中に座した。また王とその大臣の布告をもって、ニネベ中にふれさせて言った、『人も獣も牛も羊もみな、何をも味わってはならない。物を食い、水を飲んではならない。人も獣も荒布をまとい、ひたすら神に呼ばわり、おのおのその悪い道およびその手にある強暴を離れよ。あるいは神はみ心をかえ、その激しい怒りをやめて、われわれを滅ぼされないかもしれない。だれがそれを知るだろう』」（ヨナ書三ノ五―九）。

王と大臣たちが、地位の上下を問わず、一般の国民と共に、「ヨナの宣教によって悔い改め」、心を一つにして、天の神に呼び求めたときに、彼らに、神のあわれみが与えられた（マタイ二ノ四一）。「神は彼らのなすところ、その悪い道を離れたのを見られ、彼らの上に下そうと言われた災を思いかえして、これをおやめになった」（ヨナ書三ノ一〇）。彼らは、滅びを免れ、イスラエルの神は、異邦世界全土において、賛美され栄光を帰せられ、神の律法はあがめられた。ニネベが、神を忘れ、傲慢になったがために、周囲の国々の犠牲になるのは、それからずっと後になってからであつた。（「アッスリヤの没落については、第三〇章参照」）

ニネベは、邪悪ではあつたが、荒布をまとい、灰の中に座して悔い改めたので、神は町を滅ぼすことをおやめになった。それを知ったヨナは、神の驚くべき恵みをまず第一に喜ぶべきであつた。しかし、彼は、そうせずに、自分が偽預言者であると思われるのではないかとばかり心配したのである。彼は、自分の名声を守ることに心を奪われて、その悲惨な町のなかの人々に、大きな無限の価値のあることを忘れていた。悔い改めたニネベの人々に示された神のあわれみを、「ヨナはこれを非常に不快として、激しく怒」った。彼は主に言った。「主よ、わ



預言者ヨナはとうごまの木の陰にすわり、失望のあまり、「生きるよりも死ぬ方がわたしにはましだ」とつぶやいた。

たしがなお国にありました時、この事を申したではありませんか。それでこそわたしは、急いでタルシシにのがれようとしたのです。なぜなら、わたしはあなたが恵み深い神、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ豊かで、災を思いかえされることを、知っていたからです」(ヨナ書四ノ一、一二)。

彼は、ふたたび、疑惑の念にかられて、またもや、失望の淵に沈んでしまった。彼は、他の人々の幸福のことなど何も考えず、生きていて町が救われるのを見るよりは、死んだ方がましだと考えて、不満げに叫んだ。「それで主よ、どうぞ今わたしの命をとってください。わたしにとつては、生きるよりも死ぬ方がましだからです」。

「主は言われた、『あなたの怒るのは、よいことであらうか』。そこでヨナは町から出て、町の東の方に座し、そこに自分のために一つの小屋を造り、町のなりゆきを見きわめようと、その下の日陰にすわっていた。時に主なる神は、ヨナを暑さの苦痛から救うために、とうごまを備えて、それを育て、ヨナの頭の上に日陰を設けた。

ヨナはこのとうごまを非常に喜んだ」(同四ノ三―六)。

ここで主は、ヨナに、一つの実物教訓をお与えになった。「ところが神は翌日の夜明けに虫を備えて、そのとうごまをかませられたので、それは枯れた。やがて太陽が出たとき、神が暑い東風を備え、また太陽がヨナの頭を照したので、ヨナは弱りはて、死ぬことを願って言った、『生きるよりも死ぬ方がわたしにはましだ』」。

神は、また預言者ヨナにお語りになった、「とうごまのためにあなたの怒るのはよくない」。ヨナは言った、「わたしは怒りのあまり狂い死にそうです」。

「主は言われた、『あなたは勞せず、育てず、一夜に生じて、一夜に滅びたこのとうごまをさえ、惜しんでいる。ましてわたしは十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、あまたの家畜とのいるこの大きな町二ネベを、

惜しまないでいられようか」(同四ノ七一)。

ヨナは、困惑し、面目を失い、ニネベを救われた神のみこころを理解することができなかったが、それでも、神があの大きな町に警告を発するように彼に命じられた任務は、果たしたのである。預言された事件は起こらなかったけれども、警告の使命は、やはり、神から出たものであった。そして、それは、神が計画なされた目的を果たしたのである。神の栄光が異教徒の間にあらわされた。長い間「暗黒と深いやみの中にいる者、苦しみと、くるがねに縛られた者」が、「その悩みのうちに主に呼ばわったので、主は彼らをその悩みから救い、暗黒と深いやみから彼らを導き出して、そのかせをこわされた」。「そのみ言葉をつかわして、彼らをいやし、彼らを滅びから助け出された」(詩篇一〇七ノ一〇、一二、一四、二〇)。

キリストは、彼の地上の伝道中に、ヨナのニネベにおける宣教のよい働きに言及し、あの異教の中心地における住民と、彼の時代の神の民と自称する人々とを対照された。「ニネベの人々はヨナの宣教によつて悔い改めたからである。しかし見よ、ヨナにまさる者がここにいる」と彼は言われた(マタイ一二ノ四一)。商業の騒音と取り引きの口論が満ち、人々ができるだけ自分の利益を得ようとしている忙しい世界に、キリストはおいでになったのである。そのような混乱を越えて、彼の声が神のラッパのように聞こえた。「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になるうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか」(マルコ八ノ三六、三七)。

ヨナの宣教が、ニネベの人々に対するしるしであつたように、キリストの宣教は、彼の時代の人々に対するしるしであつた。しかし、言葉の受けかたがなんと異なっていたことであろう。しかし、救い主は、人々の無関心

と嘲笑に遭いながらも、たゆまず働き続けて、彼の任務を達成されたのである。

これは、今日の神の使命者たちに対する教訓である。諸国の都市は、古代の二ネベと同様に、真の神の性質と目的とを知らなければならぬ。キリストの使者たちは、人々の心から、ほとんど忘れ去られてしまったより高貴な世界を彼らに示さなければならぬ。聖書の教えによるならば、いつまでも続く唯一の都は、神がもくろみ、建てられた都である。人間は、信仰の目によって、神の輝かしい栄光にきらめく天の門口を見ることができ、主イエスは、彼に仕えるしもべたちを用いて、人々に清い望みをもって永遠の嗣業を確保するために努力するよう呼びかけておられる。彼は、神のみ座のそばに宝を貯えるように、人々に訴えておられるのである。

罪悪が頑強に増加し続けるので、都市の住民は、急速にしかも確実に、全世界的ともいふべき罪に陥りつつある。一般の腐敗状態は、描写することができないほどはなはだしい。毎日、争闘、贈賄、詐欺などが新しく暴露されている。毎日、暴力、不法、人間の苦難に対する無関心、また、残忍きわまる悪魔的生命の殺害が、いまわしい記録をとどめている。毎日、発狂、殺人、自殺が増加している。

サタンは、世々にわたって、主の恵み深い計画を人々に知らせまいとしてきた。彼は、神の律法の偉大さ、すなわち、そこに示されている正義とあわれみと愛の原則を人々の前から取り去ろうと努めてきた。人々は、われわれが、現在生存している時代の驚くべき進歩と開化とを誇っている。しかし、神は、地が、悪と暴力に満ちているのをごらんになるのである。人々は、神の律法は廃され、聖書は確実ではないと言う。その結果として、ノアの洪水や背信したイスラエルの時代以来かつてなかったような罪悪の潮流が、世界をおおっているのである。魂の高潔さ、温和な性質、敬神の念などは、禁じられた欲望を満たすために失われてしまった。自分の利益のた

めに行った犯罪の暗い記録は、血液を凍らせ、心を恐怖で満たすに十分である。

われわれの神は、あわれみの神である。神は、神の律法を犯した罪人たちを忍耐深く、あわれみをもって扱われる。今日、人々は、聖書に啓示されている神の律法に親しむ多くの機会があるにもかかわらず、町々には暴力と犯罪が力をふるい、罪悪にあふれているのをごらんになって、宇宙の支配者であられる神は到底満足されない。かたくなに、神に背き続ける人々に対する神の忍耐の限度が急速に近づいているのである。

至上権を持つておられる神が、墮落した世界に対する扱いを急激に予期しない方法で変更されたとしても驚くに当たるであろうか。罪悪と犯罪の増加に対して刑罰が下ったとしても、驚くに当たるであろうか。欺瞞と詐欺によって得た不正な利益を得た者に対して、神が滅亡と死をもたらされたからと言って、驚くに当たるであろうか。神の要求しておられることについて、ますます明るい光が、彼らの道を照らしたにもかかわらず、多くの者は、主の支配権を認めず、天の統治に対するあらゆる反逆の創始者の黒い旗のもとにとどまることを選んだのである。

神の忍耐は、実に大きい。われわれが神の聖なる戒めを侮辱し続けていることを考えるときに、その大きなことに驚嘆するばかりである。全能者は、ご自身の特質を制御してこられたのである。しかし、神は、必ず立ち上がって、十誡の正当な要求を大胆不敵にも無視する悪者たちを罰せられるのである。

神は、人間に猶予の期間をお与えになる。しかし、神の忍耐の尽きる時がくる。そして、神の刑罰が必ず下るのである。主は、人々や町々を長く忍んで、神の怒りから彼らを救うために、彼らをあわれんで警告を発せられる。しかし、あわれみを請い求める声がついにやみ、真理の光を拒否し続けた人々は、消し去られる。それは、

彼ら自身と、彼らの行為によって影響を受けるであろうと思われる人々に対するあわれみからなされることなのである。

人間の力ではいやすことのできない悲しみが、この世界に起こる時が、近づいている。神の霊が取り去られつつある。海にも陸地にも、次々と急速に災害が起こる。地震、大竜巻、火事、洪水による破壊、人命財産の大損害などを、なんと度々耳にすることであろう。一見、こうした災害は、人間の力を超えた自然の猛威が突発的に起こしたものであると思うであろう。しかし、その中であって、神のみこころを悟ることができるのである。神は、こうした方法によって、人々に、彼らの危険を自覚させようとしておられるのである。

大都会における神の使命者たちは、救いのよきおとずれを伝える一方において、当面しなければならぬ罪惡、不正、墮落などについて失望してはならないのである。主は、罪惡に満ちたコリントにおいて使徒パウロにお与えになったのと同じ言葉をもって、こうしたすべての働き人を励まされるのである。「恐れるな。語りつづけよ、黙っているな。あなたには、わたしがついていく。だれもあなたを襲って、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる」(使徒行伝一八ノ九、一〇)。救霊の働きに従事している者は、多くの者が神のみ言葉の中の神の勧告に耳を傾けないであろうが、全世界が、光と真理、長く耐え忍ばれる救い主の招きを拒むのではないことを忘れてはならない。暴力と犯罪に満ちたどの町においても、正しく教えられるならば、イエスの弟子になることができるものが多くいるのである。このようにして、幾千の人々に救いの真理が伝えられて、キリストを個人的救い主として受け入れるようになるのである。

今日、地上の住民に対する神の言葉はこれである。「だから、あなたがたも用意をしないさい。思いがけな

い時に人の子が来るからである」(マタイ二四ノ四四)。今日の社会に行きわたっている状態、特に、諸国の大都会における状態は、神のさばきの時がきて、万物の終わりが近いことを、雷のような音で、宣言している。われわれは、どのような時代にもなかったような危機の門口に立っている。火事、洪水、地震、戦争、流血などの神の刑罰は、続々とくだっている。われわれは、この時において、大きな決定的事件が起こっても、驚いてはならない。なぜならば、あわれみの天使は、悔い改めない者を保護するためにあまり長くとどまることはできない。

「見よ、主はそのおられる所を出て、地に住む者の不義を馳せられる。地はその上に流された血をあらわして、殺された者を、もはやあうことがない」(イザヤ書二六ノ二二)。神の怒りの嵐が迫っている。ヨナが宣教した時のニネベの住民のように、あわれみの招待を受け入れて、支配者であられる神の律法に従って、清められる者だけが、それに耐えることができる。滅びが過ぎ去るまで、キリストと共に神のうちに隠されるのは、義人だけである。われわれは、次のように歌おう。

わがたましいを愛するイエスよ、

波はさかまき風ふきあれて、

沈むばかりのこの身を守り、

天のみなとにみちびきたまえ。

われには外の隠れ家あらず、

頼るかたなきこのたましいを、

委ねまつれば、みいつくしみの
つばさの蔭に守らせたまえ。

(讃美歌二七三番)

第二十三章 大国アッシリヤの支配

不運なイスラエル王国の最後の年月は、アハブ家の治世下における最悪の争闘と不安の時代でさえ見ることができなかった暴力と流血のはなはだしい時であった。二世紀以上にわたって、十部族の王たちは、風をまいてきた。そして、今、彼らは、つむじ風を刈り取っていた。王は、次々に暗殺されて、野望をもった他の者がそれに代わった。主は、これらの神を恐れない王権強奪者たちについて言われた。「彼らは王を立てた、しかし、わたしによって立てたのではない。彼らは君を立てた、しかし、わたしはこれを知らない」(ホセア書八ノ四)。正義の原則は、すべて破棄された。神の恵みの保管者として地の国々の前に立たなければならなかった者が、「主にむかって貞操を守らず」互いに裏切り合った(同五ノ七)。

神は、最も厳しい譴責によって、全滅の危機が迫っていることを、悔い改めようとしないうちに国民に自覚させようとなさった。神は、ホセアとアモスによって、次々と十部族の人々に使命を送り、心から真に悔い改めることを促し、罪を犯し続けるならば、恐るべき破壊が来ることを警告された。ホセアは言った。「あなたがたは悪を耕

し、不義を刈りおさめ、偽りの実を食べた。これはあなたがたが自分の戦車を頼み、勇士の多いことを頼んだためである。それゆえ、あなたがたの民の中にいくさの騒ぎが起り、…あなたがたの城はことごとく打ち破られる。…イスラエルの王は、あらしの中に全く滅ぼされる」(ホセア書一〇ノ三―五)。

エフライムについて、預言者はあかししている。「他国人らは彼の力を食い尽すが、彼はそれを知らない。しがが混じってはえても、それを悟らない」(預言者ホセアは、エフライムをイスラエルの部族中の背信の指導者、背信国家の象徴として、しばしば引用している)。「イスラエルは善をしりぞけた」。「さばきを受けて…打ちひしがれ」た十部族は、自分たちの悪行が、どんなに悲惨な結果をもたらすかも認めることができずに、やがて、「もろもろの国民のうちに、さすらい人となる」のであった(同七ノ九、八ノ三、五ノ一、九ノ一七)。

イスラエルの指導者のある者は、彼らが威信を失ったことを痛感して、それを回復しようと望んだ。しかし、彼らは、王国を弱くしたそれらの習慣を捨て去るかわりに、罪悪をほしいままに行った。そして、時が来るならば、異教徒と同盟を結んで彼らが待望している政治的権力を手に入れることができるとうめばれていた。「エフライムはおのれの病を見、ユダはおのれの傷を見たとき、エフライムはアッスリヤに行」った。「エフライムは知恵のない愚かな、はとようだ。彼らはエジプトに向かって呼び求め、またアッスリヤへ行く」。「エフライムは…アッスリヤと取引を」した(同五ノ一三、七ノ一、一一ノ一)。

ベテルの祭壇の前に現れた神の人により、また、エリヤやエリシヤ、アモスやホセアによって主は、くり返し、十部族に不服従の罪を指摘した。しかし、イスラエルは、譴責と勧告を受けたにもかかわらず、ますます、背信の深みに沈んでいった。「イスラエルは強情な雌牛のように強情である」。「わが民はわたしからそむき去ろうと

している」(同四ノ一六、一一ノ七)。

天からの刑罰が、反逆した民の上に厳しくくだった時があった。神は言われた。「それゆえ、わたしは預言者たちによって彼らを切り倒し、わが口の言葉をもって彼らを殺した。わがさばきは現れ出る光のようだ。わたしはいつくしみを喜び、犠牲を喜ばない。燔祭よりもむしろ神を知ることを喜ぶ。ところが彼らはアダムで契約を破り、かしこでわたしにそむいた」(同六ノ五一七)。

「イスラエルの人々よ、主の言葉を聞け」という言葉が、ついに彼らに語られた。「あなたはあなたの神の律法を忘れたゆえに、わたしもまたあなたの子らを忘れる。彼らは大きくなるにしたがって、ますますわたしに罪を犯したゆえ、わたしは彼らの栄えを恥に変える。…わたしはそのわざのために彼らを罰し、そのおこないのために彼らに報いる」(同四ノ一、六一九)。

イスラエルが、アッスリヤに捕囚になる前の五十年間の罪悪は、ノアの時代、またその他、人々が神を拒否して、全く悪行にふけてしまった各時代の状態とよく似ていた。自然の神よりも自然をあがめ、創造者の代わりに造られたものを礼拝することは、常に最も卑しい罪悪に人間を陥れた。こうして、イスラエルの民は、バアルとアシタロテを礼拝して、自然の力に最高の敬意を払い、人間を向上させて、高尚にするあらゆるものから関係を絶ち切って、やすやすと誘惑のえじきになってしまった。誤った礼拝に陥った人々は、心の防備がくずれ去って、罪に対する防壁を失い、人間の心の邪悪な欲望に負けてしまったのである。預言者たちは、その時代のはなはだしい圧迫、悪評高い不正、異常なまでの華美とぜいたく、恥を忘れた宴楽と醉酒、野卑な放蕩と墮落に対して、その声をあげたのであるが、彼らの抗議も、彼らの罪の告発も、その効果がなかった。「彼らは門にいて戒

める者を憎み、真実を語る者を忌みきらう」。「あなたがたは正しい者をしえたげ、まいないを取り、門で貧しい者を退ける」とアモスは言った(アモス書五ノ一〇、一一)。

これは、ヤラベアムが、二つの金の子牛を造ったことの結果であつた。定められた礼拝の形式から、一足離れ去ると、さらに墮落した偶像礼拝へと陥り、ついには、国民全体が自然礼拝の魅惑的習慣に心を奪われてしまった。イスラエルは、彼らの創造主を忘れて、「深くおのれを腐らせた」(ホセア書九ノ九)。

預言者たちは、こうした悪習に対して抗議をつづけ、人々に善を行うように勧告した。ホセアは言った。「あなたがたは自分のために正義をまき、いつくしみの実を刈り取り、あなたがたの新田を耕せ。今は主を求むべき時である。主は来て救を雨のように、あなたがたに降りそそがれる」。「それゆえ、あなたはあなたの神に帰り、いつくしみと正しきとを守り、つねにあなたの神を待ち望め」。「イスラエルよ、あなたの神、主に帰れ。あなたは自分の不義によって、つまずいたからだ。…主に帰って言え、『不義はことごとくゆるして、よきものを受けいれてください』」(同二〇ノ一二、一二ノ六、一四ノ一、一二)。

罪人には、多くの悔い改めの機会が与えられた。彼らが、背信の極に達して、最大の必要に迫られていたときに、彼らに対する神からの言葉は、ゆるしと希望の言葉であつた。「イスラエルよ、あなたは、あなた自身を滅ぼす。しかし、あなたの助けは、わがうちにある。わたしは、あなたの王になろう。わたしのほかに、あなたを救う者がどこにあるうか」(同二三ノ九、一〇英語訳)。

預言者は嘆願して言った。「さあ、わたしたちは主に帰ろう。主はわたしたちをかき裂かれたが、またいやし、わたしたちを打たれたが、また包んでくださるからだ。主は、ふつかの後、わたしたちを生かし、三日目にわた

したちを立たせられる。わたしたちはみ前で生きる。わたしたちは主を知ろう、せつに主を知ることを求めよう。主はあしたの光のように必ず現れいで、冬の雨のように、わたしたちに臨み、春の雨のように地を潤される」(同六ノ一―三)。

サタンの力に捕らえられた罪人を救うための世々にわたる計画を見失ってしまった人々に対して、主は、回復と平和を与えると次のようにおおせになる。「わたしは彼らのそむきをいやし、喜んでこれを愛する。わたしの怒りは彼らを離れ去ったからである。わたしはイスラエルに対しては露のようになる。彼はゆりのように花咲き、ポプラのように根を張り、その枝は茂りひろがり、その麗しさはオリブの木のように、そのかんばしさはレバノンのようになる。彼らは帰って来て、わが陰に住み、園のように栄え、ぶどうの木のように花咲き、そのかんばしさはレバノンの酒のようになる。エフライムよ、わたしは偶像となんの係わりがあるうか。あなたに答え、あなたを顧みる者はわたしである。わたしは緑のいとすぎのようだ。あなたはわたしから実を得る。

知恵ある者はだれか。

その人にこれらのことを悟らせよ。

悟りある者はだれか。

その人にこれらのことを知らせよ。

主の道は直く、

正しき者はこれを歩む。

しかし罪びとはこれにつまずく」。

(ホセア書一四ノ四―九)

神を求めることの利益が、大いに強調された。主は招いておられる。「あなたがたはわたしを求めよ、そして生きよ。ベテルを求めるな、ギルガルに行くな。ベエルシバにおもむくな。ギルガルは必ず捕えられて行き、ベテルは無に帰するからである」。

「善を求めよ、悪を求めるな。そうすればあなたがたは生きることができる。またあなたがたが言うように、万軍の神、主はあなたがたと共におられる。悪を憎み、善を愛し、門で公義を立てよ。万軍の神、主は、あるいはヨセフの残りの者をあわれまれるであろう」(アモス書五ノ四、五、一四、一五)。

この招きの言葉を聞いた人々の大部分は、それによって利益を受けることを拒んだ。神の使者たちの言葉は、悔い改めない人々の邪悪な欲望とは非常に異なっていたので、ベテルの偶像礼拝の祭司は、イスラエルの王に使者をつかわして、「イスラエルの家のただ中で、アモスはあなたにそびえました。この地は彼のもるもるの言葉に耐えることができません」と言ったほどであった(同七ノ一〇)。

主は、ホセアによって、次のように言われた。「わたしがイスラエルをいやすとき、エフライムの不義と、サマリヤの悪しきわざとは現れる」。「イスラエルの誇は自らに向かって証言している、彼らはこのもるもるの事があっても、なおその神、主に帰らず」(ホセア書七ノ一、一〇)。

主は、世々にわたって、かたくなな神の民を耐え忍んでこられた。そして、今でさえ、大胆不敵な反逆にもかかわらず、喜んで彼らを救おうとする神としてご自身をあらわすことを好まれたのである。「エフライムよ、わたしはあなたに何をしようか。ユダよ、わたしはあなたに何をしようか。あなたがたの愛はあしたの雲のごとく、

また、たちまち消える露のようなものである」と主は叫ばれた(同六ノ四)。

国中に広がった罪悪は、どうにもできなくなった。そして、イスラエルには、恐るべき宣告が下された。「エフライムは偶像に結びつらなった。そのなすにまかせよ」。「刑罰の日は来た。報いの日は来た。イスラエルはこれを知る」(同四ノ一七、九ノ七)。

イスラエルの十部族は、今や、ベテルとダンに別の神のための祭壇を築いたことから起こった背信の実を刈り取らなければならなかった。神は、彼らに言われた。「サマリヤよ、わたしはあなたの子牛を忌みきらう。わたしの怒りは彼らに向かつて燃える。彼らはいつになればイスラエルで罪なき者となるであろうか。これは工人の作ったもので、神ではない。サマリヤの子牛は砕けて粉となる」。「サマリヤの住民は、ベテアベンの子牛のためにおののき、その民はこれがために嘆き、その偶像に仕える祭司たちは、…泣き悲しむ。その子牛はアッスリヤに携えられ、礼物として大王(セナケリブ)にささげられ」る(同八ノ五、六、一〇ノ五、六)。

『見よ、主なる神の目はこの罪を犯した国の上に注がれている。わたしはこれを地のおもてから断ち滅ぼす。しかし、わたしはヤコブの家をことごとくは滅ぼさない』と主は言われる。『見よ、わたしは命じて、人がふるいで物をふるうように、わたしはイスラエルの家を万国民のうちでふるう。ひと粒も地に落ちることはない。わが民の罪びと、すなわち、「災はわれわれに近づかない、われわれに臨まない」と言う者どもはみな、つるぎで殺される』(アモス書九ノ八一―一〇)。

『わたしはまた冬の家と夏の家とを撃つ、象牙の家は滅び、大いなる家は消えうせる』と主は言われる。「万軍の神、主が地に触れられると、地は溶け、その中に住む者はみな嘆く。『あなたのむすこ、娘たちはつるぎ

に倒れ、あなたの地は測りなわで分かれたる。そしてあなたは汚れた地で死に、イスラエルは必ず捕えられて行って、その国を離れる。「わたしはこれを行うゆえ、イスラエルよ、あなたの神に会う備えをせよ」(アモス書三ノ一五、九ノ五、七ノ一七、四ノ一二)。

予告されたこれらの刑罰は、しばらくの間、止められた。そして、ヤラバアム二世の長い治世の間、イスラエル軍は、大勝利を収めた。しかし、この一見、繁栄と思われた時においても、悔い改めない者たちの心には、なんの変化も起こらなかった。そして、ついに次の宣告が下されたのである。「ヤラバアムはつるぎによって死ぬ、イスラエルは必ず捕えられて行って、その国を離れる」(同七ノ一一)。

この大胆な宣言も、王や人々に何のききめもなかった。彼らは、このようにかたくなになっていたのである。ベテルの偶像礼拝の祭司たちの指導者アマジヤは、預言者が、国家と王に対して語った率直な言葉に心を動かされて、アモスに言った。「先見者よ、行ってユダの地にのがれ、かの地でパンを食べ、かの地で預言せよ。しかしベテルでは二度と預言してはならない。ここは王の聖所、国の宮だから」(同七ノ一二、一二三)。

これに向かって、預言者アモスは、断固として答えた「主はこう言われる、…イスラエルは必ず捕えられて行く」(同七ノ一七)。

背信した部族に対して語られた言葉は、文字通りに成就した。しかし、王国の崩壊は、徐々にやって来た。主は、刑罰を下すにあたって、彼らをあわれまれた。まず第一に「アッスリヤの王プルが国に攻めてきた」時、当時のイスラエルの王メナヘムは、捕虜とはならず、アッスリヤ帝国内の属国として、王位にとどまることを許された。「メナヘムは銀一千タラントをプルに与えた。これは彼がプルの助けを得て、国を自分の手のうちに強



ヒザキヤ王と王子はイスラエルとユダヤに使者を送り、神に対して悔い改め、服従し、過越祭に集まるよう求めた。

くするためであった。すなわちメナヘムはその銀をイスラエルのすべての富める者に課し、その人々におのの銀五十シケルを出させてアッスリヤの王に与えた」（列王紀下一五ノ一九、二〇）。アッスリヤ人は、十部族に屈辱を与えて、しばらく自国へ引き上げた。

メナヘムは、王国に破滅をもたらした罪惡を悔い改めるどころか、「主の目の前に惡を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの罪を一生の間、離れなかった」（列王紀下一五ノ一八、二四、二八）。二十年治めた「ペカの世に」、アッスリヤの王テグラテピレセルは、イスラエルに侵入して、ガリラヤとヨルダンの東に住んでいた部族から多くの捕虜を連れ去った。「ルベンびとと、ガドびとと、マナセの半部族」と、その他に、「ギレアド、ガリラヤ、ナフタリの全地」の住民たちが、パレスチナを遠く離れた異教の地に散らされたのである（歴代志上五ノ二六、列王紀下一五ノ二九）。

北王国は、この恐るべき一撃から二度と立ち上がることができなかった。あとに残った弱者たちは、すでに実権は失ったけれども、政府の形態を保つことができた。ペカの次には、ただもうひとりの王ホセアが続いただけであった。やがて、王国は、永遠に滅ぼされてしまうのであった。しかし、そうした悲しみと苦難の時にあって、神はなお、彼らをあわれんで、再び偶像礼拝から立ち返る機会をお与えになった。ホセアの治世の第三年に、よき王ヒゼキヤがユダを治めるようになり、直ちにエルサレムの神殿の礼拝の重要な改革を行った。過越の祭りが行われることになった。そして、この祭りには、ヒゼキヤが油を注がれて王となったユダとベニヤミンの部族だけでなく、北王国のすべての部族もまた招かれたのであった。「この事を定めて、ベエルシバからダンまでイスラエルにあまねくふれし、エルサレムに来て、イスラエルの神、主に過越の祭を行うことを勧めた。これは

しるされているように、これを行う者が多くなかったゆえである。

そこで飛脚たちは、王とそのつかさたちから受けた手紙をもって、イスラエルとユダをあまねく行き巡り、王の命を伝えて言った、『イスラエルの人々よ、あなたがたはアブラハム、イサク、イスラエルの神、主に立ち返りなさい。そうすれば主は、アッシリヤの王たちの手からのがれた残りのあなたがたに、帰られるでしょう。…あなたがたの父たちのように強情にならないで、主に帰服し、主がとこしえに聖別された聖所に入り、あなたがたの神、主に仕えなさい。そうすれば、その激しい怒りがあなたがたを離れるでしょう。もしあなたがたが主に立ち返るならば、あなたがたの兄弟および子供は、これを捕えていった者の前にあわれみを得て、この国に帰ることができるよう。あなたがたの神、主は恵みあり、あわれみある方であられるゆえ、あなたがたが彼に立ち返るならば、顔をあなたがたにそむけられることはありません』（歴代志下三〇ノ五―九）。

ヒゼキヤが送り出した使者たちは、「エフライムとマナセの国にはいつて、町から町に行き巡り、ついに、ゼブルンまで行った」。イスラエルは、この招待が、悔い改めて、神に立ち返るようという訴えであることを認めるべきであった。しかし、かつては繁栄した北王国の領内に住んでいた十部族の残りの者たちは、ユダから遣わされて来た王の使者たちを冷淡に扱い、軽蔑さえしたのである。「人々はこれをあざけり笑った」。しかし、わずかながら、喜んでこれに答えたものもあった。「ただしアセル、マナセ、ゼブルンのうちには身を低くして、…種入れぬパンの祭を行うため…エルサレムにきた人々もあった」（同三〇ノ一〇―一三）。

それから二年ほど経過して、サマリヤは、シャルマネゼルの指揮下のアッシリヤの軍勢に包囲された。それに続いた包囲攻撃において、多くの人々が、剣と同様に飢えと病気のために悲惨な死に方をした。町と国家とは崩

壊した。そして、十部族の残りの者たちは、アッスリヤ帝国の各地に離散したのである。

北王国の陥った破滅は、天からの直接の刑罰であった。アッスリヤ人は、神がご自分の目的を達成させるためにお用いになった器に過ぎなかった。サマリヤが陥落する少し前に預言し始めたイザヤによって、主はアッスリヤの軍勢が、「わたしの怒りのつえ」であると言われた。「彼らの手にあるものは、わたしの憤り」であると主は言われた(イザヤ書一〇ノ五新改訳)。

イスラエルの人々は、はなはだしく「その神、主にむかつて罪を犯し、…悪事を行って」「彼らは聞きいれず、…主の定めを捨て、主が彼らの先祖たちと結ばれた契約を破り、また彼らに与えられた警告を軽んじ」た。「彼らはその神、主のすべての戒めを捨て、自分のために二つの子牛の像を鑄て造り、またアシラ像を造り、天の万象を拝み、かつバアルに仕え」、頑強に悔い改めることを拒み続けたために、「主は…彼らを苦しめ、彼らを略奪者の手にわたして、ついに彼らを見前から打ちすてられた」。「ついに主はそのしもべである預言者たちによって」明らかに警告されたとおりになさった(列王紀下一七ノ七一、一四、一五、一六、二〇、二三)。

「こうしてイスラエルは自分の国からアッスリヤに移され」た。「これは彼らがその神、主の言葉にしたがわず、その契約を破り、主のしもべモーセの命じたすべての事に耳を傾けず、また行わなかったからである」(同一七ノ二三下句、一八ノ一二)。

主は、十二部族に下った恐るべき刑罰の中に、賢明であわれみ深いご計画を秘めておられた。神は、先祖たちの地においては、もはや彼らに実行させ得なくなったことを、異邦人の間に彼らを離散させることによって達成しようとなさったのである。人類の救い主によって、ゆるしを受けようとするすべての者に対する神の救いの計

画は、なお達成されなければならなかった。そして、イスラエルに与えられる苦難によって、神は、神の栄光が地の諸国にあらわされる道を備えておられたのである。捕らえられて行った者が、みな悔い改めなかったのではなかった。彼らの中には、神に忠実に仕えたものがあり、神の前にみづからを低くした者があった。このような「生ける神の子」によって、神は、アッシリヤ帝国の大群衆に、神の品性の特質と神の律法の恵み深さをお知らせになるのであった（ホセア書一ノ一〇）。

第二十四章 破滅を定めるもの

イスラエルに対する神の恵みは、常に、彼らの服従が条件となっていた。彼らは、シナイ山のふもとで、神と契約関係を結び、「すべての民にまさって」、神の宝となつたのである。彼らは、厳粛に、服従の道を歩くことを約束したのであつた。「われわれは主が言われたことを、みな行います」と彼らは言つた（出エジプト記一九ノ五、八）。それから数日後に、神の律法がシナイから語られ、そして、定めとおきてという形で追加的教えが、モーセによって与えられたときに、イスラエルの人々は、声を合わせて、「わたしたちは主の仰せられた言葉を皆、行います」と、もう一度、約束したのであつた。契約の批准が行われたとき、人々は、再び「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います」と心を合わせて宣言した（同二四ノ三、七）。神は、イスラエルを神の民として選ばれた。そして、彼らは、神を彼らの王として選んだのであつた。

荒野の放浪が終わりに近づいたとき、契約の条件が繰り返し返された。約束の国の国境のバル・ペオルにおいて、多くの者が巧妙な誘惑のえじきとなつたのであるが、残つた忠実な人々は、彼らの忠誠の誓いを新たにした。彼

らは、将来彼らを襲ってくる誘惑についての警告をモーセから受けた。そして、彼らは、周囲の国々から分離し、ただ神のみを礼拝するようにと、熱心に説きすすめられた。

モーセは、イスラエルに教えて言った。「いま、わたしがあなたがたに教える定めと、おきてとを聞いて、これを行いなさい。そうすれば、あなたがたは生きることができ、あなたがたの先祖の神、主が賜わる地にはいつて、それを自分のものとすることができよう。わたしがあなたがたに命じる言葉に付け加えてはならない。また減らしてはならない。わたしが命じるあなたがたの神、主の命令を守ることである。…あなたがたは、これを守って行わなければならない。これは、もろもろの民にあなたがたの知恵、また知識を示す事である。彼らは、このもろもろの定めを聞いて、『この大いなる国民は、まことに知恵あり、知識ある民である』と言つてあるう」(申命記四ノ一―六)。

イスラエルの人々は、神の戒めを見失わないように特に命じられていた。戒めに従うときに、彼らは、力と祝福を受けるのであった。モーセを通じて、彼らには、次のような主の言葉が与えられていた。「ただあなたはみずから慎み、またあなた自身をよく守りなさい。そして目に見たことを忘れず、生きながらえている間、それらの事をあなたの心から離してはならない。またそれらのことを、あなたの子孫に知らせなければならぬ」(同四ノ九)。シナイにおいて律法が与えられたときの恐るべき光景は、忘れてはならないものであった。周囲の国々の間に広がっていた偶像礼拝の習慣に対してイスラエルに与えられた警告は、明白で決定的なものであった。次の勧告が与えられた。「それゆえ、あなたがたはみずから深く慎まなければならない。…それであなたがたは道を誤って、自分のために、どんな形の刻んだ像をも造ってはならない」。「あなたはまた目を上げて天を望み、

日、月、星すなわちすべて天の万象を見、誘惑されてそれを拝み、それに仕えてはならない。それらのものは、あなたの神、主が全天下の万民に分けられたものである。「あなたがたは憤み、あなたがたの神、主があなたがたと結ばれた契約を忘れて、あなたの神、主が禁じられたどんな形の刻んだ像をも造ってはならない」(申命記四ノ一五、一六、一九、二三)。

モーセは、主の戒めから離れる結果生じる災いを描写した。もし人々が長く約束の地に住んだあとで、もしも腐敗した礼拝の形をとりいれて、刻んだ像を拝み、真の神の礼拝に立ち返ることを拒むならば、主は彼らに対して怒りを発し、彼らは捕らえられて行って、異教徒の間に離散するであろうと、天と地とを証人として、モーセは宣言したのである。「あなたがたはヨルダンを渡って行って獲る地から、たちまち全滅するであろう。あなたがたはその所で長く命を保つことができず、全く滅ぼされるであろう。主はあなたがたを国々に散らされるであろう。そして主があなたがたを追いやられる国民のうちに、あなたがたの残る者の数は少ないであろう。その所であなたがたは人が手で作った、見ることも、聞くことも、食べることも、かぐこともない木や石の神々に仕えるであろう」(同四ノ二六―二八)。

この預言は、士師の時代に部分的に成就したが、イスラエルがアッスリヤの捕囚になり、そしてユダがバビロンの捕囚になった時に、もっと完全に文字通りに成就した。

イスラエルは、徐々に背信していった。サタンは、世々にわたって、選民がいつまでも守ると約束した「命令と、定めと、おきて」を彼らに忘れさせようと繰り返し努力した(同六ノ一)。もし、サタンがイスラエルに神を忘れさせ、「他の神々に従い、これに仕え、これを拝む」ようにさせるならば、彼らは「きつと滅びる」ことを、

サタンは知っていた(同八ノ一九)。

しかし、神は、「罰すべき者をば決してゆるさ」ないが、その栄光は、「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まことの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」であるという、神のあわれみ深い性質を、この地上の神の教会の敵は、十分に考慮していなかった(出エジプト記三四ノ六、七)。イスラエルに対する神のみこころをゆがめようとサタンが努力し、悪の勢力が、勝利を勝ち得たかと思われる人類歴史の最も暗黒な時代においてさえ、主は、その恵み深さをあらわされたのである。主は、国家に繁栄をもたらすものが何であるかをイスラエルの前にお示しになった。主は、ホセアによって言われた。「わたしは彼のために、あまたの律法を書きしるしたが、これはかえって怪しい物のように思われた」。「わたしはエフライムに歩むことを教え、彼らをわたしの腕にいだいた。しかし彼らはわたしにいやされた事を知らなかった」(ホセア書八ノ一二、一三)。主は、あわれみ深く彼らをあしらい、彼の預言者たちによって、規則に規則、教訓に教訓をお教えになったのである。

もしイスラエルが、預言者たちの言葉を聞いたならば、彼らは、その後の屈辱を受けずにすんだのである。神が、彼らをやむを得ず捕囚とならせられたのは、彼らが、あくまでも神に離反しつづけたからであった。神は、ホセアを通して、次のような言葉を彼らに送られた。「わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたは知識を捨てたゆえに、わたしもあなたを捨てる。…あなたはあなたの神の律法を忘れた」(同四ノ六)。

どの時代においても、神の律法を犯せば、同じ結果がそれに伴ったのである。正義の原則が、すべて無視されて、罪悪がはなはだしくなって、神がそれに耐えられなくなれたときに、「わたしが創造した人を地のおもて

からぬぐい去ろう」という命令が出された(創世記六ノ七)。アブラハムの時代に、ソドムの人々は、神と神の律法に公然と反抗した。そして彼らは、洪水前の世界の特徴であった同じ罪悪と同じ腐敗と同じようなはなはだしき放縦に陥った。ソドムの住民は、神の忍耐の限界を越えた。そして、彼らに対して、神の報復の火が燃やされたのである。

イスラエルの十部族が捕囚になる前も、同様の不服従と同様の罪悪が行われた時代であった。神の律法は、無意味なものと考えられた。そして、これがイスラエルに罪悪の潮流を流れ込ませたのである。ホセアは言った。「主はこの地に住む者と争われる。この地には真実がなく、愛情がなく、また神を知ることもないからである。ただのろいと、偽りと、人殺しと、盗みと、姦淫することのみで、人々は皆荒れ狂い、殺害に殺害が続いている」

(ホセア書四ノ一、二)。

アモスとホセアが語った審判の預言には、将来の栄光の預言も伴っている。長く反逆を続けて悔い改めなかった十部族に対しては、パレスチナにおいて以前の権力を完全に回復する約束は、与えられなかった。彼らは、時の終わりに至るまで、「もろもろの国民のうちに、さすらい人となる」のであった。しかし、地上歴史の最後に、神の民に対して行われる最終的回復においては、彼らもそれに参加する特権が与えられるという預言が、ホセアによつて与えられた。その時キリストは、王の王、主の主としてお現れになるのである。十部族は、「多くの日の間、王なく、君なく、犠牲なく、柱なく、エポデおよびテラピムもなく過ごす。そしてその後、イスラエルの子らは帰って来て、その神、主と、その王ダビデとをたずね求め、終りの日におののいて、主とその恵みに向かって来る」とホセアは言った(同三ノ四、五)。

約束の地において、イスラエルが神に忠誠をつくしたときに与えられた祝福が、悔い改めて、地上の神の教会に加わるすべての者に回復されるという神の計画をホセアは象徴的言葉によって、十部族に語ったのである。主は、ご自分がイスラエルにあわれみを示すことを望んでいることを述べて、次のように言われた。「わたしは彼女をいざなうて、荒野に導いて行き、ねんごろに彼女に語ろう。その所でわたしは彼女にそのぶどう畑を与え、アコルの谷を望みの門として与える。その所で彼女は若かった日のように、エジプトの国からのぼって来た時のように、答えるであろう。主は言われる、その日には、あなたはわたしを『わが夫』と呼び、もはや『わがバアル』とは呼ばない。わたしはもろもろのバアルの名を彼女の口から取り除き、重ねてその名をとなえることのないようにする」(同二ノ一四―一七)。

この地上歴史の最後の時代において、神の戒めを守る人々との神の契約が更新される。「その日には、わたしはまたあなたのために野の獣、空の鳥および地の這うものと契約を結び、また弓と、つるぎと、戦争とを地から断つて、あなたを安らかに伏させる。またわたしは永遠にあなたとちぎりを結ぶ。すなわち正義と、公平と、いつくしみと、あわれみとをもってちぎりを結ぶ。わたしは真実をもって、あなたとちぎりを結ぶ。そしてあなたは主を知るであろう。

主は言われる、その日わたしは天に答え、天は地に答える。地は穀物と酒と油とに答え、またこれらのものはエズレルに答える。わたしはわたしのために彼を地にまき、あわれまれぬ者をあわれみ、わたしの民でない者に向かつて、『あなたはわたしの民である』と言い、彼は『あなたはわたしの神である』と言う」(同二ノ一八一―一八二)。

「その日にはイスラエルの残りの者と、ヤコブの家の生き残った者とは、…真心をもってイスラエルの聖者、主にたよ」る（イザヤ書一〇ノ二〇）。「あらゆる国民、部族、国語、民族」のなかから、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」という使命に喜んで答える人々があらわれる。彼らは、彼らを地に結びつけるすべての偶像を離れて、「天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝」む。彼らは、すべての束縛から解放されて、神の恵みの記念として世界の前立つのである。神のご要求に対する服従によって、彼らは、「神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける」者として、天使からも、人々からも認められる（黙示録一四ノ六、七、一二）。

「主は言われる、

『見よ、このような時が来る。』

その時には、耕す者は刈る者に相継ぎ、

ぶどうを踏む者は種まく者に相継ぐ。

もろもろの山にはうまい酒がしたり、

もろもろの丘は溶けて流れる。

わたしはわが民イスラエルの幸福をもとに返す。

彼らは荒れた町々を建てて住みへ

ぶどう畑を作ってその酒を飲み、

園を作ってその実を食べる。

わたしは彼らをその地に植えつける。
彼らはわたしが与えた地から
再び抜きとられることはない』と
あなたの神、主は言われる」。

(アモス書九ノ一三―一五)

第二十五章 預言者イザヤの召し

ウジヤ(アザリヤとも呼ばれた)が、ユダとベニヤミンの地を治めた長い期間は、約二世紀前のソロモンの死以来、他のどの王も達成することができなかった大いなる繁栄の時であった。王は、長年にわたって、賢明な統治を行った。彼の軍勢は、天の神の恵みによって、前に失った領地を部分的ではあるが取り返した。町々は再建され、防備を固められて、周囲の国々の間における国家の地位は、大いに強化された。商業は再開されて、国々の富が、エルサレムに流れ込んだ。ウジヤの名声は、「遠くまで広まった。彼が驚くほど神の助けを得て強くなったからである」(歴代志下二六ノ一五)。

ところが、この外面的繁栄には、それにふさわしい霊的能力のリバイバルが伴わなかった。神殿の務めは、以前と同様に続けられ、群衆は、生ける神の礼拝のために集まっていた。しかし、誇りと形式主義とが、徐々に、謙遜と誠実にとって代わった。ウジヤ自身について次のように書かれた。「ところが彼は強くなるに及んで、その心に高ぶり、ついに自分を滅ぼすに至った。すなわち彼はその神、主におかたて罪を犯し」た(同二六ノ一六)。

ウジヤにこのような悲惨な結果をもたらした罪は、僭越の罪であつた。王は、アロンの子孫以外は祭司の務めをしてはならないという主の明白な命令にそむいて、聖所にはいり、「香の祭壇の上に香をたこうとした」。大祭司アザリヤは、他の祭司たちと共に、王をいさめて、彼のしようとすることをやめさせようとした。「あなたは罪を犯しました。あなたは主なる神から栄光を得ることはできません」と彼らは訴えた(同二六ノ一六、一八)。

ウジヤは、王である彼が、このように譴責されたことを激しく怒つた。しかし、彼は、権威者たちの一致した反対を押し切つて、聖所を汚すことを許されなかつた。彼が、怒りを発して反逆し、そこに立っていたときに、彼は、突然、神の刑罰に打たれた。らい病が彼の額にあらわれたのである。彼は、うろたえて逃げ去り、二度と神殿にはいることはなかつた。ウジヤは、その後数年の間、彼が死ぬ日まで、らい病であつて、明白な、「主はこう仰せられる」という言葉にそむいた愚かさの生きた実例となつた。彼の高い地位も、彼の長年の奉仕も、彼がその治世の晩年を汚し、天の刑罰をもたらした僭越の罪を許す口実となることはできなかつた。

神は、人を偏り見るおかたではない。「しかし、国に生れた者でも、他国の人でも、故意に罪を犯す者は主を汚すもので、その人は民のうちから断たれなければならない」(民数記一五ノ三〇)。

ウジヤに下つた刑罰は、その息子に抑制力を及ぼしたようである。ヨタムは、彼の父の治世の晩年において、重い責任を負い、ウジヤの死後、王位についた。ヨタムについて次のように記されている。「彼は主の目にかなう事を行い、すべて父ウジヤの行つたようにおこなつた。ただし高き所は除かなかつたので、民はなおその高き所で犠牲をささげ、香をたいた」(列王紀下一五ノ三四、三五)。

ウジヤの治世は終わりに近づき、ヨタムは、すでに、多くの国事の重荷を負っていた。その時、まだ若かつた

けれども、王族の出であったイザヤは、預言者の務めに召されたのである。イザヤが働くように召された時代は、神の民にとって、特に危険に満ちていた。預言者は、北のイスラエルとスリヤの連合軍がユダを攻めるのを見、アッスリヤの軍勢が、国家の主要な町々の前に陣をしくのを見るのであった。彼の一生の間に、サマリヤは陥落し、イスラエルの十部族は、諸国の間に離散されるのであった。ユダは、アッスリヤの軍勢の度重なる侵略を受けて、エルサレムは包囲され、神が、奇跡的に手を下されるのでなければ、陥落してしまうのであった。南王国の平和を脅かす大きな危機がすでに迫っていた。神の保護は取り去られつつあった。そして、アッスリヤの軍勢は、今にもユダの国をのみつくそうとしていた。

しかし、圧倒的と思われた外部からの危険は、内部の危険ほど重大なものではなかった。主のしもべに、最も大きな困惑と最も深刻な失望を与えたのは、神の民のかたくなさであった。国々の間で光を掲げる者として立つべき者が、背信と反逆によって、神の刑罰を招いていた。北王国の速やかな滅亡を来たらせていた多くの罪惡、そして、ホセアやアモスが明白な言葉でそのころ告発したばかりの罪惡が、急速にユダ王国を腐敗させていた。

国民の社会情勢の展望は、特に失望的であった。人々は、利益を追求し、家に家を建て連ね、田畑に田畑をまし加えていた(イザヤ書五ノ八参照)。正義はゆがめられ、貧者に対するあわれみは示されなかった。このような惡に対して神は言われた。「貧しい者からかすめとった物は、あなたがたの家にある」。「なぜ、あなたがたはわが民を踏みじり、貧しい者の顔をすり砕くのか」(同三ノ一四、一五)。弱者を保証することが義務であった長官たちでさえ、貧者や困窮者、寡婦やみなしこの叫びに耳を傾けなかった(同一〇ノ一、二参照)。

圧迫と富が増し加わるにつれて、誇りと虚飾を愛する心が起こり、酒に酔い、酒宴にふけた(同二ノ一一、

一二、三ノ一六、一八一二三、五ノ二二、一一、一二参照)。そして、イザヤの時代においては、偶像礼拝それ自体は、もはや驚くに当たらなくなった(同二ノ八、九参照)。各階層に邪悪な風習が広く行きわたっていたので、神に忠実であつたわずかな人々は、誘惑に負けて気落ちし、失望落胆に陥るのであつた。イスラエルに対する神の目的は、失敗したかのように思われ、反逆した国家は、ソドム、ゴモラと同様の運命に陥るかのように思われたのである。

ウジヤの治世の晩年のこうした状態の下で、イザヤが、神の警告と譴責の使命をユダに伝えるように召されたときに、その責任を回避しようとしたのは驚くに当たらない。彼は、かたくなな抵抗に会うことをよく知っていた。彼が、事態に当面する自己の無能と彼が働きかけなければならない人々のかたくなさと不信とを考えたときに、彼の任務は、絶望的に思われるのであつた。彼は、失望して、その任務を放棄し、偶像礼拝をなすがままにユダを放任しておくべきであろうか。二ネベの神々が天の神に反抗して地を支配するのであるうか。

イザヤは、神殿の門に立っていたときに、このようなことを考えたのであつた。すると、突然、神殿の門と内の幕が引き上げられるように思われ、預言者の足でさえはいってはならない至聖所の中を見ることを許された。彼の前に主の幻があらわれ、主が高くあげられたみくらに座し、その栄光の衣のすそが神殿に満ちているのを見た。み座の両側には、セラピムが立ち、うやうやしくその顔をおおって創造主の前で務めを行い、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地に満つ」と声を合わせて厳肅に歌っていた。その呼ばわっている者の声によつて敷居の基が震い動き、神殿の中に賛美が満ちた(同六ノ三)。

イザヤが、この主の栄光と威光の啓示を見たときに、彼は、神の純潔さと神聖さとに圧倒された。彼の創造主

の無比の完全さと、自分も含めてイスラエルとユダの選民の中に長い間数えられていた人々の罪深い行いとの間には、なんと大きな相違があったことであろう。「わざわざいなるかな」と彼は叫んだ。「わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから」(イザヤ書六ノ五)。彼は、至聖所の中の神の臨在の満ちあふれる光の中に立ったように思われたので、もし彼自身の不完全さと無能さのままに放任されるとするならば、彼が、召された任務を完成することとは、とうてい不可能であると自覚した。しかし彼を苦悩から救い、彼を彼の大きいなる任務にふさわしい者とするために、セラフが送られた。セラフは、燃えている炭火を彼の口に触れて言った、「見よ、これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた」。「わたしはだれをつかわそうか。だれがわれわれのために行くだろうか」と言う神の声が聞こえた。イザヤは、それに答えて、「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」と言った(同六ノ七、八)。

天使は待っている使者に命じた。「あなたは行って、この民にこう言いなさい、

『あなたがたはくりかえし聞くがよい、

しかし悟ってはならない。

あなたがたはくりかえし見るがよい、

しかしわかつてはならない』と。

あなたはこの民の心を鈍くし、

その耳を聞えにくくし、その目を閉ざしなさい。

これは彼らがその目で見、その耳で聞き、

その心で悟り、

悔い改めていやされることのないためである」。

(同六ノ九、一〇)

預言者の義務は明らかであった。彼は、広く行われていた罪惡に抗議の声をあげなければならなかった。しかし、彼は、何かの希望の確証が与えられることなく働きに取りかかることを恐れた。彼は、「主よ、いつまでですか」とたずねた(同六ノ一一)。あなたの選民は、だれひとりとして、悟り、悔い改め、いやされることはないであろうか。道を誤ったユダの人々に対して彼が感じた魂の重荷は、おだではなかった。彼の任務は、全然実を結ばないというのではなかった。しかし、幾世代にもわたって、ふえひろがっていた罪惡は、彼の時代に取り除くことはできなかった。彼は、その一生を通じて、忍耐強く勇敢な教師となり、破滅の預言者であると共に、希望の預言者でなければならなかった。ついに、神のみこころはなしとげられ、彼の努力がすべて実って、神のすべての忠実な使命者たちの働きの結果が現れる。残りの者が救われる。反逆した国民に警告と訴えの使命が伝えられるのは、これが実現するためであると主は言われた。

「町には荒れすたれて、住む者もなく、

家には人かげもなく、国は全く荒れ地となり、

人々は主によって遠くへ移され、

荒れはてた所が国の中に多くなる時まで、

こうなっている」。

(イザヤ書六ノ一一、一二)

戦争、追放、圧迫、国家間における権力と威信の喪失などの厳しい刑罰が、悔い改めない者の上にくだろうとしていたのは、みな、人々が、その中に神の怒りのみ手を認めて、悔い改めに導かれるためであった。北王国の十部族は、間もなく、諸国の間に散らされ、彼らの町々は、荒廃するのであった。敵国の破壊的軍勢が、くりかえして彼らの国土を襲うのであった。ついに、エルサレムも陥落して、ユダは、捕らえられていくのであった。しかし、約束の地は、永久に捨て去られてしまうのではなかった。イザヤに対する天使の確証の言葉はこうであった。

「『その中に十分の一の残る者があっても、

これもまた焼き滅ぼされる。

テレビンの木またはかしの木が切り倒されるとき、

その切り株が残るように』。

聖なる種族はその切り株である」。

(同六ノ一三)

神のみこころが、最後に達成されるというこの確証によって、イザヤは、勇気づけられた。地上の強国がユダを攻めてきても何であろう。主の使命者が、反対と抵抗に会っても何であろう。イザヤは、万軍の主なる王を見、天使たちの歌を聞き、「その栄光は全地に満ちるのを見たのである。背信したユダに対する主の言葉には、心

を動かす聖霊の力が伴うという約束が与えられた。そして、預言者は、彼の前にある任務を遂行する力が与えられた(同六ノ三)。彼は、その長期に及ぶ困難な働きの全期間を通じて、常にこの幻の記憶を持ち続けた。彼は、六十年以上にわたって、希望の預言者として、ユダの人々の前に立ち、ますます勇敢に、教会の将来の勝利を預言したのである。

第二十六章 「あなたがたの神を見よ」

イザヤの時代には、神について誤った解釈がなされ、人類の靈的理解は暗かった。サタンは、長い間、創造主が、罪と苦しみと死の創始者であると人々に思わせてきた。こうして、サタンに欺かれた人々は、神をかたくなで、苛酷なおかたであると考えた。彼らは、神を、罪を非難して宣告を下すために目を見張り、援助せずともよい正当な理由がある限り、罪人を快く受け入れないもののように考えた。天は、愛の律法に支配されているのであるが、大欺瞞者はそれを人類の幸福を束縛するもの、重苦しいくびきであると誤表し、人類は律法から解放されることを喜ぶべきであると言った。戒めは守り得ないもので、罪に対する罰は、独断的に与えられたものであると彼は言った。

イスラエルの人々が、主の真のご品性を見失ってしまったことは、全く弁解のしようがないことであつた。神は、しばしば、ご自分を、「あわれみと恵みに富み、怒りをあそくし、いつくしみと、まことに豊かな神」として人々にあらわされた(詩篇八六ノ一五)。「わたしはイスラエルの幼い時、これを愛した。わたしはわが子を

エジプトから呼び出した」と彼はあかしされた(ホセア書一一ノ一)。

主は、慈愛深く、イスラエルをエジプトの奴隷から解放し、約束の国への旅を導かれた。「彼らのすべての悩みのとき、主も悩まれて、そのみ前の使をもって彼らを救い、その愛とあわれみによって彼らをあがない、いにしえの日、つねに彼らをもたげ、彼らを携えられた」(イザヤ書六三ノ九)。

「わたし自身が一緒に行くであろう」というのが、荒野の旅行中に与えられた約束であった(出エジプト記三三ノ一四)。この確証には、主のご品性の驚くべき啓示が伴っていた。モーセは、それによって、イスラエルのすべての民に神の恵みを宣言し、彼らの目に見えない王の属性について十分な教えを与えることができた。「主は彼の前を過ぎて宣べられた。『主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者、しかし、罰すべき者をば決してゆるさ』ない者(同三四ノ六、七)。約束の国の国境において、イスラエルの人々が神の命令に従って前進することを拒んだときに、モーセが彼らの命ごいをして驚くべき嘆願をしたのは、彼が主のいつくしみと彼の無限の愛とあわれみとを知っていたからであった。彼らの反逆がその頂点に達したときに主は、「わたしは疫病をもって彼らを撃ち滅ぼし」モーセの子孫を「彼らよりも大いなる強い国民としよう」と言われた(民数記一四ノ一二)。しかし、モーセは、選民のために神の驚くべき摂理と約束とが果たされることを嘆願した。そして、最も強力な嘆願として、彼は、墮落した人類に対する神の愛に訴えたのである(同一四ノ一七―一九参照)。

主は、恵み深くお答えになった。「わたしはあなたの言葉のとおりにゆるそう」。そして、それから、主は、預言の形でイスラエルの最後の勝利に関する神のみこころをモーセにお知らせになった。「わたしは生きている。

また主の栄光が、全世界に満ちている」と言われた(民数記一四ノ二〇、二二)。神の栄光、すなわち、モーセがイスラエルのために嘆願した神のいつくしみと慈悲深い愛という彼の品性が、全人類にあらわされるのであった。そして、主のこの約束は、二重に確かなものとされた。それは、誓いによって確認されたのである。主が生き、支配しておられる限り、「もろもろの国の中にその栄光をあらわし、もろもろの民の中にそのくすしきみわざをあらわ」されるのである(詩篇九六ノ三)。

輝くセラピムが、み座の前で、「その栄光は全地に満つ」と歌うのをイザヤが聞いたのは、この預言の将来の成就に関するものであった。イザヤは、これらの言葉が確かなことを固く信じて、木や石の像にひざまずいている人々が、「主の栄光を見、われわれの神の麗しさを見る」と彼自身、後に、大胆に宣言したのである(イザヤ書三五ノ二)。

今日、この預言は、急速に成就している。この地上における神の教会の伝道の働きは、豊かな実を結び、間もなく、福音は、すべての国々に宣べ伝えられるであろう。すべての部族、国語、民族の中からの人々が、「その愛する御子によって賜わった栄光ある恵みを…ほめたたえる」。「それは、キリスト・イエスにあってわたしたちに賜わった慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった」(エペソー一ノ六、二ノ七)。「イスラエルの神、主はほむべきかな。ただ主のみ、くすしきみわざをなされる。その光榮ある名はとこしえにほむべきかな。全地はその栄光をもって満たされるように」(詩篇七二ノ一八、一九)。

イザヤは、神殿の中で与えられた幻によって、イスラエルの神の品性をはっきりと知ることができた。「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖となえられる」かたが、大いなる威光の中で彼の前に現

れたのである。しかし、イザヤは、彼の主のあわれみ深い性質を理解することができた。「高く、聖なる所に住」むおかたが、「心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕けたる者の心をいかし」（イザヤ書五七ノ一五）。イザヤのくちびるに触れる任務を帯びた天使は、「あなたの悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた」という言葉を伝えた（同六ノ七）。

イザヤは、ダマスコの門におけるタルソのサウロのように、神を眺めて、自分自身の無価値なことを悟っただけではなかった。彼のへりくだった心に、完全で十分なゆるしの確証が与えられた。そして彼は、変化した人間として立ち上がった。彼は、彼の主を見たのである。彼は、神の品性の麗しさを眺めたのであった。彼は、無限の神の愛を眺めることによって起こった変化についてあかしをすることができた。その時以来、彼は、道を誤ったイスラエルが罪の重荷と罰から解放されるのを見たいという熱望を抱くようになった。「あなたがたは、どうして重ね重ねそおいて、なおも打たれようとするのか」とイザヤはたずねた。「さあ、われわれは互に論じよう。たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。」「あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをなら」え（同一ノ五、一八、一六、一七）。

彼らが、仕えると言いながら、その品性を誤解していた神が、彼らの前に、霊的病の大なる治癒者として示されたのである。頭はことごとく病み、心は全く弱り果てていても何であろうか。足の裏から頭まで、完全なところがなく、傷と打ち傷と生傷ばかりでも、それが何であろうか（イザヤ書一ノ六参照）。自分の心のままにかなかな道を歩いてきたものは、主に立ち返ることによっていやされることができ。主は言われる。『わたしは

彼の道を見た。わたしは彼をいやし、また彼を導き、慰めをもって彼に報いる。…遠い者にも近い者にも平安あれ、平安あれ、わたしは彼をいやそう』と主は言われる」(イザヤ書五七ノ一八、一九)。

イザヤは、神をすべての物の創造主として高めた。ユダの町々に対する彼の使命は、「あなたがたの神を見よ」であった(同四〇ノ九)。「天を創造してこれをのべ、地とそれに生ずるものをひらかれる…主なる神はこう言われる」。「わたしは主である。わたしはよろずの物を造り」、「わたしは光をつくり、また暗きを創造し」た。「わたしは地を造って、その上に人を創造した。わたしは手をもって天をのべ、その万軍を指揮した」(同四二ノ五、四四ノ二四、四五ノ七、一二)。「聖者は言われる、『それで、あなたがたは、わたしをだれにくらべ、わたしは、だれにひとしいというのか』。目を高くあげて、だが、これらのものを創造したかを見よ。主は数をしらべて万軍をひきいだし、おのおのをその名で呼ばれる。その勢いの大きいなるにより、またその力の強きがゆえに、一つも欠けることはない」(同四〇ノ二五、二六)。

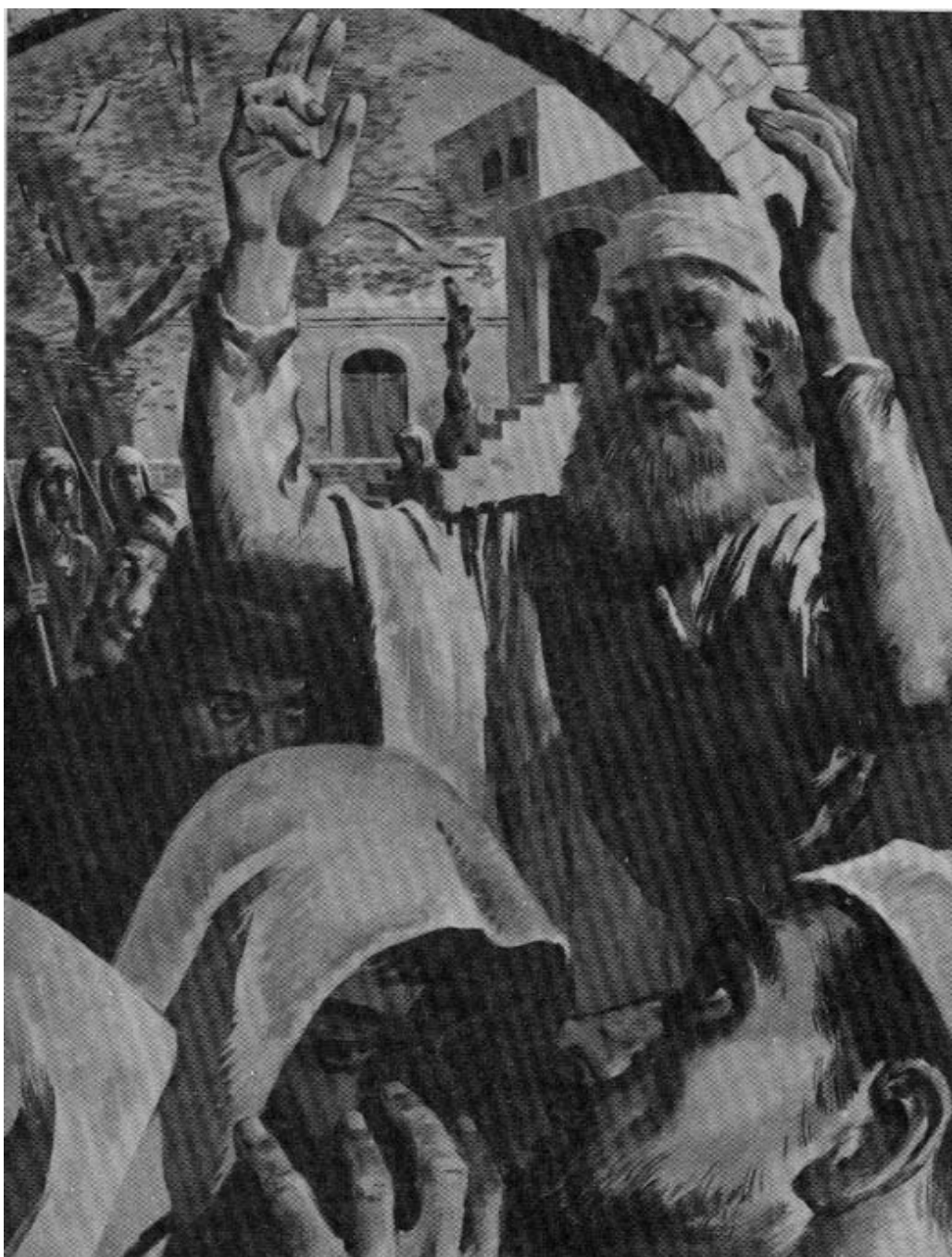
たとえ、神に立ち返っても、受け入れられないのではないかと恐れた人々に対して、イザヤは言った。

「ヤコブよ、何ゆえあなたは、『わが道は主に隠れている』と言うか。イスラエルよ、何ゆえあなたは、『わが訴えはわが神に顧みられない』と言うか。あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか。主はとこしえの神、地の果の創造者であって、弱ることなく、また疲れることなく、その知恵はかりがたい。弱った者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる。年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れはてて倒れる。しかし主を待ち望む者は新たな力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない」(同四〇ノ二七―三一)。

無限の愛の神は、自力ではサタンのわなから逃れることができないと考えている人々を助けたいと切望しておられる。そして、神のために生きる力を与えようと恵み深くも仰せになっている。「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、あなたが勝利の右の手をもって、あなたをささえる」。「あなたの神、主なるわたしはあなたの右の手をとってあなたに言う、『恐れてはならない、わたしはあなたを助ける』。主は言われる、『虫にひとしいヤコブよ、イスラエルの人々よ、恐れてはならない。わたしはあなたを助ける。あなたをあがなう者はイスラエルの聖者である』」(同四一ノ一〇、一三、一四)。

ユダの住民はみな無価値な人々であつたが、神は、彼らをお見捨てにならなかった。彼らによって、神のみ名が異邦の人々の間で高められなければならなかつた。神の属性が何であるかを全く知らないでいる多くの人々が、なお、神の品性の栄光を見なければならなかつた。神が、神のしもべたちである預言者たちを送って、「あなたがたはおの今その惡の道と悪い行いを捨てなさい」と言わせられたのは、神の恵み深いみこころを明らかにするためであつた(エレミヤ書二五ノ五)。神はイザヤを通して言われた。「わが名のために、わたしは怒りをおそくする。わが譽のために、わたしはこれをおさえて、あなたを断ち滅ぼすことをしない」。「わたしは自分のために、自分のためにこれを行う。どうしてわが名を汚させることができよう。わたしはわが栄光をほかの者に与えることをしない」(イザヤ書四八ノ九、一一)。

悔い改めの招きは、誤ることのできない明確さをもって発せられたので、すべてのものは、立ち返るように招かれたのである。預言者は言った、「あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおら



預言者イザヤは創造者である神をあがめた。この謙遜な使者はユダの町々をめぐり、「あなたがたの神を見よ」と語った。彼は人々に勇気と希望を与えた。

れるうちに呼び求めよ。悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」(イザヤ書五五ノ六、七)。

読者よ、あなたは、自分勝手な道を選んだであろうか。あなたは、神から遠くさ迷い出たであろうか。あなたは、罪の実を食べようとして、それがあなたのくちびるで灰に変わるのを経験したであろうか。もうあなたの人生の計画は挫折し、希望はうせ去り、ひとり寂しくすわって、惨めな思いにふけているであろうか。長くあなたに語りかけていたにもかかわらず、あなたが聞こうとしなかったあの声が、紛れもなくはっきりと聞こえてくる。「立つて去れ、これはあなたがたの休み場所ではない。これは汚れのゆえに滅びる。その滅びは悲惨な滅びだ」(ミカ書二ノ一〇)。あなたの天の父の家に帰れ。神は「わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなつたから」。「耳を傾け、わたしにきて聞け、そうすれば、あなたがたは生きることができる。わたしは、あなたがたと、とこしえの契約を立てて、ダビデに約束した変わらない確かな恵みを与える」と言っておあなたを招いておられる(イザヤ書四四ノ二三、五五ノ三)。

あなた自身を善良にし、神に近づくことができるほどに善い人間になるまで、キリストから離れているように言う敵の言葉に耳を傾けてはならない。その時まで待つならば、いつまでたっても、来ることはないであろう。サタンが、あなたの汚れた衣を指摘するならば、「わたしに来る者を決して拒みはしない」という救い主の約束を繰り返して言え(ヨハネ六ノ三七)。イエス・キリストの血は、すべての罪を清めるということを敵に告げよ。

「ヒソプをもって、わたしを清めてください、わたしは清くなるでしょう。わたしを洗ってください、わたしは雪よりも白くなるでしょう」というダビデの祈りを、あなたの祈りとされよ(詩篇五一ノ七)。

生ける神を眺め、神の恵み深いお言葉を受け入れるようにユダに訴えたイザヤの勧告は、むだにはならなかった。熱心に耳を傾けて、偶像礼拝をやめて、主の礼拝に立ち返った人々があつたのである。彼らは、彼らの創造主が、愛とあわれみといつくしみに満ちたおかたであることを悟った。そして、わずかの者が国内にとどまるという、ユダの歴史の来たるべき暗黒の日々において、預言者イザヤの言葉は実を結びつづけて、決定的改革を起こしたのである。イザヤは言った。「その日、人々はその造り主を仰ぎのぞみ、イスラエルの聖者に目をとめ、おのれの手のわざである祭壇を仰ぎのぞまず、おのれの指が造ったアシラ像と香の祭壇とに目をとめない」（イザヤ書一七ノ七、八）。

多くの人々は、ことごとく麗しく、万人にぬきんでおられるおかたをながめるのであつた。「あなたの目は麗しく飾った王を見」という恵み深い約束が彼らに与えられた（同三三ノ一七）。彼らの罪はゆるされ、彼らは、ただ神のみを誇りとするようになるのであつた。偶像礼拝からあがなわれるその喜ばしい日において、彼らは叫ぶのである。「主は威厳をもつてかしこにいまし、われわれのために広い川と流れのある所となり、主はわれわれのさばき主、主はわれわれのつかさ、主はわれわれの王であつて、われわれを救われる」（同三三ノ二一、二二）。

悪い道を離れる者に伝えたイザヤの使命は、慰めと励ましに満ちたものであつた。主の預言者によって語られた主の言葉を聞いてみよう。

「ヤコブよ、イスラエルよ、これらの事を心にとめよ。

あなたはわがしもべだから。

わたしはあなたを造った、

あなたはわがしもべだ。

イスラエルよ、わたしはあなたを忘れない。

わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、

あなたの罪を霧のように消した。

わたしに立ち返れ、

わたしはあなたをあがなったから」。

(同四四ノ二一、二二)

「その日あなたは言う、

『主よ、わたしはあなたに感謝します。

あなたは、さきにわたしにむかつて怒られたが、

その怒りはやんで、わたしを慰められたからです。

見よ、神はわが救である。

わたしは信頼して恐れることはない。

主なる神はわが力、わが歌であり、

わが救となられたからである』。…

『主をほめうたえ。

主はそのみわざを、みごとになし遂げられたから。

これを全地に宣べ伝えよ。

シオンに住む者よ、声をあげて、喜びうたえ。

イスラエルの聖者はあなたがたのうちで

大いなる者だから』」。

（イザヤ書一二章）

第二十七章 大国に援助を求めたアハズ王

アハズが王位につくことによって、イザヤとその仲間たちは、ユダ国内において、これまで当面したこともない恐るべき事態に直面することになった。これまで偶像礼拝の習慣の魅力に抵抗してきた人々の多くが、異教の神々の礼拝に参加するように説き伏せられていたのである。イスラエルの君たちは、彼らに負わせられた信任にそびえていた。偽りの預言者が起こって、人々を背信に導く言葉を語った。祭司の中には、価をとって教える者さえあった。それにもかかわらず、背信の指導者たちは、なお、神の礼拝の形式を保持して、自分たちは神の民に属すると主張していた。

こうした騒然とした時代にあかしを立てた預言者ミカは、シオンの罪人たちは、「主に寄り頼んで」いると主張し、「主はわれわれの中におられるではないか、だから災はわれわれに臨むことがない」と豪語して神の名を汚しながら、「血をもってシオンを建て、不義をもってエルサレムを建てた」のであると断言した（ミカ書三ノ一一、一〇）。預言者イザヤは、こうした罪惡に対して、厳しい譴責の声をあげた。「あなたがたソドムのつかさ

たちよ、主の言葉を聞け。あなたがたゴモラの民よ、われわれの神の教に耳を傾けよ。主は言われる、『あなたがたがささげる多くの犠牲は、わたしになんの益があるか。…あなたがたは、わたしにまみえようとして来るが、だれが、わたしの庭を踏み荒すことを求めたか』（イザヤ書一ノ〇―一二）。

「悪しき者の供え物は憎まれる、悪意をもってささげる時はなおさらである」と聖書に書いてある（箴言二一ノ二七）。天の神は、「目が清く、悪を見られない者」であり、「また不義を見られない者である」（ハバクク書一ノ一三）。神が、罪人に背を向けられるのは、神が快くおゆるしにならないからではない。神が、罪から救うことがおできにならないのは、罪人が、豊かに備えられた恵みを活用することを拒むからである。「見よ、主の手が短くて、救い得ないのではない。その耳が鈍くて聞き得ないのではない。ただ、あなたがたの不義があなたがたと、あなたがたの神との間を隔てたのだ。またあなたがたの罪が主の顔をおおったために、お聞きにならないのだ」（イザヤ書五九ノ一、一二）。

「あなたの王はわらべであって…あなたはわざわいだ」とソロモンは書いた（伝道の書一〇ノ一六）。ユダの国は、このような状態にあったのである。ユダの国の王たちは、罪を続けて子供のようにになっていた。イザヤは諸国間における彼らの地位が衰えたことに人々の注目をひき、それが、地位の高い者たちの罪惡の結果であることを示した。彼は言った。「見よ、主、万軍の主はエルサレムとユダからささえとなり、頼みとなるもの――すべてささえとなるパン、すべてささえとなる水――を取り去られる。すなわち勇士と軍人、裁判官と預言者、占い師と長老、五十人の長と身分の高い人、議官と巧みな魔術師、老練なまじない師を取り去られる。わたしはわらべを立てて彼らの君とし、みどりごに彼らを治めさせる」。「これは彼らの言葉と行いとが主にそむき…エル

サレムはつまずき、ユダは倒れたからである」(イザヤ書三ノ一四、八)。

「ああ、わが民よ、あなたを導く者はかえって、あなたを迷わせ、あなたの行くべき道を混乱させる」と預言者は続けて言った(同三ノ一二)。アハズの治世は、文字どおりにこの通りであった。彼について、次のように書かれている。彼は、「イスラエルの王たちの道に歩み、またもろもろのバアルのために鑄た像を造り、ベンヒンノムの谷で香をたき」、「また主がイスラエルの人々の前から追ひ払われた異邦人の憎むべきおこないにしたがって、自分の子を火に焼いてささげ物とした」(歴代志下二八ノ二、三、列王紀下一六ノ三)。

これは、実に選民にとって、一大危機の時代であった。わずか数年のうちに北の十部族は、異邦の諸国の間に離散されなければならなかった。そして、ユダ王国においても、前途は暗たんとしていた。善の勢力は急速に衰え、悪の勢力は増大していた。預言者ミカは、こうした事態をながめて、次のように叫ばずにはあらなかった。「神を敬う人は地に絶え、人のうちに正しい者はない」。「彼らの最もよい者もいばらのごとく、最も正しい者もいばらのいけがきのようだ」(ミカ書七ノ二、四)。「もし万軍の主が、われわれに少しの生存者を残されなかったなら、われわれはソドムのようになり、またゴモラと同じようになつたであらう」とイザヤは言った(イザヤ書一ノ九)。

神は、どの時代においても、忠実な者のためと同時に、誤りに陥った人々に対する無限の愛のゆえに、反逆者たちを長く忍び、彼らがその悪行を捨てて、神に立ち返るように促してこられたのである。神は、「教訓に教訓、教訓に教訓、規則に規則、規則に規則、ここにも少し、そこにも少し」というふうには、ご自身が選んだ人々によって、罪人に義の道をお教えになつた(同二八ノ一〇)。

アハズの時代も、このとおりであった。招きの声が次から次へと誤りに陥ったイスラエルに送られて、主に忠誠をつくすように訴えた。預言者たちは、慈悲深く人々に訴えた。彼らが、人々の前に立って、熱心に悔い改めと改革を勧告したときに、彼らの言葉は実を結んで神の栄光をあらわしたのである。

ミカは、次のような驚くべき訴えをした。「あなたがたは主の言われることを聞き、立ちあがって、もろもろの山の前に訴えをのべ、もろもろの丘にあなたの声を聞かせよ。もろもろの山よ、地の変ることなき基よ、主の言い争いを聞け。主はその民と言い争い、イスラエルと論争されるからである。

『わが民よ、わたしはあなたに何をなしたか、何によってあなたを疲れさせたか、わたしに答えよ。わたしはエジプトの国からあなたを導きのほり、奴隷の家からあなたをあがない出し、モーセ、アロンおよびミリアムをつかわして、あなたに先だたせた。

わが民よ、モアブの王バラクがたくらんだ事、ベオルの子バラムが彼に答えた事、シッテムからギルガルに至るまでに起った事どもを思い起せ。そうすれば、あなたは主の正義のみわざを知るであろう』（ミカ書六ノ一―五）。

われわれが仕える神は、長くお忍びになる。「主のいつくしみは絶えることがない」（哀歌三ノ二二）。神の霊は、猶予の期間を通じて、人々に生命の賜物を受け入れるように訴えてきた。「主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ。あなたがたは心を翻せ、心を翻してその悪しき道を離れよ。…あなたはどのようにして死んでよかうか」（エゼキエル書三三ノ一）。人々を罪に陥れ、力なく、希望のないままに、そこに放置して、ゆるしを求めることを恐れさせることが、サタ

ンの特別の策略である。しかし、神は、「わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」と招いておられる（イザヤ書二七ノ五）。キリストによって、すべての備えがなされ、すべての励ましが与えられているのである。

ユダとイスラエルの背信の時代において、多くの者は、次のようにたずねていた。「わたしは何をもって主のみ前に行き、高き神を拝すべきか。燔祭および当歳の子牛をもってそのみ前に行くべきか。主は数千の雄羊、万流の油を喜ばれるだろうか」。その答えは、明快で決定的なものであった。「人よ、彼はさきによい事のなんであるかをあなたに告げられた。主のあなたに求められることは、ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むことではないか」（ミカ書六ノ六―八）。

預言者が、実際の敬神深さの価値を強調したことは、幾世紀もの昔、イスラエルに与えられた勧告をくり返したに過ぎなかった。彼らが約束の国に入ろうとしていたときに、モーセによって与えられた主の言葉は、次のようなものであった。「イスラエルよ、今、あなたの神、主があなたに求められる事はなんであるか。ただこれだけである。すなわちあなたの神、主を恐れ、そのすべての道に歩んで、彼を愛し、心をつくし、精神をつくしてあなたの神、主に仕え、また、わたしがきょうあなたに命じる主の命令と定めとを守って、さいわいを得ることである」（申命記一〇ノ一二、一三）。各時代を通じて、これらの勧告は、主のしもべたちが、形式主義に陥り、あわれみを示すことを忘れる危険のある者に対して繰り返ししてきたのである。キリストご自身もこの地上の働きをしておられたときに、ある律法学者から次のような質問を受けた。「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切のですか」。イエスは言われた、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を

愛せよ。』これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。』これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」(マタイ二二ノ三六―四〇)。

預言者たちと主ご自身のこうした明白な言葉を、われわれは、すべての魂に対する神の声として受け入れなければならぬ。われわれは、重荷を負い、圧迫されている人々に対して、あわれみと思いやりに満ちた行為を行い、キリスト者的親切を示す機会を見失ってはならない。もしもわれわれが、何もすることができない場合には、まだ神を知らない人々に、勇気と希望の言葉を語ることができる。このような人々に最もたやすく近づくことができる方法は、同情と愛によってである。

他の人々の生活に喜びと祝福をもたらす機会を捕らえようと待ちかまえている者には、実に豊かな約束が与えられている。「飢えた者にあなたのパンを施し、苦しむ者の願いを満ち足らせるならば、あなたの光は暗きに輝き、あなたのやみは真昼のようになる。主は常にあなたを導き、良い物をもつてあなたの願いを満ち足らせ、あなたの骨を強くされる。あなたは潤った園のように、水の絶えない泉のようになる」(イザヤ書五八ノ一〇、一一)。

預言者たちの熱心な訴えにもかかわらず、アハズの行った偶像礼拝は、ただ一つの結果をもたらすよりほかなかった。「それゆえ、主の怒りはユダとエルサレムに臨み……主は彼らを恐れと驚きと物笑いにされた」(歴代志下二九ノ八)。王国は、急速に衰微し、やがて侵入軍のために、王国の存在そのものが危機にひんしたのである。「そのころ、スリヤの王レチンおよびレマリヤの子であるイスラエルの王ペカがエルサレムに攻め上って、アハズを囲んだ」(列王紀下一六ノ五)。



イザヤはアハズ王に懇めし希望を述べた。もし預言者たちが神の勅令に従うならば、王国は繁栄するところであつた。

もしアハズと王国の主だった人々が、至高者なる神の真のしもべたちであつたならば、彼らに対抗して形成されたこのような不自然な同盟に対して、何の恐れも抱く必要はなかった。しかし彼らは、繰り返し罪を犯して、力を失っていた。怒りを抱かれた神の刑罰に対する言いようのない不安にかられて、「王の心と民の心とは風に動かされる林の木のように動揺した」（イザヤ書七ノ二）。この危機において、ふるえる王におかれて、次のように言うことを命じる主の言葉がイザヤに与えられた。

「氣をつけて、静かにし、恐れてはならない。…スリヤはエフライムおよびレマリヤの子と共にあなたにむかつて悪い事を企てて言う、『われわれはユダに攻め上つて、これを脅かし、われわれのためにこれを破り取り、タビエルの子をその王にしよう』と。主なる神はこう言われる、この事は決して行われぬ、また起ることはない」。預言者は、イスラエル王国も、スリヤも共に間もなく滅びうせると宣言したのである。「もしあなたがたが信じないならば、立つことはできない」と預言者は、結論を下したのである（同七ノ四一七、九）。

もしアハズが、この言葉を天からのものとして受け入れたならば、ユダ王国は幸福だったことであらう。しかしアハズは、肉の腕に頼り、異邦人の助けを求めることにしたのである。彼は、自暴自棄に陥つて、アッシリヤの王、テグラテピレセルに使者をつかわして言わせた。「わたしはあなたのしもべ、あなたの子です。スリヤの王とイスラエルの王がわたしを攻め囲んでいます。どうぞ上つてきて、彼らの手からわたしを救い出してください」（列王紀下一六ノ七）。この願いには王の家の倉と神殿の倉庫から、おびただしい贈り物が伴っていた。

願い出た援助は与えられた。そして、アハズ王は一時、急場をしのぐことができた。しかし、それは、ユダにとってなんと大きな負担だったことであらう。アッシリヤに納めた貢ぎ物は、アッシリヤの貪欲心をかき立てた。

そして、この反逆的国家は、やがてユダを攻め略奪しようとするのであった。アハズと不幸な国民は、今や残忍なアッシリヤ人の手に完全に陥ってしまうのではないかと恐れたのである。

罪を犯し続けたために、「主がユダを低くされた」のである。こうした懲罰の時に、アハズは悔い改めるかわりに、「ますます主に罪を犯した。…彼は…ダマス」の神々に、犠牲をささげ」た。「スリヤの王たちの神はその王たちを助けるから、わたしもそれに犠牲をささげよう」と彼は言った(歴代志下二八ノ一九、二二、二三)。

背信した王は、その治世の終わりが近づいたときに、神殿の扉を閉じさせた。聖なる儀式は中断された。祭壇の前に燭台の灯はもはや燃えなくなつた。人々の罪のための犠牲は、もはや献げられなくなつた。朝と夕方の犠牲を献げるときに、もう香は上にのぼっていかなくなつた。神の家の庭を去り、その扉を固く閉ざして、神を敬わない町の住民たちは、エルサレムの至るところの町角に異教の神々の礼拝のための祭壇を、臆面もなく建てたのである。異教の神々の礼拝が、勝利したかのように思われた。暗黒の力は、ほとんど勝ち誇つたのである。

しかしユダの中には、主に忠誠を保ち、偶像礼拝に陥ることを固く拒んでいた人々が住んでいた。アハズの晩年に行われた破壊を見渡したときにも、イザヤ、ミカおよび彼らの仲間たちは、これらの人々に彼らの希望をつないだのである。彼らの聖所は閉じられた。しかし、忠実な人々には、「神がわれわれと共におられる」という確証が与えられた。「あなたがたは、ただ万軍の主を聖として、彼をかしこみ、彼を恐れなければならない。主は…聖所とな」られる(イザヤ書八ノ一〇、一三、一四)。

第二十八章 熱心な改革者ヒゼキヤ王

アハズの無謀な統治とは、大いに対照的に、彼の子、ヒゼキヤの栄えた治世に改革が起こったのである。ヒゼキヤは、北王国が陥っていた運命から、ユダを救おうと全力をつくす決意をもって王位についた。預言者たちの言葉は、中途半端な対策を奨励するものではなかった。最も決定的な改革によってのみ、切迫しつつあった刑罰を避けることができたのである。

この危機において、ヒゼキヤは、機会の人であつた。彼は、王位につくや否や、計画を立て、それを実行し始めた。彼はまず、長い間行われていなかった神殿の務めを回復することに心を向けた。そして、彼は、この仕事をやるに当たって、聖職に忠誠を保っていた一群の祭司たちとレビ人たちの協力を熱心に求めた。ヒゼキヤは、彼らの忠実な支持を得ることを確信して、彼が直ちに遠大な改革を行おうと願っていることを、率直に彼らに語った。「われわれの先祖は罪を犯し、われわれの神、主の悪と見られることを行つて、主を捨て、主のすまいに顔をそむけ、うしろを向けた。」「今わたしは、イスラエルの神、主と契約を結ぶ志をもっている。そうすればそ

の激しい怒りは、われわれを離れるであろう」と彼は告白した(歴代志下二九ノ六、一〇)。

王は、よく選ばれたわずかな言葉によって、彼らが当面した事態を回顧した。すなわち、神殿は閉ざされ、聖所内のすべての務めは中断されていた。町の通りと王国の至るところにおいて、邪悪な偶像礼拝が行われていた。もしもユダの指導者たちが正しい模範を示しさえすれば神に忠誠をつくしたはずの多くの人々が背信した。そして、周囲の諸国間において、王国の威信は失墜した。北王国は、急速に崩壊しつつあった。剣にかかって倒れる者も多かった。すでに、多数の者が、捕虜として連れ去られた。間もなくイスラエルは、完全にアッスリヤの手の中に落ち、全く荒廃してしまうのであった。そして、神が、選んだ代表者によって、大いなる働きをなさるのでなければ、ユダもまた、この運命に陥ることにきまっていた。

ヒゼキヤは、必要な改革を行うために、直接祭司たちに訴えて、彼らの協力を求めた。「わが子らよ、今は怠ってはならない。主はあなたがたを選んで、主の前に立つて仕えさせ、ご自分に仕える者となし、また香をたく者とされたからである」。「レビびとよ、聞きなさい。あなたがたは今、身を清めて、あなたがたの先祖の神、主の宮を清め、聖所から汚れを除き去りなさい」と熱心に彼らに説いた(同二九ノ一一、五)。

それは、急速に行動すべき時であった。祭司たちは、直ちに行動を起こした。彼らは、この会合に出席していなかった他の祭司たちの協力を呼びかけて、心から神殿を清める仕事に従事した。長年、汚され、顧みられないままであったので、これには多くの困難が伴った。しかし、祭司たちやレビびとたちは、たゆまず働き、驚くべき短期間のうちに、その任務を完了したことを報告することができたのである。神殿の扉は修理されて、広く開放された。聖なる器物は集められて、所定の場所に置かれた。そして、聖所の務めを再開する準備が全く整った。

最初の礼拝が行われたときに、町のつかさたちは、ヒゼキヤ王や祭司たちレビびとたちと心を合わせて、国家の罪のゆるしを求めた。罪祭が祭壇の上に献げられて、イスラエル全国のためにあがないが行われた。「ささげる事が終ると、王および彼と共にいた者はみな身をかがめて礼拝した」。再び、神殿の庭は、賛美と喜びの声に鳴りひびいた。ダビデとアサフの歌が、喜びをもって歌われ、礼拝者たちは、彼らが罪と背信のつなぎから解放されていることを感じた。「この事は、にわかになされたけれども、神がこのように民のために備えをされたので、ヒゼキヤおよびすべての民は喜んだ」(歴代志下二九ノ二四、二九、二六)。

神は、背信の潮流を止めるために、決定的改革運動を推進するようにユダの主立った人の心を準備されたのであった。神は預言者たちによって、熱烈な訴えの言葉を次々と神の選民に送られた。イスラエル王国の十部族は、その使命を軽蔑し拒否して、今や敵の手中に渡されてしまったのである。しかし、ユダには、貴重な残りの民が残っていたので、預言者たちは、この人々に訴え続けたのである。「イスラエルの人々よ、主に帰れ。あなたがたは、はなはだしく主にそむいた」と訴えるイザヤの声を聞け(イザヤ書三一ノ六)。ミカの確信に満ちた宣言を聞け。「しかし、わたしは主を仰ぎ見、わが救の神を待つ。わが神はわたしの願いを聞かれる。わが敵よ、わたしについて喜ぶな。たといわたしは倒れるとも起きあがる。たといわたしは暗やみの中にすわるとも、主はわが光となられる。主はわが訴えを取りあげ、わたしのためにさばきを行われるまで、わたしは主の怒りを負わなければならぬ。主に對して罪を犯したからである。主はわたしを光に導き出してくださる。わたしは主の正義を見るであらう」(ミカ書七ノ七―九)。

神は、心から神に立ち返る人々を快くゆるして受け入れてくださることを示すこれらの言葉と、これに類した

言葉は、神殿の扉が閉ざされていた暗黒の時代に、多くの弱り果てそうな人々に希望をもたらした。そして、今、指導者たちが、改革を起こそうとしていたときに、罪の束縛に疲れた多くの人々は、それに答える用意があったのである。

ゆるしを求め、主に対する忠誠の誓いを新たにするために神殿に入った人々は、聖書の預言的部分によって驚くべき励ましを与えられたのである。イスラエル国民の前でモーセが語った偶像礼拝に対する厳粛な警告には、背信の時に、まごころから主を求める者に対して、神は、喜んで耳を傾け、ゆるしてくださるという預言が伴っていたのである。「もしあなたの神、主に立ち帰ってその声に聞きしたがうならば、あなたの神、主はいつくしみの深い神であるから、あなたを捨てず、あなたを滅ぼさず、またあなたの先祖に誓った契約を忘れられないであろう」(申命記四ノ二〇、三一)。

今、ヒゼキヤとその仲間たちは、神殿の務めを再開しようとしていたのであるが、その神殿の献納の時の預言的祈りにあいて、ソロモンは次のように祈ったのである。「もしあなたの民イスラエルが、あなたに対して罪を犯したために敵の前に敗れた時、あなたに立ち返って、あなたの名をあげ、この宮であなたに祈り願うならば、あなたは天にあって聞き、あなたの民イスラエルの罪をゆるして」ください(列王紀上八ノ三三、三四)。この祈りを神が嘉納されたしるしが与えられた。この祈りが終わったときに、天から火が下って、燔祭と犠牲とを焼き、主の栄光が宮に満ちたのである(歴代志下七ノ一参照)。そして、主は、夜ソロモンに現れて、彼の祈りが聞かれたことと、そこで祈る人々に恵みが与えられることをお告げになったのである。恵み深い確証が与えられた。「わたしの名をもってとなえられるわたしの民が、もしへりくだり、祈って、わたしの顔を求め、その悪い道を離れ

るならば、わたしは天から聞いて、その罪をゆるし、その地をいやす」(歴代志下七ノ一四)。

これらの約束は、ヒゼキヤの治世下における改革のときに、あふるるばかりに成就したのである。

神殿の清めの時に行われたよい出発に続いて、さらに広範囲にわたる運動が起こり、それにユダもイスラエルも参加した。ヒゼキヤは、神殿の務めを真に人々の祝福にしようと熱望して、イスラエルの人々を集めて、過越の祭りを祝う古代の習慣を復興することを決意した。

過越の祭りは、長年の間、国家的祭りとして行われていなかった。ソロモンの治世後、王国が分裂して以来、これは実行が不可能だろうと思われていた。しかし、十部族にくだりつつあった恐るべき刑罰は、ある人々の心に、よりよきものへの願望を起こさせた。そして、預言者たちの感動的な言葉は、その効果をあらわした。王の使者たちは、エルサレムにおいて行われる過越の祭りへの招待を至るところに告げひろめて、「エフライムとマナセの国にはいつて、町から町に行き巡り、ついに、ゼブルンまで行つた」。恵み深い招待の使者たちは、断られるのが普通であつた。悔い改めようとしぬ人々は、軽々しく背を向けた。しかし、神のみこころをさらにはつきりと知ろつとして熱心に神を求めていた人々は、「身を低くして、エルサレムにきた」のであつた(同三〇ノ一〇、一一)。

ユダの国においては、すべての人々がそれに答えた。それは、「神の手が」彼らの上におかれ、「人々に一つ心を与えて、王とつかさたちが主の言葉によって命じたことを行わせた」からである(同三〇ノ一二)。

この祭りは、集まつた群集にとって、最も有益な時であつた。町の汚れた通りから、アハズの治世下に置かれた偶像礼拝の祭壇が取り除かれた。定められた日に過越の祭りが祝われ、その週、人々は、酬恩祭の犠牲をささ

げ、神が彼らに何をするかを望んでおられるかを学んで過ごした。レビびとは、日ごとに主に関することを人びとに教えた。そして、神を求めるために、その心の準備をした者は、ゆるしを与えられたのである。礼拝に集まった群衆は、大いなる喜びを味わった。「レビびとと祭司たちは日々に主をさんびし、力をつくして主をたたえた」。すべての者は、心を一つにして、このように恵みとあわれみとを示された神を賛美したいと願ったのであった(同三〇ノ二〇、二一)。

過越の祭りのために定められた七日間は、速やかに過ぎ去った。そして、礼拝者たちは、主の道をもっと詳しく学ぶために、そのあとさらに七日間、過ごすことにした。教育に当たっていた祭司たちは、律法の書から人々に教える働きを続けた。人々は、日ごとに神殿に集まって、彼らの賛美と感謝のささげ物をささげた。そして、大いなる集会が終わりに近づいたときに、神が、背信したユダの改心のために驚くべき働きをなし、国家の前にあるすべてのものを押し流すかと思われた偶像礼拝の潮流を阻止されたことが明らかになった。預言者たちの厳粛な警告は、おだに語られたものではなかった。「このようにエルサレムに大いなる喜びがあった。イスラエルの王ダビデの子ソロモンの時からこのかた、このような事はエルサレムになかった」(同三〇ノ二六)。

礼拝者たちが家に帰る時が来た。「このとき祭司たちとレビびとは立って、民を祝福したが、その声は聞かれ、その祈は主の聖なるすみかである天に達した」(同三〇ノ二七)。神は、砕けた心をもって罪を告白し、固い決心のもとに、ゆるしと助けを求めて神に立ち返った人々をお受け入れになった。

さて、それぞれの家へ帰る人々が、活発に従事しなければならない働きが残されていた。そして、この働きを完成することによって、ここで起こった改革の純粋さが証明されるのであった。記録には次のように記されてい

る。「そこにいたイスラエルびとは皆、ユダの町々に出て行って、石柱を碎き、アシラ像を切り倒し、ユダとベニヤミンの全地、およびエフライムとマナセにある高き所と祭壇とを取りこわし、ついにこれをことごとく破壊した。そしてイスラエルの人々はおのおのその町々、その所領に帰った」(歴代志下三二ノ二)。

ヒゼキヤとその仲間たちは、王国の霊的および物質的福利増進のために種々の改革を起こした。「ヒゼキヤはユダ全国にこのようにし、良い事、正しい事、忠実な事をその神、主の前に行った。彼が：始めたわざは、ことごとく心をつくして行い、これをなし遂げた」。「ヒゼキヤはイスラエルの神、主に信頼した。：すなわち彼は固く主に従って離れることなく、主がモーセに命じられた命令を守った。主が彼と共にあられたので：彼は功をあらわした」(同三二ノ二〇、二二、列王紀下一八ノ五―七)。

驚くべき摂理が引き続いて起こり、周囲の国々にイスラエルの神が神の民と共にあられることを示したのが、ヒゼキヤの治世の特徴であった。彼の治世の初期に、アッシリヤが、サマリヤを占領して、十部族の残っていた民を諸国の間に離散させてしまったことが、ヘブルの神の力を多くの者に疑わせるに至った。二ネベは、こうした成功に勇気を得て、すでに早くからヨナの使命を拒否し、天の神のみこころに大胆にも反抗していた。サマリヤが、陥落してから数年後に、勝ち誇った軍勢は、ふたたびパレスチナに現れ、今回は、ユダの城壁をめぐらした町々を攻撃し、多少の成果をあげた。しかし、アッシリヤ領土内の他の地域に困難な問題が起こったために、軍勢はしばらく、退却していった。異教徒の神々がついに勝利するかどうかということが、世界の諸国の前に示されるのは、それから数年経過して、ヒゼキヤの治世も終わろうとするころにおいてであった。

第二十九章 虚栄のつけ

ヒゼキヤ王は、その栄えた治世の最中に、突然致命的な病気にかかった。「死にかかっていた」彼の病気は、人間の力ではどうすることもできないものであった。預言者イザヤが彼の前にあらわれて、「主はこう仰せられます、あなたの家を整えておきなさい。あなたは死にます、生きながらえることはできません」と言ったときに、彼の最後の望みの綱は絶たれたように思われたのである（イザヤ書三八ノ一）。

なおる見込みは全くないと思われた。しかし、王はこれまで彼の「避け所また力」、「悩める時のいと近き助けであ」られたお方に祈ることができたのである（詩篇四六ノ一）。「そこでヒゼキヤは顔を壁に向けて主に祈って言った、『ああ主よ、わたしが真実と真心をもってあなたの前に歩み、あなたの目になうことをおこなったのをどうぞ思い起してください』。そしてヒゼキヤは激しく泣いた」（列王紀下二〇ノ二、三）。

ダビデの時代以来、背信と失望の時代にあつて、ヒゼキヤほど神の国の建設のために大いに働いた王はいなかった。死にかかっている王は、神に忠実に仕えた。そして、主が最高の支配者であられるということについて、

人々の確信を強めたのである。彼はダビデのように、今嘆願することができたのである。

「わたしの祈をみ前にいたらせ、

わたしの叫びに耳を傾けてください。

わたしの魂は悩みに満ち、

わたしのいのちは陰府に近づきます」。

（詩篇八八ノ二、三）

「主なる神よ、あなたはわたしの若い時からの

わたしの望み、わたしの頼みです。

わたしは…あなたに寄り頼みました」。

「わたしが力衰えた時、わたしを見捨てないでください」。

「神よ、わたしに遠ざからないでください。

わが神よ、すみやかに来てわたしを助けてください」。

「神よ、…あなたの力をきたらんとするすべての代に

宣べ伝えるまで、わたしを見捨てないでください」。

（同七一ノ五、六、九、一二、一八）

その「いつくしみは絶えることがない」お方が、彼の祈りを聞かれた（哀歌三ノ二二）。「イザヤがまだ中庭を出ないうちに主の言葉が彼に臨んだ、『引き返して、わたしの民の君ヒゼキヤに言いなさい、』「あなたの父ダビ

デの神、主はこう仰せられる、わたしはあなたの祈を聞き、あなたの涙を見た。見よ、わたしはあなたをいやす。三日目にはあなたは主の宮に上るであろう。かつ、わたしはあなたのよわいを十五年増す。わたしはあなたと、この町とをアッスリヤの王の手から救い、わたしの名のため、またわたしのしもべダビデのためにこの町を守るであろう。』」（列王紀下二〇ノ四―六）。

預言者イザヤは喜んで引き返して行って、確証と希望の言葉を伝えた。イザヤはいちじくのかたまりを病気の個所につけることを指示して、王に神のあわれみと保護の使命を伝えた。

モーセがミデアンの地において、また、ギデオンが天の使者の前に出たとき、またエリシヤが彼の主人の昇天する直前に求めたのと同様に、ヒゼキヤはこの使命が天からのものであるというしるしを見せてほしいと願った。「主がわたしをいやされる事と、三日目にわたしが主の家に上ることについて、どんなしるしがありましようか」とヒゼキヤはイザヤにたずねた。イザヤは言った、「主が約束されたことを行われることについては、主からこのしるしを得られるでしょう。すなわち日影が十度進むか、あるいは十度退くかです」（同二〇ノ八、九）。

日時計の影を十度退かせることは、ただ神の直接の介入によつてのみなし得ることであつた。そして、ヒゼキヤはこれを、主が彼の祈りを聞かれたしるしとして求めたのであつた。「そこで預言者イザヤが主に呼ばわると、アハズの日時計の上に進んだ日影を、十度退かせられた」（同二〇ノ一一）。

ユダの王はいつもの力を回復したときに、主のあわれみを歌の言葉に表現して感謝した。そして余生を王の王に心から仕えることを誓つたのである。彼が神のあわれみ深い取り扱いに対して感謝をいい表したことは、創造者の栄光のために、自分たちの年月を費やそうと望んでいるすべての者に大きな励ましを与えているのである。

「わたしは言った、わたしはわが一生のまつ盛りに、去らなければならない。

わたしは陰府の門に閉ざされて、

わが残りの年を失わなければならない。

わたしは言った、わたしは生ける者の地で、

主を見ることなく、

世にある人々のうちに、再び人を見ることがない。

わがすまいは抜き去られて

羊飼の天幕のようにわたしを離れる。

わたしは、わが命を機織りのように巻いた。

彼はわたしを機から切り離す。

あなたは朝から夕までの間に、わたしを滅ぼされる。

わたしは朝まで叫んだ。

主はししのようにわが骨をことごとく砕かれる。

あなたは朝から夕までの間に、わたしを滅ぼされる。

わたしは、つばめのように、つるのように鳴き、

はどのようにうめき、

わが目は上を見て衰える。

主よ、わたしは、しえたげられています。

どうか、わたしの保証人となってください。

しかし、わたしは何を言うことができませんよう。

主はわたしに言われ、

かつ、自らそれをなされたからである。

わが魂の苦しみによって、

わが眠りはことごとく逃げ去った。

主よ、これらの事によって人は生きる。

わが霊の命もすべてこれらの事による。

どうか、わたしをいやし、

わたしを生かしてください。

見よ、わたしが大いなる苦しみにあつたのは、

わが幸福のためであつた。

あなたはわが命を引きとめて、

滅びの穴をまぬかれさせられた。

これは、あなたがわが罪をことごとく、

あなたの後に捨てられたからである。

陰府は、あなたに感謝することはできない。

死はあなたをさんびすることはできない。

墓にくだる者は、

あなたのまことを望むことはできない。

ただ生ける者、生ける者のみ、

きょう、わたしがするように、あなたに感謝する。

父はあなたのまことを、その子らに知らせる。

主はわたしを救われる。

われわれは世にあるかぎり、

主の家で琴にあわせて、歌をうたおう」。

(イザヤ書三八ノ一〇―二〇)

チグリスとユーフラテ川にはさまれた肥沃な流域に、当時アッスリヤに属してはいたが、世界を支配する運命にあった古代民族が住んでいた。その国民の中に、熱心に天文学を研究していた賢者たちがあった。そして彼らは、日時計の影が十度退いたことに気づいたときに大いに驚いた。彼らの王メロダク・バラダンは、天の神がユダの王の寿命を延ばされたしるしに、神がこの奇跡を彼にお与えになったことを聞いてヒゼキヤに使者を送り、彼の回

復を祝うとともに、できることならばこのように大きな奇跡を行うことができる神についてもっと学びたいと思った。

遠国の王からのこれらの使者たちの訪問は、生ける神を賛美する機会をヒゼキヤに与えたのである。彼がすべての造られたものを支えておられる神について語ることは、何と容易なことであつたことだろう。その神の恵みによつて、全く絶望的であつた彼自身の生命が助けられたのである。カルデヤの平原から来たこれらの真理の探究者たちが、生ける神の最高の支配権を認めるように導かれたならば、何と大きな変化が起こつたことであろう。しかし、誇りと虚栄がヒゼキヤの心を捕らえた。そして彼は得意気に、強欲な人々の目の前に神がお与えになつた、神の民の宝を開いて見せた。王は、「宝物の蔵、金銀、香料、貴重な油および武器倉、ならびにその倉庫にあるすべての物を彼らに見せた。家にある物も、国にある物も、ヒゼキヤが彼らに見せない物は一つもなかつた」(同三九ノ二)。彼がこつしたのは、神に栄光を帰するためではなくて、外国の君たちの前で自分を高めるためであつた。彼はこの人々が、神を恐れることも愛することもしない強大な国家の代表者であることを考慮しなかつた。そして、彼が彼らを信じて国家の物質的富を見せたことは分別のないことであつた。

使者たちがヒゼキヤを訪問したことは、彼の感謝と献身を試すためであつた。次のように記録されている。「しかしバビロンの君たちが使者をつかわして、この国にあつた、しるしについて尋ねさせた時には、神は彼を試みて、彼の心にあることを、ことごとく知るために彼を捨て置かれた」(歴代志下三三ノ三二)。もしヒゼキヤが、イスラエルの神の力と恵みとあわれみについてあかしを立てるために、彼に与えられた機会を活用したならば、使者たちの報告は暗黒を照らす光となつたことであろう。しかし彼は、万軍の主よりも自分自身を賛美したので



シダキヤ王は自分の王国の力を誇示するため、王の宝物庫を開いて、バビロンからの使者に全部見せた。彼は神をあがめる機会を逃した。

ある。「しかしヒゼキヤはその受けた恵みに報いることをせず、その心が高ぶった」(歴代志下三二ノ二五上句)。何と悲惨な結果が起ころうとしていたことであろう。帰国する使者たちは、彼らが見た富の報告を持ち帰ろうとしていた。そしてバビロンの王と大臣たちは、エルサレムの宝によって自分たちを富まそうと計画するのであるということがイザヤに示された。ヒゼキヤははなだしい罪を犯した。「怒りが彼とユダおよびエルサレムに臨もうとした」のである(同三二ノ二五下句)。

「時に預言者イザヤはこのヒゼキヤ王のもとに来て言った、『あの人々は何を言いましたか。どこから来たのですか』。ヒゼキヤは言った、『彼らは遠い国から、すなわちバビロンから来たのです』。イザヤは言った、『彼らは、あなたの家で見ましたか』。ヒゼキヤは答えて言った、『彼らは、わたしの家にある物を皆見ました。倉庫のうちには、彼らに見せなかった物は一つもありません』。

そこでイザヤはヒゼキヤに言った、『万軍の主の言葉を聞きなさい。見よ、すべてあなたの家にある物およびあなたの先祖たちが今日までに積みたくわえた物がバビロンに運び去られる日が来る。何も残るものはない、と主が言われます。また、あなたの身から出るあなたの子たちも連れ去られて、バビロンの王の宮殿において宦官となるでしょう』。ヒゼキヤはイザヤに言った、『あなたが言われた主の言葉は結構です』(イザヤ書三九ノ三八)。

ヒゼキヤは悔恨の念に満たされ、「その心の高ぶりを悔いてへりくだり、またエルサレムの住民も同様にしたので、主の怒りは、ヒゼキヤの世には彼らに臨まなかった」(歴代志下三二ノ二六)。しかし悪の種類はまかれたのであった。そして、やがてそれは芽生えて、荒廃と悲哀という収穫を実らせるのであった。ユダの王はその後の

年月の間、過去の償いのためと彼が仕える神のみ名の栄えのために着実に歩んだので、大いに繁栄するのであった。しかし彼の信仰は激しく試みられるのであった。そして彼は、主に全く信頼することによってのみ、彼を破滅に陥れ、彼の民を全滅させようとしていた悪の勢力に勝利することができることを学ぶのであった。

使者たちの訪問に当たってヒゼキヤが自分に与えられた信任に背いた物語は、すべてのものに重大な教訓を教えている。われわれは自分たちの経験の中の尊い出来事、神のあわれみといつくしみ、また、救い主の愛の比類のない深さなどについて、これまでよりもっと多く語らなければならない。われわれの心と思い、神の愛に満たされているときに、霊的生活のことを他の人々に伝えることは難しくなくなる。偉大な思想、高尚な熱望、真理についての明快な理解、無我の目的、敬虔な生活と聖潔への願望などは言葉となつてあらわれ、心に秘められた宝がどんなものであるかを示すのである。

われわれが日ごとに交わる人々は、われわれの助けと指導を必要としている。彼らの心は、折になつて語られる言葉に力づけられる状態にあることである。これらの人々の中には、明日ふたたび接することができなくなってしまう者がある。われわれはこれらの旅の道づれに、どんな感化を及ぼしていることであるか。

われわれは日ごとの生活において負わなければならない義務が与えられている。毎日われわれの言行は、交わる人々に印象を与えている。われわれの唇に門番をおき、われわれの歩みを注意深く見守ることが何と必要なことであろう。一つの軽率な行為、一つの分別を欠いた歩み、また何か強い誘惑の波が押し寄せて、人を墮落の道に流してしまうのである。われわれは人々の心の中に植えた思いを、拾い集めることはできない。もしそれが悪いものであれば、われわれは一連の出来事、悪の潮流を始動させたのであつて、それを止める力はわれわれに

はないのである。

他方もしわれわれが自分たちの模範によって、正しい原則を発達させるように他の人々を助けたとするならば、われわれは彼らに善を行う力を与えるのである。今度は彼らが同様の有益な感化を、他の人々に及ぼすのである。こうして幾百幾千という人々が、われわれの無意識の感化によって助けられるのである。キリストの眞の弟子は接触するすべての人の、善を行おうとする精神を強める。神を信ぜず罪を愛する世界の前で、彼は神の恵みの力と神の品性の完全さをあらわすのである。

第三十章 大国アッスリヤからの解放

アッスリヤの軍勢がユダの国内を侵略し、エルサレムを破滅から救うものが何もないように思われた、重大な国家的危機において、ヒゼキヤは国中の軍勢を集結させ、不屈の勇氣をもって異教の圧制者に抵抗し、主の救いの力に寄り頼んだのである。「心を強くし、勇みたちなさい。アッスリヤの王をも、彼と共にいるすべての群衆をも恐れてはならない。おのいてはならない。われわれと共にある者は彼らと共にある者よりも大いなる者だからである。彼と共にある者は肉の腕である。しかしわれわれと共にある者はわれわれの神、主であって、われわれを助け、われわれに代って戦われる。」とヒゼキヤはユダの人々を訓戒した（歴代志下三三ノ七、八）。

ヒゼキヤが結果について確信をもって語り得たことは、理由がないわけではなかった。勝ち誇ったアッスリヤ人は一時諸国を罰する神の怒りのおちとして神に用いられたのであったが、いつまでも勝利することはできなかった（イザヤ書一〇ノ五参照）。幾年か前にイザヤは、シオンに住む人々に次のような主の言葉を伝えていたのである。「アッスリヤびと……を恐れてはならない。ただしばらくして、……万軍の主は、おかしミデアンびとを

オレブの岩で撃たれた時のように、彼らにむかつて、むちをふるわれる。またそのつえを海の上にのばし、エジプトでなされたように、それをあげられる。その日には、彼の重荷はあなたの肩からあり、彼のくびきはあなたの首から離れる」(同一〇ノ二四―二七)。

「アハズ王の死んだ年」に与えられたもう一つの預言の言葉の中で、預言者は次のように宣言した。「万軍の主は誓って言われる、『わたしは思ったように必ず成り、わたしは定めたように必ず立つ。わたしはアッスリヤびとをわが地で打ち破り、わが山々で彼を踏みにじる。こうして彼が置いたくびきはイスラエルびとから離れ、彼が負わせた重荷はイスラエルびとの肩から離れる』。これは全地について定められた計画である。これは国々の上に伸ばされた手である。万軍の主が定められるとき、だれがそれを取り消すことができるのか。その手を伸ばされるとき、だれがそれを引きもどすことができるのか」(同一四ノ二八、二四―二七)。

圧制者の力はくじかれるのであった。しかしヒゼキヤは彼の治世の初期においては、アハズが結んだ協定に基づいてアッスリヤに貢ぎ物を納めていた。一方王は「つかさたちおよび勇士たちと相談して」、王国を防衛するためにできる限りの手をつくした。彼は、エルサレム城内においては水の供給が十分あるようにする一方、城外では水が欠乏するようにした。「ヒゼキヤはまた勇気を出して、破れた城壁をことごとく築き直して、その上にやぐらを建て、その外にまた城壁を巡らし、ダビデの町のミ口を堅固にし、武器および盾を多く造り、軍長を民の上に置いた(歴代志下三二ノ三、五、六)。包囲に備えて、なし得ることではなかったことは何一つなかった。

ヒゼキヤがユダの王位についたときには、アッスリヤはすでに多数のイスラエル人を北王国から捕虜として連れ去っていた。そして彼が治め始めて数年しか経たず、彼がまだエルサレムの防衛を強化していたときに、アッ

スリヤはサマリヤを包囲してこれを占領し、十部族をアッスリヤ領土内の多くの地域に離散させたのである。ユダの国境はほんの数マイルの距離のところにあり、エルサレムも五〇マイル以内のところにあった。そして神殿の莫大な財宝を得ようとして、敵は帰ってくるのであった。

しかしユダの王は、敵に抵抗するために彼のなすべき分をつくす決意を固めた。そして人知と精力の限りを尽くした上で彼は軍勢を集めて、彼らに勇気を出すように勧告したのである。「イスラエルの聖者はあなたがたのうちで大いなる者だから」というのが、預言者イザヤのユダに対する言葉であった、そして王は今、ゆるがぬ信仰をもって「しかしわれわれと共にある者はわれわれの神、主であって、われわれを助け、われわれに代って戦われる」と宣言した（イザヤ書一一ノ六。歴代志下三二ノ八）。

信仰を働かせることほど、急速に信仰を鼓舞するものはない。ユダの王は来たるべき嵐に備えていたのである。そして彼は今、アッスリヤに対する預言が成就することを確信して、神に信頼して、心安んじていたのである。「民はユダの王ヒゼキヤの言葉に安心した」（歴代志下三二ノ八下句）。もしアッスリヤが、地上の最も強大な諸国の征服と、イスラエルのサマリヤに勝ち誇って、今その軍勢をユダに向けたならばどうなることであろうか。もし彼らが、「わが手は偶像に仕える国々に伸びた。その彫った像はエルサレムおよびサマリヤのものにまさっていた。わたしはサマリヤとその偶像に行ったように、エルサレムとその偶像に行わぬであろうか」と彼らが勝ち誇ったらどうなることであろうか（イザヤ書一〇ノ一〇、一一）。ユダは何も恐れることはなかった。彼らは主に信頼していたからである。

永く予想されていた危機が、ついにやって来た。勝利に勝利を得ていたアッスリヤの軍勢が、ついにユダやに

近づいた。勝利を確信した將軍たちは軍勢を二つに分け、一方が南のエジプト軍と対峙している間に、他のほうがエルサレムを包囲することにした。

今や、ユダの唯一の救いの望みは神であつた。エジプトからの援助はことごとく切断され、援助の手を差しおける他の国は近くなかつた。

アッスリヤの將校たちは、彼らのよく訓練された軍勢の力を確信してユダの指導者たちと會議を開き、その席上で無礼にも都の明け渡しを要求した。この要求には、ヘブルの神に対する、不敬なのしりも伴っていた。イスラエルとユダの弱さと背信のために、神のみ名は諸国の間でもはや恐れられることがなくなり、絶えず物笑いの種になつていたのである(同五二ノ五参照)。

セナケリブの將軍のひとりのラブシヤケは言つた。「ヒゼキヤに言いなさい、『大王、アッスリヤの王はこう仰せられる。あなたが頼みとする者は何か。□先だけの言葉が戦争をする計略と力だと考えるのか。あなたは今だれにたよつて、わたしにそゐいたのか』(列王紀下一八ノ一九、二〇)。

將校たちは町の門の外で會議を開いていたが、それは城壁の番兵たちに聞こえた。そして、アッスリヤの王の代表者たちが大声で提案を語ったときに、ユダの主だった人々は、ユダヤの言葉でなくてスリヤ語で語つてほしいと要望した。というのは、城壁のところにいる者たちに會議の成り行きが分からないようにするためであつた。ラブシヤケはこの提案をあざ笑つて、一層声をはり上げて、ユダヤの言葉で話しつつづけて言つた。

「大王、アッスリヤの王の言葉を聞け。王はこう仰せられる、『あなたがたはヒゼキヤに欺かれてはならない。彼はあなたがたを救い出すことはできない。ヒゼキヤが、主は必ずわれわれを救い出される。この町はアッスリヤ

「ヤの王の手に陥ることはない、と言っても、あなたがたは主を頼みとしてはならない」。

あなたがたはヒゼキヤの言葉を聞いてはならない。アッスリヤの王はこう仰せられる、『あなたがたは、わたしと和ぼくして、わたしに降服せよ。そうすれば、あなたがたはめいめい自分のぶどうの実を食べ、めいめい自分のいちじくの実を食べ、めいめい自分の井戸の水を飲むことができる。やがて、わたしが来て、あなたがたを一つの国へ連れて行く。それは、あなたがたの国のように穀物とぶどう酒の多い地、パンとぶどう畑の多い地だ。ヒゼキヤが、主はわれわれを救われる、と言って、あなたがたを惑わすことのないように気をつけよ。もろもろの国の神々のうち、どの神がその国をアッスリヤの王の手から救ったか。ハマテやアルパデの神々はどこにいるか。セパルワイムの神々はどこにいるか。彼らはサマリヤをわたしの手から救い出したか。これらの国々のすべての神々のうちに、だれかその国をわたしの手から救い出した者があるか。主がどうしてエルサレムをわたしの手から救い出すことができるか』(イザヤ書三六ノ一二―二〇)。

こうした嘲笑に、ユダの人々は「ひと言も答えなかった」。会議は終わった。ユダの代表者たちはヒゼキヤのところにもどって、「衣を裂き、……ラブシャケの言葉を彼に告げた」(同三六ノ二一、二二)。王は不敬な挑戦を聞いて、「衣を裂き、荒布を身にまとい主の宮に入」った(列王紀下一九ノ一)。

会議の結果を伝えるためにイザヤのもとへ使者がつかわされた。「ヒゼキヤはこう言います、『きようは悩みと責めと、はずかしめの日です。……あなたの神、主は、あるいはラブシャケのもろもろの言葉を聞かれたかもしれません。彼はその主君アッスリヤの王につかわされて、生ける神をそしりました。あなたの神、主はその言葉を聞いて、あるいは責められるかもしれませんが。それゆえ、この残っている者のために祈をささげてください』」

(イザヤ書三七ノ三、四)。

「そこでヒゼキヤ王およびアモツの子預言者イザヤは共に祈って、天に呼ばわった」(歴代志下三二ノ二〇)。
神はしもべたちの祈りを聞かれた。ヒゼキヤに伝えるべき言葉がイザヤに与えられた。「主はこう仰せられる、アッスリヤの王の家来たちが、わたしをそしった言葉を聞いて恐れるには及ばない。見よ、わたしは一つの霊を彼のうちに送って、一つのうわさを聞かせ、彼を自分の国へ帰らせて、自分の国でつるぎに倒れさせるであろう」(列王紀下一九ノ六、七)。

アッスリヤの代表者たちはユダのつかさたちと別れたあとで、エジプトからの侵入路を守っていた軍勢とともにいた王に直接連絡した。報告を聞いたセナケリブ王は、「手紙を書き送って、イスラエルの神、主をあざけり、かつそしって言った、『諸国の民の神々が、その民をわたしの手から救い出さなかったように、ヒゼキヤの神も、その民をわたしの手から救い出さないであろう』」(歴代志下三二ノ一七)。

この勝ち誇った威嚇には、次の言葉がつづいていた。「あなたは、エルサレムはアッスリヤの王の手に陥ることはない、と言うあなたの信頼する神に欺かれてはならない。あなたはアッスリヤの王たちがもろもろの国々にした事、彼らを全く滅ぼした事を聞いている。どうしてあなたが救われることができようか。わたしの父たちはゴザン、ハラン、レゼフ、およびテラサルにいたエデンの人々を滅ぼしたが、その国々の神々は彼らを救ったか。ハマテの王、アルパデの王、セパルウィムの町の王、ヘナの王およびイフの王はどこにいるのか」(列王紀下一九ノ一〇ー一三)。

ユダの王は嘲笑の手紙を受け取ったときに、それを神殿に持っていき、「主の前にそれをひろげ、」天からの助

けが与えられるという強い信仰をもって祈り、ヘブルびとの神が今もなお生きて支配しておられることを、地の諸国が知るようと祈った（列王紀下一九ノ一四）。主の栄誉が危機にさらされていた。救いをもたらすことができるのは彼だけであつた。

ヒゼキヤは次のように嘆願した。「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、主よ、地のすべての国のうちで、ただあなただけが神でいらせられます。あなたは天と地を造られました。主よ、耳を傾けて聞いてください。主よ、目を開いてごらんください。セナケリブが生ける神をそしるために書き送った言葉をお聞きください。主よ、まことにアッスリヤの王たちはもろもろの民とその国々を滅ぼし、またその神々を火に投げ入れました。それらは神ではなく、人の手の作ったもので、木や石だから滅ぼされたのです。われわれの神、主よ、どうぞ、今われわれを彼の手から救い出してください。そうすれば地の国々は皆、主であるあなただけが神でいらせられることを知るようになるでしょう」（同一九ノ一五―一九）。

「イスラエルの牧者よ、

羊の群れのようにヨセフを導かれる者よ、

耳を傾けてください。

ケルビムの上に座せられる者よ、

光を放ってください。

エフライム、ベニヤミン、マナセの前に

あなたの力を振り起し、

来て、われらをお救いください。

神よ、われらをもとに返し、

み顔の光を照してください。

そうすればわれらは救をえるでしょう。

万軍の神、主よ、

いつまで、その民の祈にむかつて

お怒りになるのですか。

あなたは涙のパンを彼らに食わせ、

多くの涙を彼らに飲ませられました。

あなたはわれらを隣り人のあざけりとし、

われらの敵はたがいにあざわりました。

万軍の神よ、われらをもとに返し、

われらの救われるため、み顔の光を照してください。

あなたは、ぶどうの木をエジプトから携え出し、

もろもろの国民を追い出して、これを植えられました。

あなたはこれがために地を開かれたので、

深く根ざして、国にはびこりました。

山々はその影でおおわれ、

神の香柏はその技でおおわれました。

これはその枝を海にまでのべ、

その若枝を大川にまでのべました。

あなたは何ゆえ、そのかきをくずして

道ゆくすべての人にその実を

摘み取らせられるのですか。

林のいのししはこれを荒し、

野のすべての獣はこれを食べます。

万軍の神よ、再び天から見おろして、

このぶどうの木をかえりみてください。

あなたの右の手の植えられた幹と、

みずからのために強くされた枝とを

かえりみてください。...

われらを生かしてください。

われらはあなたのみ名を呼びます。

万軍の神、主よ、われらをもとに返し、

み顔の光を照してください。

そうすればわれらは救をえるでしょう。」

(詩篇八〇篇)

ユダのためと、最高の支配者であられる神の栄誉のためのヒゼキヤの嘆願は、神のみこころにかなっていた。ソロモンは神殿を捧げた時の祝祷において、主が「主の民イスラエルを助けられるように。そうすれば、地のすべての民は主が神であることと、他に神のないことを知るに至るであろう」と祈ったのである(列王紀上八ノ五九、六〇)。特に主は、戦争の時や敵軍の侵略を受けたときに、イスラエルのつかさたちが祈りの家に入って救いを請い願うときに、神は恵みをほどこされるのであった(同八ノ三三、三四参照)。

ヒゼキヤは何の希望も与えられずに放置されなかった。イザヤは人をつかわして、王に言った。「イスラエルの神、主はこう仰せられる、『アッスリヤの王セナケリブについてあなたがわたしに祈ったことは聞いた』。主が彼について語られた言葉はこうである、

『処女であるシオンの娘は

あなたを侮り、あなたをあざける。

エルサレムの娘は

あなたのうしろで頭を振る。

あなたはだれをそしり、だれをののしったのか。

あなたはだれにおかつて声をあげ、
目を高くあげたのか。

イスラエルの聖者におかつてしたのだ。

あなたは使者をもって主をそしって言った、

「わたしは多くの戦車をひきいて山々の頂にのぼり、
レバノンの奥に行き、

だけの高い香柏と最も良いとすぎを切り倒し、

またその果の野営地に行き、

その密林にはいった。

わたしは井戸を掘って外国の水を飲んだ。

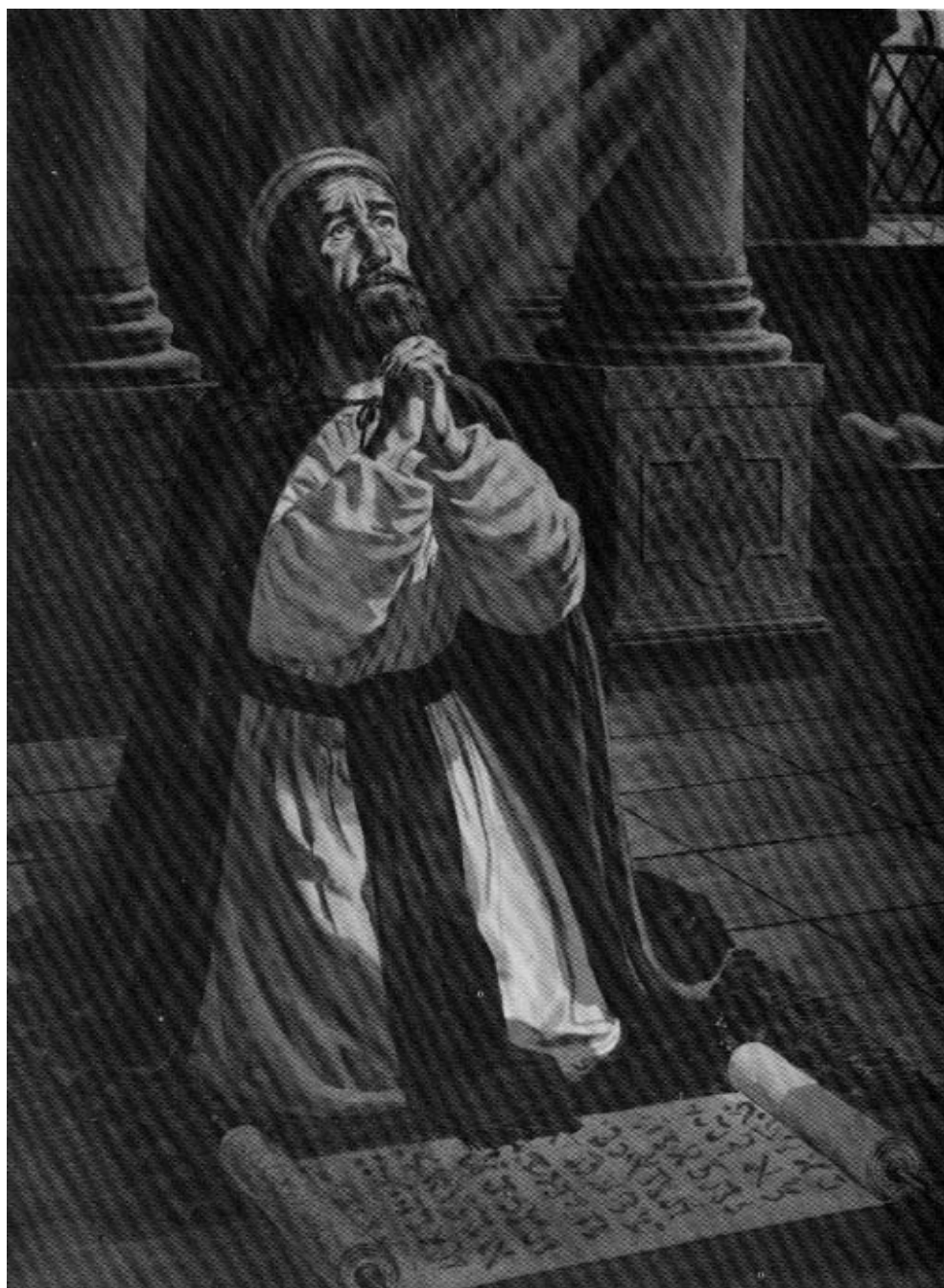
わたしは足の裏で、

エジプトのすべての川を踏みからした」。

あなたは聞かなかったか、

昔わたしがこれを定めたことを。

堅固な町々をあなたが荒塚とすることも、
いにしえの日からわたしが計画して
今これをおこなうのだ。



ヒゼキヤ王はセナケリブの脅迫状を受けとったとき、それを神殿にもっていき、主の前にひろげ、救いを祈った。

そのうちに住む民は力弱くおののき、恥をいだいて、野の草のように、青菜のようになり、

育たないで枯れる屋根の草のようになった。

わたしはあなたのすわること、出入りすること、

わたしにむかつて怒り叫んだことをも知っている。

あなたがわたしにむかつて怒り叫んだことと、

あなたの高慢がわたしの耳にはいったため、

わたしはあなたの鼻に輪をつけ、

あなたの口にくつわをはめて、

あなたをもときた道へ引きもどすであろう』。」

(列王紀下一九ノ二〇―二八)

ユダの国は占領軍に荒らされていたが、神は奇跡的に民の必要なものを備えることを約束されたのである。ヒゼキヤに次の言葉が与えられた。「『あなたに与えるしはこれである。すなわち、ことは落ち穂からはえたものを食べ、二年目にはまたその落ち穂からはえたものを食べ、三年目には種をまき、刈り入れ、ぶどう畑を作ってその実を食べるであろう。ユダの家ののがれて残る者は再び下に根を張り、上に実を結ぶであろう。すなわち残る者がエルサレムから出てき、のがれた者がシオンの山から出て来るであろう。主の熱心がこれをされるであらう』。

それゆえ、主はアッスリヤの王について、こう仰せられる、『彼はこの町にこない、またここに矢を放たない、盾をもってその前に来ることなく、また塁を築いてこれを攻めることはない。彼は来た道を帰って、この町にはいることはない。主がこれを言う。わたしは自分のため、またわたしのしもべダビデのためにこの町を守って、これを救うであろう』(同一九ノ二九―三四)。

救いが与えられたのは、まさにその夜のことであった。「主の使が出て、アッスリヤの陣營で十八万五千人を撃ち殺した」(同一九ノ三五)。「アッスリヤ王の陣營にいるすべての大勇士と将官、軍長ら」が殺されたのである(歴代志下三二ノ二一)。

エルサレムを占領するために派遣された軍勢にくだった恐ろしい刑罰の知らせがやがて、なおもエジプトからユダヤに入る道を守っていたセナケリブに伝えられた。アッスリヤの王は、恐怖に打ちのめされて急いで去り、「赤面して自分の国に帰った」(同三二ノ二二)。しかし彼は長く国を治めることにはなっていなかった。彼の突然の死に関する預言に従って、彼は身内の者に暗殺された。そして、「その子エサルハドンが代って王となった」(イザヤ書三七ノ三八)。

ヘブル人の神は、傲慢なアッスリヤびとを打ち負かしたのである。周囲の国々の目の前で、主の名譽が保たれた。エルサレムでは、人々の心は聖なる喜びに満たされた。熱心に救いを呼び求めた彼らの嘆願には、罪の告白と多くの涙が混じっていた。彼らは大いなる緊急事態において、神の救いの力に全く信頼していた。そして神は彼らに失望をお与えにならなかった。今や神殿の庭は、厳肅な賛美の歌に鳴りひびいたのである。

「神はユダに知られ、

そのみ名はイスラエルにおいて偉大である。

その幕屋はサレムにあり、

そのすまいはシオンにある。

かしこで神は弓の火矢を折り、

盾とつるぎと戦いの武器をこわされた。

あなたは永久の山々にまさって

光栄あり、威厳がある。

雄々しい者はかすめられ、彼らは眠りに沈み、

いくさびとは皆その手を施すことができなかった。

ヤコブの神よ、あなたのとがめによって、

乗り手と馬とは深い眠りに陥った。

しかし、あなたこそは恐るべき方である。

あなたが怒りを発せられるとき、

だれがみ前に立つことがきよう。

あなたは天からさばきを仰せられた。

神が地のしえたげられた者を救うために、

さばきに立たれたとき、地は恐れて、沈黙した。

まことに人の怒りはあなたをほめたたえる。

怒りの余りをあなたは帯とされる。

あなたがたの神、主に誓いを立てて、それを償え。

その周囲のすべての者は

恐るべき主に贈り物をささげよ。

主はもろもろの君たちのいのちを断たれる。

主は地の王たちの恐るべき者である。」

(詩篇七六篇)

アッスリヤ帝国の興亡の歴史は、今日の地上の諸国に対する教訓に富んでいる。靈感は、最高潮にあつたアッスリヤの栄光を、神の園にあつて、回りの木々より高くそびえ立つ高貴な樹木にたとえている。

「見よ、わたしはあなたを

レバノンの香柏のようにする。

麗しき枝と森の陰があり、たけが高く、

その頂は雲の中にある。…

その陰にもろもろの国民は住む。

これはその大きなこと、

その枝の長いことによって美しかった。

その根を多くの水に、おろしていたからである。

神の園の香柏も、これと競うことはできない。

もみの木もその枝葉に及ばない。

けやきもその枝と比べられない。

神の園のすべての木も、その麗しきこと、

これに比すべきものはない。…

神の園にあるエデンの木は皆

これをうらやんだ。」

(エゼキエル書三二ノ三一九)

しかしアッスリヤの王たちはこの著しい祝福を人類の幸福のために用いることをせず、多くの地において災いとなった。神や同胞のことを心に留めずに残酷になって、すべての国民に二ネベの神々の至上権を認めさせようとする厳しい政策をとり、二ネベの神々を至高者よりも高めたのである。神はヨナを彼らに送って警告をお与えになったので、彼らはしばらくの間、万軍の主の前にへりくだって罪のゆるしを求めた。しかし、やがて彼らは偶像礼拝と世界の征服に逆もどりしてしまったのである。

預言者ナホムは、二ネベの悪人たちの罪を告発して叫んだ。

「わざわいなるかな、血を流す町。

その中には偽りと、ぶんどり物が満ち、

略奪はやまない。

むちの音がする。車輪のとどろく音が聞える。

かける馬があり、走る戦車がある。

騎兵は突撃し、

つるぎがきらめき、やりがひらめく。

殺される者はおびただしく、…

万軍の主は言われる、

見よ、わたしはあなたに臨む、」

(ナホム書三ノ一一五)

無限の神は、今もなお誤ることのない正確さをもって諸国の記録をとっておられる。神のあわれみが差しのべられて、悔い改めの招きが与えられている間、この帳簿は開かれている。しかし、数字が神のお定めになった一定の数に達するときに、神の怒りのわざが始まる。帳簿は閉じられる。神の忍耐は終わる。もはや、あわれみの声は彼らのために訴えなくなるのである。

「主は怒ることおそく、力強い者、

主は罰すべき者を決してゆるされない者、

主の道はつむじ風と大風の中にあり、

雲はその足のちりである。

彼は海を戒めて、これをかわかし、

すべての川をかれさせる。

バシヤンとカルメルはしおれ、

レバノンの花はしぼむ。

もろもろの山は彼の前に震い、もろもろの丘は溶け、

地は彼の前におなしくなり、

世界とその中に住む者も皆、おなしくなる。

だれが彼の憤りの前に立つことができよう。

だれが彼の燃える怒りに耐えることができよう。

その憤りは火のように注がれ、

岩も彼によって裂かれる」。

(ナホム書二ノ三一六)。

「勝ち誇つて、安らかに落ち着き、その心の中で、『ただわたしただ、わたしの外にはだれもない』と言つた」ニネベが、こうして荒れはてて、「消えうせ、おなしくなり、荒れはてた。…ししのすみかはどこであるか。若いししの穴はどこであるか。そこに雄じしはその獲物を携え行き、その子じしと共にいても、これを恐れさせる者はない」(ゼパニヤ書二ノ一五。ナホム書二ノ一〇、一一)。

アッスリヤの誇りが低められる時を予見して、ゼパニヤは二ネベについて預言した。「家畜の群れ、もろもろの野の獣は其中に伏し、はげたかや、やまあらしはその柱の頂に住み、ふくろうは、その窓のうちになき、からすは、その敷居の上に鳴く。その香柏の細工が裸にされるからである」(ゼパニヤ書二ノ一四)。

アッスリヤ帝国の栄光は、実に偉大なものであった。また、その崩壊もはなはだしいものであった。預言者エゼキエルは、高貴な香柏の木の象徴をさらにくわしく説明して、誇りと残酷のゆえにアッスリヤが滅亡することを明白に預言して、次のように言ったのである。

「それゆえ、主なる神はこう言われる、……その頂を雲の中におき、その心が高ぶりおごるゆえ、わたしはこれを、もろもろの国民の力ある者の手に渡す。彼はこれに対してその悪のために正しい処置をとる。わたしはこれを追い出した。もろもろの国民の最も恐れている異邦人はこれを切り倒して捨てる。その枝はもろもろの山と、すべての谷とに落ち、その枝葉は砕けて、地のすべての流れにあり、地のすべての民は、その陰を離れて、これを捨てる。その倒れた所に、空のもろもろの鳥は住み、その枝の上に、野のもろもろの獣はいる。これは水のほとりのすべての木が、その高さのために誇ること……のないためである。……」

主なる神はこう言われる、これが陰府に下る日にわたしが淵をこれがために悲しませ……野のすべての木を、これがために衰えさせる。……もろもろの国民をその落ちる響きのために、打ち震えさせる」(エゼキエル書三一ノ一〇―一六)。

アッスリヤの誇りとその崩壊とは、時の終わりに至るまで実物教訓として、その役割を果たすのである。傲慢と誇りをもって神に逆らう今日の地上の国々に対して、神は次のようにおたずねになる。「エデンの木のうちに、

その栄えと大いなることで、あなたはどれに似ているのか。あなたはこのように、エデンの木と共に、下の国に落され」る（エゼキエル書一三ノ一八）。

「主は恵み深く、なやみの日の要害である。彼はご自分を避け所とする者を知っておられる。」しかし、至高者よりも自分たちを高めようとするすべての者を、「彼はみなぎる洪水で……全く滅ぼ」されるのである（ナホム書一ノ七、八）。

「アッスリヤの高ぶりは低くされ、エジプトのつえは移り去る」（ゼカリヤ書一〇ノ一一）。これは神に逆らった古代の国家だけでなく、神のみこころを実現しない現代の国家においても同様である。全地の正しい審判者であられる神が「もろもろの国をふる」われる最後の報復の日に（イザヤ書三〇ノ二八）、そして真理を守り通した人々が神の都に入ることをゆるされるときに、天空は贖われた人々の勝利の歌に鳴り響くのである。「あなたがたは、聖なる祭を守る夜のように歌をうたう。また笛をならして主の山にきたり、イスラエルの岩なる主にまみえる時のように心に喜ぶ。主はその威厳ある声を聞かせ」られる。「主がそのおちをもつて打たれる時、アッスリヤの人々は主の声によって恐れおののく。主が懲らしめのつえを彼らの上に加えられるごとに鼓を鳴らし、琴をひく」（同三〇ノ二九―三二）。

第三十一章 諸国民の希望

イザヤはその働きの全期間を通して、異教徒に対する神のみこころについて明白なあかしを立てたのである。他の預言者たちも神の計画について述べはしたが、彼らの言葉は必ずしも理解されたとは限らなかった。しかし、神のイスラエルの中には、肉によるアブラハムの子孫ではない多くの人々が数えられるという真理を、ユダに明らかに示すようにイザヤは命じられた。この教えは彼の時代の神学と一致していなかったが、それでも彼は恐れることなく神から与えられた使命を伝え、アブラハムの子孫に約束された霊的祝福を渴望していた多くの人々に希望を与えたのである。

異邦人への使徒パウロは、ローマ人への手紙のなかで、イザヤのこの独特の教えに注意をひいている。「イザヤも大胆に言っている、『わたしは、わたしを求めない者たちに見いだされ、わたしを尋ねない者に、自分を現した』」（ローマ一〇ノ二〇）。

イスラエルの人々はしばしば、異邦人に対する神のみこころを理解することができず、また、理解しようとし

なかった。しかし、彼らが分かれた民となり、地上の諸国の間で独立した国家として確立されたのは、実にこの目的のためであった。まず最初に契約が与えられた、彼らの先祖アブラハムはその親族を離れて遠くの地へ出て行き、異邦人に光を掲げるように召されたのである。彼に与えられた約束のなかには、子孫が海の砂のように多くなることが含まれてはいたが、彼がカナンの地で大いなる国家の父になることは、何も利己的な目的のためではなかった。彼に与えられた神の契約は、地上のすべての国々を含んでいた。「わたしは…あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」(創世記一二ノ二、三)。

イサクが生まれるすぐ前に契約が更新されたとき、人類に対する神のみこころが再び明らかにされた。「地のすべての民がみな、彼によって祝福を受ける」という主の確証が約束の子について与えられた(同 一八ノ一八)。そして後に、天からの使者はもう一度、「また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう」と宣言した(同 二二ノ一八)。

この契約のすべてを包含した条項は、アブラハムの子々孫々によく理解されていた。彼らがエジプトの奴隷から解放されたのは、イスラエルの人々が国々に対して祝福となるためであり、神のみ名が「全地に」宣べ伝えられるためであった(出エジプト記九ノ一六)。もし彼らが神の要求に従ったならば、知恵と理解とが他の民族よりもはるかに進むことになっていた。しかしこの優秀性は、神のみこころが、彼らによって「地のもろもろの国民」のために成就することによってのみ、達成され維持されるのであった。

イスラエルがエジプトの奴隷から解放されたときの驚くべき摂理と、彼らが約束の地を占領したことは、多く

の異教徒に、イスラエルの神が最高の支配者であることを認めさせたのである。「エジプトびとはわたしの主であることを知るようになるであろう」という約束が与えられていた(同七ノ五)。高慢なバロデさえ、主の力を認めないわけにはいかなかった。「行つて主に仕えなさい。」「また、わたしを祝福しなさい」と彼は、モーセとアロンに訴えた(同一二ノ三二、三三)。

進軍するイスラエルの軍勢は、ヘブル人の神の大きなみ業のことが彼らに先立って人々に知られ、異教徒の中のある人々はこの神だけが真の神であることを知っていた。邪悪なエリコの町において、異教徒の女は「あなだがたの神、主は上の天にも、下の地にも、神でいらせられるからです。」とあかしした(ヨシユア記二ノ一一)。このようにして彼女に与えられた主についての知識が、彼女を救つたのである。「信仰によつて、遊女ラハブは、…不従順な者どもと一緒に滅びることはなかった」(ヘブル一ノ三一)。彼女の改心は、神の権威を認めた偶像礼拝者に対する神のあわれみのただ一つの例ではなかった。多数の民族の地のただ中において、ギベオン人は彼らの異教の神を捨ててイスラエルと同盟を結び、契約の祝福にあずかつたのである。

神は国籍、人種、または階級などの差別をお認めにならない。彼はすべての人類の創造主であられるのである。すべての人々は、創造によつて一つの家族である。そしてすべての人々は、贖罪によつて一つなのである。すべての魂が自由に神に近づくことができるように、キリストはすべての差別の壁を取り除き、神殿のすべての部屋を広く開けるために来られた。彼の愛は広く深く十分に満ちあふれていて、どんなところにも滲透していくのである。それは、サタンの影響を受けてその欺瞞に惑わされた人々を引き上げて、約束の虹に囲まれている神のみ座近くに彼らを置くのである。キリストにあつてはユダヤ人もなければギリシア人もなく、奴隷も自由人もな

いのである。

約束の地の占領後年月がたつうちに、異教徒の救いに関する主の恵み深い計画が全くと断つていいほど忘れ去られてしまった。そして神はご自分の計画をもう一度、改めて示さなければならなくなったのである。詩篇記者は靈感を受けて歌った。「地のはての者はみな思い出して、主に帰り、もろもろの国のやからはみな、み前に伏し拝むでしょう。」「諸侯はエジプトよりきたり、エチオピアはあわただしく神にむかひて手をのべん(文語訳)」。

「もろもろの国民は主のみ名を恐れ、地のもろもろの王はあなたの栄光を恐れるでしょう。」「きたるべき代のために、この事を書きしるしましょう。そうすれば新しく造られる民は、主をほめたたえるでしょう。主はその聖なる高き所から見おろし、天から地を見られた。これは捕われ人の嘆きを聞き、死に定められた者を解き放ち、人々がシオンで主のみ名をあらわし、エルサレムでその誉をあらわすためです。その時もろもろの民、もろもろの国はともに集まって、主に仕えるでしょう」(詩篇二二ノ二七。六八ノ三一。一〇二ノ一五、一八一―一二二)。

もしイスラエルが与えられた信任に忠実であつたならば、地のすべての国々がイスラエルの祝福にあづかつたことであろう。しかし人々を救う真理の知識を委ねられた者の心は、周囲の人々の必要を感じなかつた。神のみどころが見失われるにつれて、異教徒は神のあわれみの範囲外のものとみなされるようになったのである。真理の光は遮られて、暗黒がみなぎつた。諸国は無知のとばりに覆われた。神の愛は忘れ去られた。誤りと迷信がはびこつた。

イザヤが預言者の任務に召されたのは、このような状態の時であつた。それでも彼は失望しなかつた。なぜならば、神のみ座を取り巻く天使たちが「その栄光は全地に満つ」と勝ち誇つて歌う歌声が、彼の耳に鳴り響いて

いたからである(イザヤ書六ノ三)。そして彼の信仰は、神の教会が輝かしく勝利する幻を見て強められた。「水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちるからである」(同一一ノ九)。「すべての民のかぶっている顔おおいと、すべての国のおおっているおおい物」とは、ついに破られるのである(同二五ノ七)。神の霊がすべての人々に注がれるのであった。飢えかわくように義を慕い求める者は、神のイスラエルの中に数えられるのであった。「彼らは水の中の草のように、流れのほとりの柳のように、生え育つ。ある人は『わたしは主のものである』と言い、ある人はヤコブの名をもって自分を呼び、またある人は『主のものである』と手にしるして、イスラエルの名をもって自分を呼ぶ」と預言者は言った(同四四ノ四、五)。

預言者には、地上の諸国に散らされた悔い改めないユダの人々に対する神の恵み深い計画の啓示が与えられた。「わが民はわが名を知るにいたる。その日には彼らはこの言葉を語る者がわたしであることを知る」と主は言われた(同五二ノ六)。そして彼らはただ服従と信頼の教訓を学ぶだけではなかった。彼らは生ける神についての知識を、他の人々に伝えることもしなければならなかった。他国人の子孫の中から多くの人々が、神を彼らの創造主、また贖い主として愛するようになるのであった。彼らは神の創造の力の記念として、聖安息日を守り始めるのであった。そして主が、「その聖なるかいなを、もろもろの国びとの前にあらわし、捕囚から神の民を救い出されるときに、「地のすべての果は、われわれの神の救を見る」のである(同五二ノ一〇)。こうした異教からの改宗者の多くは、イスラエルと全く一つになって彼らがユダヤに帰還する旅に加わりたいと願った。この人々はだれひとりとして、「主は必ずわたしをその民から分かれたる」と言ってはならなかった(同五六ノ三)。なぜならば、神に従い神の律法を守る人々に、神が預言者によって語られたことは、彼らが今後霊的イスラエル、す

なわちこの地上の神の教会の中に数えられるということであつた。

「『また主に連なり、主に仕え、主の名を愛し、そのしもべとなり、すべて安息日を守つて、これを汚さず、わが契約を堅く守る異邦人は——わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、わが祈の家のうちで楽しませる、彼らの燔祭と犠牲とは、わが祭壇の上に受けいれられる。わが家はすべての民の祈の家となえられるからである』。イスラエルの追いやられた者を集められる主なる神はこう言われる、『わたしはさらに人を集めて、すでに集められた者に加えよう』と」(イザヤ書五六ノ六—八)。

預言者は数世紀も先に約束のメシヤが来られる時のことを見るのを許された。彼はまずはじめに、「悩みと暗きと、苦しみのやみ」を見ただけであつた(同八ノ二—三)。真理の光を仰ぎ求めていた多くの人々は、偽教師たちによつて邪道に導かれ、哲学と心靈術の欺瞞的迷路に陥つた。他の者は信心深い形式に信頼を置いていたが、その実生活には真の清めを実現させていなかった。将来はいかにも絶望的であつた。しかし間もなく光景は変化した。そして預言者の目の前に驚くべき幻が展開されたのであつた。イザヤは義の太陽が、その翼にいやす力を備えてのぼるのを見たのである。そして彼はわれを忘れて賛嘆し、叫んで言った。「しかし、苦しみにあつた地にも、やみがなくなる。さきにはゼブルンの地、ナフタリの地にはずかしめを与えられたが、後には海に至る道、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤに光榮を与えられる。暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照つた」(同九ノ一、二)。

この輝かしい世の光は、あらゆる国民、部族、国語、民族に救いをもたらすのであつた。彼の前にある働きについて、永遠の父なる神が次のように宣言されるのをイザヤは聞いたのである。「あなたがわがしもべとなって、



イザヤは人々を神の働きに召す神の声を聞いた。彼は残りのものが救われることを望んだ。

ヤコブのもろもろの部族をおこし、イスラエルのうちの残った者を帰らせることは、いとも軽い事である。わたしはあなたを、もろもろの国びとの光となして、わが救を地の果にまでいたらせよう。」「わたしは恵みの時に、あなたに答え、救の日にあなたを助けた。わたしはあなたを守り、あなたを与えて民の契約とし、国を興し、荒れすたれた地を嗣業として継がせる。わたしは捕えられた人に『出よ』と言い、暗きにある者に『あらわれよ』と言う。」「見よ、人々は遠くから来る。見よ、人々は北から西から、またスエネの地から来る」(イザヤ書四九ノ六、八、九、一二)。

預言者イザヤは更にはるか遠い将来を眺めて、これらの輝かしい約束が文字どおりに成就するのを見た。彼は救いの福音を伝える者たちが地の果てまで行って、すべての部族と民族にまで及ぶのを見た。彼は、主が福音の教会について次のように言われるのを聞いた。「見よ、わたしは川のように彼女に繁栄を与え、みなぎる流れのように、もろもろの国の富を与える。」そして彼は、次のような任命を聞いた。「あなたの天幕の場所を広くし、あなたのすまいの幕を張りひろげ、惜しむことなく、あなたの綱を長くし、あなたの杭を強固にせよ。あなたは右に左にひろがり、あなたの子孫はもろもろの国を獲」る(同六六ノ一二。五四ノ二、三)。

主はご自分の証人たちを「タルシシ、…プトおよびルデ、トバル、ヤワン、また…海沿いの国々につかわす」と預言者イザヤに宣言された(同六六ノ一九)。

「よきおとずれを伝え、平和を告げ、

よきおとずれを伝え、救を告げ、

シオンにむかつて『あなたの神は王となられた』と

言う者の足は山の上にあつて、
なんと麗しいことだろう。」

(同五二ノ七)

イザヤは定められた働きをするようにと教会を召される神の声を聞いた。それは、神の永遠の王国の到来に対して道を備えるためであつた。その言葉は紛れもなく明白なものであつた。

「起きよ、光を放て。

あなたの光が臨み、

主の栄光があなたの上にのぼつたから。

見よ、暗きは地をおおい、

やみはもろもろの民をおおう。

しかし、あなたの上には主が朝日のごとくのぼられ、

主の栄光があなたの上にあらわれる。

もろもろの国は、あなたの光に来、

もろもろの王は、のぼるあなたの輝きに来る。

あなたの目をあげて見ませ、

彼らはみな集まってあなたに来る。

あなたの子らは遠くから来、

あなたの娘らは、かいなにいだかれて来る。…

異邦人はあなたの城壁を築き、

彼らの王たちはあなたに仕える。

わたしは怒りをもってあなたを打ったけれども、

また恵みをもってあなたをあわれんだからである。

あなたの門は常に開いて、

昼も夜も閉ざすことはない。

これは人々が国々の宝をあなたに携えて来、

その王たちを率いて来るためである。」

「地の果なるもろもろの人よ、

わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる。

わたしは神であつて、ほかに神はないからだ。」

(イザヤ書六〇ノ一—四、一〇、一一。四五ノ二二)

暗黒の時代に大いなる霊的覚醒が起こるといふこれらの預言は、今日、伝道活動の戦線が前進して、地の暗黒に覆われた地域へと及んでいることによって成就した。異邦の地における伝道者たちの一群を、預言者は、真理の光を求める人々を導くために立てられた旗にたとえている。

イザヤは言っている。「その日、エッサイの根が立って、もろもろの民の旗となり、もろもろの国びとはこれに尋ね求め、その置かれる所に栄光がある。

その日、主は再び手を伸べて、その民の残れる者を…あがなわれる。

主は国々のために旗をあげて、イスラエルの追いやられた者を集め、ユダの散らされた者を地の四方から集められる」(同二一ノ一〇—二二)。

救いの日が近づいている。「主の目はあまねく全地をゆきめぐり、自分に向かって心を全うする者のために力をあらわされる」(歴代志下一六ノ九)。神はあらゆる国民、部族、国語の中に、光と知識を求めて祈っている男女をごらんになる。彼らの魂は満たされていない。彼らは長い間灰を食べてきた(イザヤ書四四ノ二〇参照)。すべての義の敵が誤った道に導いたので、人々は盲人のように手さぐりしている。しかし彼らはまじめな人々であって、よりよい道を知ろうと望んでいる。彼らは異教主義の深みに沈み、成文化した神の律法と、神のみ子イエスについて何の知識もなかったとは言え、その心と品性に神の力が働いていたことをいろいろの方法で示したのである。

神の恵みの働きによって与えられる以外には神のことを何も知らない人々が、神のしもべたちに親切を示し、自分たちの生命を危険にさらしてまで彼らを保護したことがあったのである。聖霊は真理を探究する多くの気高い人々の心にキリストの美德を植えつけ、彼らの性質や以前の教育とは正反対の同情心を起こさせるのである。「すべての人を照すまことの光があつて、世にきた」(ヨハネ一ノ九)。この光が彼らの心を照らしている。この光に心を留めるならば、それは彼らの足を神の国に導くのである。預言者ミカは言った。「たといわたしが暗や

みの中にすわるとも、主はわが光となられる。…主はわたしを光に導き出してください。わたしは主の正義を見るであろう」(ミカ書七ノ八、九)。

天の神の救いの計画は、広く全世界を含むものである。神は弱り果てた人類に、生命の息を吹き込もうと熱望されるのである。そして神は、この世の何ものよりもはるかに高尚で高貴なものを、真剣に求めている者が失望に陥ることをお許しにならないのである。最も絶望的な状況のもとにありながらも、自己の力以上の何か大きな力によって救いと平和が与えられるように、信仰をもって祈っている者に神は常に天使を送っておられる。神はさまざまな方法によって自分を彼らに現し、「彼らをして神に望みをおき、神のみわざを忘れず、その戒めを守らせるため」にご自身を贖いとしてすべての者のためにお与えになった方に対する信頼を確立するように、神の摂理の働きに彼らを触れさせられる(詩篇七八ノ七)。

「勇士が奪った獲物をどうして取り返すことができようか。」「しかし主はこう言われる、『勇士がかすめた捕虜も取り返され、暴君が奪った獲物も救い出される』」(イザヤ書四九ノ二四、二五)。「刻んだ偶像に頼み、鑄た偶像におかって『あなたがたは、われわれの神である』と言う者は退けられて、大いに恥をかく」(同四二ノ一七)。

「ヤコブの神をおのが助けとし、その望みをおのが神、主におく人はさいわいである」(詩篇一四六ノ五)。「望みをいだく捕われ人よ、あなたの城に帰れ」(ゼカリヤ書九ノ一二)。異邦の地のすべての心の正しい人々に、すなわち天の神の目の前に「正しい者」たちのために、光は「暗黒の中にもあらわれる」(詩篇一一二ノ四)。神はお語りになった。「わたしは目しいを彼らのまだ知らない大路に行かせ、まだ知らない道に導き、暗きをその前

に光とし、高低のある所を平らにする。わたしはこれらの事をおこなって彼らを捨てない」(イザヤ書四二ノ
六)。

ホワイト選集

- 1 人類のあけぼの (上巻)
- 2 人類のあけぼの (下巻)
- 3 国と指導者 (上巻)**
- 4 国と指導者 (下巻)
- 5 各時代の希望 (上巻)
- 6 各時代の希望 (中巻)
- 7 各時代の希望 (下巻)
- 8 患難から栄光へ (上巻)
- 9 患難から栄光へ (下巻)
- 10 各時代の大争闘 (上巻)
- 11 各時代の大争闘 (下巻)

NDC 194/350P/22cm

転載複製を禁ず

1977年11月1日 発行

著者	エレン・G・ホワイト
訳者	清野喜夫
発行者	広田実
印刷所	福音社

〒241 横浜市旭区上川井町1966

発行所 福音社

電話(045)921-1414 振替横浜 599番

〒241 横浜市旭区上川井町846

発売所 健康と品性向上協会本部

電話(045)921-1121

製本・関山製本社 PRINTED IN JAPAN